

坂戸市
田島・棚田

住宅・都市整備公団坂戸入西地区土地区画整理事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

— X —

1995



棚田遺跡 第4号住居跡出土遺物



棚田遺跡 第24号住居跡出土遺物

序

坂戸市は、埼玉県の中央部に位置し、鉄道で都心と直結する立地によって、首都近郊の都市として、めざましい発展をとげつつあります。このたび、住宅・都市整備公団が計画した入西地区の土地区画整理事業も、首都圏都市開発の一環であります。

土地区画整理事業が実施された坂戸市は、都市化が進んでいるとはいえ豊かな自然が残り、原始・古代からの歴史に育まれた地であります。市内には弥生時代の大集落である附島遺跡、古墳時代後期の入西古墳群、また、県内で代表的な古代寺院跡である勝呂庵寺などの遺跡のほか、中世には児玉党の入西・浅羽氏など、坂戸市域の地名と同じ姓をもつ武蔵武士の活躍した地でもありました。

事業地内でも11か所の埋蔵文化財包蔵地が確認され、その取扱について関係諸機関と協議が重ねられました。その結果、当事業団が発掘調査を実施し、その記録を保存することになりました。調査の成果はすでに、9冊の報告書として刊行されており、今回報告する棚田遺跡と田島遺跡は最終報告書となります。

棚田遺跡の発掘調査では入西地区の遺跡群で例の乏しかった古墳時代後期前半の集落跡が発掘されました。28軒の堅穴住居跡からは土器をはじめ、多数の遺物が出土しており、当時の生活の様子を知る豊富な資料が発見されました。また、田島遺跡では古墳時代終末の集落跡が発掘され、当地での古墳時代集落の移り変わりを知る上で貴重な手がかりを得ることができました。

これらの成果をまとめた本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広く活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行まで多大な御指導・御協力を賜りました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、住宅・都市整備公団、坂戸市教育委員会並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成7年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例 言

1. 本書は、埼玉県坂戸市大字堀込字田島254他に所在する田島(たじま)遺跡および埼玉県坂戸市大字竹ノ内字棚田26他に所在する棚田(たなだ)遺跡の発掘調査報告書である。遺跡コード番号および文化財保護法第57条にもとづく発掘調査届に対する文化庁指示通知番号は以下のとおりである。

田島遺跡 (27-288) 昭和62年6月18日付委保第5の800

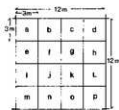
棚田遺跡 (27-084) 昭和63年7月7日付委保第5の1056

2. 発掘調査は、坂戸市入西地区土地区画整理事業に先立つ事前調査である。埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整を経て、住宅・都市整備公団の委託を受けた財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
3. 田島遺跡の発掘調査は、昭和62年4月1日から昭和63年3月31日まで、棚田遺跡の発掘調査は昭和63年4月1日から平成元年3月31日まで実施した。整理・報告書作成は平成6年4月1日から平成7年3月31日まで実施した。発掘調査および整理事業の組織は3ページに記した。
4. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、他を石坂俊郎がおこなった。なおIV-2(1)における、鉄鍬の実測と記述は、佐藤廉二が分担した。
5. 遺跡現地における記録写真は、調査担当者が撮影し、復元作業完了後の遺物写真は、水村孝行が撮影した。
6. 本書の編集は、石坂がおこなった。
7. 出土資料ならびに記録資料は、平成7年度以降、埼玉県埋蔵文化財センターが保管する。
8. 発掘調査における基準点測量および空中写真撮影は、株式会社朝日航洋、自然科学的分析は、株式会社パレオ・ラボ、巻頭口絵写真撮影は、小川忠博へ委託した。
9. 挿図第2図は、国土地理院発行1:50000地形図「熊谷」・「川越」を使用した。
10. 入西地区土地区画整理事業関係の既刊発掘調査報告書は、下記のとおりである。

『金井遺跡』	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書	第86集	1989
『広面遺跡』	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書	第89集	1990
『塚の越遺跡』	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書	第101集	1991
『稲荷前遺跡(A)区』	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書	第120集	1992
『桑原遺跡』	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書	第121集	1992
『中耕遺跡』	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書	第125集	1993
『足洗遺跡』	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書	第136集	1994
『稲荷前遺跡(B・C区)』	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書	第145集	1994
『金井B遺跡』	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書	第146集	1994

凡 例

1. X、Yによる座標表示は、国家標準直角座標第IX系にもとづく座標値である。また、方位はすべて座標北を指す。
2. グリッドは国家標準直角座標を基本に設定され、12×12m方眼である。各グリッドの名称は、北西隅の杭番号で代表される。また、調査の便宜上、グリッド内部を3×3m方眼で区分した。その名称はアルファベット小文字を用いて表示する。構成は右図のとおりである。



3. 挿図における遺構の略号は以下のとおりである。
S J……密穴住居跡 S B……掘立柱建物跡 S E……井戸跡 S D……溝跡 S K……土墳
4. 挿図の縮尺は、遺構全体図については1/60、カマド等細部の詳細図は1/30を基本としたが、より大型の遺構には1/80のものがある。遺物図は1/4を基本としたが、小型品は1/2・原寸のものがある。
5. 遺構断面図における水準の数値は、すべて海拔標高(m)である。
6. 遺構図で用いられたスクリーン・トーンは、それぞれ以下の事物を表現したものである。



地山



柱状覆土



焼土



貼床

7. 遺物出土状況図で用いられた記号は、それぞれ以下の遺物を表現したものである。
●……土師器 ▲……須恵器 ☆……石製品・鉄製品 □……礫
8. 土器実測図は、1/8周以上遺存する資料について径を復元し、反転図示した。
9. 遺物図で用いられたスクリーン・トーンは、赤色塗彩(赤彩)を表現したものである。ただし、例外的に、第34図では、青磁の釉薬を表現するのに用いている。
10. 遺物図のうち土器の断面は、須恵質のものは黒塗り、その他は白ぬきで表現した。
11. 土器観察表の記載方法は以下のとおりである。
 - ・口径・器高・最大径の単位はcmである。なお、推定による数値は()付で記した。
 - ・胎土については肉眼で観察した範囲内で確認された岩石・鉱物を記す。それには次のとおり略号を使用する。A：石英、B：チャート、C：長石、D：角閃石、E：雲母、F：白色針状物質、G：その他砂粒、H：赤色粒子
 - ・焼成は、次のとおり分類し、略号を用いて記す。良：良好・硬質、普：標準的、劣：不良・軟質
 - ・色調の呼称は、『新版標準土色帖』（農林省農林水産技術会議事務局監修1970）による。
 - ・残存度は、図示部に占める割合をパーセントで示した。完形時の全体に対する数値ではない。
 - ・「出土番号・その他」に記した番号は、土器に直接注記されているものである。

目 次

口絵
序
例言
凡例
目次

I. 発掘調査の概要	1
1. 発掘調査に至るまでの経過	1
2. 調査の経過	2
(1) 発掘調査	2
(2) 整理・報告書作成作業	2
(3) 発掘調査および整理・報告書作成作業の組織	3
II. 遺跡の立地と歴史的環境	4
III. 田島遺跡の調査	9
1. 遺跡の概要	9
2. 検出された遺構と遺物	11
(1) 竪穴住居跡	11
(2) 掘立柱建物跡	27
(3) 井戸跡	51
(4) 溝跡	54
(5) 土壌	68
IV. 棚田遺跡の調査	71
1. 遺跡の概要	71
2. 検出された遺構と遺物	73
(1) 竪穴住居跡	73
(2) 井戸跡	165
(3) 溝跡	168
(4) 土壌	170
(5) 埋設土器	175
(6) 畑跡	177
(7) 河道跡	178
(8) 遺構外出土の遺物	179
V. 調査の成果と課題	183
1. 田島遺跡	183
2. 棚田遺跡	187

付篇. 自然科学的分析 203

1. 棚田遺跡の珪藻化石.....	203
2. 坂戸市棚田遺跡の古墳時代以降の花粉化石群集.....	217
3. 棚田遺跡のプラント・オパール分析.....	230
4. 棚田遺跡古墳時代溝中の堆積物.....	235

插图目次

第1図 埼玉県の地形	4	第34図 第9号掘立柱建物跡出土遺物 ...	39
第2図 周辺の関連遺跡	5	第35図 第12号掘立柱建物跡	40
第3図 入西地区の遺跡群	6	第36図 第10号掘立柱建物跡出土遺物 ...	40
第4図 田島・棚田遺跡と周辺の遺跡 ...	7	第37図 第13号掘立柱建物跡	41
田島遺跡		第38図 第14号掘立柱建物跡	42
第5図 田島遺跡全体図	10	第39図 第15号掘立柱建物跡	43
第6図 第1号住居跡出土遺物	11	第40図 第16号掘立柱建物跡(1)	44
第7図 第1号住居跡・同遺物出土状況	12	第41図 第16号掘立柱建物跡(2)	45
第8図 第2号住居跡出土遺物	13	第42図 第17号掘立柱建物跡	46
第9図 第2号住居跡・同カマド	14	第43図 第18号掘立柱建物跡	47
第10図 第2号住居跡遺物出土状況	15	第44図 第19号掘立柱建物跡	48
第11図 第3号住居跡(1)	16	第45図 第20号掘立柱建物跡	48
第12図 第3号住居跡(2)	17	第46図 第21号掘立柱建物跡	50
第13図 第3号住居跡遺物出土状況	18	第47図 第22号掘立柱建物跡	50
第14図 第3号住居跡出土遺物	19	第48図 井戸跡(1)	52
第15図 第4号住居跡・同カマド	20	第49図 井戸跡(2)	53
第16図 第4号住居跡遺物出土状況・同遺物	21	第50図 第5号井戸跡出土遺物	53
第17図 第5号住居跡・同カマド	22	第51図 溝跡(1)	55
第18図 第5号住居跡遺物出土状況	23	第52図 溝跡(2)	56
第19図 第5号住居跡出土遺物	24	第53図 溝跡(3)	57
第20図 第6号住居跡	25	第54図 第1号溝跡遺物出土状況	58
第21図 第1号掘立柱建物跡	28	第55図 第1号溝跡出土遺物(1)	59
第22図 第2号掘立柱建物跡	29	第56図 第1号溝跡出土遺物(2)	60
第23図 第3号掘立柱建物跡(1)	30	第57図 第1号溝跡出土遺物(3)	61
第24図 第3号掘立柱建物跡(2)	31	第58図 第1号溝跡出土遺物(4)	62
第25図 第4号掘立柱建物跡	32	第59図 溝跡出土遺物	66
第26図 第5号掘立柱建物跡	33	第60図 土壌	69
第27図 第5号掘立柱建物跡出土遺物 ...	33	第61図 土壌出土遺物	70
第28図 第6号掘立柱建物跡	34	棚田遺跡	
第29図 第7号掘立柱建物跡	35	第62図 棚田遺跡全体図	71
第30図 第8号掘立柱建物跡	36	第63図 棚田遺跡基本土層図	72
第31図 第9号掘立柱建物跡	37	第64図 第1号住居跡出土遺物	73
第32図 第10号掘立柱建物跡	38	第65図 第1号住居跡	74
第33図 第11号掘立柱建物跡	39	第66図 第2号住居跡出土遺物	75
		第67図 第2号住居跡	76
		第68図 第3号住居跡出土遺物	77

第69図	第3号住居跡(1) ……………	78	第114図	第15号住居跡カマド ……………	128
第70図	第3号住居跡(2)・同遺物出土 状況 ……………	79	第115図	第15号住居跡遺物山上状況 ……………	128
第71図	第4号住居跡遺物出土状況 ……………	81	第116図	第15号住居跡出土遺物 ……………	129
第72図	第4号住居跡(1) ……………	82	第117図	第16号住居跡 ……………	130
第73図	第4号住居跡(2)・同カマド ……………	83	第118図	第16号住居跡カマド ……………	131
第74図	第4号住居跡出土遺物(1) ……………	84	第119図	第16号住居跡遺物出土状況 ……………	131
第75図	第4号住居跡出土遺物(2) ……………	85	第120図	第16号住居跡出土遺物 ……………	132
第76図	第4号住居跡出土遺物(3) ……………	86	第121図	第17号住居跡カマド ……………	132
第77図	第5・6号住居跡(1) ……………	88	第122図	第17号住居跡 ……………	133
第78図	第5・6号住居跡(2) ……………	89	第123図	第17号住居跡出土遺物 ……………	133
第79図	第5号住居跡カマド ……………	90	第124図	第17号住居跡遺物出土状況 ……………	134
第80図	第5号住居跡遺物出土状況 ……………	92	第125図	第18号住居跡 ……………	135
第81図	第5号住居跡出土遺物(1) ……………	94	第126図	第18号住居跡カマド ……………	136
第82図	第5号住居跡出土遺物(2) ……………	95	第127図	第19号住居跡・同カマド ……………	137
第83図	第5号住居跡出土遺物(3) ……………	96	第128図	第19号住居跡遺物出土状況 ……………	138
第84図	第6号住居跡出土遺物 ……………	97	第129図	第19号住居跡出土遺物 ……………	139
第85図	第7号住居跡(1) ……………	98	第130図	第20号住居跡 ……………	140
第86図	第7号住居跡(2)・同カマド ……………	99	第131図	第20号住居跡カマド ……………	141
第87図	第7号住居跡遺物出土状況 ……………	100	第132図	第20号住居跡遺物出土状況 ……………	142
第88図	第7号住居跡出土遺物(1) ……………	100	第133図	第20号住居跡出土遺物 ……………	143
第89図	第7号住居跡出土遺物(2) ……………	101	第134図	第21号住居跡(1) ……………	144
第90図	第8号住居跡 ……………	103	第135図	第21号住居跡(2)・同カマド ……………	145
第91図	第8号住居跡遺物出土状況 ……………	104	第136図	第21号住居跡遺物出土状況 ……………	146
第92図	第8号住居跡出土遺物 ……………	104	第137図	第21号住居跡出土遺物 ……………	147
第93図	第9・10号住居跡(1) ……………	106	第138図	第22号住居跡 ……………	148
第94図	第9・10号住居跡(2) ……………	107	第139図	第22号住居跡カマド ……………	149
第95図	第9・10号住居跡カマド ……………	108	第140図	第22号住居跡遺物出土状況 ……………	150
第96図	第9・10号住居跡遺物出土状 況 ……………	109	第141図	第22号住居跡出土遺物(1) ……………	151
第97図	第9号住居跡出土遺物 ……………	110	第142図	第22号住居跡出土遺物(2) ……………	152
第98図	第10号住居跡出土遺物(1) ……………	111	第143図	第23号住居跡 ……………	153
第99図	第10号住居跡出土遺物(2) ……………	112	第144図	第23号住居跡遺物出土状況 ……………	154
第100図	第11号住居跡・同カマド ……………	113	第145図	第23号住居跡出土遺物 ……………	154
第101図	第11号住居跡遺物出土状況 ……………	114	第146図	第24号住居跡 ……………	156
第102図	第11号住居跡出土遺物(1) ……………	115	第147図	第24号住居跡カマド ……………	157
第103図	第11号住居跡出土遺物(2) ……………	116	第148図	第24号住居跡出土遺物(1) ……………	158
第104図	第12号住居跡(1) ……………	118	第149図	第24号住居跡出土遺物(2) ……………	159
第105図	第12号住居跡(2)・同カマド ……………	119	第150図	第24号住居跡遺物出土状況 ……………	159
第106図	第12号住居跡遺物出土状況 ……………	120	第151図	第25号住居跡出土遺物 ……………	160
第107図	第12号住居跡出土遺物(1) ……………	121	第152図	第25号住居跡 ……………	160
第108図	第12号住居跡出土遺物(2) ……………	122	第153図	第26号住居跡 ……………	161
第109図	第13号住居跡・同カマド痕跡 ……………	124	第154図	第27号住居跡出土遺物 ……………	162
第110図	第13号住居跡遺物出土状況 ……………	125	第155図	第27号住居跡 ……………	163
第111図	第13号住居跡出土遺物 ……………	125	第156図	第28号住居跡・同出土遺物 ……………	164
第112図	第14号住居跡 ……………	126	第157図	井戸跡(1) ……………	166
第113図	第15号住居跡 ……………	127	第158図	井戸跡(2) ……………	167
			第159図	井戸跡出土遺物 ……………	167
			第160図	溝跡 ……………	169

第161図	第1号溝跡出土遺物	170
第162図	土壌(1)	172
第163図	土壌(2)	173
第164図	土壌出土遺物	174
第165図	埋設土器出土状況	175
第166図	埋設土器	176
第167図	畑跡	177
第168図	河道跡断面図	178
第169図	河道跡出土遺物	178
第170図	遺構外出土遺物(1)	180
第171図	遺構外出土遺物(2)	181
第172図	田島遺跡と周辺の掘立柱建物跡	184
第173図	掘立柱建物跡の平面規模分布	185
第174図	杯A・Bの口径と指数の分布	191
第175図	杯A・Bの法量と指数の分布	192
第176図	杯A・Bの指数の相関と他の器種の法量分布	193
第177図	棚田遺跡土器編年表	196・197
第178図	棚田遺跡の集落変遷	199
付 属		
第1図	各グリッドの層位と分析試料採取位置	204
第2図	D5グリッド主要珪酸化石ダ イアグラム(3%以上の種)	208

第3図	O4グリッド主要珪酸化石ダ イアグラム(3%以上の種)	211
第4図	化石顕微鏡写真	216
第5図	各グリッドの層位と分析試料 採取位置	217
第6図	D5グリッドの主要花粉分布 図	221
第7図	O4グリッドの主要花粉分布 図	223
第8図	D5・O4グリッド堆積物の 物理的性質と1g中の花粉粒 数	225
第9図	花粉化石顕微鏡写真(1)	228
第10図	花粉化石顕微鏡写真(2)	229
第11図	D5グリッドの層位と分析試 料採取位置	230
第12図	主な植物の推定生産量とその 変遷	231
第13図	プラント・オパール顕微鏡写 真	234
第14図	棚田遺跡の堆積物の含水比と 粒度組成	238

表 目 次

田島遺跡		
第1表	第1号住居跡土器観察表	13
第2表	第2号住居跡土器観察表	15
第3表	第3号住居跡土器観察表	19
第4表	第5号住居跡土器観察表	23
第5表	第5号掘立柱建物跡土器観察表	27
第6表	第5号井戸跡土器観察表	53
第7表	第1号溝跡土器観察表(1)	63
第8表	第1号溝跡土器観察表(2)	64
第9表	第2号溝跡土器観察表	64
第10表	第3号溝跡土器観察表	65
第11表	第6号溝跡土器観察表	66
第12表	第10号溝跡土器観察表	67
第13表	第3号土壌土器観察表	68
第14表	第9号土壌土器観察表	70
第15表	第10号土壌土器観察表	70

棚田遺跡		
第16表	第1号住居跡土器観察表	73
第17表	第2号住居跡土器観察表	75
第18表	第3号住居跡土器観察表	77
第19表	第4号住居跡土器観察表(1)	86
第20表	第4号住居跡土器観察表(2)	87
第21表	第5号住居跡土器観察表	93
第22表	第6号住居跡土器観察表	97
第23表	第7号住居跡土器観察表	102
第24表	第8号住居跡土器観察表	105
第25表	第9号住居跡土器観察表	110
第26表	第10号住居跡土器観察表	111
第27表	第11号住居跡土器観察表	117
第28表	第12号住居跡土器観察表(1)	122
第29表	第12号住居跡土器観察表(2)	123
第30表	第13号住居跡土器観察表	125

第31表	第15号住居跡土器観察表	129
第32表	第16号住居跡土器観察表	132
第33表	第17号住居跡土器観察表	133
第34表	第19号住居跡土器観察表	138
第35表	第20号住居跡土器観察表	142
第36表	第21号住居跡土器観察表	147
第37表	第22号住居跡土器観察表	152
第38表	第23号住居跡土器観察表	154
第39表	第24号住居跡土器観察表	155
第40表	第25号住居跡土器観察表	160
第41表	第27号住居跡土器観察表	162
第42表	第28号住居跡土器観察表	164
第43表	第2号井戸跡土器観察表	165
第44表	第4号井戸跡土器観察表	165
第45表	第5号井戸跡土器観察表	166
第46表	第1号溝跡土器観察表	168
第47表	第1号土壌土器観察表	171
第48表	第2号土壌土器観察表	171
第49表	第5号土壌土器観察表	173

第50表	埋設土器観察表	175
第51表	河道跡土器観察表	178
第52表	遺構外土器観察表	182
付属		
第1表	D5グリッドで検出された珪藻化石産出表(1)	206
第2表	D5グリッドで検出された珪藻化石産出表(2)	207
第3表	O4グリッドで検出された珪藻化石産出表(1)	209
第4表	O4グリッドで検出された珪藻化石産出表(2)	210
第5表	O17グリッドで検出された珪藻化石産出表	212
第6表	D5グリッドの花粉化石組成表	220
第7表	O4グリッドの花粉化石組成表	222
第8表	D5グリッドの試料1g当たりのプラント・オパール個数	231
第9表	堆積物の洗い出し結果	237

写真図版目次

田島遺跡

図版1	調査区全景空中写真(南から)
図版2	第1・2号住居跡、第2号住居跡カマド
図版3	第3号住居跡(1)・(2)、第4号住居跡遺物出土状況
図版4	第5号住居跡、同遺物出土状況、同近景(1)
図版5	第5号住居跡遺物出土状況近景(2)、第6号住居跡、第1号掘立柱建物跡
図版6	第2・3・4号掘立柱建物跡
図版7	第5・6・7号掘立柱建物跡
図版8	第8・9・10号掘立柱建物跡
図版9	第1号溝跡、同遺物出土状況、第2号溝跡
図版10	第1・2・3・4号井戸跡、第3・2・9・10号土壌

榑田遺跡

図版11	調査区全景空中写真、同(北から)
図版12	第7～11号住居跡、第12～17号住居跡
図版13	第1・2・3号住居跡
図版14	第4号住居跡、同カマド周辺遺物出土状況、同貯蔵穴遺物出土状況

図版15	第5号住居跡、同カマド遺物出土状況、同貯蔵穴遺物出土状況
図版16	第6・7・8号住居跡
図版17	第9号住居跡、同貯蔵穴遺物出土状況、第10号住居跡
図版18	第11号住居跡、同掘形、同貯蔵穴確認状況
図版19	第11号住居跡貯蔵穴、第12号住居跡、同カマド遺物出土状況
図版20	第14号住居跡、第15号住居跡、同貯蔵穴遺物出土状況
図版21	第16号住居跡、同カマド、第14～16号住居跡
図版22	第17号住居跡、同カマド、第18号住居跡
図版23	第19号住居跡、同カマド遺物出土状況、同カマド
図版24	第20号住居跡、同カマド、第21号住居跡
図版25	第21号住居跡貯蔵穴遺物出土状況、第22号住居跡、同カマド

図版26	第23号住居跡、第24号住居跡、同カマド遺物出土状況	図版35	第4号住居跡出土土器(1)
図版27	第24号住居跡遺物出土状況、第25号住居跡、第26号住居跡	図版36	第4号住居跡出土土器(2)
図版28	第4号井戸跡、第1号溝跡、第2号土壌遺物出土状況	図版37	第4・5号住居跡出土土器
図版29	第1号埋設土器、第2号埋設土器、畑跡	図版38	第5号住居跡出土土器
田島遺跡		図版39	第5・7・8・9号住居跡出土土器
図版30	第1・3・5号住居跡出土土器	図版40	第10・11号住居跡出土土器
図版31	第5号住居跡、第1号溝跡出土土器	図版41	第11号住居跡出土土器
図版32	第1号溝跡出土土器	図版42	第12・15・19号住居跡出土土器
図版33	第1・3号溝跡、第5号井戸跡出土土器	図版43	第19・20号住居跡出土土器
棚田遺跡		図版44	第20～22号住居跡出土土器
図版34	第1・3・4号住居跡出土土器	図版45	第22～24号住居跡出土土器
		図版46	第24号住居跡出土土器
		図版47	第24・27号住居跡、第1・2号土壌出土土器、遺構外出土土器
		図版48	遺構外出土土器、第1号溝跡出土土器、第1・2号埋設土器、石・鉄製品

付 図 目 次

- 付図1 田島遺跡全体図
付図2 棚田遺跡全体図

I. 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至るまでの経過

首都圏における人口増加の波は著しく、全国の三分の一の人口が集中している。埼玉県ではそれに対応するため、住宅・都市整備公団を中心に住宅政策および地域環境整備計画が進められている。坂戸市入西(西部)地区については、住宅・都市整備公団による区画整理方式により宅地開発事業が計画された。

住宅・都市整備公団では文化庁との間で取り交わされた『住宅・都市整備公団の事業施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取り扱いに関する覚書』に基づき、埼玉県教育委員会へ「坂戸市入西(西部)地区における埋蔵文化財の取り扱いについて」照会した。

県教育委員会では埋蔵文化財遺跡地名表等に基づき、昭和56年1月20日付け教文第918号をもって次のとおり回答した。

記

1 文化財の所在

名 称	所 在 地	種 別	時 期
坂戸市No.99 終塚古墳	坂戸市大字堀込 字桑原157	古 墳	古墳時代後期

上記の他に条里遺跡及び畑地部分に集落遺跡の存在が予想される。

2 取り扱いについて

- (1) 開発予定地内は事前の遺跡分布調査及び必要に応じて試掘調査を実施して、遺跡の所在を確認する必要がある。
- (2) 上記の結果をもとに埋蔵文化財ができるだけ現状保存できる開発計画を策定することが望ましい。
- (3) 計画上、やむを得ず現状変更する場合は、文化財保護法第57条3の規定により、事前に文化庁長官あて埋蔵文化財発掘通知を提出して、記録保存のための発掘調査を実施すること。

住宅・都市整備公団と県教育委員会では開発地域内に所在する遺跡の取り扱いについて協議を重ねた結果、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に委託して昭和59年度から発掘調査を実施することに決定した。

文化財保護法に基づき、住宅・都市整備公団からは埋蔵文化財発掘通知、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団からは埋蔵文化財発掘調査届が文化庁長官へ提出され、田島遺跡の発掘調査は昭和62年4月1日から昭和63年3月31日まで、棚田遺跡の発掘調査は昭和63年4月1日から平成元年3月31日まで実施された。

(文化財保護課)

2. 調査の経過

(1) 発掘調査

田島遺跡の発掘調査は、昭和62(1987)年4月1日から昭和63(1988)年3月31日まで実施した。対象面積は、27,000㎡である。

4月に事務所設置後、重機によって表土を除去し、ついで基準点測量・人力による遺構確認作業・遺構の発掘作業に順次着手した。7月中旬までに第1～6号住居跡、同月下旬には第1～7号掘立柱建物跡の掘り下げ・記録作業をほぼ終え、以後、11月中旬まで、井戸跡・溝跡・土壌などの調査にあたった。12月からはピット群、第8～10号掘立柱建物跡の掘り下げ・記録作業にあたった。未調査部分となっていた稻荷前遺跡に接する西辺部分の調査を含め、それらを3月上旬に完了した。その後、空中写真撮影を実施し、調査区の完掘状況を記録したのち、3月31日をもって調査を完了した。

柳田遺跡の発掘調査は、昭和63(1988)年4月1日から平成元(1989)年3月31日まで実施した。対象面積は、33,000㎡である。

事務所設置後、調査区南半について重機によって表土を除去し、ついで人力による遺構確認作業・遺構の発掘作業に順次着手した。基準点測量は6月14日に実施した。そして7月末までに第1～3号住居跡、11月上旬中に第4～20号住居跡の掘り下げ・記録作業を完了した。そして11月中旬～12月中旬にかけて、未調査部分について重機による表土除去作業を実施した。人力による発掘作業は併行して続行し、12月中旬中に第25～28号住居跡についての作業を終えた。井戸跡・溝跡など住居跡以外の遺構についての作業は12月下旬中に完了した。明けて1月12日に空中写真撮影を実施し、調査区の完掘状況を記録した。2月6日には、花粉分析・珪藻分析をはじめとする自然科学的分析のための土壌採取作業を実施した。すべての現地作業を完了させ、3月31日をもって調査を終了した。

(2) 整理・報告書作成作業

整理・報告書作成作業は、平成6(1994)年4月1日から平成7(1995)年3月31日まで実施した。4月から8月にかけては、遺物の水洗い・注記・接合・復元と併行して、調査時に作成された遺構平面図・断面図の整理、遺物台帳にもとづく遺物分布図の作成を進めた。それらとともに、完形品をはじめ、復元作業を完了した遺物については順次実測図を作成した。遺物は、年度当初の予想を越えて復元可能な個体が多く、接合・復元作業は予定以上の時間を必要とした。復元された遺物が増加するのにともない実測作業は多忙をきわめ、完了したのは11月であった。9月からは遺構図面のトレース、10月からは遺物実測図のトレースに着手し、図版作成は12月までかかった。12月からは本文の割付けをおこなうとともに原稿の執筆を開始した。原稿執筆完了後、報告書印刷に入り、3月末をもって刊行した。

(3) 発掘調査および整理・報告書作成作業の組織

1 発掘調査

(昭和62年度)

理事長	長井 五郎
副理事長	百瀬 陽二
常務理事兼調査研究部長	早川 智明
庶務・経理	
管理部長	原田 家次
主査	関野 栄一
主事	江田 和美
主事	岡野美智子
主事	福田 浩
主事	本庄 朗人

発掘調査

調査研究副部長	塩野 博
調査研究第二課長	昼間 孝次
調査員	昼間 孝志
調査員	大谷 徹

(昭和63年度)

理事長	長井 五郎
副理事長	百瀬 陽二
常務理事兼調査研究部長	早川 智明
庶務・経理	
管理部長	原田 家次
管理課長	関野 栄一
主事	江田 和美
主事	岡野美智子
主事	福田 浩
主事	本庄 朗人

発掘調査

調査研究副部長	塩野 博
調査研究第二課長	昼間 孝次
調査員	西口 正純

2 整理・報告書作成作業 (平成6年度)

理事長	荒井 桂
副理事長	富田 真也
専務理事	栃原 嗣雄
常務理事兼管理部長	加藤 敏昭
理事兼調査部長	小川 良祐
庶務・経理	
庶務課長	及川 孝之
主査	市川 有三
主事	長瀬美智子
主事	菊池 久
専門調査員兼経理課長	関野 栄一
主任	江田 和美
主事	福田 昭美
主事	腰塚 雄二

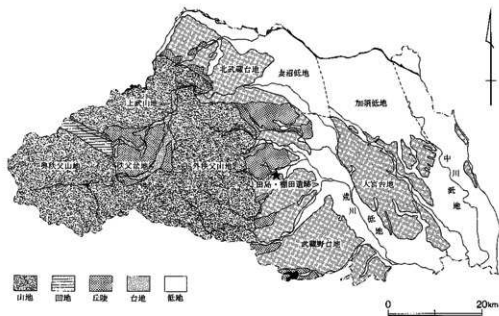
整理・報告書作成

資料部長	塩野 博
資料副部長	
兼資料整理第一課長	谷井 彪
専門調査員	
兼資料整理第二課長	水村 孝行
主任調査員	石坂 俊郎

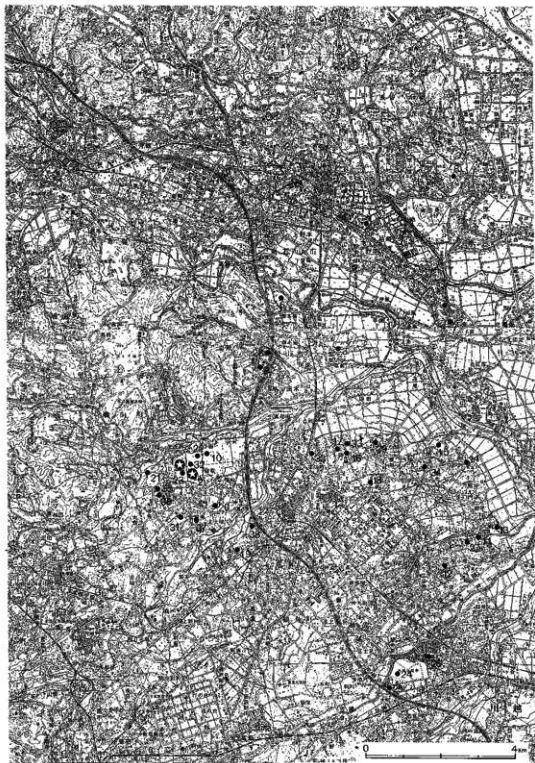
II. 遺跡の立地と歴史的環境

田島遺跡(1)の所在地は、坂戸市大字堀込字田島254他である。同じく棚田遺跡(2)は、坂戸市大字竹ノ内字棚田26他である。両遺跡を含む坂戸市入西地区の遺跡群は、外秩父山地東辺から東にのびる毛呂台地の東端部に立地している。毛呂台地は、南に高麗川が流れ、その対岸は坂戸市市街地が広がる坂戸台地である。一方北は越辺川によって限られ、対岸には眼前に岩殿丘陵が展開し、以北の視界を遮っている。遺跡群の北東約3kmでこの両河川は合流し、越辺川となり、ほどなくして入間川に合流する。

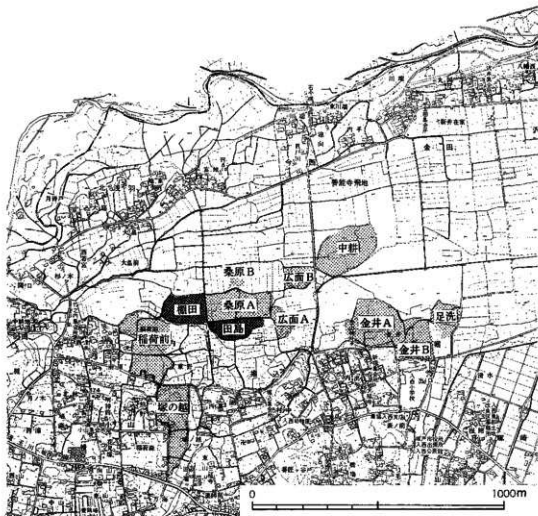
遺跡群は、越辺川を北に臨む台地北縁部に展開する。標高は30m前後、北に接する越辺川右岸沖積地との比高差は1m余りである。そこに含まれる11の遺跡は、立地から4つの群にまとめられる(富田1994 P6)。すなわち台地高位部の塚の越遺跡・金井遺跡B区、沖積地に接する台地低位部の稲荷前遺跡・田島遺跡・桑原A遺跡・桑原B遺跡・金井遺跡A区・足洗遺跡、沖積面下の埋没ローム上の広面A遺跡・広面B遺跡・中耕遺跡、沖積地上の棚田遺跡である。遺跡の内容から歴史的傾向をみると、沖積地にかかる4遺跡では、主体は3～4世紀に属し、7世紀以降に属する遺構の展



第1図 埼玉県の地形



第2図 周辺の関連道跡



第3図 入西地区の遺跡群

開は認められない。一方、台地上では、稲荷前遺跡に4世紀代の墳墓群、桑原A遺跡に6世紀代の集落が存在するほか、各遺跡で7世紀以降の集落跡が主体となっており、低地部の遺跡と対照的な傾向を示している。この状況は、近接しながらも立地を異にする田島・棚田両遺跡間にも反映されている。Ⅲ以下で詳述するように、6世紀代の集落跡を主体とする棚田遺跡と、7世紀代の集落跡と、一部中世以降のことが確実な独立柱建物跡群を主体とする田島遺跡は、同一の溝1条を共有するものの、時間的にはほとんど重複が認められない。

なお本書で扱う2遺跡を除く各遺跡の調査成果は、例言でも紹介したとおり、すでに刊行された9冊の報告書によって明らかにされている。

次に、周辺の歴史的環境を概観する。上述した田島・棚田両遺跡の内容に応じて、視野を古墳時代の遺跡に限定して見ていきたい。



第4図 田島・棚田遺跡と周辺の遺跡

古墳時代前期初頭の遺跡で注目されるのは、岩殿丘陵の東辺・高坂台地上に立地する東松山市代正寺遺跡(3)である。第68号住居跡出土の一括土器群に代表される内容は、相模湾沿岸地域以西との関連を示唆しており、いかえれば在来的な伝統との断絶が鮮明である。都幾川をさき対岸に位置する下道浜遺跡(4)では、前方後方形墳墓を含むと推定される墳墓群が明らかにされており、それらにともなう多くの外来系古式土師器が出土している。また、同じ東松山台地上には、下道浜遺跡から2kmを隔てずして五領遺跡(5)がある。古式土師器の標識遺跡として学史上著名なこの遺跡は、複数の布留式土甕に象徴されるように、外来性の鮮明な中核的集落遺跡として再評価が可能である。前期古墳として確認されているものには、高坂台地縁部に東松山市諏訪山29号墳(6)、東松山台地南端に同市根岸稲荷神社古墳(7)、吉見丘陵南端に吉見町山の根2号墳(8)などがあり、上記の遺跡に沿うように分布している。いずれも前方後方墳である。

一方、岩殿丘陵上の東松山市根平遺跡(9)では、第4号住居跡で吉ヶ谷式系の甕に外来系古式土師器が共伴する事例が著名である。また入西地区の中耕遺跡(10)では、方形周溝墓群で出土した多数の土器に、吉ヶ谷式の残影が濃厚に認められる。このように、高坂・東松山台地では、古墳時代前期における外来性の到来が顕著であるのに対し、毛呂・板戸台地周辺では、方形周溝墓が卓越し、

また土器に象徴されるように、弥生時代後期以来の在来性が根強く存在した可能性がある。この様相の把握と整理は、古墳時代初頭の具体相を解明する上での重要課題といえるだろう。坂戸市域の古墳時代前期の遺跡を列挙しておく、坂戸台地東部では、中小坂遺跡群の上谷遺跡(11)と金山遺跡(12)・高窪遺跡(13)・木曾免遺跡(14)・附島遺跡(15)・勇福寺遺跡(16)・新町遺跡(17)・石井前原遺跡(18)・宮裏遺跡(19)がある。いずれも部分的な調査にとどまっているが、弥生時代遺跡と重複する例も少なくないようだ。毛呂台地では、北峰西浦遺跡(20)・長岡遺跡(21)、入西地区の中耕遺跡(10)・広面B遺跡(22)・稲荷前遺跡(23)がある。入西地区の3遺跡は、一連の大墳墓群である。

古墳時代中期の遺跡としては、坂戸台地南辺の川越市御伊勢原遺跡(24)・同市上組Ⅱ遺跡(25)・同市女堀遺跡(26)がある。至近に位置する3遺跡で集落跡が完掘されている。坂戸市域では、古墳時代中期の遺跡として把握されているものは少なく、中小坂遺跡群の前林遺跡(27)と木曾免遺跡(14)だけである。

後期の遺跡で注目されるのは、岩殿丘陵東辺上の東松山市舞台遺跡(28)である。2次にわたる発掘調査によって、100軒以上の竪穴住居跡が出土した。中核的な大集落だったと考えられる。坂戸市域では、主な集落跡として、坂戸台地上谷遺跡(11)・前林遺跡(27)・勝呂遺跡(29)・空ヶ谷戸遺跡(30)、毛呂台地に大河原遺跡(31)・長岡遺跡(21)、そして入西地区の桑原遺跡(32)・榎田遺跡(1)などがある。後期の古墳については、集落遺跡とともに、『坂戸市史』古代資料編(坂戸市教育委員会1993)による網羅的にして精細な仕事によって、市域全体の状況を確認することが可能になった。ここでは比較的大規模なものの名を掲げるとどめるが、約67mの前方後円墳である新町1号墳(駒山古墳)(33)、46.5mの前方後円墳である雷電塚古墳(34)、苦林古墳群に属し、44mの前方後円墳である塚原1号墳(35)、40mの前方後円墳である塚原2号墳(36)、直径50mの円墳である成願寺2号墳(石上古墳)(37)、直径40m級の円墳である浅羽野1号墳(土屋神社古墳)(38)などがある。

参考文献

坂戸市教育委員会1993『坂戸市史』古代資料編 坂戸市

富田和夫1994『稲荷前遺跡(B・C区)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第145集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

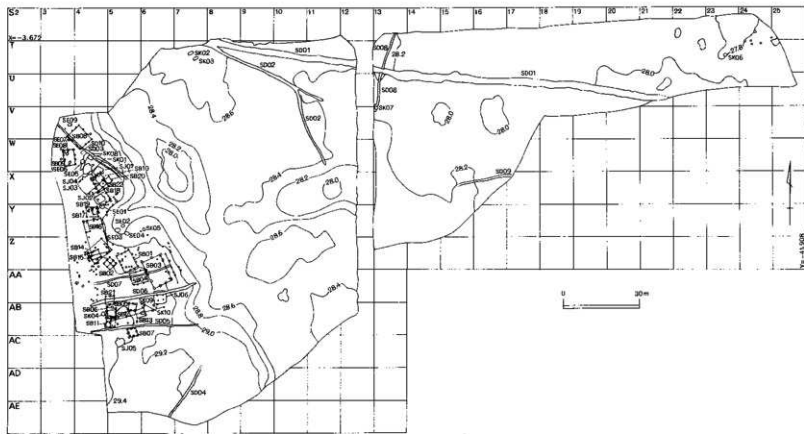
Ⅲ. 田島遺跡の調査

1. 遺跡の概要

田島遺跡は、東西に長く分布する遺跡群のほぼ中央に位置し、その立地は、沖積地にほど近い低位台地上である。西に稲荷前遺跡、北に桑原遺跡が隣接する。調査区は東西に長く、南北に横断する道路によって二分されている。遺構確認面の地形は、稲荷前遺跡に接する西辺部が壇状に高くなり、その上面の標高は、29.0～29.4mである。遺構の分布は、この部分に集中する。低位部の標高は27.8～28.6mで、西から東へ、ごくゆるく傾斜している。西辺の高位部とは対照的に、遺構の分布は希薄である。

発掘調査の結果、検出された遺構は、竪穴住居跡6、掘立柱建物跡22、井戸跡9、溝跡10、土壇10である。竪穴住居跡は、いずれもカマドもしくはその痕跡が確認された。遺物がともなわず不確定なものを含むが、主に古墳時代終末期に属している。分布は南北に分かれており、北の第1～4号住居跡は互いに近接し、南の第5・6号住居跡はやや離れている。最も大型の第3号住居跡には拡張の痕跡が認められる。掘立柱建物跡は、南北にわたり分布するが、ACライン付近が南限になる。遺構どうしの重複と近接が顕著である。22棟のうち第1～10号掘立柱建物跡は調査時に現地において確認され、第11～22号掘立柱建物跡は、整理作業の過程で机上において想定されたものである。他にも配列の規則性を見いだせなかったピットが多数あり、把握していない遺構が存在する可能性を残している。出土遺物に乏しく、帰属時期を特定できないものがほとんどである。比較的多いのは土師器の小破片だが、古墳時代のものは混入品の可能性がある。それらは遺構の上限は示せても、下限の決め手に用いるのは危険だろう。わずかに第9号掘立柱建物跡は中世まで下ることが確実であり、遺構群の少なくとも一部は中世以降の集落であることが暗示されている。個々の遺構は、その平面規模にもとづき大・中・小3群に分類できるようだが、概ね大型は中央部、中型は北寄り、小型は南寄りに分布の偏りが認められる。いずれにしても、複数時期の集落が重複していることは確実で、集落規模と構成の把握は、重複関係の整理を経る必要がある。溝跡は、第1・2号溝跡が古墳時代後期、第3・10号溝跡が平安時代に属するが、他は特定が難しい。第1号溝跡は、後述する棚田遺跡第1号溝跡と同一で、桑原A遺跡を含め3遺跡にまたがる長大な遺構である。第2号溝跡は、桑原A遺跡第15号溝跡とほぼ平行し、同遺跡の古墳時代集落に関連するとみられる。このように、溝の存在意義については、隣接する遺跡を視野に含める必要がある。一方、第4・5・6号溝跡は近距離にあって平行しており、相互に無関係ではないだろう。時期を特定できないが、掘立柱建物集落に関連する可能性がある。

なお、発掘調査にあたり設定されたグリッドは、国家標準直角座標にもとづく12×12m方眼である。このグリッド網は、遺跡群を包括しているが、グリッドの名称は、遺跡間で必ずしも統一されていない。隣接する遺跡との位置関係を確認しておくが、田島遺跡のT6(X, Y) = (-3.672, -42.148)は、西に接する稲荷前遺跡のC33、北に接する桑原A遺跡のR6と一致する。



第 5 図 田島遺跡全体図

2. 検出された遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

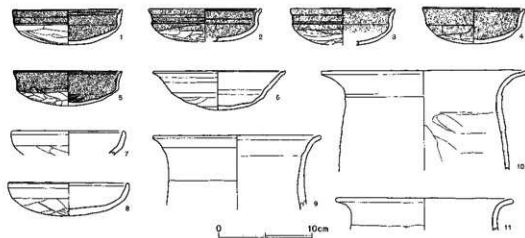
第1号住居跡（第7図 遺物第6図）

位置は、W4・X4グリッドである。西に近接する第4号住居跡とともに、竪穴住居跡群の最北部にあたる。第10号掘立柱建物跡と重複し、カマド燃焼部と南西周壁の一部がそれによって破壊されていた。すなわち第10号掘立柱建物跡に先行することが確認される。周壁平面形は、奥行2.5m、幅2.9mの方形で、床面積は7.0㎡である。カマドは東壁に痕跡が認められ、中心軸方向はN-121°-Eである。支柱穴は確認されなかった。

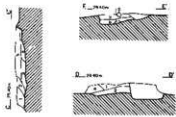
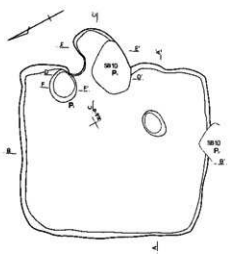
周壁は、高さ0.1m余りである。カマドは、ほとんど遺存しなかった。東壁中央部が外側に突出して掘り込まれ、付近に焼土が集中していたのがその痕跡だろう。カマドの脇のP₁は、直径0.5mのほぼ円形で、深さ0.06mとごく浅い。

出土遺物は、覆土中の土器片が主体で、礫の出土も目立っている。分布は、北半にやや偏りが認められる。破片から復元図示したものが多いが、6のみは遺存状態がよい。床面に伏して、つぶれた状態で出土した。なお8・10は、重複している第10号掘立柱建物跡P₁埋土からの出土である。本来そちらに帰属させて報告すべきだが、第1号住居跡覆土を攪乱した際に混入した可能性が高いとみなし、ここに含めた。1・4・5は、比企・入間型杯の係累である杯。これを比企・入間型杯系杯と呼ぶ。2・3は口縁部下に段をもち、須恵器模倣杯の係累である杯とみられる。これを須恵器模倣杯系杯と呼ぶ。端部内面には凹線状のヨコナデが加えられ、その結果、口縁端部の断面形は薄く尖ったものになる。6は、口縁部が大きく開く皿状の杯である。7・8は、口縁部にかけて丸みを帯びる北武蔵系の杯である。9～11は、甕の上半部である。

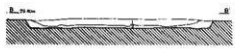
これらの遺物は、古墳時代終末期に属するものである。



第6図 第1号住居跡出土遺物



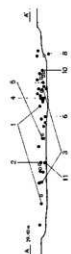
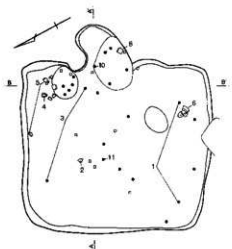
- S11 (C-C'・D-D'・E-E')
- 1 暗褐色土 : 焼土粒をわずかに含む
 - 2 黄褐色土 : 焼土粒をわずかに含む
 - 3 暗褐色土 : 径1~2cmの焦土ブロック、炭化物粒を多く含む
 - 4 黄褐色土 : 焼土粒を多く含む
 - 5 黄褐色土 : 焼土粒、炭化物粒を含む
 - 6 褐色土 : 焼土粒を多く含む
 - 7 ソフトロームブロック



- S12 (F-F')
- 1 暗褐色土 : 焼土粒、炭化物粒を多く含む

S11 (A-A'・B-B')

- 1 褐色土 : ローム状をわずかに、焼土粒、炭化物粒を多く含む
- 2 褐色土 : 径1~3cmのハードロームブロックを多く、焼土粒をわずかに含む



第7図 第1号住居跡・同遺物出土状況

第1表 第1号住居跡土器観察表

番号	器種	口 径	器 高	最大径	胎 土	焼成	色 調	残 存	出土番号・その他
1	杯	(11.8)	3.8		ABH	普	橙・黒	50%	No12・17 内外面赤彩
2	杯	(12.1)	(3.5)		BC	優	にぶい橙	20%	No34 内外面赤彩
3	杯	(11.2)			ABC	優	明赤褐	25%	No1・20 内外面赤彩
4	杯	(11.0)	3.8		ABH	普	にぶい赤褐	25%	No29 内外面赤彩
5	杯	(11.7)	(3.8)		BDGH	普	にぶい橙	30%	No28・33 内外面赤彩
6	杯	14.2	4.2		BDGH	普	にぶい黄褐	90%	No35
7	杯	(12.0)			AE	普	黒褐	口縁部 20%	カマド
8	杯	(13.0)	3.5		ABEG	劣	にぶい黄褐	25%	No27
9	壺	(18.1)			BG	劣	明褐	図示部 35%	カマド
10	壺	(21.8)			ABCGH	劣	にぶい橙	図示部 25%	No23
11	壺	(19.0)			ABCG	劣	明赤褐	口縁部 20%	No4

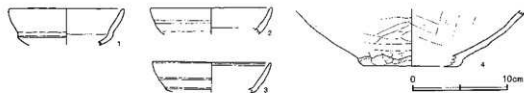
第2号住居跡(第9・10図 遺物第8図)

位置は、X4・Y4グリッドである。第1号住居跡から南6mにあたる。第19号掘立柱建物跡と重複するが、前後関係は不明である。周壁平面形は、奥行3.1m、幅は北東壁で3.1m、対面する南西壁で2.7mあり、正方形に近い歪んだ方形である。床面積は9.3㎡である。カマドは北東壁中央に設置されていた。中心軸方向はN-52°-Eである。主柱穴および貯蔵穴は認められない。

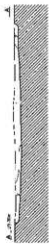
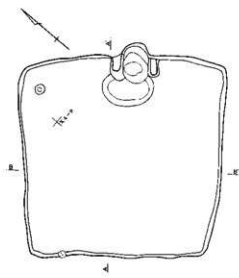
周壁は、最高0.1mである。カマドは、奥壁が外側に突出し、両袖が遺存している。袖部は、床面をわずかに削り出した上に粘質土を盛って構築されている。焚口付近は皿状にくぼみ、燃焼部はさらに深く掘り下げられているが、これらは掘形で、4層上面が燃焼面だったとみられる。

出土遺物は、覆土中から土器器片が出土している。比較的少量で、小破片が主体である。辛うじて復元図示できたものは4点ある。1～3は杯である。いずれも口縁部が大きく開き、2・3は口縁部に段をもち、「有段口縁杯」と呼ばれるものである。2ではほとんど凹線状である。4は壺の底部だろう。

これらの遺物は、古墳時代終末期に属するものである。

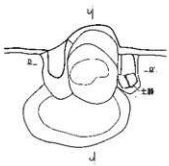
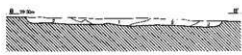


第8図 第2号住居跡出土遺物



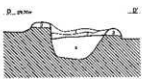
532 (A-A'・B-B')

- 1 暗褐色土：ローム粒、炭土粒をわずかに含む
- 2 暗褐色土：ソフトロームブロックを多く含む
- 3 黒褐色土：焼土粒をわずかに含む

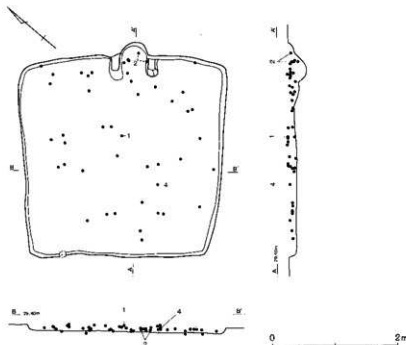


512 カマド (C-C'・D-D')

- 1 暗褐色土：焼土粒、ローム粒をわずかに含む
- 2 黒褐色土：瓦片ブロック、炭化物粒を含む
- 3 暗褐色土：焼土粒をわずかに含む、焼土層上
- 4 暗褐色粘質土：焼土層上



第9図 第2号住居跡・同カマド



第10図 第2号住居跡遺物出土状況

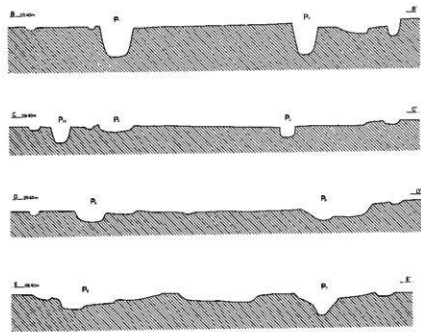
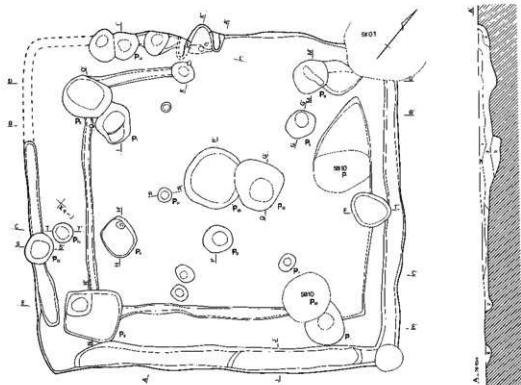
第2表 第2号住居跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
1	杯	(12.3)			ADGH	劣	橙	図示部 10%	№23
2	杯	(13.0)			ABG	普	にぶい黄橙	口縁部 30%	№12・13(カマド)
3	杯	(12.6)			CEG	劣	にぶい黄橙	口縁部 20%	
4	壺?				ABCFG	優	褐・黒褐	底部 30%	№27

第3号住居跡 (第11~13図 遺物第14図)

位置は、X4グリッドである。北に第1・4号住居跡、南東に第2号住居跡が近接する。第10・22号独立柱建物跡と重複し、破壊されている。それらに先行することが確認される。西隅周辺が削平されているが、周壁平面形は、奥行5.1m、幅5.8mの方形で、床面積は29.7㎡と推定される。田島遺跡の竪穴住居跡では最大の遺構である。カマドは北西壁のほぼ中央に設置されていた。中心軸方向はN-40°-Wである。主柱穴はP₃~P₈と推定される。これらをつなぐように周溝と段がめぐっており、拡張前の住居の痕跡とみられる。

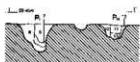
周壁は、最高でも0.1mに達せず、大部分は削平されている。北西壁東半を除いて壁溝が存在し、それによって周壁平面形を把握することができた。主柱穴は、深さ0.15~0.25m、柱痕は確認されていない。カマドは、両袖が遺存していた。奥壁は外側にやや張りだし、燃焼部には浅い凹みが横断していた。



- §11 (A-A')
- 1 黒褐色土：焼土質、ローム殻をわずかに含む
 - 2 暗褐色土：ローム殻をわずかに含む
 - 3 暗黄褐色土：ソフトロームブロックを多く、焼土殻をわずかに含む
(紅押壊土の可能性あり)
 - 4 暗褐色土：炭入物なし
 - 5 暗褐色粘質土：ローム殻をわずかに含む
 - 6 黒褐色土：砂礫をわずかに含む

0 ————— 2m

第11図 第3号住居跡(1)



S101 (古) カマド (D-F)

- 1 焼成土 : 焼土粒子、焼土ブロックを含む
- 2 赤褐色土 : 焼土粒を多く含む
- 3 黄褐色土 : ローム粒を含む
- 4 黄褐色土 : 径3cmのロームブロックを主体とする

S102 (新) カマド (K-K'・L-L')

- 1 焼成土 : 焼土粒をわずかに含む
- 2 赤褐色土 : 焼土粒を多く含む
- 3 赤褐色土 : 焼土粒、ローム粒をわずかに含む
- 4 黄褐色土 : 焼土粒、黄褐色粘土粒を含む
- 5 黄褐色土 : ローム粒を多く含む
- 6 暗褐色土 : 焼土粒をわずかに含む
- 7 褐色土 : 焼土粒、炭化植物をわずかに含む
- 8 暗褐色土 : ローム粒をわずかに含む
- 9 暗褐色土 : 焼土粒、炭化植物をわずかに含む
- 10 黄褐色土 : 炭化植物をわずかに含む
- 11 黄褐色土 : 焼土粒を含む

S111 (G-G'・H-H'・I-I'・M-M')

N-N'・O-O'・P-P'・Q-Q'

R-R'・S-S'・T-T')

- 1 暗褐色土 : 焼土粒、褐色粘土粒を多く、炭化物をわずかに含む
- 2 暗褐色土 : 焼土粒、ローム粒を多く含む
- 3 黄褐色土 : 焼土、炭化ロームを含む、しまり強い
- 4 黄褐色土 : ロームブロックを主体とする
- 5 黄褐色土 : ローム粒、径2~3cmのロームブロックを多く含む、しまり強い粘性強い
- 6 暗褐色土 : ローム粒を含む、しまり強い
- 7 赤褐色土 : 焼土粒、焼土ブロックを主体とし、ローム粒、炭化植物を含む
- 8 暗褐色土 : ローム粒子、ロームブロックを含む、しまり強い
- 9 黄褐色土 : ローム粒子、ロームブロックを主体とする、暗褐色土
- 10 暗褐色土 : 粘り強く、しまり粘りともに強い
- 11 暗褐色土 : 径2cmのロームブロック、焼土粒を含む、しまり強い
- 12 黄褐色土 : ローム粒子、ロームブロックを多く含む、しまり強い
- 13 暗褐色土 : 第3層よりロームブロックを多く含む

S103 (古) 壁溝 (J-J')

- 1 黄褐色土 : 焼土粒をわずかに含む
- 2 暗褐色土 : 炭化物なし



第12図 第3号住居跡②

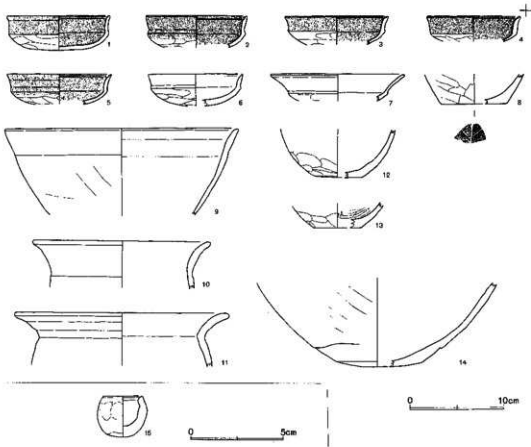


第13図 第3号住居跡遺物出土状況

拡張前の住居跡は、北西壁東半部分が不明であるが、北西・南西・南東の3面は壁溝によって、北東は段差によって把握された。周壁平面形は、4.5×3.9mの方形である。床面積は17.5㎡と推定される。主柱穴は、周壁に対しややいびつな配置であるがP₁～P₄と推定される。深さは0.1～0.45mである。カマドの痕跡は確認されなかった。

このほか、なんらかの意義をもつ可能性のあるP₅～P₁₅があるが、具体的な性格は不明である。

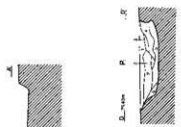
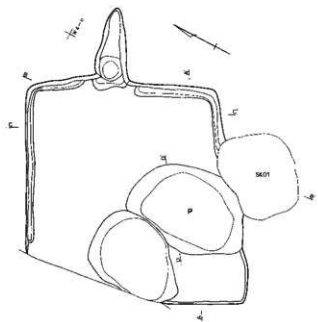
出土遺物は、覆土が残っていた東半を中心に分布していた。土師器の小破片が主体である。復元図示できた個体は15点ある。1・3～5は比企・入間型杯系杯、2・6は須恵器模倣杯系杯である。6は口縁部がやや短く、器肉が厚く、口径は相対的に小さい。7は口縁部が大きく開く杯である。9は鉢、10・11は甕の口縁部、8・12・13は甕の底部である。15はミニチュアの椀形土器だろうか。いずれにせよ実用品とはみなし難いだろう。14は壺の底部だろう。これらの遺物は、古墳時代終末期に属するものである。



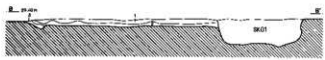
第14図 第3号住居跡出土遺物

第3表 第3号住居跡土器観察表

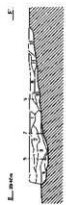
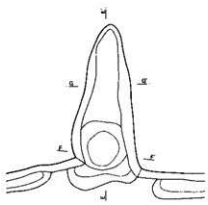
番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
1	杯	(11.0)	3.7	(11.0)	ABH	普	明赤褐	30%	No122 内外面赤彩
2	杯	(10.8)			AGH	普	にぶい赤褐	図示部 15%	No56 内外面赤彩
3	杯	(11.1)			BGH	劣	にぶい褐	図示部 20%	No66 内外面赤彩
4	杯	(10.0)			ABGH	普	明赤褐	図示部 20%	No42 内外面赤彩
5	杯	(11.2)			BCG	優	にぶい赤褐	25%	内外面赤彩
6	杯	(10.1)			BH	普	橙	25%	P 8 グリッド
7	杯	(14.4)			ADFG	優	明赤褐	図示部 10%	No2
8	甕?				AF	普	にぶい黄褐	底部 20%	No47 底部木葉痕
9	鉢	(25.0)			ABGH	劣	にぶい橙	上半部 20%	S K 3
10	甕	(19.0)			ABGH	劣	にぶい黄橙	口縁部 20%	No31
11	甕	(23.0)			ABFG	普	にぶい黄褐	口縁部 20%	P 8 グリッド
12	甕?				ACH	劣	にぶい黄褐	底部 20%	
13	甕?				AG	普	にぶい赤褐	底部 30%	カマド 外面スス,赤化
14	甕?				ABCG	劣	にぶい赤褐	底部 80%	No118 内外面下位スス
15	小皿?	3.9	4.4	5.3	ABFG	優	にぶい橙	50%	N 8 グリッド



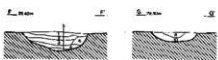
- §14 (D-D')
- 1 灰褐色土
ローム錠をわずかに含む
 - 2 暗褐色土
ローム錠、炭七粒をわずかに含む
 - 3 褐色土
ローム錠を多く含む
 - 4 暗褐色土
ローム錠をわずかに、焼土粒を多く含む
 - 5 暗褐色土
炭化物、焼土錠をわずかに含む
 - 6 暗褐色土
ローム錠を多く含む



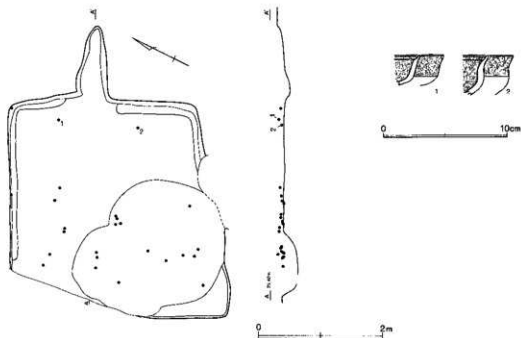
- §14 (H-H')
- 1 灰褐色土 : ローム錠をわずかに含む
 - 2 暗褐色土 : ソフトロームブロックを含む
 - 3 暗褐色土 : ソフトロームブロックを多く含む



- §14 (E-E'・F-F'・G-G')
- 1 暗褐色土 : 焼土粒、ローム錠をわずかに含む
 - 2 黄褐色土 : 焼土粒をわずかに含む
 - 3 暗褐色土 : 黄褐色土粒をわずかに、焼土粒を多く含む
 - 4 暗褐色土 : 黄褐色土粒を多く、焼土粒をわずかに含む
 - 5 暗褐色土 : 炭化物なし
 - 6 黄褐色土
 - 7 暗褐色土 : 焼土粒をわずかに含む
 - 8 暗褐色土 : 焼土粒をわずかに含む
 - 9 黄褐色土 : ブロック状
 - 10 黄褐色土 : 炭化物なし
 - 11 灰褐色土 : 灰、焼土粒をわずかに含む
 - 12 暗褐色土 : 焼土粒をわずかに含む



第15図 第4号住居跡・同カマド



第16図 第4号住居跡遺物出土状況・同遺物

第4号住居跡（第15図 遺物第16図）

位置は、W4・X4グリッドである。東に第1号住居跡、南に第3号住居跡が近接する。

北西隅周辺は、第10号溝跡に破壊され、また南壁中央は、第1号土壌によって破壊されている。それらに先行することが確認される。

周壁平面形は、奥行3.3m、幅3.0～3.3mの、正方形に近い歪んだ方形である。床面積は、約11㎡と推定される。カマドは東壁に設置されていた。中心軸方向はN-65°-Eである。支柱穴は確認されなかった。P₁は屋内施設としては大型だが、その可能性も否定できない。

周壁は、最高0.15mである。カマドは、北壁から燃焼部と煙道が突出する。現存長は約1.1mに達する。袖部は遺存していなかった。P₁は、平面形が1.9×1.3mのゆがんだ方形で、深さは0.3mである。底面は広く平坦である。

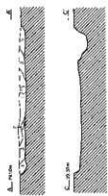
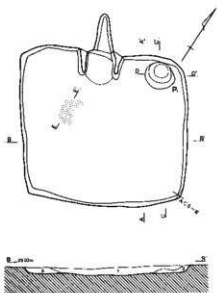
出土遺物は、覆土中から土師器の小破片が少量出土している。1・2はともに比企・入間型杯系杯である。1にくらべ、2は器高がやや高くなるようである。

これらの遺物は古墳時代終末期に属するものである。

第5号住居跡（第17・18図 遺物第19図）

位置は、AC5グリッドである。田島遺跡の調査で検出された遺構のうちでは、最南の立地である。

周壁平面形は、奥行2.3m・幅2.5mのほぼ正方形で、床面積は5.6㎡である。カマドは、北西壁中

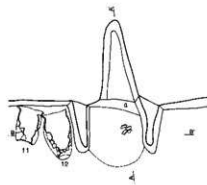


- S15
- 1 黒褐色土：遺人物なし
 - 2 暗褐色土ブロック
 - 3 暗褐色土：ローム状、黄土粒をわずかに含む
 - 4 褐色土：ローム粒をわずかに含む
 - 5 褐色土：ローム粒、黄土粒をわずかに含む
 - 6 黒褐色土：ローム粒、黒色土粒をわずかに含む



- S16 灰土塊
- 1 黒色土：粘土ブロックを多く含む
 - 2 黒褐色土：黄土粒をわずかに含む
 - 3 褐色土：黄土粒、ローム粒をわずかに含む

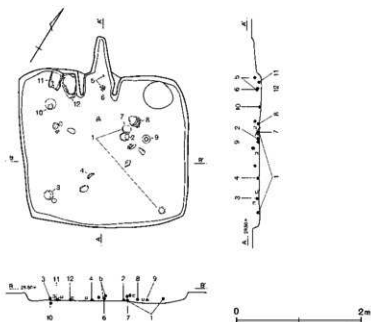
- S15 貯蔵穴
- 1 黒褐色土：ローム粒、径1cmの小石を含む



- S16 カマド
- 1 黄褐色土：ロームブロック、小石を含む、油煙灰土
 - 2 褐色土：ローム粒をわずかに含む、油煙灰土
 - 3 褐色土：黄土粒をわずかに含む、油煙灰土
 - 4 黒褐色土：黄土粒をわずかに含む
 - 5 黄褐色砂質土：腐敗により黄色
 - 6 赤褐色土：黄土粒を多く含む
 - 7 暗褐色土：黄土粒、炭化物をわずかに含む
 - 8 暗褐色土：黄土粒を多く含む
 - 9 黒色土：ローム粒をわずかに含む
 - 10 黄褐色土ブロック
 - 11 暗褐色土：黄土粒、炭化物粒を含む
 - 12 黄褐色土：黄土粒をわずかに含む
 - 13 暗褐色土：黄土粒を含む
 - 14 黒色土：ローム粒をわずかに含む
 - 15 黒色土：遺人物なし
 - 16 褐色土：ローム粒をわずかに含む



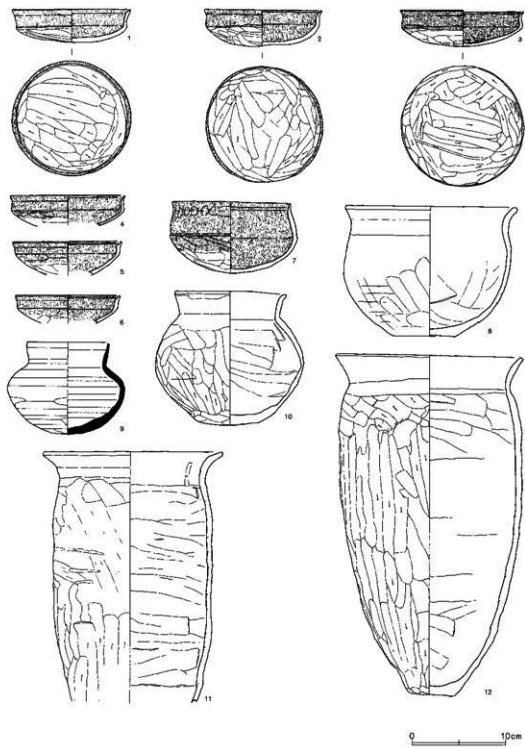
第17図 第5号住居跡・同カマド



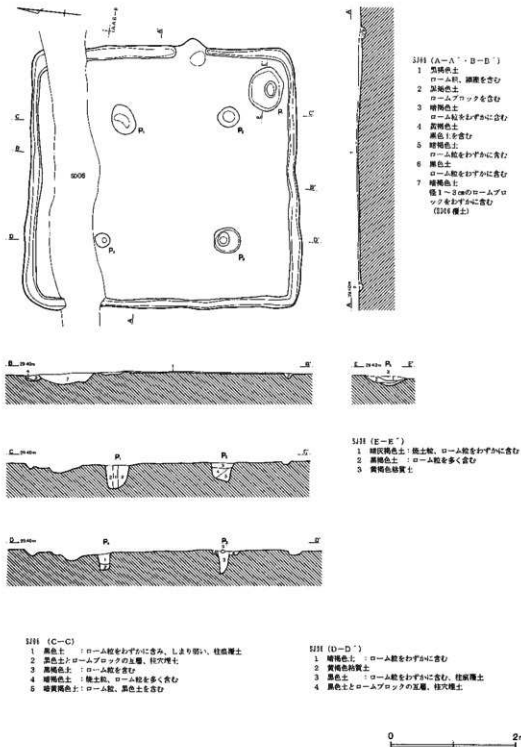
第18図 第5号住居跡遺物出土状況

第4表 第5号住居跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
1	杯	12.7	3.5	12.7	ABGH	優	明赤褐	100%	No2・3 内外面赤彩
2	杯	12.1	3.9	12.2	BH	普	にぶい橙・黒	100%	No4 内外面赤彩
3	杯	13.1	3.9	13.1	BGH	普	橙	100%	No1 内外面赤彩
4	杯	(12.2)			AGH	普	橙・黒	図示部 40%	No6 内外面赤彩
5	杯	(11.7)			ABGH	普	橙	図示部 25%	No1・2(カマド) 内外面赤彩
6	杯	(11.2)			ABGH	普	橙	図示部 20%	No2(カマド) 内外面赤彩
7	杯	12.7	7.6	13.6	ABCG	優	にぶい赤褐	100%	No3 内外面赤彩
8	鉢	18.3	13.8	18.3	ABCFGH	普	橙	70%	No7
9	壺	8.8	9.8	12.5	CG	優	褐灰	100%	No5 須恵器
10	壺	11.9	14.2	15.9	ABCFGH	優	にぶい黄橙	100%	No20 外面下半スス
11	甕	(19.3)			ABCG	優	にぶい黄橙	図示部 50%	No18
12	甕	20.1	36.0		ABCFG	優	にぶい黄褐	60%	No19



第19図 第5号住居跡出土遺物



第20図 第6号住居跡

央に設置されている。中心軸方向はN-33°-Wである。主柱穴は確認されなかった。北隅に位置するP₁は貯蔵穴だろう。

周壁は、高さ約0.1mである。貯蔵穴P₁は、直径0.4m、深さ0.15mである。カマドは、直線的な壁面に袖部が取付けられていた。焚口から燃焼部にかけてはわずかにくぼんでいる。また煙道部が遺存しており、現存長0.6mである。

出土遺物は、土師器と須恵器のほか、それらに混ざり礫の出土もめだった。また、カマド前方の覆土中に焼土の堆積が認められたため、その土層断面を記録した。土器は、完形もしくはそれに近い状態の個体が、床面およびその直上から9点出土しており、田島遺跡の竪穴住居跡では、唯一、良好な一括資料をもたらした。1は床面東隅、3は床面南隅、10は床面西隅近く、2・7～9は床面中央東寄り、5・6はカマド覆土中から破片となって出土した。11・12はカマド西袖に接して横臥の状態出土した。11下半はもともと失われていたが、埋没時はともに全周が遺存していたと推定される。1～6は、比企・入間型杯系杯である。完形の1～3と、破片となって出土した4～6は、細部の作風が両者で異なるようである。7は須恵器模倣杯系杯である。口縁端部がゆるく外反し、その内面に凹線状の段をもつ形態は、1～6に共通する。完形品である。8は鉢である。頸部はゆるくくびれ、口縁部は肥厚して外反する。9は須恵器の短頸壺である。完形品である。口縁部は器壁が薄く、内湾気味で、わずかに丸底である。口縁部内外面は肌あれが顕著である。10は壺である。完形品である。胴部は中位が強く張り出し、ソロバン玉状に近い。胴部中位以下はケズリ調整で、下半はススでよごれている。煮沸具として用いられた可能性が高い。平底だが底面は丸みを帯び、やや丸底気味である。11・12は甕である。両者ともに細身で、顕著な長胴である。頸部のくびれはゆるやかである。調整は外面タテケズリ、内面ヨコヘラナデ。

これらの遺物は、古墳時代終末期に属するものである。

第6号住居跡（第20図）

位置は、AA6・AB6グリッドである。竪穴住居跡群中では南寄りである。南西18mに第5号住居跡がある。第6号溝跡と重複し、破壊されている。第6号溝に先行することが確認される。

周壁平面形は、奥行4.0m、幅4.1mのほぼ正方形である。床面積は17.0㎡である。カマドは東壁にその痕跡が認められる。中心軸方向はN-83°-Eである。主柱穴はP₁～P₄である。南東隅のP₁は貯蔵穴である。

周壁は、高さ0.1mに達せず、削平されている部分が多い。壁溝が全周する。主柱穴の深さは0.25～0.35mで、P₄で柱痕が確認された。カマドは、東壁の壁溝が途切れ、壁が外側にふくらむ部分に設置されていたとみられる。袖部などは遺存していない。貯蔵穴P₁は、平面形は0.7×0.55mの楕円形で、深さ0.15mである。

出土遺物はなく、遺構の帰属時期も特定できない。カマドの痕跡が確認されていることから、古墳時代中期以降だろう。

(2) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第21図)

位置は、Z5グリッドである。遺構群の中央部に属する。

規模は、4×3間で、桁行7.1m、梁行5.2mである。長軸方向はN-30°-Wである。柱穴の規模は、直径0.4m前後、深さは0.1~0.3mである。柱痕は確認されていないが、柱間距離は、四隅の柱の両側が約2m、他で約1.5mと推定される。

出土遺物は、土器片1点のみで、遺構の帰属時期は不明である。

第2号掘立柱建物跡 (第22図)

位置は、Z4・Z5グリッドである。遺構群の中央部に属し、第1号掘立柱建物跡の東に近接する。他の掘立柱建物跡とは重複していない。

規模は、2×2間の総柱で、3.1m四方の正方形である。柱穴の規模は、直径0.4m前後、深さは0.1~0.5mである。柱痕は確認されていないが、柱間距離は1.6m前後と推定される。

出土遺物は、土器片7点のみである。遺構の帰属時期は古墳時代後期以降であるが、確定はできない。

第3号掘立柱建物跡 (第23・24図)

位置は、AA6・Z6グリッドである。遺構群の中央部に属する。第4号掘立柱建物跡・第7号溝と重複しているが、両者との新旧関係は不明である。

規模は、一部不揃いだが4×3間で、桁行11.2m、梁行6.4mである。長軸方向はN-29°-Wである。柱穴の規模は、直径0.5m前後、深さは0.2~0.4mである。柱痕は確認されていないが、柱間距離は、2.5m前後を主体とし、一定ではなかったと推定される。

出土遺物は、P₁とP₂から土師器小破片が出土しており、遺構の帰属時期は古墳時代後期以降である。

第4号掘立柱建物跡 (第25図)

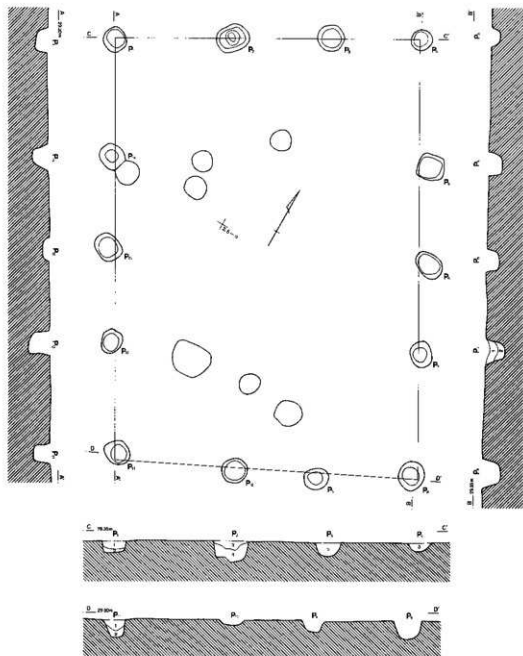
位置は、AA5・AA6グリッドである。遺構群の中央部に属する。第3号掘立柱建物跡・第7号溝と重複しているが、両者との新旧関係は不明である。

規模は、3×2間で、桁行6.5m、梁行4.7mである。長軸方向はN-71°-Eである。柱穴の規模は、直径0.4~0.7m、深さは0.25~0.4mである。柱痕は、P₁でその可能性が認められるのみだが、柱間距離は、2.0~2.1mではほぼ一定していたと推定される。

出土遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。

第5表 第5号掘立柱建物跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
1	杯	(11.4)		(11.4)	BCH	B	にぶい赤褐	図示部 20%	P2



130: (B-B')

- 1 赤色土 : ローム殻をわずかに含む
- 2 黒褐色土 : ローム殻をわずかに含む

131: (C-C')

- 1 暗褐色土 : ローム殻を多く含む
- 2 暗黄褐色土 :
- 3 黒色土 : ローム殻をわずかに含む
- 4 赤色土 : ロームブロックを含む
- 5 黒色土 : 遺人物なし

132: (D-D')

- 1 暗褐色土 : ローム殻をわずかに含む
- 2 黒褐色土 : ロームブロックを多く含む



第21図 第1号掘立柱建物跡

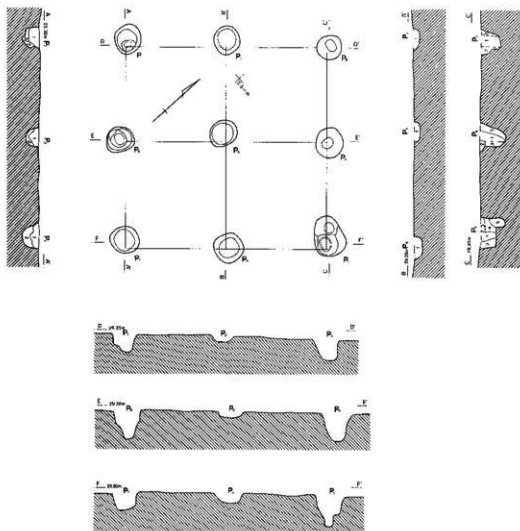


図1 (A-A')

- 1 黒褐色土：ロームブロックをわずかに含む
- 2 暗褐色土：ローム粒を多く含む
- 3 黄褐色土
- 4 黒褐色土：混入物なし
- 5 暗褐色土：ロームブロックを多く含む
- 6 黒褐色土：稜上段、ローム粒をわずかに含む
- 7 黒褐色土：ローム粒をわずかに含む

図2 (C-C')

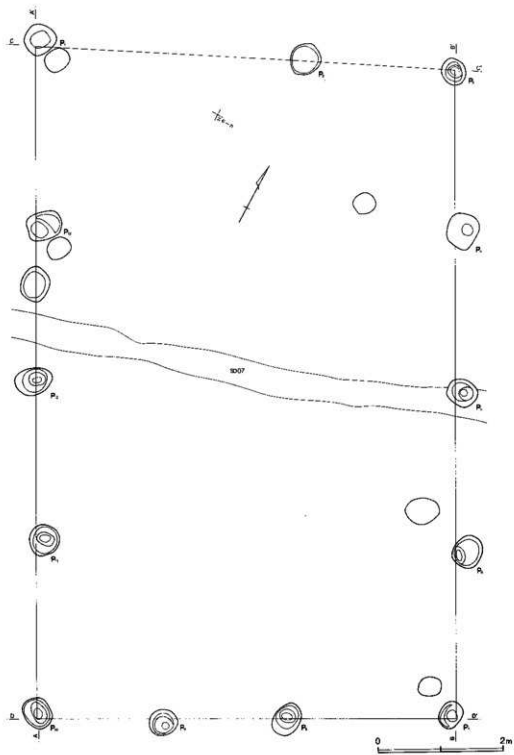
- 1 黒色土：混入物なし
- 2 黒色土：ローム粒をわずかに含む
- 3 黒褐色土：ローム粒を含む
- 4 暗黄褐色土：ロームと暗褐色土を含む
- 5 暗褐色土：ローム粒を含む
- 6 黒褐色土：ローム粒をわずかに含む
- 7 ロームブロック
- 8 暗褐色土：ロームブロックを含む

図3 (B-B')

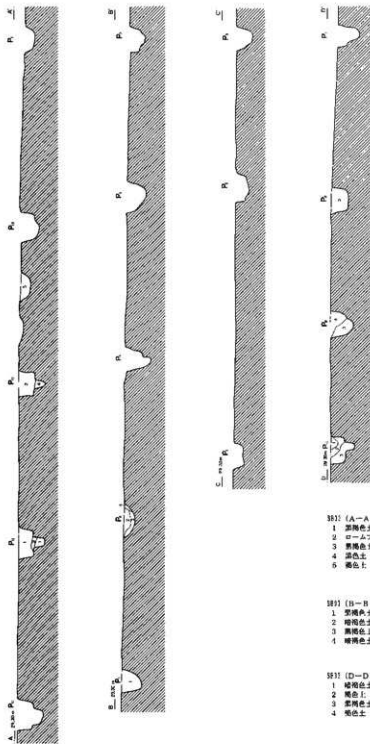
- 1 暗褐色土：ローム粒を多く含む
- 2 黒褐色土：ローム粒をわずかに含む



第22図 第2号掘立柱建物跡



第23图 第3号插立柱建物跡(1)



5912 (A-A')

- 1 紫褐色土：径1～2cmのロームブロックを含む
- 2 ロームブロック
- 3 紫褐色土：コーム粒を含む
- 4 紫色土：融入物なし
- 5 褐色土：ローム粒を含む

5911 (B-B')

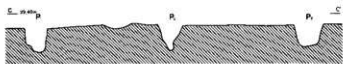
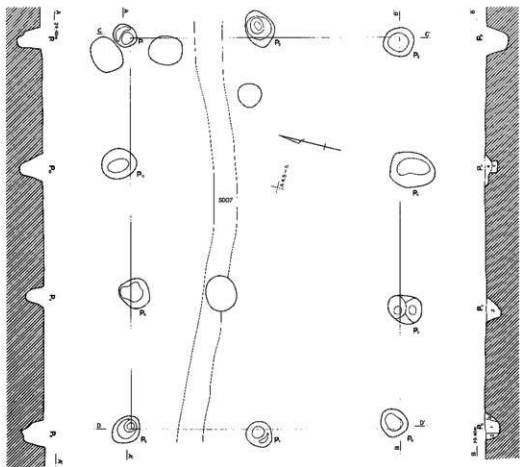
- 1 紫褐色土：径1～2cmのロームブロックを含む
- 2 紫褐色土：ローム粒をわずかに含む
- 3 紫褐色土：径3～5cmのロームブロックを含む
- 4 紫褐色土：コーム粒を多く含む

5911 (D-D')

- 1 紫褐色土：径1cmのコームブロックを含む
- 2 褐色土：径1cmのロームブロックを含む
- 3 紫褐色土：径5cmのロームブロックを含む
- 4 褐色土：径1～2cmのロームブロックを含む

0 2m

第24図 第3号掘立柱建物跡(2)

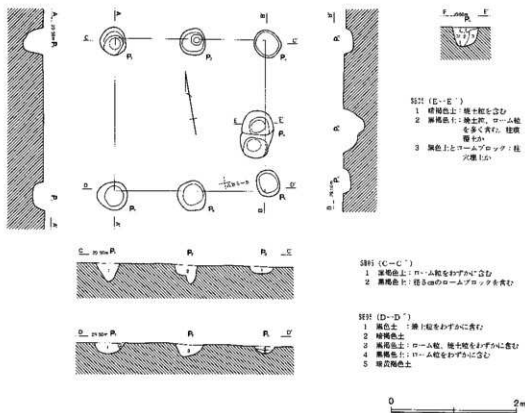


S4 (H-B)

- 1 黒色土 : 炭人跡なし
- 2 暗褐色土 : 磁541ロームブロックを含む。柱穴埋土
- 3 暗褐色土 : 径1~2cmのロームブロックを含む
- 4 褐色土 : ローム粒を多く含む



第25図 第4号掘立柱建物跡



第26図 第5号掘立柱建物跡

第5号掘立柱建物跡 (第26図 遺物第27図)

位置は、AB5グリッドである。南寄りの遺構群に属する。第13号掘立柱建物跡と重複しているが、両者の新旧関係は不明である。

規模は、2×2間、あるいはP₁を付属する柱穴とみなさなければ1×2間である。2.9m四方の正方形である。柱穴の規模は、直径0.4m前後、深さは0.1~0.3mである。柱痕は、P₁でその可能性があるのみである。出土遺物は、柱穴から1が出土した。1は杯である。これにより、遺構の帰属時期は古墳時代後期末以降であるが確定はできない。



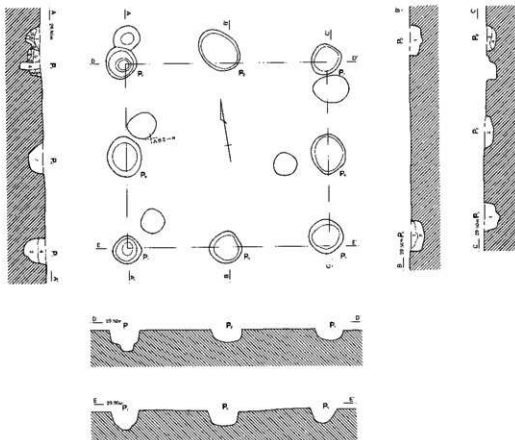
第27図 第5号掘立柱建物跡出土遺物

第6号掘立柱建物跡 (第28図)

位置は、AB4・5グリッドである。南寄りの遺構群に属している。第12号掘立柱建物跡と重複しているが、両者の新旧関係は不明である。

規模は、2×2間で、長辺3.7m、短辺3.3mである。柱穴の規模は、直径0.5m余り、深さは0.2~0.35mである。柱痕はP₁のみ確認された。

出土遺物は、土器片2点のみである。遺構の帰属時期は、古墳時代後期以降であるが確定はできない。



群柱 (A-A')

- 1 暗褐色土：ローム粒をわずかに含む
- 2 黒褐色土：ローム粒をわずかに含む
- 3 暗黄褐色土：黒色土、ロームブロック多量
- 4 黒色土：ローム粒をわずかに含む
- 5 黒色土：ローム粒を多く含む
- 6 暗黄褐色土：黒色土を含む
- 7 黒褐色土：縦2～3cmのロームブロックを含む

群柱 (B-B')

- 1 黒褐色土：ローム粒をわずかに含む
- 2 暗褐色土：縦2～4cmのロームブロックを含む

群柱 (C-C')

- 1 黒褐色土：ローム粒、焼土粒をわずかに含む
- 2 黒褐色土：縦2～4cmのロームブロックを多く含む
- 3 暗褐色土：ローム粒をわずかに含む
- 4 黒褐色土：ローム粒、焼土粒を多く含む



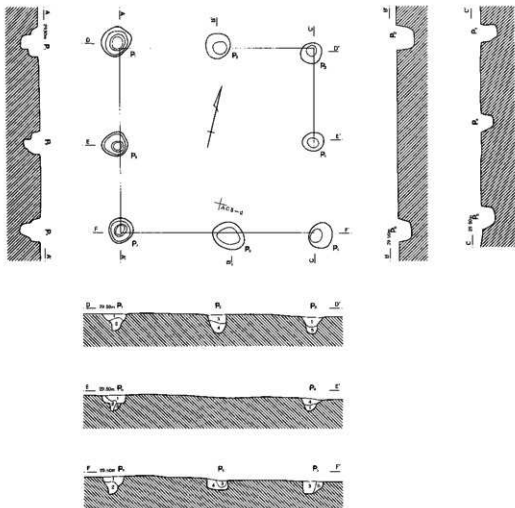
第28図 第6号掘立柱建物跡

第7号掘立柱建物跡 (第29図)

位置は、AB4・AC5グリッドである。遺構群の最南に位置している。第1号掘立柱建物跡と重複しているが、両者の新旧関係は不明である。

規模は、2×2間で、3.4m四方の正方形である。柱穴の規模は、0.3～0.5m、深さは0.2～0.3mである。柱痕は確認されなかった。

出土遺物はなく、遺構の所属時期は不明である。



1307 (D-D')

- 1 黒褐色土：ローム粒をわずかに含む
- 2 黒褐色土：径1～2cmの碎褐色土のブロックを含む
- 3 黒褐色土
- 4 褐色土：細かいロームブロックをわずかに含む
- 5 褐色土：細かいロームブロックを含む

1307 (F-F')

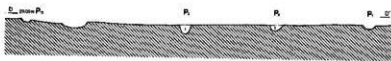
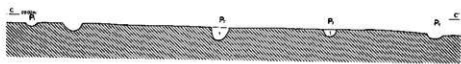
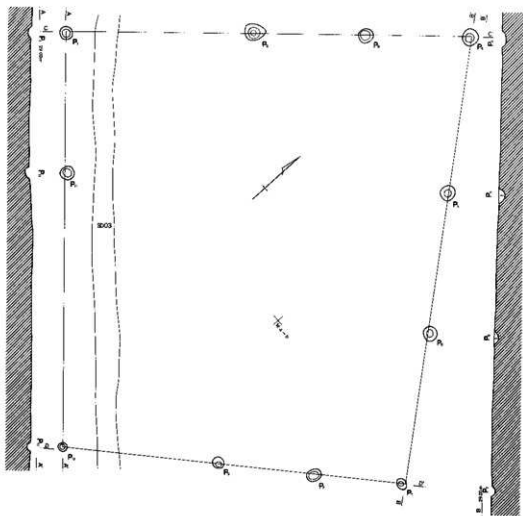
- 1 黒褐色土：径1～2cmのロームブロックをわずかに含む
- 2 黒褐色土：混入物なし
- 3 黒褐色土：ローム粒をわずかに含む
- 4 碎黄褐色土：ローム粒をわずかに含む
- 5 碎黄褐色土

1307 (E-E')

- 1 褐色土：ローム粒をわずかに含む
- 2 黒褐色土：ローム粒をわずかに含む
- 3 碎黄褐色土ブロック
- 4 黒褐色土：混入物なし



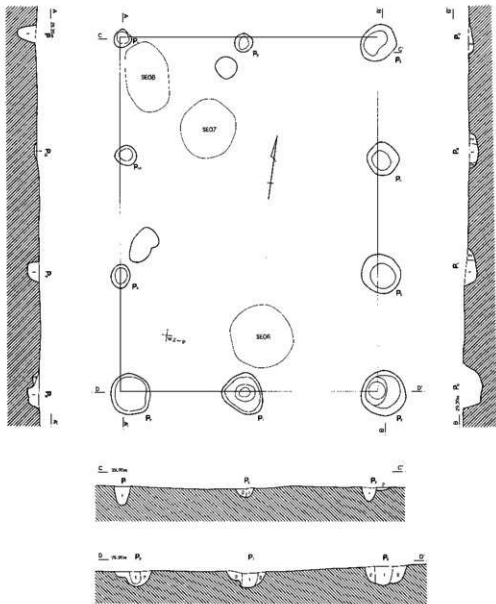
第29図 第7号掘立柱建物跡



1111
 1 黒色土：焼土をわずかに含み、しまり強い

0 2m

第30図 第8号掘立柱建物跡

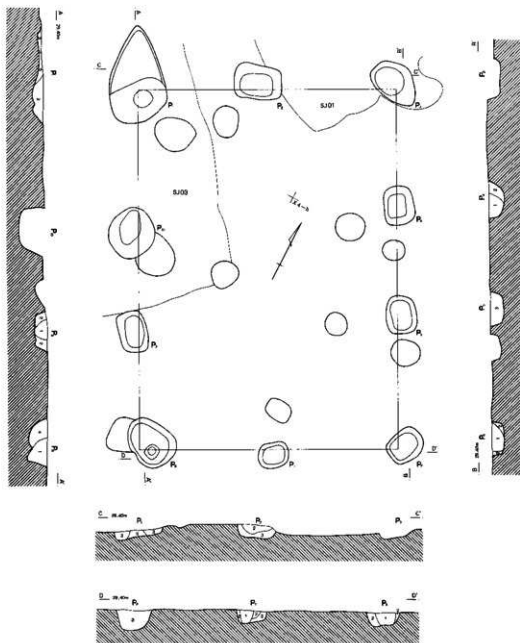


SB06

- 1 暗褐色土：ローム柱、焼土灰を含む
- 2 灰褐色土：ローム柱、ロームブロックを含み、しまっている

0 2m

第31図 第9号掘立柱建物跡

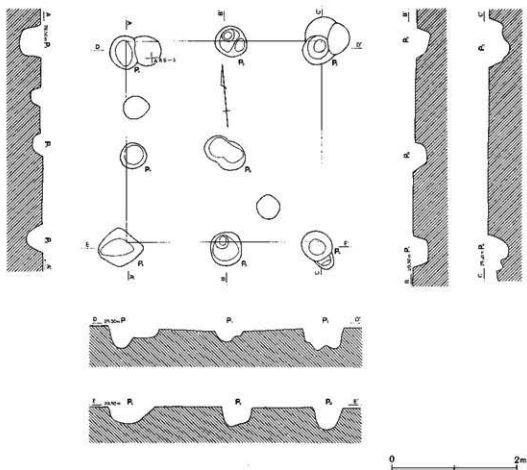


附1:

- 1 暗褐色土：ローム粒、炭化物粒を含み、しまり強い
- 2 暗褐色土：第1層よりローム粒を多く含む
- 3 黄褐色土：黄土、炭化物粒を含み、しまり強い
- 4 黄褐色土：ローム粒、ロームブロックを含む
- 5 ローム

0 2m

第32図 第10号掘立柱建物跡



第33図 第11号掘立柱建物跡

第8号掘立柱建物跡 (第30図)

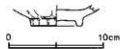
位置は、V3・V4・W3・W4グリッドである。遺構群の最北に位置する。第3号溝跡と重複しているが、両者の新旧関係は不明である。

規模は、一部不揃いだが3×3間である。平面形はいびつで、西側の2辺は6.6m、東側では北東辺が7.3m、南東辺が5.5mである。柱穴の規模は、直径0.2m前後が主体であり、深さは0.05~0.2mである。遺構の平面規模に比べ小さいといえる。平面形がいびつなこととあわせ、比較的簡易的な建築物の遺構とも考えられる。柱痕は確認されなかった。

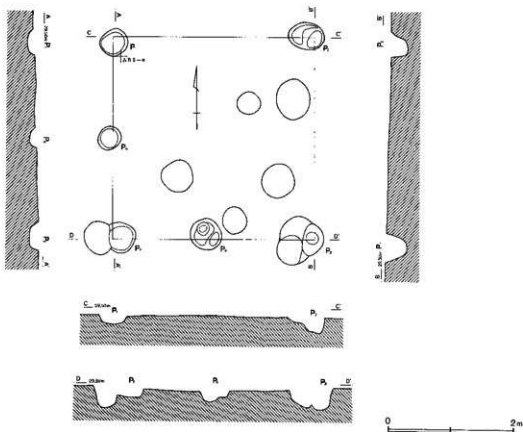
出土物は土器片2点のみで、遺構の帰属時期は、古墳時代後期以降だろう。

第9号掘立柱建物跡 (第31図 遺物第34図)

位置は、W3・W4グリッドである。北寄りの遺構群に属する。第6・7・8号井戸跡と重複しているが、両者との新旧関係は不明である。規模は、3×2間で、桁行6.5m、梁行4.7mである。長軸方向



第34図 第9号掘立柱建物跡出土遺物



第35図 第12号掘立柱建物跡

はN-8°-Wである。柱穴の規模は、直径0.3~0.7m、深さは0.05~0.3mで規模にばらつきがある。柱痕は、P₁~P₁₁で認められる。出土遺物は土器片11点到磁器片1点である。1は青磁碗の底部である。柱穴内から出土した。画花文をもち、中国元代のものと思われる。

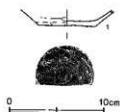
このことから、遺構の帰属時期は13世紀中葉以降である。

第10号掘立柱建物跡 (第32図 遺物第36図)

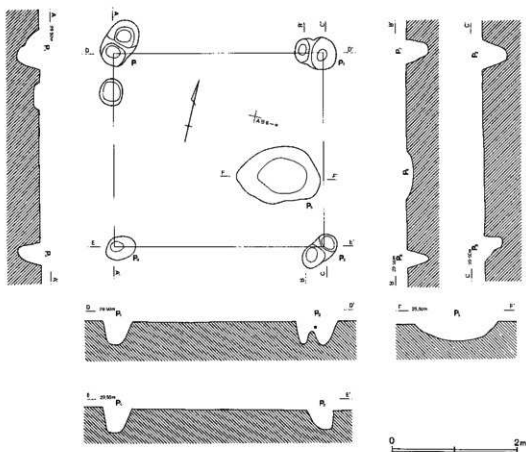
位置は、X4・X5グリッドである。北寄りの遺構群に属する。第19・20・22号掘立柱建物跡などと重複しているが、それらとの新旧関係は不明である。

規模は、3×2間で、桁行6.2m、梁行4.9mである。長軸方向はN-27°-Wである。柱穴の規模は、長径0.5~0.9mの隅丸方形が主体で、深さは0.2~0.4mである。柱痕は、P₁などでその可能性が認められる。

出土遺物は、須恵器を含む土器片11点である。1は杯の底部である。底部に回転糸切痕を残している。これらから、遺構の帰属時期は平安時代以降とみられる。



第36図 第10号掘立柱建物跡出土遺物



第37図 第13号掘立柱建物跡

第11号掘立柱建物跡 (第33図)

位置は、AB4・AB5グリッドである。北寄りの遺構群に属する。第12号掘立柱建物跡と重複しているが、両者の新旧関係は不明である。

規模は、一部不揃いだが2×2間で、3.5m四方である。中央付近に位置するP₁が柱穴としてともなうとすると、総柱建物であった可能性もある。柱穴の規模は、直径0.4～0.5m、深さは0.15～0.35mである。

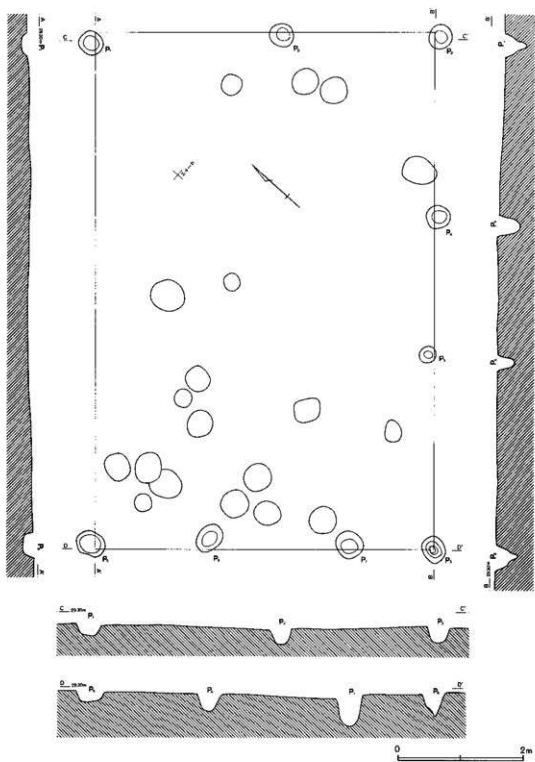
出土遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。

第12号掘立柱建物跡 (第35図)

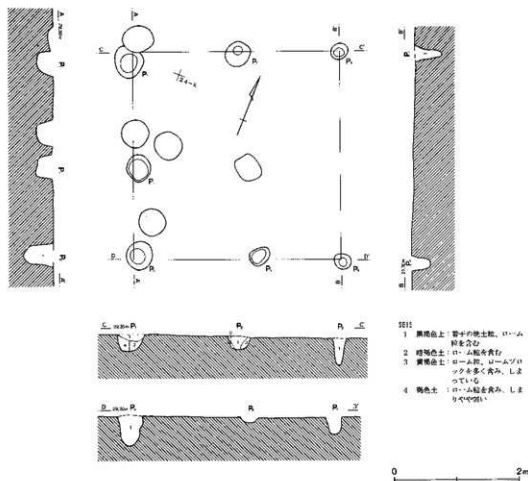
位置は、AB4・AB5グリッドである。北寄りの遺構群に属する。第6・11号掘立柱建物跡と重複しているが、両者との新旧関係は不明である。

規模は、不揃いだが2×2間とみられ、3.6m四方である。柱穴の規模は、直径0.4m前後、深さは0.15～0.35mである。

出土遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。



第36图 第14号掘立柱建物跡



第39図 第15号掘立柱建物跡

第13号掘立柱建物跡 (第37図)

位置は、AB5・AB6グリッドである。北寄りの遺構群に属する。第5号掘立柱建物跡と重複しているが、両者の新旧関係は不明である。

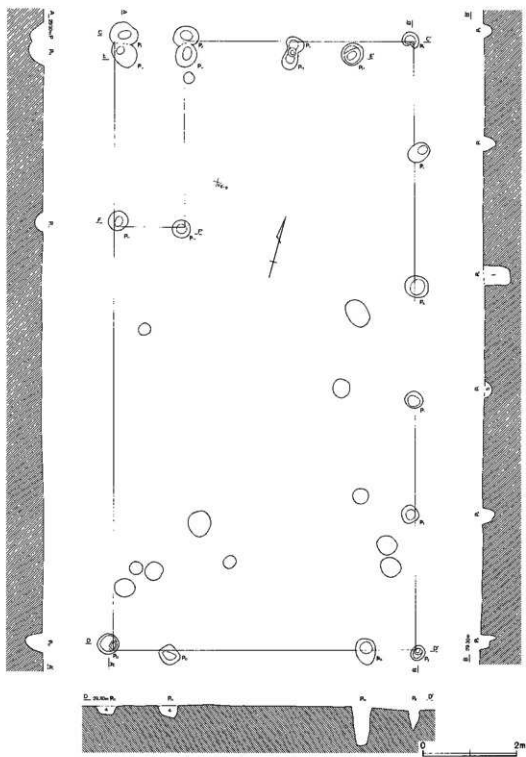
規模は、1×1間とみられ、3.6m四方である。柱穴の規模は、直径0.4m前後、深さは0.3～0.4mである。P₁～P₂は2基のビットが結合している。遺構内東辺寄りのP₁がこれにともなうかは不明である。出土遺物は土器片1点のみで、遺構の帰属時期は不明である。

第14号掘立柱建物跡 (第38図)

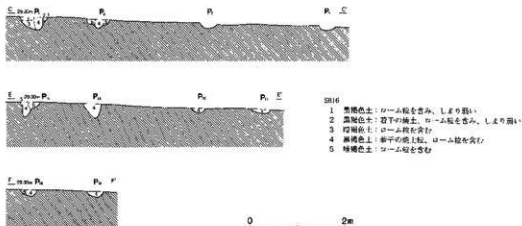
位置は、Z4・Z5グリッドである。遺構群の中央部に属する。第15号掘立柱建物跡・第16号掘立柱建物跡と重複しているが、両者との新旧関係は不明である。

規模は、各辺1～3間と不揃いだが、桁行8.4m、梁行5.8mである。長軸方向はN-47°-Eである。柱穴の規模は、直径0.25～0.4m、深さは0.1～0.5mである。

出土遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。



第40图 第16号掘立柱建物跡(1)



第41図 第16号掘立柱建物跡(2)

第15号掘立柱建物跡 (第39図)

位置は、Z4グリッドである。北寄りの遺構群に属する。第14・15号掘立柱建物跡と重複しているが、両者との新旧関係は不明である。

規模は、一部不揃いだが2×2間で、3.5m四方である。東辺が1間となる構造と規模は、第11号掘立柱建物跡と同じである。柱穴の規模は、直径0.25～0.45m、深さは0.1～0.45mである。柱痕は確認されなかった。

出土遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。

第16号掘立柱建物跡 (第40・41図)

位置は、Y4・Z4・Z5グリッドである。遺構群の中央部に属する。第3号掘立柱建物跡・第7号溝と重複しているが、両者との新旧関係は不明である。

規模は、不揃いだが3×5間で、桁行13.4m、梁行7.0mである。田島遺跡で確認されたうちでは最大の掘立柱建物跡である。長軸方向はN-16°-Wである。柱穴の規模は、直径0.3～0.5m、深さは0.15～0.8mである。柱痕は確認されなかった。

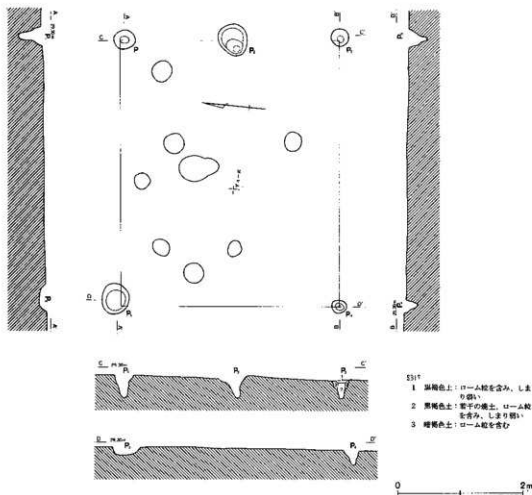
出土遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。

第17号掘立柱建物跡 (第42図)

位置は、Y4グリッドである。北寄りの遺構群と中央の遺構群の中間に位置している。第18号掘立柱建物跡と重複しているが、両者との新旧関係は不明である。

規模は、1×1間だが、東辺のみ中間に柱穴を持ち、2間になる。4.4×3.7mである。長軸方向はN-80°-Eである。柱穴の規模は、直径0.25～0.45m、深さは0.25～0.4mである。柱痕は、P₁で確認されたほか、P₁・P₂・P₃も、柱穴底部断面から、柱位置がうかがえる。

出土遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。



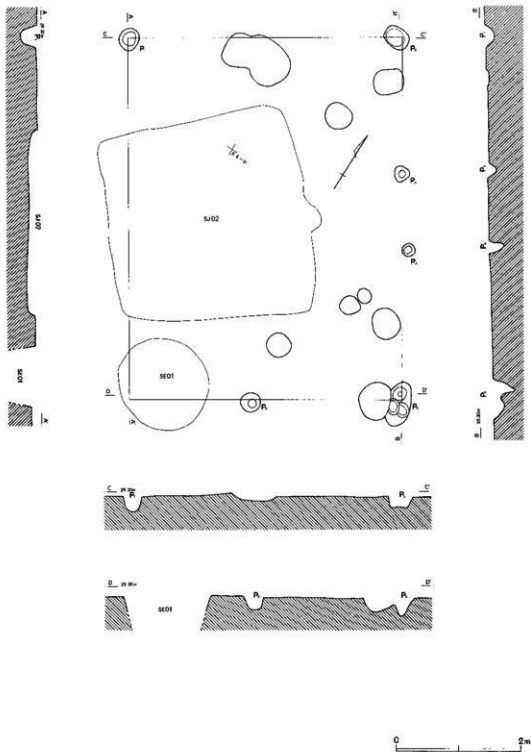
第42図 第17号掘立柱建物跡

第18号掘立柱建物跡 (第43図)

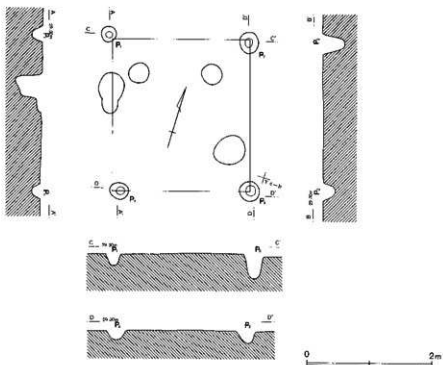
位置は、X 4・X 5・Y 4 グリッドである。北寄りの遺構群と中央の遺構群の中間に位置している。第17号掘立柱建物跡と重複しているが、両者の新旧関係は不明である。さらに第2号住居跡、第1号井戸跡なども重複し、平面規模はさわめて不明瞭である。確認されたピットの配列を積極的に評価し、以下のようなプランを想定した。

規模は、3×2間で、桁行6.5m、梁行4.7mである。長軸方向はN-34°-Wである。柱穴の規模は、径0.3~0.7m、深さは0.15~0.35mである。

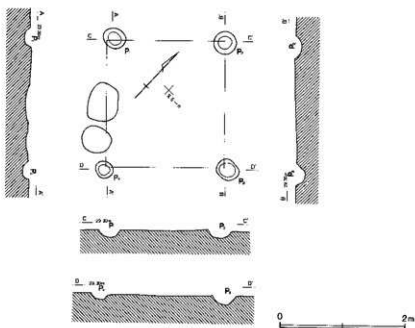
出土遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。



第43図 第18号掘立柱建物跡



第44图 第19号掘立柱建物跡



第45图 第20号掘立柱建物跡

第19号掘立柱建物跡（第44図）

位置は、Y 4 グリッドである。第17号掘立柱建物跡と重複しているが、両者の新旧関係は不明である。

規模は、1×1間で、2.6×2.4mである。柱穴の規模は、直径0.4m前後、深さは0.15～0.2mである。柱痕は確認されなかった。周壁が認められない現状から掘立柱建物跡に含めたが、規模からみて、竪穴住居跡が、柱穴を残して削平された痕跡である可能性もある。

出土遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。

第20号掘立柱建物跡（第45図）

位置は、X 4・X 5 グリッドである。北寄りの遺構群に属する。第10号掘立柱建物跡と重複しているが、両者の新旧関係は不明である。

規模は、1×1間で、2.1×2.3mである。柱穴の規模は、直径0.3m前後、深さは0.1～0.15mである。周壁が認められない現状から掘立柱建物跡に含めたが、規模からみて、竪穴住居跡が、柱穴を残して削平された痕跡である可能性もある。

出土遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。

第21号掘立柱建物跡（第46図）

位置は、AA 4・AA 5・AB 4・AB 5 グリッドである。南寄りの遺構群に属する。第6号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模は、不揃いだが2×1間で、桁行3.6m、梁行3.3mである。長軸方向はN-87°-Wである。ただし、第6号溝跡との重複によって、柱穴が破壊されたか見落とされた可能性はあり、プランの確定は困難である。あるいは、現状を肯定的に評価するなら、第6号溝跡をまたぐ、溝の付帯施設である可能性も否定できない。柱穴の規模は、径0.45～0.7m、深さは0.15～0.2mである。いずれも現状では皿状の浅さである。柱痕は確認されなかった。

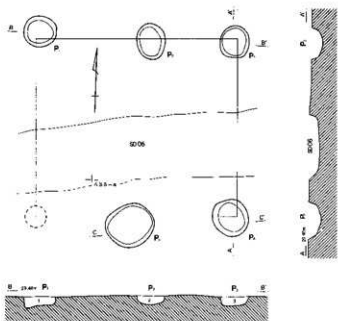
出土遺物は、土器片2点である。遺構の帰属時期は不明である。

第22号掘立柱建物跡（第47図）

位置は、X 4 グリッドである。北寄りの遺構群に属する。第10号掘立柱建物跡と重複しているが、両者の新旧関係は不明である。

規模は、1×1間で、2.6m四方の正方形である。柱穴の規模は、直径0.4m前後、深さは0.15～0.2mである。周壁が認められない現状から掘立柱建物跡に含めたが、規模からみて、竪穴住居跡が、柱穴を残して削平された痕跡である可能性もある。

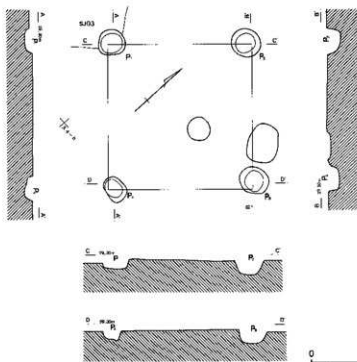
出土遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。



- 16): (H-B⁺)
- 1 黄褐色土: ローム粒、粘土粒を
およかに含む
 - 2 黄褐色土: 径1~2cmの塊状のロ
ームブロックを含む
 - 3 黄褐色土: 粘土粒をわずかに含
む

- 17): (C-C⁺)
- 1 黄褐色土: ローム粒を多く含む
 - 2 黄褐色土: 粘褐色土ブロック、
ローム粒を含む

第46図 第21号掘立柱建物跡



第47図 第22号掘立柱建物跡

(3) 井戸跡

第1号井戸跡（第48図）

位置は、Y 4 グリッドである。平面形は直径1.4mの円形で、深さは、推定1.25mである。
出土遺物は土器片2点で、遺構の帰属時期は不明である。

第2号井戸跡（第48図）

位置は、Y 5 グリッドである。平面形は直径0.95mの円形で、深さ0.95mである。
出土遺物は土器片5点で、遺構の帰属時期は古墳時代後期以降である。

第3号井戸跡（第48図）

位置は、Y 5 グリッドである。平面形は直径0.85mのややくずれた円形で、深さ1.2mである。
出土遺物は土器片3点で、遺構の帰属時期は古墳時代後期以降である。

第4号井戸跡（第48図）

位置は、Y 5 グリッドである。平面形は1.75×1.5mの楕円形で、深さ1.2mである。
出土遺物は土器片2点で、遺構の帰属時期は古墳時代後期以降である。

第5号井戸跡（第48図 遺物第50図）

位置は、W 4 グリッドである。平面形は1.2×1.1mの楕円形で、深さ0.95mである。覆土の層位からみて、第10号溝に切られている。

出土遺物は土器片16点と燈明皿、土鍾3個が出土した。土鍾はいずれも完形である。
遺構の帰属時期は、第10号溝に先行する状況と遺物からみて、平安時代に含まれるだろう。

第6号井戸跡（第48図）

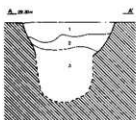
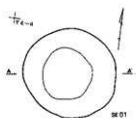
位置は、W 3 グリッドである。平面形は直径0.95mの円形で、深さ0.95mである。
出土遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。

第7号井戸跡（第49図）

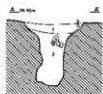
位置は、W 3 グリッドである。平面形は直径0.95mの円形で、深さ0.75mである。
出土遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。

第8号井戸跡（第49図）

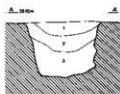
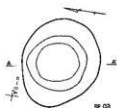
位置は、W 3 グリッドである。平面形は1.1×0.7mの楕円形で、深さ0.65mである。
出土遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。



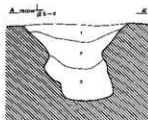
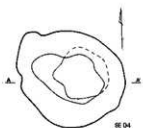
- SE01
- 1 暗褐色土 : 焼土粒をわずかに含む
 - 2 黒褐色粘質土 : 混入物なし
 - 3 黒褐色粘質土 : ローム粒をわずかに含む



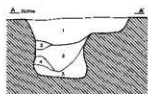
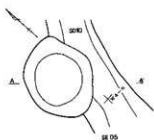
- SE02
- 1 黒色粘質土 : ローム粒をわずかに含む
 - 2 黒色粘質土 : ローム粒を多く含む



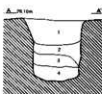
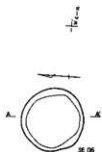
- SE03
- 1 褐色粘質土 : ローム粒をわずかに含む
 - 2 赤色粘質土 : 混入物なし
 - 3 暗褐色粘質土 : 細かいロームブロックを多く含む



- SE04
- 1 暗褐色土 : 混入物なし
 - 2 黒褐色粘質土 : ローム粒をわずかに含む
 - 3 暗褐色土 : ローム粒、細砂粒を多く含む



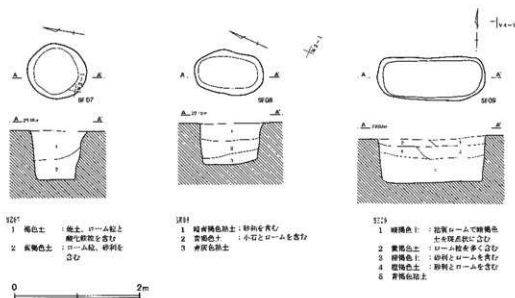
- SE05
- 1 黒褐色土 : 焼土粒、炭化粒、ローム粒を含む
 - 2 黄褐色土 : ローム粒、ロームブロックを主成分とする
 - 3 黒褐色粘質土 : 砂粒を含み、しまっている
 - 4 黄褐色土 : ローム粒、ロームブロックを多く含む
 - 5 黒褐色粘土 :



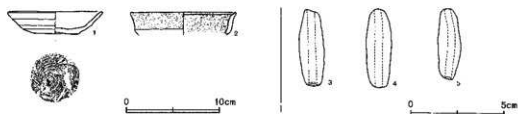
- SE06
- 1 黒褐色土 : 焼土粒、炭化粒、ローム粒を均一に含む
 - 2 暗黄褐色土 : 砂礫、ローム粒を含む
 - 3 赤灰色粘質土 : しまり割れ
 - 4 灰褐色粘土 :



第48図 井戸跡(1)



第49図 井戸跡(2)



第50図 第5号井戸跡出土遺物

第6表 第5号井戸跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
1	灯明皿	10.2	2.5		ABCFGH	普	にぶい黄橙	90%	底部糸切痕
2	杯	11.3			BCH	普	明褐	口縁部 15%	内外面赤彩
3	土罐		長4.2	1.3	BCF	普	にぶい黄橙	100%	
4	土罐		長4.2	1.3	BCFG	普	にぶい黄橙	100%	
5	土罐		長3.8	1.2	CH	普	浅黄橙	100%	

第9号井戸跡 (第49図)

位置は、V3グリッドである。平面形は1.7×0.65mの隅丸長方形で、深さ0.65mである。

出土遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。

(4) 溝跡

第1号溝跡 (第51・53・54図 遺物第55～58図)

位置は、S 8・T 7～15・U 13～21グリッドである。桑原A遺跡第22号溝跡・棚田遺跡第1号溝跡と同一の遺構で、全長は約370mである。このうち田島遺跡に含まれるのは東半部にあたり、長さは165mである。平面形は直線的で、幅2～3.5m前後、深さ0.2～0.4mである。

遺物は、T 8グリッドを中心に大量の土器が出土した。T 8グリッドでは完形品もしくはそれに近い状態の個体も多く、底面からおよそ20cm上の覆土中に、一括あるいは連続的に投棄されたとみられる。1・2は古式土師器である。1は、直立した口縁部など、北陸系の甕の特徴をよくしめしている。軟質で風化が著しく、細部の特徴は不明瞭だが、胴部外面にはハケメがわずかに残っている。胎土はきめ細かく淡黄色で、搬入品である可能性が高い。2は無文だが、その形態から、吉ヶ谷式土器の系譜を引く甕とみられる。3～13・16～21・24～26はT 8グリッド出土の杯、22・23は同じく碗である。遺存状態の良いものが主体である。3～7・9～14・16～19は須恵器模倣杯、8・20・21・24～26は比企・入間型杯である。このうち5～8は底部に木葉痕をもつ。15はT 9グリッド出土の須恵器模倣杯である。27～33はT 10～12グリッド出土の杯である。やや小ぶりのものが目立つ。34～52は高杯である。34・36は同一個体の可能性が高い。36から脚部の全景がうかがえ、比較的短脚の有稜高杯である。53・57・62は甕である。57は形態が甕に近い。54～56・58～61・63～67は甕である。56は外面と口縁部内面にハケメを残しており、北武蔵地域等他地域との関連が注目される。72は杯の底部である。底面に糸切り痕を残す。73・75～82は甕もしくは壺の底部である。74は台付甕の脚部である。古式土師器だろう。

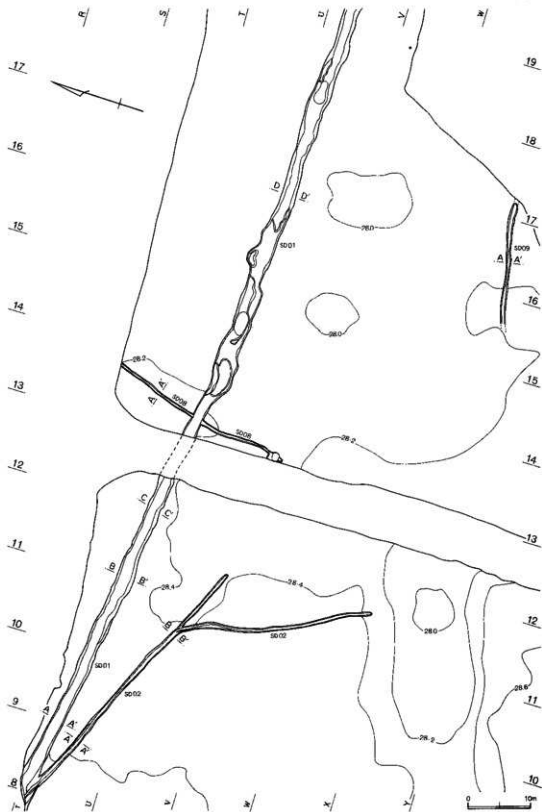
1・2・74は古墳時代前期、72が平安時代以降に属するのを除けば、これらの遺物は古墳時代後期に属する。遺物の出土状況は明確なまとまりを示しており、遺構の帰属時期が古墳時代後期に遡ることは確実だろう。

第2号溝跡 (第51・53図 遺物第59図)

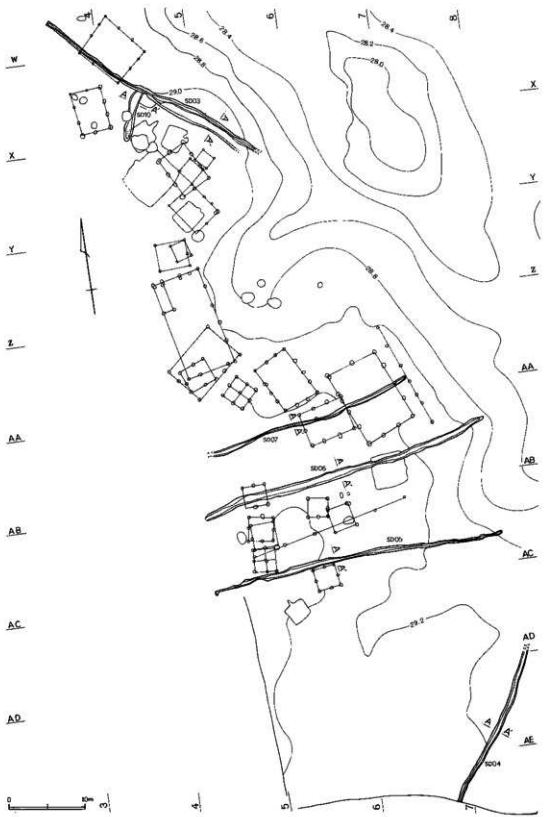
位置は、T 7～9・U 9～11・V 10・V 11・W 11グリッドである。調査区西半部北寄りにあたる。第1号溝跡と鋭角的に交わる直線部分の長さは45m、途中から南南東へ分岐する部分の長さは31mである。いずれも幅0.7m前後・深さ0.2～0.3mである。前者を第2号(A)溝跡、後者を第2号(B)溝跡と分けて呼称する。第2号(A)溝跡は、覆土の堆積状況からみて2つの遺構が重複しており、一方が第2号(B)溝跡である可能性はあるだろう。新旧関係は断定できない。また、第1号溝跡との新旧関係も不明である。

出土遺物は、土器片数10点である。第1号溝跡と接続するT 8グリッドから出土した。図化できたものは4点ある。1は比企・入間型杯、2は須恵器模倣杯である。3・4は高杯の脚柱部である。これらの遺物は、古墳時代後期に属する。第1号溝跡の遺物が混入している可能性に不安を残すが、遺構の帰属時期も古墳時代後期だろう。

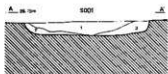
なお、第2号(A)溝跡は、桑原A遺跡第4・15号溝跡と平行しており、帰属時期からも、これらとともに桑原A遺跡の古墳時代後期集落に付属するとみられる。



第51図 溝跡(1)

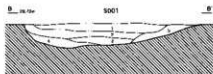


第52図 溝跡(2)



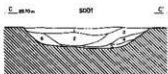
S001 (A-A')

- 1 黒褐色シルト
- 2 暗灰褐色シルト：ローム粒をわずかに含む
- 3 暗褐色シルト：ローム粒をわずかに含む



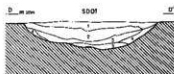
S001 (B-B')

- 1 暗褐色土：ローム粒をわずかに含む
- 2 黒褐色土：ローム粒を含む
- 3 黒褐色土：混入物なし
- 4 粘土：ローム粒をわずかに含む
- 5 暗灰褐色土：礫を含む



S001 (C-C')

- 1 暗褐色土：径1～2cmの小石を含む
- 2 黒褐色土：ローム粒をわずかに含む
- 3 黒褐色土：混入物なし
- 4 暗褐色土：混入物なし
- 5 灰褐色土：砂粒をわずかに含む
- 6 暗灰褐色土：ローム粒、砂粒をわずかに含む



S001 (D-D')

- 1 黒褐色粘質土
- 2 黒色粘質土
- 3 黒褐色粘質土：ローム粒をわずかに含む
- 4 黒褐色粘質土：ローム粒を多く含む
- 5 黒褐色粘質土：砂礫を多く含む



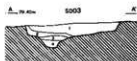
S002 (A-A')

- 1 黒褐色土：ローム粒をわずかに含む
- 2 黒褐色土：ロームブロックを多く含む
- 3 暗褐色土：混入物なし
- 4 暗褐色土：ローム粒をわずかに含む



S002 (B-B')

- 1 黒褐色土：ローム粒をわずかと、ロームブロックを含む
- 2 黒褐色土：ローム粒をわずかに含む
- 3 暗褐色土：ローム粒をわずかに含む
- 4 暗灰褐色土



S003 (A-A')

- 1 暗褐色土：小石、焼土粒をわずかに、土器を多く含む。しまっている
- 2 黒褐色土：焼土粒、ローム粒、小石、土器を多く含む。しまっている
- 3 暗褐色土：ローム粒、小石をわずかに、土器を多く含む
- 4 黒褐色土：小石、土器を多く含む



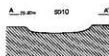
S005 (A-A')

- 1 暗褐色土
- 2 黒褐色土：ローム粒をわずかに含む



S006 (A-A')

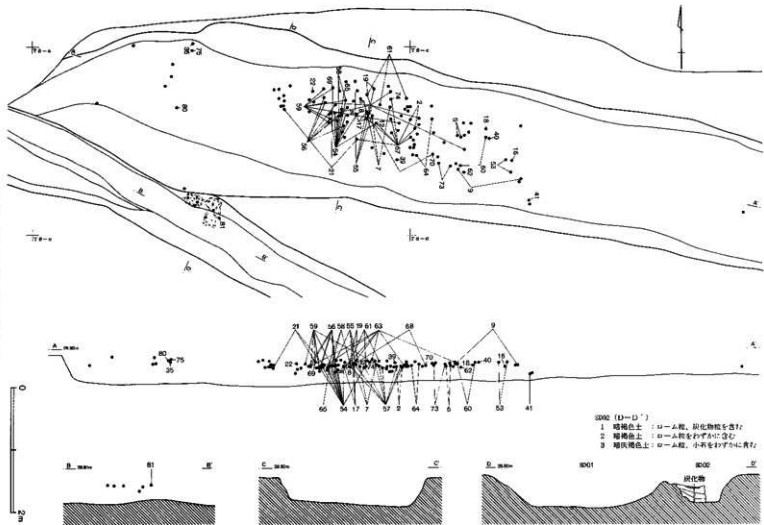
- 1 暗褐色土：焼土粒、ローム粒をわずかに含む
- 2 黒色土：ローム粒を多く含む

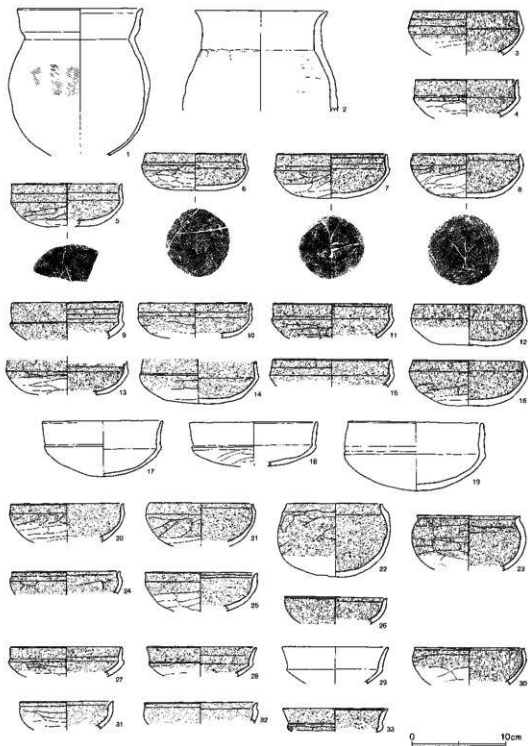


0 2m

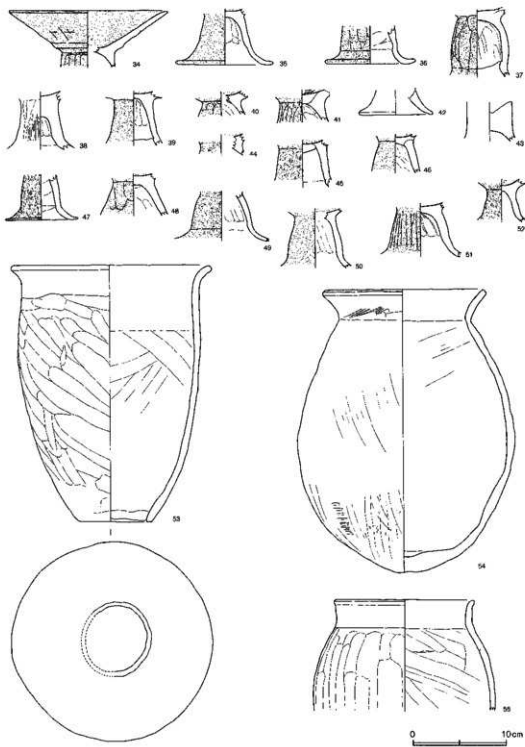
第53図 溝跡(3)

第54圖 第1号溝跡遺物出土状況

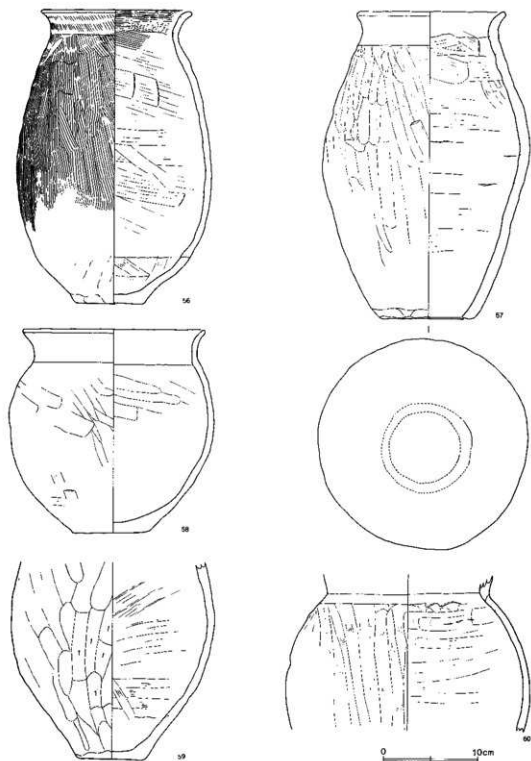




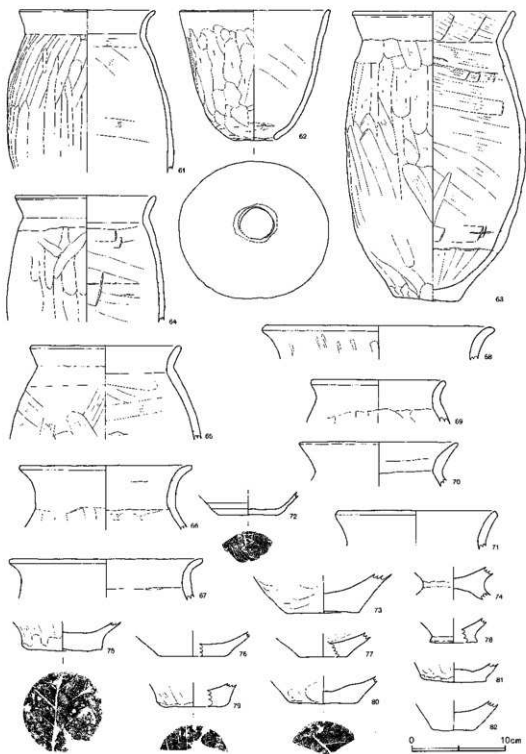
第55図 第1号溝跡出土遺物(1)



第56图 第1号溝跡出土遺物(2)



第57区 第1号溝跡出土遺物(3)



第58图 第1号沟跡出土遺物(4)

第7・8表 第1号湾跡土器観察表(1)(2)

番号	器種	口径	器高	最大径	胎上	焼成	色調	残存	出土番号・その他
1	壺	(13.4)		(15.1)	ACG	劣	浅黄橙	40%	T8・9グリッド
2	壺	(14.1)		(16.8)	ABG	劣	明赤褐	上半部 50%	№31・43
3	杯	(11.3)		(12.3)	AB	優	にぶい赤褐	図示部 25%	T8グリッド 内外面赤彩
4	杯	(11.0)		(11.4)	AG	優	明赤褐	図示部 20%	T8グリッド 内外面赤彩
5	杯	11.8		(12.0)	AB	優	にぶい赤褐	20%	№16・19 底部木炭痕 内外面赤彩
6	杯	10.7	4.0	11.4	ABCG	普	明赤褐	90%	№67 底部木炭痕 内外面赤彩
7	杯	11.9	4.8	12.4	ABCG	普	明赤褐	85%	№55・67・68 底部木炭痕 赤彩
8	杯	11.5	4.7	5.3	ABG	普	赤褐	80%	№70 底部木炭痕 内外面赤彩
9	杯	(11.8)		(12.1)	B	普	明赤褐	図示部 25%	№7・22 内外面赤彩
10	杯	(12.0)		(12.2)	ABH	普	明赤褐	図示部 25%	№21 内外面赤彩
11	杯	(12.7)		(13.0)	ABE	普	明赤褐	図示部 15%	№78 内外面赤彩
12	杯	11.8	4.3	12.4	ABG	普	にぶい赤褐	65%	№72 内外面赤彩
13	杯			(13.2)	ACD	普	にぶい赤褐	図示部 30%	№70 内外面赤彩
14	杯			(12.8)	ABDG	劣	明赤褐	25%	内外面赤彩
15	杯	(12.8)		(13.4)	AB	優	明赤褐	口縁部 15%	T9グリッド 内外面赤彩
16	杯	(12.0)	4.8	(12.7)	ABG	普	明赤褐	70%	№6 内外面赤彩
17	杯	12.9			DGH	劣	明黄褐	90%	№67・70・71
18	杯	(13.7)			H	普	にぶい赤褐	30%	№2 内面上位スス
19	杯	14.5	7.3	15.1	DGH	劣	橙	95%	№62・63
20	杯	(12.0)		(12.2)	ABG	普	赤褐	図示部 20%	T8グリッド 内外面赤彩
21	杯	(11.2)		(11.7)	ABGH	普	明赤褐	図示部 50%	№74・99・102 内外面赤彩
22	鉢	10.1	7.8	12.0	ABGH	劣	にぶい橙	70%	№101 内外面赤彩
23	鉢	(11.0)		(12.2)	ABH	優	明赤褐	図示部 30%	T8グリッド 内外面赤彩
24	杯	(11.5)		(12.0)	G	優	にぶい赤褐	口縁部 30%	T8グリッド 内外面赤彩
25	杯	(12.0)			ABG	優	にぶい赤褐	図示部 20%	T8グリッド 内外面赤彩
26	杯	(10.9)			ABH	劣	明赤褐	口縁部 10%	№70 内外面赤彩
27	杯	(11.9)		(12.4)	BH	普	橙	口縁部 25%	T10グリッド 内外面赤彩
28	杯	(11.8)			BGH	優	明赤褐	口縁部 10%	T10グリッド 内外面赤彩
29	杯	(11.4)		(11.4)	H	普	橙	図示部 20%	T10グリッド
30	杯	(11.8)		(12.2)	BG	普	明赤褐	図示部 30%	T10グリッド 内外面赤彩
31	杯	(10.0)			BGH	普	明赤褐	図示部 25%	T10グリッド 内外面赤彩
32	杯	(12.1)		(12.3)	BDG	普	にぶい赤褐	口縁部 15%	T12グリッド 内外面赤彩
33	杯	(11.2)			BCGH	普	にぶい赤褐	口縁部 30%	T11グリッド 内外面赤彩
34	高杯	(17.0)			BGH	劣	橙	杯部 30%	T8グリッド 内外面赤彩
35	高杯				ABCH	劣	にぶい橙	脚部 75%	№111 外面赤彩
36	高杯				ABCGH	劣	橙	脚部 50%	T8グリッド 外面赤彩
37	高杯				ABGH	普	明赤褐	図示部 100%	T8グリッド 外面赤彩
38	高杯				DGH	普	橙	図示部 85%	T8グリッド
39	高杯				ABH	普	明赤褐	図示部 50%	№58 外面赤彩
40	高杯				BGH	優	明赤褐	図示部 50%	№11 外面赤彩
41	高杯				BC	優	明赤褐	図示部 50%	№5 外面赤彩
42	高杯				ADH	劣	橙	脚部 55%	T8グリッド
43	高杯				ADG	劣	明赤褐	図示部 50%	T9グリッド
44	高杯				ADH	優	明赤褐	図示部 55%	T9グリッド 外面赤彩

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
45	高杯				ABCGH	優	明赤褐	図示部 50%	外面赤彩
46	高杯				ACG	普	明赤褐	図示部 30%	T8グリッド 外面赤彩
47	高杯				CGH	優	にぶい赤褐	脚部 30%	T10グリッド 外面赤彩
48	高杯				BD	優	明赤褐	図示部 40%	T10グリッド 外面赤彩
49	高杯				BDH	優	明赤褐	脚部 30%	T10グリッド 外面赤彩
50	高杯				ADGH	優	にぶい褐	図示部 30%	T10グリッド 外面赤彩
51	高杯				BC	優	にぶい橙	図示部 65%	T10グリッド 外面赤彩
52	高杯				BG	優	にぶい赤褐	図示部 50%	T12グリッド 外面赤彩
53	甌	21.6	27.2		ABGH	普	にぶい赤褐	95%	No9・10 孔径6.5
54	甌	17.5	30.0	23.3	AGH	普	にぶい赤褐	80%	No70・71・72他 外面スス跡
55	甌 (15.0)				ABEF	優	黒褐	上半部 40%	No66・67・68他
56	甌	16.0	30.9	20.7	AB	普	にぶい赤褐	85%	No87・98・76他 下半赤化
57	甌	15.8	32.1	21.9	ABCFG	普	にぶい褐	60%	No31・71・74他 孔径7.6
58	甌	19.3		21.6	AFG	普	にぶい橙	70%	No77・99・90
59	甌			21.7	ABC	普	橙	図示部 50%	No99・94・87 外面スス
60	甌 (26.0)				BCG	優	明赤褐	上半部 30%	No12・20
61	甌	14.6		(17.6)	ABGF	普	にぶい橙	上半部 60%	No63・44・56
62	小型甌	16.1	13.9		ABH	普	にぶい橙	85%	No21 孔径3.5
63	甌	17.5	30.8	(19.3)	ABF	普	赤褐	55%	No52・62・63他 下半赤化スス
64	甌 (15.0)				ABCFGH	普	明黄褐	上半部 25%	No29・33
65	甌 (16.2)				ACF	優	オリーブ褐	図示部 10%	No81
66	甌 (18.5)				AB	優	明赤褐	口縁部 10%	T10グリッド
67	甌 (20.7)				ABH	普	にぶい橙	口縁部 10%	T9グリッド
68	甌 (25.0)				ADG	普	にぶい橙	口縁部 25%	No67・26
69	甌 (14.5)				BCF	優	黒褐	口縁部 30%	No99
70	甌 (17.0)				BCH	優	にぶい褐	口縁部 10%	No26
71	甌 (17.4)				BC	普	にぶい褐	口縁部 20%	T8グリッド
72	杯				ABCD	普	橙	底部 25%	T11グリッド 底面糸切痕
73	壺?				ABCH	普	にぶい赤褐	底部 60%	No23・24
74	台付甌				ABCGH	普	赤褐	図示部 80%	No53
75	壺?				ABCH	普	にぶい褐	底部 100%	No113 底部木葉痕
76	甌?				ADEF	普	にぶい赤褐	底部 25%	T10グリッド
77	甌?				ACG	優	にぶい赤褐	底部 40%	T12グリッド
78	甌?				BFG	普	にぶい赤褐	底部 40%	S8グリッド
79	甌?				ABCEH	普	にぶい赤褐	底部 25%	S8グリッド 底部木葉痕
80	甌?				AEG	普	にぶい橙	底部 30%	No117 底部木葉痕
81	甌?				ACDF	普	にぶい赤褐	底部 100%	No122(SD2) 赤化
82	甌?				ACGH	劣	にぶい橙	底部 80%	T10グリッド

第9表 第2号溝跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
1	杯	(12.8)	4.8	(13.2)	BCDH	優	明赤褐	30%	No1 内外面赤彩
2	杯	(11.0)			ABCH	普	明赤褐	図示部 15%	T8グリッド 内外面赤彩
3	高杯				BCH	優	赤褐	脚柱部 50%	T8グリッド 外面赤彩
4	高杯				BCDH	優	明赤褐	脚部 40%	T8グリッド 外面赤彩

第3号溝跡(第52・53図 遺物第59図)

位置は、V10・V11・W11グリッドである。遺構群の北寄りにあたる。第8号掘立柱建物跡と重複し、また第10号溝跡と直交するが、それらとの新旧関係は不明である。長さ32m、幅0.5～1.5m、深さ0.2～0.35mである。稲荷前遺跡C区第31号溝跡は、この北西延長部分にあたる。

出土遺物は、土器片約600点である。須恵器が日立ち、個体としてのまとまりを保っていたものはむしろ須恵器に多い。5～10は須恵器の杯である。底部が失われた9を除き、いずれも底面に糸切痕を残している。9は外面に赤彩が認められる。11は須恵器の皿である。底面に糸切痕を残している。12は有段口縁の杯、13は甕の底部だろう。これらの遺物は平安時代に属する。直交する第10号溝跡の遺物が混在する可能性に不安を残すが、遺構の帰属時期もこれに従いたい。

第10表 第3号溝跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
5	杯	(12.5)		(12.5)	CF	劣	浅黄	10%	W4グリッド 須恵器,糸切痕
6	杯	11.8	3.6	11.8	CGF	優	灰白	100%	W4グリッド 須恵器,糸切痕
7	杯	12.6	3.3	12.6	CF	優	灰	50%	W4グリッド 須恵器,糸切痕
8	杯				CF	優	灰	図示部 30%	W4グリッド 須恵器,糸切痕
9	杯	(14.1)		(14.1)	ACF	優	灰黄	図示部 10%	W4グリッド 須恵器,外面赤彩
10	杯	(12.9)	(3.2)	(12.9)	AF	優	灰	30%	W4グリッド 須恵器,糸切痕
11	皿	(15.9)	(2.5)	(15.9)	CF	優	灰オリーブ	30%	W4グリッド 須恵器,糸切痕
12	杯	(12.7)		(12.7)	ACE	普	にぶい黄褐	10%	W4グリッド
13	甕?				ABC	劣	明褐	底部 30%	底部糸切痕

第4号溝跡(第52・53図)

位置は、C7・D7・E6・E7グリッドである。調査区の最南にあたる。長さ22m、幅0.4m前後、深さ0.1mで、ほぼ直線である。

出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

第5号溝跡(第52・53図)

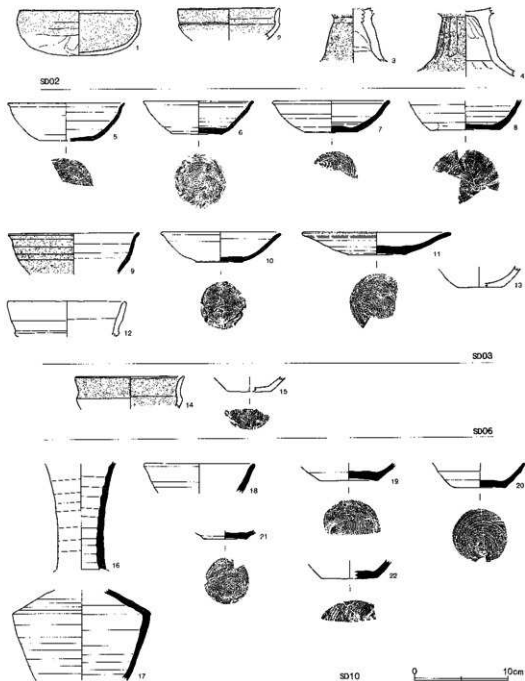
位置は、B4～7グリッドである。遺構群の南寄りにあたる。長さ38m、幅0.5m前後、深さ0.1～0.2mである。直線的で、北に第6・7号溝跡が平行する。これらは相互に無関係ではないだろう。

出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

第6号溝跡(第52・53図 遺物第59図)

位置は、A4～7・B4グリッドである。遺構群の南寄りにあたる。長さは39m、幅0.7m、深さ0.1～0.2mである。直線的で、北に第7号溝跡、南に第5号溝跡が平行する。これらは相互に無関係ではないだろう。出土遺物は土器片2点である。14は比企・入間型杯係累の杯である。15は杯の底部である。底面に糸切痕を残している。内外面に黒漆もしくはタール状の付着物がある。

15から、遺構の帰属時期は平安時代以降だろう。



第59図 溝跡出土遺物

第11表 第6号溝跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	地色	色調	残存	出土番号・その他
14	杯	(11.7)			BDH	普	明赤褐	口縁部 15%	No3(SJ6) 内外面赤彩
15	杯				C	優	黒褐	底部 20%	No2(SJ6) 内外面黒色付着物

第7号溝跡(第52・53図)

位置は、A4～6・Z6グリッドである。遺構群の南寄りにあたる。第3・4号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。長さは27m、幅0.05～0.1m、深さ0.3～0.4mである。ほぼ直線的で、南の第5・6号溝跡と平行する。相互に無関係ではないだろう。また、第9号溝跡はその東延長線上に位置しており、やはり関連を有する可能性がある。

出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

第8号溝跡(第51・53図)

位置は、調査区東半のS13・T13・U13・V13グリッドである。第1号溝跡と直交するが、新旧関係は不明である。長さは30m、幅0.4～0.5m、深さ0.1mである。桑原A遺跡第7号溝跡の南延長線上に位置していることから、相互に関連する可能性がある。

出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

第9号溝跡(第51・53図)

位置は、調査区東半のX15～17グリッドである。長さは19m、幅0.5～0.8m、深さ0.1mである。直線的で、方向は第5・6・7号溝跡とほぼ同じである。周辺に遺構は存在せず、孤立的な立地だが、第7号溝跡の東延長線上に位置していることから、相互に関連する可能性がある。

出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

第10号溝跡(第52・53図 遺物第59図)

位置は、W4グリッドである。遺構群の北寄りにあたる。第3号溝跡と直交するが、新旧関係は不明である。第5号井戸跡と重複し、破壊していることから、それに後出することが確認される。長さは7m、幅1.1m前後、深さ0.1mである。

出土遺物は、土器・陶器片約500点である。土師器と須恵器の比率が拮抗しており、須恵器の存在が目立っている。小破片が大半を占め、図示できたものは多くない。16・17は灰胎陶器の長頸壺である。接合しないが同一個体とみられる。焼成は堅緻で、静岡県西部湖西産の可能性もある。18～22は須恵器の杯である。19～22は底面に糸切痕を残している。

これらの遺物は、平安時代に属するものである。遺構も同様だろう。

第12表 第10号溝跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
16	長頸壺				微砂粒	優	褐灰	図示部 90%	須恵器
17	長頸壺				微砂粒	優	灰白	図示部 25%	16と同・器体か、須恵器
18	杯	(11.4)		(11.4)	C G	優	灰	口縁部 15%	須恵器
19	杯				B F	優	灰白	底部 25%	須恵器、土師質、底部糸切痕
20	杯				C F	優	褐灰	底部 100%	須恵器、内外面黄色付着物
21	杯				C	優	灰	底部 100%	須恵器、底部糸切痕
22	杯				B D F	優	灰	底部 30%	須恵器、底部糸切痕

(5) 土墳

第1号土墳（第60図 遺物第61図）

位置は、X4グリッドである。

平面形は、1.5×1.1mのいびつな隅丸方形で、深さは0.4mである。出土遺物は土器片30点で、図示できたものは4点ある。1～4は杯の口縁部である。これらの遺物から、遺構の帰属時期は古墳時代後期終末以降である。

第2号土墳（第60図）

位置は、T7グリッドである。

平面形は1.15×0.6mの長方形で、深さは0.3mである。出土遺物は土器片11点だが、いずれも小片である。これらの遺物から、遺構の帰属時期は古墳時代以降である。

第3号土墳（第60図 遺物第61図）

位置は、T7グリッドである。

平面形は1.45×0.75mの長方形で、深さは0.1mである。出土遺物は土器片4点である。5は比企・入間型杯である。これらの遺物から、遺構の帰属時期は古墳時代後期とみておきたい。

第13表 第3号土墳土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成色調	残存	出土番号・その他
5	杯	(11.9)		(11.9)	BCH	普・明赤褐	図示部 25%	内外面赤彩

第4号土墳（第60図）

位置は、AB4グリッドである。

平面形は1.5×1.25mの楕円形で、深さは0.5mである。出土遺物は土器片15点であるが、図示できるものはない。

底面は凹凸があり、樹木痕である可能性が高い。

第5号土墳（第60図）

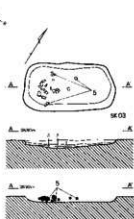
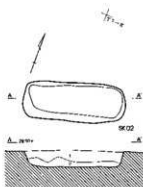
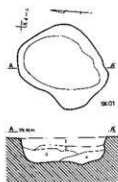
位置は、Y6グリッドである。

平面形は0.7×0.7mの円形で、深さは0.7mである。形状から井戸跡である可能性があるだろう。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

第6号土墳（第60図）

位置は、T23グリッドである。

平面形は1.15×0.9mの隅丸方形で、深さは0.25mである。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。



SK01

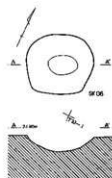
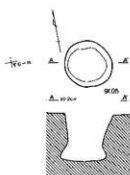
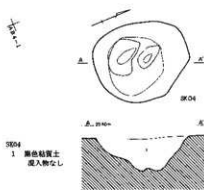
- 1 黒褐色土：径1cmの焼土ブロックをわずかに含む
- 2 黒褐色土：径1cmの焼土ブロック、ハードロームブロックをわずかに含む
- 3 暗褐色土：埋入物なし
- 4 暗褐色土：焼土ブロック、ハードロームブロックを多く含む

SK02

- 1 黒褐色土：埋入物なし
- 2 暗褐色土：ロームブロックを含む

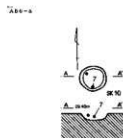
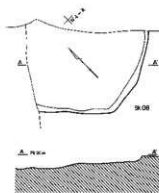
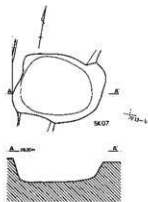
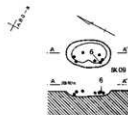
SK03

- 1 暗褐色土：ローム粒をわずかに含む
- 2 黒褐色土：炭化物の多い層、ローム粒を含む
- 3 暗褐色土：ローム粒を多く含む



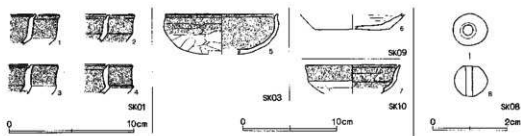
SK04

- 1 黒色粘質土：埋入物なし



0 2m

第60図 土坑



第61図 土壌出土遺物

第7号土壌（第60図）

位置は、V13グリッドである。第8号溝と重複するが、新旧関係は不明である。

平面形は1.3×1.0mの隅丸方形で、深さは0.35mである。

出土遺物はなく、層属時期は不明である。

第8号土壌（第60図）

位置は、W4グリッドである。第3・10号溝と重複するが、新旧関係は不明である。

平面形は不明で、深さは0.2mである。

出土遺物は、石製小玉1点である。直径約9mm、滑石製である。古墳時代に属するとみられ遺構の層属時期もそれ以降だろう。

第9号土壌（第60図 遺物第61図）

位置は、AB5・6グリッドである。

平面形は0.7×0.45mの楕円形で、深さは0.07mである。

出土遺物は土器片7点である。1は底部である。遺構の層属時期は古墳時代後期以降である。

第14表 第9号土壌土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
6	甕?				ABCE	普	灰褐	底部 30%	外面スス

第10号土壌（第60図 遺物第61図）

位置は、AB6グリッドである。

平面形は、直径0.4mの円形で、深さは0.08mである。出土遺物は土器片2点である。7は比企・入間型杯係累の杯である。これにより、遺構の層属時期は、古墳時代後期末である。

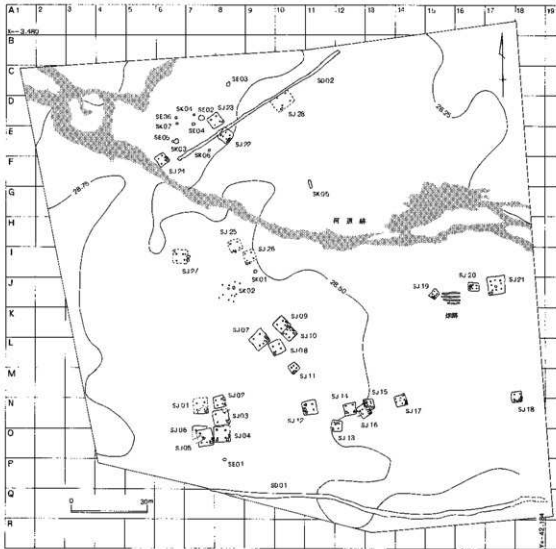
第15表 第10号土壌土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
7	杯	(10.2)		(10.2)	BCH	普	明赤褐	図示部 30%	内外面赤彩

IV. 棚田遺跡の調査

1. 遺跡の概要

棚田遺跡は、入西地区の遺跡群の北西に位置する。その立地は、低位台地縁部に接する沖積地上である。南に稲荷前遺跡、東に桑原A遺跡が隣接する。遺構確認面の地形は、概ね西から東へわずかに傾き、遺構は、標高28.3~28.7mにかけて分布している。台地上の稲荷前遺跡との比高差は約1.5m、桑原A遺跡とはほぼ同レベルである。基本土層は、2カ所で観察されている(第63図)。A



第62図 棚田遺跡全体図



Aセクション

- 1 結実褐色土：径1mm以下の白色粒、炭化物を多く含む
- 2 結実褐色土：径1mm以下の白色粒、径2～3mmの砂粒を多く含む、礫をわずかに含む
- 3 結実褐色土：径1mm以下の白色粒、径1～2cmの結実色の礫をわずかに、炭化物粒、腐食植物質を多く含む、南北側が傾斜に感敏し、粘性が高い
- 4 棕色土：腐食植物質を多く、径1～2cmの礫をわずかに含む、粘性が高い
- 5 結実褐色土：径1～2cmの礫を多く含む、粘性が高い

Bセクション

- 1 黒色土：腐食植物質、径5～10mmの礫をわずかに含む、粘性が高い
- 2 結実褐色土
- 3 明褐色土：コアムを主体とし、径1～2cmの礫をわずかに含む

第63図 棚田遺跡基本土層図

セクションはO4グリッド南西隅付近だが、地表下1.3mまでローム層は確認されていない。稲荷前遺跡B・C区間の旧谷状地形が、この地点の南に接しているのに関連する状況だろう。一方、調査区南東のO17グリッドに位置するBセクションでは、地表下0.3～0.4mでローム層が確認されている。ただし、遺構確認面で観察された土壌の水平分布状況では、礫層・礫まじり土層が島状ながら顕著に認められ、ローム層の分布は安定したものではないことがうかがえる。

発掘調査の結果、検出された遺構は、竪穴住居跡28、井戸跡6、溝跡2、土壇7、畑跡1、河道跡1などである。河道跡は、調査区北半を西北西から東南東に横切っている。竪穴住居跡は、次節で詳細を報告するとおり、不確定なものもあるが概ね古墳時代後期前半に属する。井戸跡の一部が中世まで下ることを除けば、他の時代に属する遺構の複合は確認できず、全体として、内容の時代性は比較的純粋である。遺構の分布は、標高28.5mからやや上にかけて偏りが認められ、より子細にみると、竪穴住居跡は、6前後の小群に細分される可能性がうかがえる。すなわち第1～6号住居跡、第7～11号住居跡、第12～17号住居跡、第19～21号住居跡、第22～24・28号住居跡、第25～27号住居跡のようなまとまりである。ただし、遺構どうしの重複、あるいはそれに類する極端な近接も多く認められ、それらの時間的な分解と整理が、実態を把握するための前提作業となるようだ。また、第25～27号住居跡などのように、調査区中央部では遺構の遺存状態がきわめて悪く、正確な集落復元にむけては、失われた遺構の存在も念頭に置いておく必要があるだろう。そのほか、井戸跡・土壇は、調査区北西に集中が認められる。調査区南辺の第1号溝跡は、田鳥・桑原A・棚田3遺跡を横断する長大な遺構である。田鳥遺跡において出土した多数の遺物から確認されたとおり、その上限は古墳時代後期に遡る。

なお、発掘調査にあたり設定されたグリッドは、国家標準直角座標にもとづく12×12m方眼である。このグリッド網は、周囲の遺跡を包括しているが、グリッドの名称は遺跡間で必ずしも統一されていない。隣接する遺跡との位置関係を明確にする必要から確認しておくが、棚田遺跡のH22(X, Y)=(−3.522, −42.148)は、東に接する桑原遺跡のH6と一致する。同様に棚田遺跡のP1(X, Y)=(−3.648, −42.400)は、南接する稲荷前遺跡のA12と一致する。

2. 検出された遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡（第65図 遺物第64図）

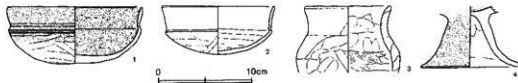
位置は、N7グリッドである。

遺構は、南東隅周辺を残し大部分が消滅していた。しかし、主柱穴とみられる $P_1 \sim P_4$ が遺存していたことから、周壁平面形は $5.9 \times 5.5\text{m}$ の方形、床面積は約 33m^2 だろう。床南東隅に位置する P_1 は貯蔵穴である。 $P_2 \cdot P_3$ 付近東壁際に、カマド痕跡とみられる落ち込みが認められる。

周壁は、最高 0.25m である。主柱穴は、底部が標高 28.15m 付近で一定していることから、床面からの深さは 0.55m で揃えられていたとみられる。いずれも柱痕が確認された。柱間距離は、東西 3.2m 、南北 2.8m である。貯蔵穴は $0.8 \times 0.8\text{m}$ の隅丸正方形で、深さ 0.6m である。

出土遺物は、遺構の大半が失われていたこともあり、わずかである。いずれも土師器で、1～3は床上覆土中、4は貯蔵穴から出土した。1は須恵器楕圓杯である。口縁部がやや厚くふくらみを帯び、先端に面をもたないのが特徴的で、底部は厚く平底である。焼成は硬質で、赤彩される。2も須恵器楕圓杯だが、丸底で、器壁が底部にわたって薄く、焼成は軟質である。赤彩は認められない。これらの特徴は、遺跡内の同形式の土器に概ね通有である。その他の杯において、赤彩が顕著で、比較的硬質に焼成されているのとは対照的である。3は埴である。口縁部から頸部にかけてゆるく屈曲し、胴部上半がわずかに屈折する。焼成は硬質だが、器壁は厚く、成形・調整ともおおまかな仕上げである。とりわけ、胴部内面には粘土紐接合痕が顕著に残されている。4は高杯脚部である。やや短い柱部は下方にかけて大きく開き、裾部との境界は不明瞭である。

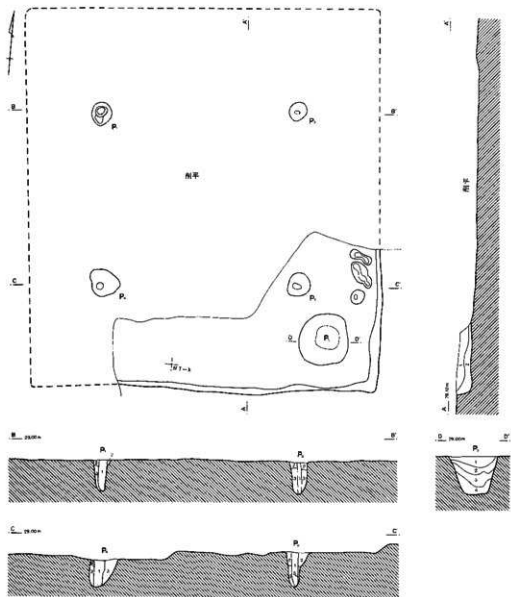
これらの遺物は、古墳時代後期に属するものである。



第64図 第1号住居跡出土遺物

第16表 第1号住居跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
1	杯	14.7	6.1	14.7	ABCD	優	明赤褐	20%	覆土 内外面赤彩
2	杯	(12.1)	5.1	(12.1)	BCE	普	明赤褐	50%	覆土
3	埴	9.3		11.0	ABF	普	にぶい赤褐	30%	
4	高杯				BC	優	にぶい赤褐	脚部 80%	貯蔵穴 内外面赤彩



57H (A-A')

- 1 黒褐色土 : 径1cm以下の黄褐色土粒、焼土粒をわずかに含み、しまっている
- 2 緑黄褐色土 : 径5mm~1cmの黒色土ブロックを多く、焼土、炭化物粒をわずかに含み、しまっている

57H (B-B'・C-C')

- 1 黒褐色土 : 径2~3mmの黄褐色土粒、炭化物粒をわずかに含み、しまり弱い、柱状構造
- 2 黒褐色土 : 径2~3mmの黄褐色土粒を多く、径5mm~1cmの黄褐色土ブロックをわずかに含み、しまっている
- 3 緑黄褐色土 : 黒褐色土をわずかに含み、しまっている

57H (D-D')

- 1 緑黄褐色土 : 径1mm以下の黄褐色土粒をわずかに、焼土、炭化物粒を多く含み、しまっている
- 2 黒褐色土 : 焼土、炭化物を多く、灰をわずかに含み、しまり弱い
- 3 黒褐色土 : 灰、炭化物をわずかに含み、しまり弱い
- 4 黄褐色土 : 黒褐色土をわずかに含み、しまり弱い

第65図 第1号住居跡

第2号住居跡（第67図 遺物第66図）

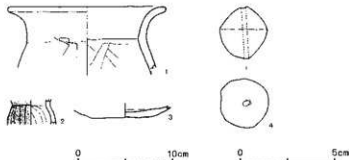
位置は、M7・M8・N7・N8グリッドである。西に第1号住居跡・南に第3号住居跡が近接する。

床面付近まで削平されて周壁は失われていたが、南東隅周辺をのぞき壁溝が遺存していたため、平面規模は把握できた。周壁平面形は、奥行4.5m、幅4.4mのほぼ正方形である。床面積は19.4㎡と推定される。カマドの存在は確認できないが、東辺に接するP₆がその掘形と推定される。中心軸方向はN-76°-Eである。支柱穴はP₁~P₄、南東隅に位置するP₅は貯蔵穴である。

支柱穴は、現状で深さ0.25~0.4m、P₁・P₂で柱痕が確認された。柱間距離は、奥行2.3m、幅2.2mである。貯蔵穴は、0.9×0.8mの楕円形で、深さ0.3mである。カマド掘形とみられるP₆は、長径1.15m、短径0.7mで、ゆがんだ長楕円形である。断面形もいびつで、南壁がゆるやかな一方、北壁は垂直で、むしろややオーバーハンクしている。深さは0.8mである。

出土遺物は、覆土がほとんど失われていたこともあり、少数でごく断片的である。1は甕の上半である。頭部内面はわずかに稜をもち垂直的に立ち上がるが、口縁端部は水平に開く。2は高杯脚部の上半である。ふくらみが顕著である。3は杯の底部だろう。4はソロバン玉型土製品である。切子玉の類品である「算盤玉」の土製模造品とみられる。南壁中央付近で、床面に密着して出土した。最大径部の稜線をはさんで半身は円錐状、半身は丸みを帯びる。頂部を結ぶように穿孔されている。色調はにぶい褐色、最大径2.5cm、完形である。

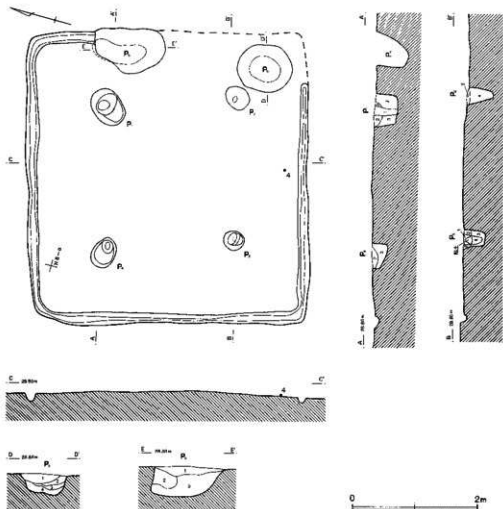
これらの遺物は、古墳時代後期に属するものである。



第66図 第2号住居跡出土遺物

第17表 第2号住居跡土器観表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	構成	色調	残存	出土番号・その他
1	甕	(16.8)			A B F G H	普	にぶい橙	口縁部 20%	
2	高杯				B C	優	明赤褐	図示部 20%	外面赤彩
3	杯				A C G	劣	にぶい橙	底部 100%	
4	土玉		長2.4	2.5	C F	普	黒褐	100%	床面



S11 (A-A'・B-B')

- 1 黒褐色土：礫土、炭化物粒を多く、黒灰色土ブロックをわずかに含み、しまり強い、柱状構造
- 2 暗茶褐色土：黄褐色土、礫土、炭化物粒をわずかに含み、しまっている
- 3 暗黄褐色土：黒褐色土をわずかに含み、しまっている
- 4 暗黄褐色土：第3層より礫土、炭化物粒を多く含み、しまっている

S12 (E-E')

- 1 暗黄褐色土：径3～5mmの黄褐色土粒をわずかに、径1～3mmの黄褐色土粒、礫土ブロック、礫土粒、炭化物粒を多く含み、しまっている
- 2 暗茶褐色土：径1mm以下の黄褐色土粒を多く含み、しまり強い
- 3 黒褐色土：径1mm以下の黄褐色土粒をわずかに含み、しまっている

S13 (D-D')

- 1 黒色土：径3～5mmの黄褐色土粒、礫土、炭化物粒をわずかに含み、しまっている
- 2 黒灰色土：灰褐色土、炭化物粒を多く含み、しまっている
- 3 暗茶褐色土：径2～3mmの黄褐色土粒、礫土、炭化物粒を多く含み、しまり強い
- 4 暗黄褐色土：径5mm～1cmの黄褐色土粒を多く、礫土粒をわずかに含み、しまり強い

第67図 第2号住居跡

第3号住居跡 (第69・70図 遺物第68図)

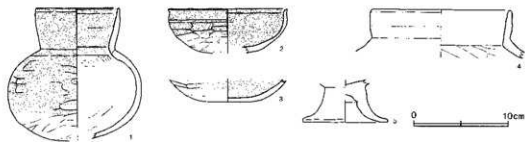
位置は、N7・N8グリッドである。北に第2号住居跡、南に第4号住居跡が近接する。

北東隅周辺が失われているが、奥行6.0m、東壁幅5.6m、西壁幅6.0mで、周壁平面形は正方形に近い台形である。床面積は、一部推定を含むが、36.0㎡である。主柱穴はP₁~P₄、南東隅に位置するP₁は貯蔵穴である。カマドの存在は明瞭でないが、P₁と東壁の間隙に、その痕跡が認められる。南東隅に著しく偏るが、貯蔵穴設置以前に機能したものであろう。

周壁は、高さ0.1~0.25mである。主柱穴は、深さ0.5~0.65mで、いずれも柱痕が確認された。柱間距離は、奥行3.6m、幅3.3mである。貯蔵穴は1.15×0.95mの隅丸方形で、深さは0.45mである。

出土遺物は、貯蔵穴と南壁付近の覆土中に偏在する傾向を示した。1は単純口縁壺である。覆土中に細かに分散した状態で出土した。口縁部はわずかに内湾し、端部はヨコナデによって薄く仕上げられている。胴部は偏球状で安定感があるが、底部は丸底に近いようである。胎土・仕上げとも精製品と呼ぶにふさわしい。ナデ仕上げの外表面は赤彩されるが、板ナデ仕上げの底部は塗りのこされたようである。この塗り分けは杯にも共通する。なお同形式の壺は、棚田遺跡ではこの1点に限られる。2は比企・入間型杯である。口縁端部が内側のヨコナデ面取りによって外方に突出し、口縁端部が内側のヨコナデ面取りによって外方に突出し、底部は厚く平底気味で、外面上半と内面を赤彩する特徴も通有である。3も杯の下半部とみられる。4は壺か甕の口縁部である。頸部からの立ち上がりは短く垂直的で、外面に稜をもつ。5は高杯の脚部である。短脚で、器壁は厚い。柱部と裾部の境は明瞭でないが、裾部は水平的に開く。

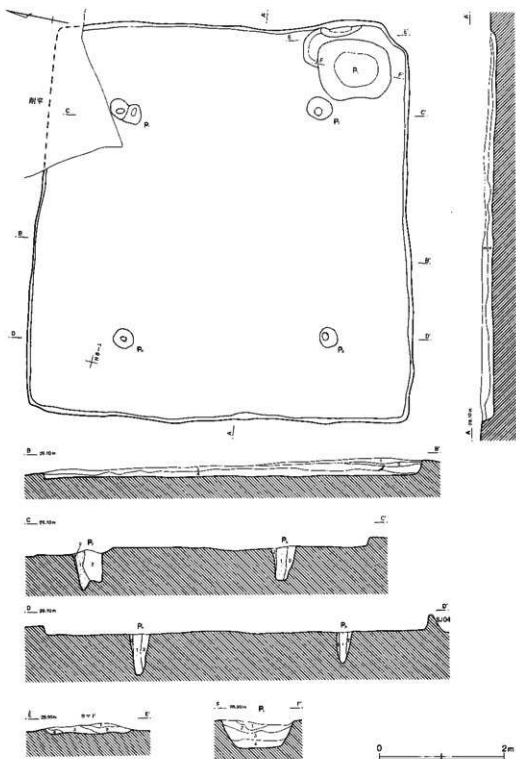
これらの遺物は、古墳時代後期に属するものである。



第68図 第3号住居跡出土遺物

第18表 第3号住居跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
1	壺	8.9		14.1	ABG	普	明赤褐	70%	No.31・34・36他 内外面赤彩
2	杯	(12.6)		(12.6)	CG	優	明赤褐	20%	No.63・97 内外面赤彩
3	杯				BCG	優	明赤褐	底部 30%	No.62 内外面赤彩
4	甕?	(15.0)			ABFG	普	にぶい橙	口縁部 15%	No.109・136
5	高杯				AB	普	明赤褐	脚部 80%	No.51



第69图 第3号住居跡(1)

S11 (A-A'・B-B')

- 1 暗茶褐色土 : 径1~2mmの黄褐色土粒、黒土粒をわずかに含み、しまり強い
- 2 黄褐色土 : 黄褐色土ブロック、径3~5mmの砂粒を多く含み、しまっている
- 3 黒褐色土 : 径1~3mmの黄褐色土粒をわずかに、黒土、炭化物粒を多く含み、しまり強い
- 4 黄褐色土 : 黄褐色土、黒褐色土をわずかに含み、しまり強い

S12 (D-D'・E-E')

- 1 黄褐色土 : 暗茶褐色土粒、黒土粒をわずかに含み、しまっている
- 2 黒褐色土 : 径1~2mmの黄褐色土ブロック、黒土、炭化物粒をわずかに含み、しまっている
- 3 暗茶褐色土 : 黄褐色土粒をわずかに、黒土、炭化物粒を多く含み、しまっている
- 4 黄褐色土 : 径3mm~1cmの褐色土ブロックを含み、しまり強い

S13 (C-C'・D-D')

- 1 暗茶褐色土 : 径3~5mmの黄褐色土粒を多く含み、しまっている、柱状土
- 2 暗黄褐色土 : 径1~2mmの褐色土ブロックを多く含み、しまっている

S14 (F-F')

- 1 黄褐色土 : 径3mm~1cmの褐色土ブロックをわずかに、黒土、炭化物粒を多く含み、しまっている
- 2 黒褐色土 : 径3mm~1cmの黄褐色土ブロックをわずかに、径1~3mmの黄褐色土粒、黒土、炭化物粒を多く含み、しまっている
- 3 暗茶褐色土 : 径3mm~1cmの黄褐色土ブロックをわずかに、黒土、炭化物粒を多く含み、しまっている
- 4 黄褐色土 : 径3mm~1cmの褐色土ブロック、黒土、炭化物粒を多く含み、しまっている



第70図 第3号住居跡(2)・同遺物出土状況

第4号住居跡（第71～73図 遺物第74～76図）

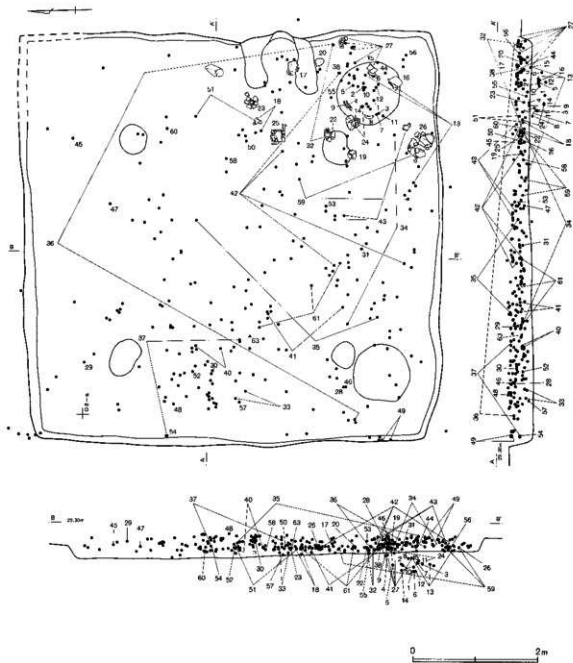
位置は、N7・N8・O7・O8グリッドである。西壁は第5号住居跡に接し、そのカマドの一部を破壊しているとみられる。すなわち、第5号住居跡に後出すとしておく。北は第3号住居跡に近接する。

周壁平面形は、奥行6.3m、幅6.4mの、ほぼ正方形である。北東隅付近は一部周壁が失われている。床面積は40.4㎡である。カマドは東壁や南よりに設置されていた。中心軸方向はN-83°-Eである。主柱穴はP₁～P₄、南東隅のP₅は貯蔵穴である。南西隅のP₆も、その位置からみて貯蔵穴と推定される。

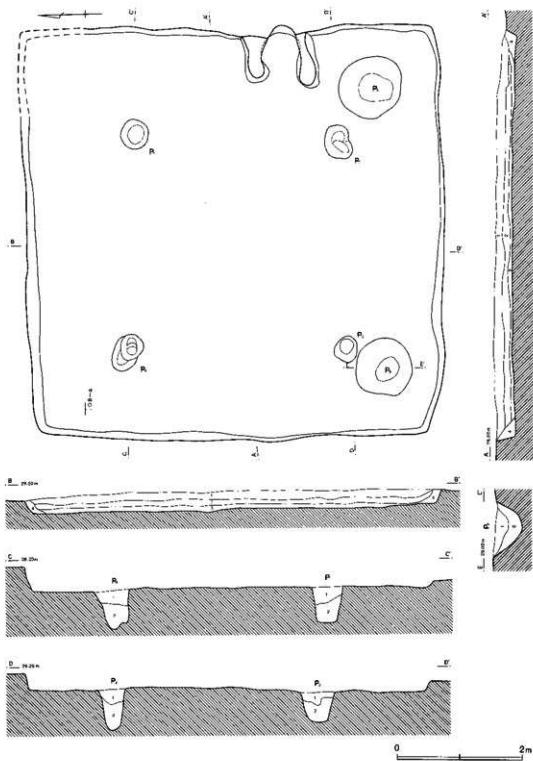
周壁は、高さ0.1～0.4mである。主柱穴は、深さ0.5～0.6mで、柱痕は確認されなかった。柱間距離は、奥行3.4m、幅3.3～3.5mである。貯蔵穴P₁は、直径1mのほぼ円形で、深さ0.4mである。同じく貯蔵穴とみられるP₂は、0.9×0.9mの隅丸正方形で、深さ0.4m、P₃とはほぼ同規模といえる。カマドは両袖部が遺存していた。奥壁は半円形に突出し、燃焼部はわずかにくぼんでいる。煙道は失われていた。

出土遺物はいずれも土器で、貯蔵穴P₁内部とその周辺に、完形品を主体に顕著なまとまりを示していたほか、覆土中からも多くの破片が出土した。遺構単位では、棚田遺跡で最も充実した資料群である。1～16は、いずれも貯蔵穴P₁から出土した。貯蔵穴底部からやや浮いて覆土中層から上層にかけてまとまっており、もともと内部に収納されていたか、貯蔵穴の蓋の上など、床面近くの高さに置かれたものが、遺構の腐朽と埋没の過程で、内部に陥没した可能性も高いだろう。2に10、9に4、11に3と7、13に16が、それぞれ入れ子状に重なっていた。また、カマドからは17が出土した。カマド前方に23・25、主柱穴P₁付近に19・22、南壁際に26など、比較的遺存状態の良い個体は、カマド・貯蔵穴P₁周辺に集中しているようである。これらは床面からやや浮いており、第72図の土層断面と対照して、覆土3層上面に位置したと推定される。3層は、その状態からみて、住居廃絶後の覆土ではなく生活時に堆積していたと考えられる。つまり最終生活面を3層上面に想定することは可能であり、とすればこれらの土器は、住居廃絶時の遺留品、もしくは遺構埋没前の投棄品とみることができる。出土状態からすれば、貯蔵穴P₁出土の土器群も、これら3層上面の土器群と一連のものである可能性が高い。

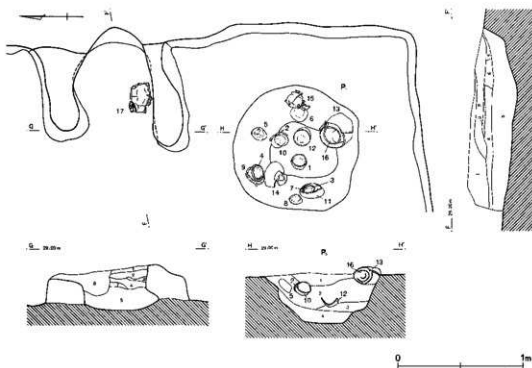
1～4は須恵器模倣杯である。いずれも赤彩され、基本形態以外は比企・人間型杯の特徴を示している。2は底部に木葉痕をもつ。5～9・18～20は比企・人間型杯である。7は底部に木葉痕をもつ。10～12は鉢である。11・12は比企・人間型杯の底を深くした形態で、棚田遺跡内では類例に乏しい。13は壺か鉢だろう。器壁は厚く、貯蔵具であった可能性が高い。14は高杯である。22～24と同型式で、細部の特徴もほぼ共通している。15・16・25は小型壺、17・26は壺である。26は細身長胴で、頸部のくびれはゆるやかだが、内面に稜をもつ。21は小型埴である。27は壺である。28以下は、覆土中・上層を中心に出土した断片の資料が主体である。28・63は須恵器高杯である。同一個体の可能性があるが、28の下端に波状文が確認されないことから、とりあえず両者別個に掲載した。29～35は須恵器模倣杯である。いずれも赤彩される。36～39・42は比企・人間型杯である。42の底部にはへう描きの直線が4条確認される。40は小型の高杯の杯部だろうか。41は杯の底部であ



第71図 第4号住居跡遺物出土状況



第72号 第4号住居跡(1)



S14 (A-A' - B-B')

- 1 暗茶褐色土：径5mm~1cmの褐色粘土ブロックを多く、褐色土粒、焼土、炭化物粒をわずかに含む。砂礫を含み、しまっている
- 2 黒褐色土：径5mm~1cmの褐色土粒、炭化物粒をわずかに含む、しまっている
- 3 黒褐色土：径1~2cmの黄褐色土ブロックを多く、焼土粒をわずかに含む、しまっている
- 4 記録なし

S14 (C-C' - D-D')

- 1 黒褐色土：径3~5mmの黄褐色土粒をわずかに含む、しまっている
- 2 暗茶褐色土：黒褐色土をわずかに含む、しまり弱い

S14 (E-E')

- 1 黒褐色土：径1~2cmの黄褐色土ブロック、砂礫をわずかに含む、しまっている
- 2 暗茶褐色土：黒褐色土をわずかに含む、しまっている

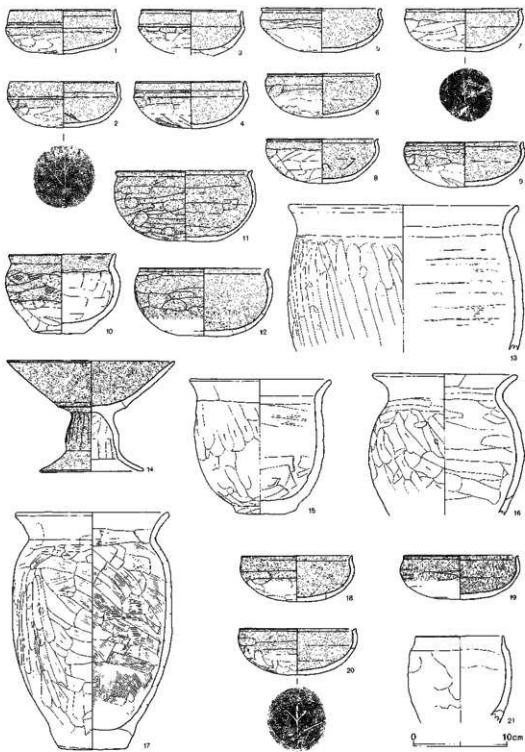
S14 カマド (F-F' - G-G')

- 1 暗茶褐色土：径5mm~1cmの褐色粘土ブロックをわずかに、径1~3mmの黄色粘土粒、焼土、炭化物粒を多く含む、しまっている
- 2 黄褐色粘土：焼土、炭化物粒をわずかに含む、しまっている。天井部の粘土層
- 3 褐色土：第2層下面の焼土化部分
- 4 黒褐色土：焼土、炭化物、灰を多く、径3~5mmの黄褐色粘土粒をわずかに含む、しまり弱い
- 5 黒褐色土：径3~5mmの黄色粘土粒子をわずかに含む、しまっている
- 6 黒褐色土：焼土粒を多く含む、しまり弱い
- 7 記録なし
- 8 記録なし

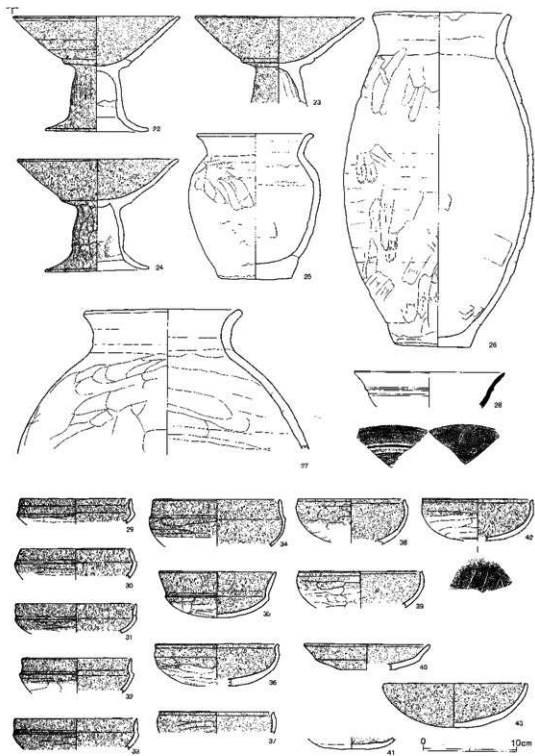
S14 (H-H')

- 1 黒褐色土：径1~3mmの黄褐色土粒、焼土粒をわずかに含む、しまっている
- 2 暗茶褐色土：径5mm~1cmの黄褐色土ブロック、焼土粒をわずかに含む、しまっている
- 3 黒褐色土：焼土、炭化物粒、灰をわずかに含む、しまり弱い
- 4 暗茶褐色土：径5mm~1cmの黄褐色土ブロックを多く、砂をわずかに含む

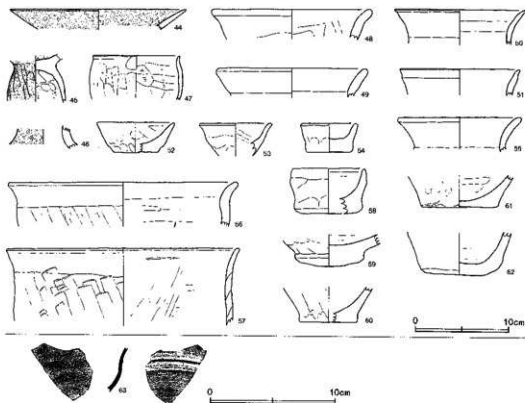
第73図 第4号住居跡②・同カマド



第74图 第4号住居跡出土遺物(1)



第75図 第4号住居跡出土物[2]



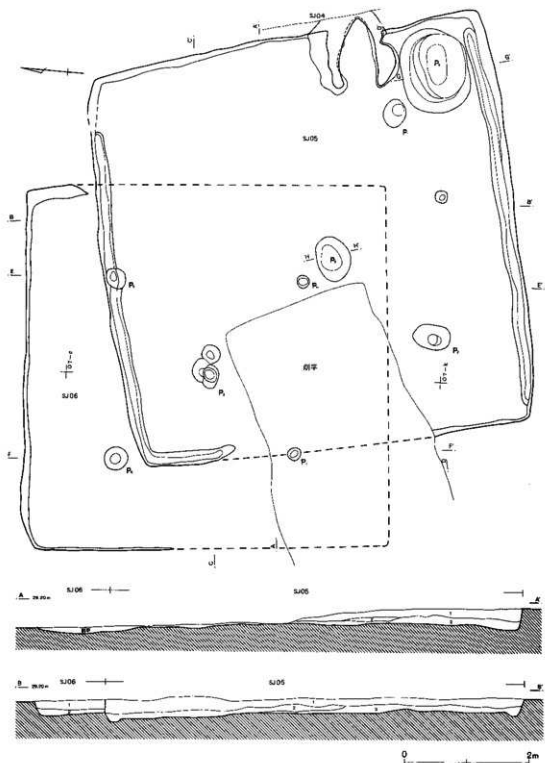
第76図 第4号住居跡出土遺物(3)

第19表 第4号住居跡土器観察表(1)

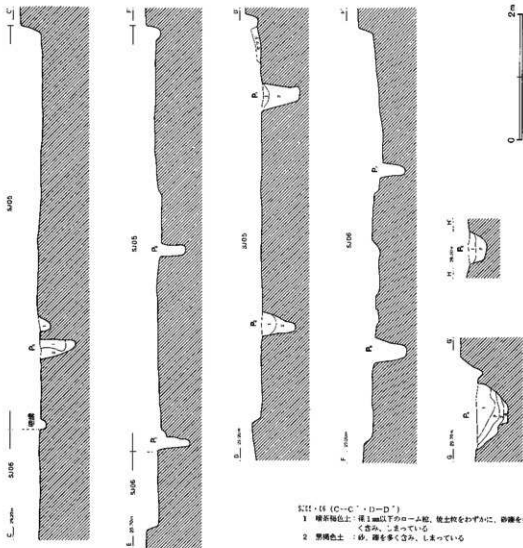
番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
1	杯	11.2	4.8	12.2	BCG	優	にぶい橙	95%	No.309(貯蔵穴) 内外面赤彩
2	杯	11.6	5.0	12.2	ABC	優	にぶい橙	100%	No.311(貯蔵穴) 底部木炭痕、赤彩
3	杯	10.9		11.5	B	優	明赤褐	100%	No.308(貯蔵穴) 内外面赤彩
4	杯	11.8	5.1	12.3	ABCG	普	明赤褐	100%	No.303(貯蔵穴) 底部ヘラ圧痕、赤彩
5	杯	12.8	4.7	13.1	BCDH	優	にぶい赤褐	100%	No.313(貯蔵穴) 内外面赤彩
6	杯	12.0	4.8	12.0	BCDH	優	にぶい橙	100%	No.314(貯蔵穴) 内外面赤彩
7	杯	12.4	4.6	12.6	ABCD	普	明赤褐	100%	No.307(貯蔵穴) 底部木炭痕、赤彩
8	杯	11.9	4.8	12.1	ABCDG	優	明赤褐	100%	No.305(貯蔵穴) 内外面赤彩
9	杯	12.4	4.8	12.9	AB	優	明赤褐	100%	No.302(貯蔵穴) 内外面赤彩
10	鉢	11.4	8.5	12.2	ABC	優	にぶい赤褐	100%	貯蔵穴 内外面赤彩
11	碗	14.7	7.5	15.1	BCDH	優	にぶい赤褐	100%	No.308(貯蔵穴) 内外面赤彩
12	碗	13.8	7.3	14.7	AB	優	赤褐	100%	No.310(貯蔵穴) 内外面赤彩
13	壺	24.6		25.0	ABC FG	普	にぶい褐	30%	No.315-316-317(貯蔵穴) 割中皿、スス
14	高杯	17.9	11.8	17.9	ABC	普	にぶい橙	100%	No.304(貯蔵穴) 内外面赤彩
15	小型壺	(15.2)	14.4	(15.2)	BC FG	普	にぶい赤褐	95%	No.315(貯蔵穴) スス、赤化
16	小型壺	15.4		16.5	ABC FG	普	にぶい橙	70%	No.317(貯蔵穴) スス、層子圧痕
17	壺	16.4	25.0	(17.0)	ABC FH	普	にぶい赤褐	40%	No.296(カマド)
18	杯	(11.8)	4.9	12.1	B	優	にぶい赤褐	60%	No.273・64 内外面赤彩

第20表 第4号住居跡土器観察表(2)

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	地質	色調	残存	出土番号・その他
19	杯	12.3	4.8	12.9	B	優	にぶい赤褐	80%	No.276(カマド) 内外面赤彩
20	杯	12.5	5.0	12.7	ABCD	優	明赤褐	90%	No.291 内外面赤彩
21	埴	(9.3)			BC	普	明赤褐	40%	カマド
22	高杯	17.8	12.4	17.8	ABC	普	明赤褐	100%	No.275 内外面赤彩
23	高杯	18.0		18.0	BCD	優	明赤褐	図示部 90%	No.272 内外面赤彩
24	高杯	17.4	11.9	17.4	ABCD	普	明赤褐	90%	No.277・304内外面赤彩
25	小壺	12.4	15.6	14.0	ABFG	優	明赤褐	100%	No.274 下半スス,赤化
26	甕	14.8		20.4	ABCFG	優	褐	95%	No.279 嗣下位スス
27	壺	16.9			ABCDHF	普	にぶい橙	上半部 40%	No.207・227・280地(貯蔵穴)
28	高杯	(16.1)			G	優	オリーブ黒	口縁部 15%	No.235 須恵器,外面自然釉
29	杯	11.9		12.6	BGH	優	赤褐	口縁部 15%	No.1 内外面赤彩
30	杯	(11.7)		(13.0)	BDGH	優	明赤褐	口縁部 15%	No.37 内外面赤彩
31	杯	(12.9)		(12.9)	G	優	明赤褐	図示部 15%	No.139 内外面赤彩
32	杯	11.7		12.2	BC	優	明赤褐	20%	No.281・275 内外面赤彩
33	杯	13.1		13.4	ABD	優	明赤褐	図示部 15%	No.280・268 内外面赤彩
34	杯	13.6		14.5	BCD	優	明赤褐	図示部 25%	No.209・188 内外面赤彩
35	杯	12.5	4.9	12.5	BCD	優	明赤褐	30%	No.74・47 内外面赤彩
36	杯	(13.2)		(13.2)	BD	優	赤褐	30%	No.281・236 内外面赤彩
37	杯	(12.3)		(12.8)	BGH	優	にぶい赤褐	口縁部 15%	No.214・255 内外面赤彩
38	杯	11.4		11.9	BG	優	明赤褐	40%	No.283 内外面赤彩
39	杯	13.2		13.6	BCDH	優	赤褐	図示部 25%	P 2 内外面赤彩
40	高杯?	(13.5)		(13.5)	AEF	普	明赤褐	杯部 15%	No.122・118 内外面赤彩
41	杯				BCE	優	にぶい赤褐	底部 50%	No.154・172 内面赤彩
42	杯	(11.8)		(11.8)	BC	優	にぶい赤褐	図示部 30%	No.176・245・189地 木製原赤彩
43	杯	15.4	4.8	15.4	AD	劣	にぶい橙	70%	No.278・87・88 内外面赤彩
44	高杯	(18.9)		(18.9)	ABCG	優	明赤褐	口縁部 20%	No.218 内外面赤彩
45	高杯				BGH	優	明赤褐	図示部 100%	No.54 内外面赤彩
46	高杯				BG	優	明赤褐	脚座部 20%	No.72 外面赤彩
47	埴	(9.3)			BDFG	優	明赤褐	口縁部 20%	No.51
48	甕	(17.2)			ABDFG	普	にぶい橙	口縁部 20%	No.19
49	壺	(16.2)			ABCDFFG	普	橙	口縁部 15%	No.265・266
50	甕	(14.0)			AEFG	優	にぶい黄橙	口縁部 15%	No.62
51	壺?	(12.8)			ACFG	普	明赤褐	口縁部 30%	No.273・105
52	手捏ね	(8.4)	3.2	(8.4)	ABDF	普	橙	30%	No.113
53	手捏ね	(7.8)		(7.8)	ABCDFFG	普	にぶい黄橙	20%	No.84
54	手捏ね	(6.0)	3.1	(6.0)	ABCDFFG	普	橙	50%	No.214
55	甕	(13.2)			ABDFG	普	橙	口縁部 15%	No.284
56	甕?	(24.6)			ABCGF	優	にぶい赤褐	口縁部 20%	No.221
57	甕?	(25.0)			ABCGF	優	にぶい黄橙	口縁部 15%	No.269
58	手捏ね	(7.8)	4.8	(7.8)	ACF	普	にぶい橙	30%	No.57
59	甕?				BC	普	にぶい赤褐	底部 75%	No.195・201・279外面赤化
60	甕?				ABCEF	優	褐	底部 40%	No.106
61	壺?				ABCH	普	にぶい褐	底部 75%	No.152・181・173
62	甕?				ABCDFFG	普	橙	底部 100%	カマド 外面赤化
63	高杯				G	優	灰	杯部 5%	No.131 須恵器



第77图 第5·6号住居跡(1)



S105 (A-A'・B-B')

- 1 暗茶褐色土：径2～3mmの赤色土粒、焼土粒をわずかに、砂礫を多く含む、しまっている
- 2 黄褐色粘土：暗茶褐色土をわずかに含む、しまっている
- 3 黒褐色土：径3～5mmの黄褐色土粒、径5cm～1cmの赤褐色土ブロックを多く含む、しまっている

S106 (A-A'・B-B')

- 1 黒褐色土：径2～3mmの黄褐色土粒、砂礫をわずかに含む、しまっている
- 2 暗茶褐色土：径5mm～1cmの赤褐色土ブロックをわずかに含む、しまっている

S107・108 (C-C'・D-D')

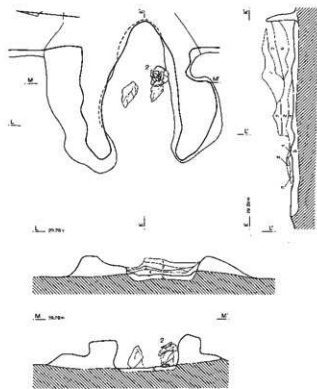
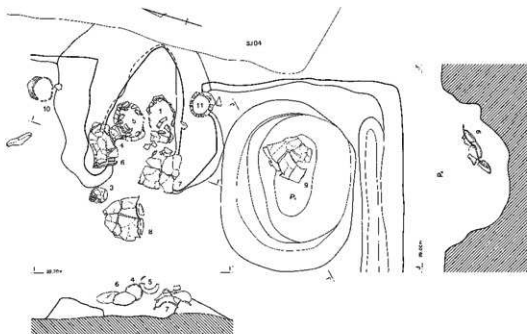
- 1 暗茶褐色土：径1mm以下のローム粒、焼土粒をわずかに、砂礫を多く含む、しまっている
- 2 黒褐色土：砂、礫を多く含む、しまっている

S109 (G-G')

- 1 黒褐色土：焼土粒、径1～2cmの赤褐色粘土ブロックをわずかに、砂、礫を多く含む、しまっている
- 2 黒褐色土：径2～3mmの黄褐色粘土ブロック、焼土、炭化物粒を多く含む、しまっている
- 3 赤色砂質土：焼土、炭化物粒をわずかに含む、しまっている
- 4 暗茶褐色土：黒色土をわずかに含む、しまり強い

S110 (I-I')

- 1 暗茶褐色土：砂、焼土粒をわずかに含む、しまっている
- 2 黒褐色土：砂を多く、焼土粒をわずかに含む、しまっている



註記 カマダ (K-K'・L-L')

- 1 灰褐色土 : 焼し、炭化物等、灰をわずかに含む。しまっている
- 2 黄褐色粘土 : 焼土層を多く含む。しまっている
天弁形陶片埋藏土
- 3 黒灰褐色土 : 焼土をわずかに含む。粘性しまりとも強い
- 4 雑褐色土 : 黒灰褐色土をわずかに含む。しまっている
- 5 赤褐色土 : 焼土層をわずかに含む。しまっている。黒灰褐色土
- 6 雑褐色土 : 灰褐色土をわずかに含む。しまっている
- 7 緑灰色土 : 焼土ブロック、黄褐色粘土をわずかに含む。しまっている

第79図 第5号住居跡カマダ

る。43はほぼ完形である。分散して出土した。丸底の浅い皿型で、棚田遺跡内では類例に乏しい。44~46は高杯である。47は小型埴である。48~50・55は甕の口縁部、51は壺の口縁部だろう。52~54・58は手握ねの小型土器である。日用品ではないだろう。これらが複数含まれることは、覆土中・上層の土器片群が、祭祀行為などの痕跡である可能性をうかがわせる。56・57は大型鉢か甕とみられる。59~62は甕の底部だろう。59は底面が突出して丸底になっている。

これらの遺物は、古墳時代後期に属するものである。

第5号住居跡（第77~80図 遺物第81~83図）

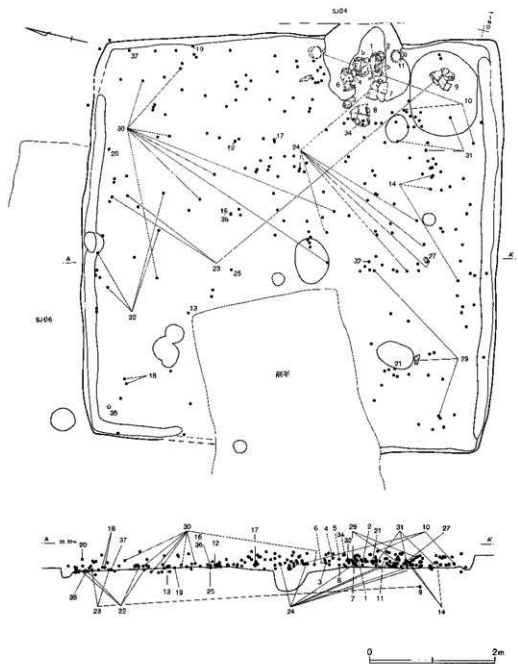
位置は、O7グリッドである。東は第4号住居跡に重複し、カマドの一部を破壊されているとみられる。また、西は第6号住居跡と重複し、それを破壊している。すなわち、第4号住居跡に先行し、第6号住居跡に対し後出である。

西半の一部は削平されていたが、周壁平面形は、奥行6.5m、幅6.5mのほぼ正方形である。床面積は40.7㎡である。カマドは東壁やや南寄りに設置されていた。中心軸方向はN-80°-Eである。主柱穴はP₁~P₂で、通例北東にあるべき柱穴は確認されなかった。南東隅のP₁は貯蔵穴である。

周壁は、最高0.3mである。南・北壁と、西壁の一部には壁溝が存在する。主柱穴は、深さ0.4~0.6mで、柱痕は確認されなかった。貯蔵穴は1.3×1.0mの楕円形で、中途に段がつく。深さ0.5mである。カマドは、東壁を扶けるようにして構築されており、奥部が壁外に突出する。両袖が遺存し、突出部分は第4号住居跡に破壊されている。燃焼部は、床面を浅く掘りくぼめたあと、埋めもどして燃焼面を構築している。すなわち5層上面が燃焼面であったとみられる。また、燃焼部中央には角礫が2個並列して立てられており、支脚であったと考えられる。燃焼面との隙間には粘土をつめて支えとしていた。

出土遺物は第4号住居跡に次いで豊富で、カマド周辺と貯蔵穴P₁に、完形品を主体とするまとまりが認められた。土器のほか、石製紡錘車が出土している。カマド周辺では、上述の角礫上に、2の高杯が倒立したままつぶれていた。その直上には、カマドを覆う様に、1・5・6・7の甕、4の小型甕が横転してつぶれていた。さらに袖部の両脇には10・11の甕が正立していた。10・11はともに胴部下位が欠落しており、カマドの一部あるいはその周辺設備として再利用されていた可能性がある。カマドの前には3の杯、8の甕がやはりつぶれていた。貯蔵穴P₁では、覆土中から9の甕が出土した。完形の状態で転落し、埋没過程でつぶれたとみられる。

1・5・6・7はカマドから一括出土した甕だが、形態の細部は様でない。5は胴部のふくらみが目立ち、頸部は明瞭に屈折して口縁部は大きく開く。一方7は細身の長胴で、頸部はゆるく屈曲し、内面に稜をもたない。すなわち5に対し新出の型式的特徴を示しているといえるだろう。1の底部はわずかにドーナツ状の凹底である。2は高杯である。低脚で、杯部の底部が広くなり、有縁高杯本来の姿を半ば失っている。第24号住居跡1などが類例となる。3は比企・人間型杯である。4・8・9は甕である。4はほぼ完形、8・9はともに完形品である。10は甕である。30とよく似ている。すなわち口縁部の開きがあまり大きくなく、上半が僅かに内湾し、端部に水平の面取りがなされている点、胴部外面のナデ方向がヨコ・ナナメを基調とする点、胎土がやや砂っぽく、



第80図 第5号住居跡遺物出土状況

淡黄色がかる点などが共通する。12以下は、その他出土状態に特筆すべき点のみられない断片的資料である。12・13は須恵器模倣杯、14～19は比企・入間型杯、20・21もその特徴を示しているが、鉢だろう。22は内面に放射状の暗文をもつ杯である。遺跡内唯一の例である。23～26・28・29は高杯である。いずれも有蓋高杯の特徴を示している。29は脚柱部が高く、古相を示している。27は須恵器模倣杯の小型模造品とみておく。口縁部の一部が欠けるが、完形に近い。30は甕である。第3

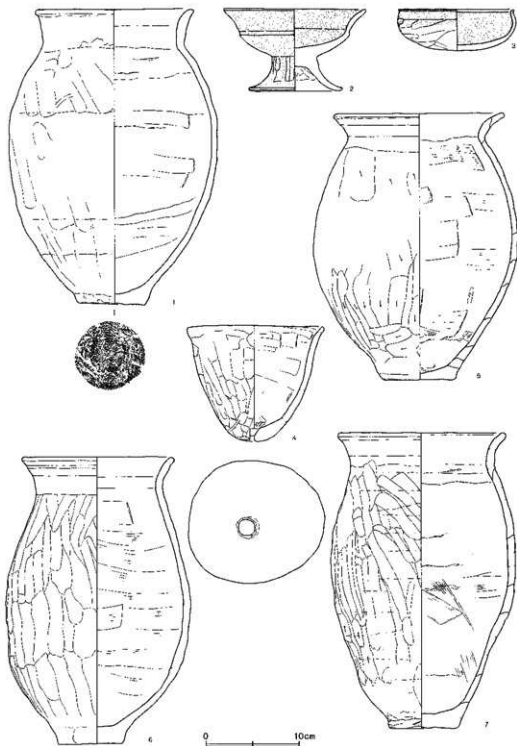
第21表 第5号住居跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	色調	残存	出土番号・その他
1	甕	17.0	31.2	22.2	ABCFG	普 明褐	70%	No.240 胴部以下ス、凹底
2	高杯	15.1	8.8	15.1	BDH	劣 におい橙	100%	No.245 内外面赤彩
3	杯	12.2	4.4	12.6	ABG	優 におい赤褐	90%	No.235 内外面赤彩
4	瓶	14.6	12.4	14.6	ABCGH	優 におい赤褐	90%	No.238 孔径1.7
5	甕	(18.2)	28.2	(21.8)	ABCGH	優 におい赤褐	50%	No.239(カマド) 下半ス
6	甕	16.6	30.4	19.8	ABCDFFG	普 明赤褐	90%	No.237(カマド) ドブス、赤化
7	甕	17.8	31.2	19.6	ABCFGH	優 褐	100%	No.236(カマド)
8	瓶	23.4	26.8	23.4	ABCDFFH	優 におい橙	100%	No.234 孔径7.0
9	瓶	26.4	29.8	26.4	ABCFGH	優 におい赤褐	100%	No.247 孔径7.2
10	甕	16.2		(20.2)	ABCEGH	普 におい黄橙	40%	No.144・191・242
11	甕	(16.0)		17.9	ACFGH	優 におい黄橙	60%	No.241
12	杯	10.5	4.7	11.3	B	優 におい赤褐	95%	No.220 内外面赤彩
13	杯	(12.4)		(12.4)	B	優 明赤褐	15%	No.8 内外面赤彩
14	杯	(13.1)		(13.5)	ABG	優 明赤褐	30%	No.188-188-57 内外面赤彩
15	杯	(12.9)		(12.9)	AB	優 におい赤褐	20%	内外面赤彩
16	杯	12.7	4.7	12.7	BG	優 灰赤	80%	No.216 内外面赤彩
17	杯	(12.6)		(12.6)	AB	優 におい赤褐	15%	No.161 内外面赤彩
18	杯	(13.7)		(13.7)	BG	優 におい橙	20%	No.65・66 内外面赤彩
19	杯	(14.0)		(14.5)	BD	優 明赤褐	15%	No.197 内外面赤彩
20	鉢?	(12.2)			ABG	優 赤褐	口縁部 20%	No.3 内外面赤彩
21	鉢?	(11.8)		(12.9)	AB	普 明赤褐	口縁部 15%	No.34 内外面赤彩
22	杯	(13.0)		(13.0)	AD	普 明赤褐	図示部 25%	No.5・73・77他 暗文
23	高杯	(17.5)		(17.5)	ABEGH	普 橙	杯部 75%	No.79・80・247(貯蔵穴) 赤彩
24	高杯	17.1		17.1	ABCGH	普 橙	杯部 75%	No.13・28・29他 内外面赤彩
25	高杯				BCG	普 明赤褐	杯底部 20%	No.211 内外面赤彩
26	高杯				ABD	普 赤褐	杯底部 25%	内外面赤彩
27	杯	6.6	4.0	7.2	ABCDF	優 明黄褐	90%	No.68
28	高杯				ABDGH	優 明赤褐	脚柱部 30%	外面赤彩
29	高杯				ABG	優 明赤褐	脚部 50%	No.69・45・21 内外面赤彩
30	甕	17.9		20.3	ABCEGH	普 明赤褐	上半部 25%	No.95・113・S.J03他 ス
31	鉢	(25.0)		(25.0)	BDFG	優 におい黄褐	口縁部 25%	No.142・147・189 外面ス
32	甕?	(9.9)			BDG	普 褐灰	口縁部 20%	No.17
33	甕	(13.9)			ABH	普 におい橙	口縁部 25%	カマド
34	甕	(16.7)			ADG	普 におい橙	口縁部 25%	No.138 条痕明瞭
36	甕	(17.3)		(19.0)	ACDEFG	優 におい黄褐	上半部 25%	No.216
37	甕			(20.4)	ACG	優 におい赤褐	胴部 25%	No.112
38	甕				ABCGH	優 明赤褐	底部 30%	カマド

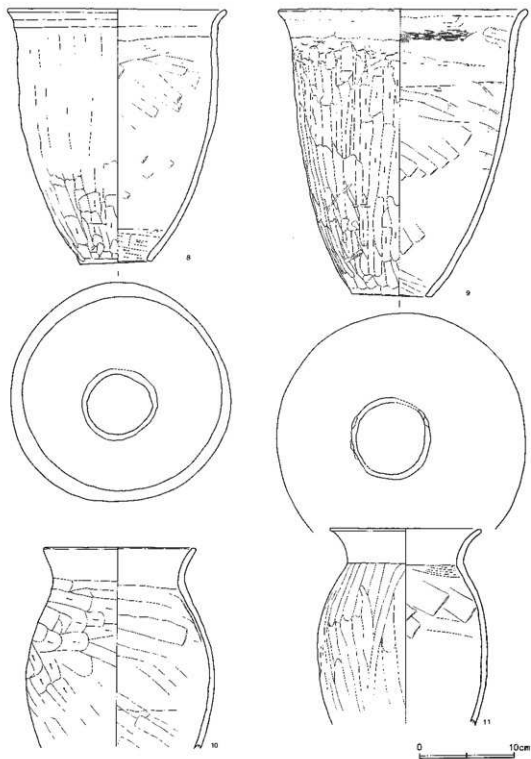
号住居跡出土の口縁部破片がこれに接合した。31は鉢である。36は甕、32~38も甕もしくは小型甕だろう。

35は石製紡錘車である。滑石製である。

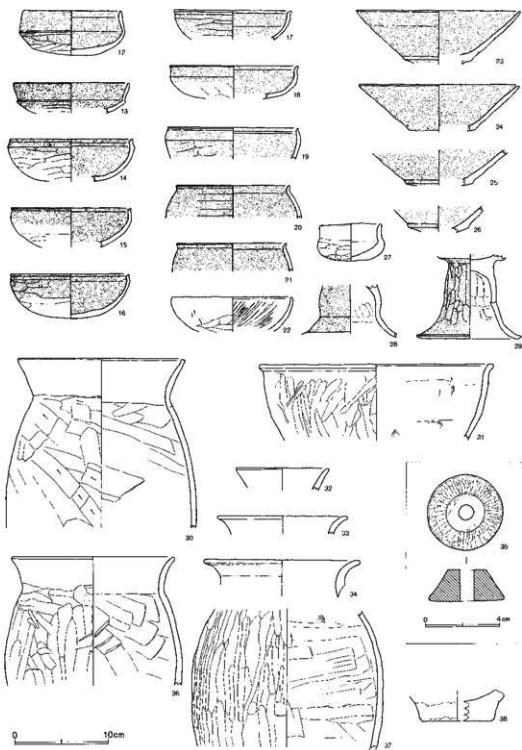
これらの遺物は、古墳時代後期に属するものである。



第81图 第5号住居跡出土遺物(1)



第82図 第5号住居跡出土遺物(2)



第83図 第5号住居跡出土遺物(3)

第6号住居跡(第77図 遺物第84図)

位置は、N7・O7グリッドである。

遺構は、第5号住居跡と重複し、それによって過半が破壊されている。すなわち第5号住居跡に先行することが確認される。さらに西側の一部は削平されており、北壁周辺のみ床面が遺存していた。P₁~P₃が主柱穴とみられ、P₁は貯蔵穴だろう。そこから推定すると、周壁平面形は5.7×5.6mのほぼ正方形で、床面積は約32㎡である。カマドの存在は確認されなかったが、東壁と仮定すると、中心軸方向はN-85°-Eである。

周壁は、最高0.2mである。主柱穴は、いずれも深さ0.5mである。柱間距離は、東西2.8~2.9m、南北2.9~3.1mである。貯蔵穴は、0.7×0.6mの楕円形で、深さ0.3mである。

出土遺物は、遺構の大半が破壊されていたこともあり、ごくわずかで、断片的である。1は甕の口縁部である。

遺物と、第5号住居跡に先行する層位的事実からみて、遺構は古墳時代後期に属するだろう。



第84図 第6号住居跡出土遺物

第22表 第6号住居跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
1	甕	(17.9)			ADGH	覆	にぶい黄褐	口縁部 20%	端部スス

第7号住居跡(第85~87図 遺物第88・89図)

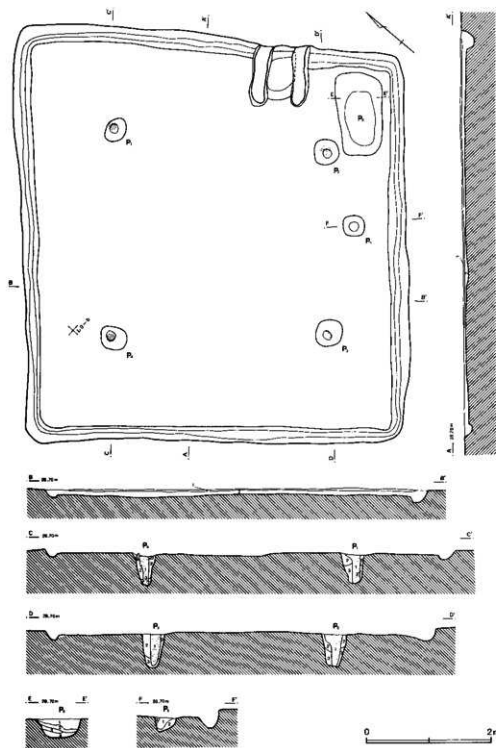
位置は、K9・L9グリッドである。南東に第8号住居跡、北東には第9・10号住居跡が近接する。

奥行6.4m、幅6.0mで、周壁平面形はややいびつな方形である。中心軸方向はN-52°-Eで、床面積は38.4㎡である。主柱穴はP₁~P₄、東隅のP₃は貯蔵穴である。カマドは北東壁南寄りに設置されていた。

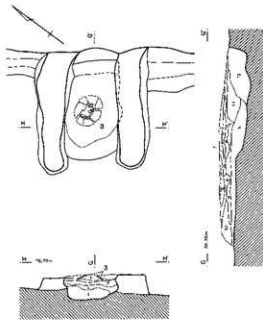
周壁は、高さ0.1~0.2mで、壁溝が全周する。主柱穴P₁~P₄は、深さ0.5~0.6mで、いずれも柱痕が確認された。柱間距離は、奥行3.0~3.4m、幅3.6mである。貯蔵穴P₃は1.4×0.7mの隅丸長方形で、深さ0.3mである。カマドは両袖が遺存し、燃焼部がくぼんでいる。

出土遺物は、覆土中の土器片が主体である。点数は比較的少ない。カマドと貯蔵穴P₃周辺に分布の偏りが認められた。土器のほか、鉄鏡2点と石製白玉1点が出土している。

1は鉄鏡頭部である。主柱穴P₁付近の覆土中から出土した。2本が錆で癒着している。錆化が著しいため、実測および計測は、X線写真を参考にした。1Aは、鏡被部がスカート状に幅広になり、緩やかに茎部に移行する。現存長6.8cm、頸部幅約0.6cm、鏡被部最大幅0.8cm、茎部幅約0.4cmである。1Bは、鏡被部形態が不明である。現存長7.0cm、幅約0.6cmである。1A・Bともに断面



第85图 第7号住居跡(1)



S187 (A-A'・B-B')

- 1 黄褐色土：径5mm～1cmの褐色土ブロック、炭を多く、焼土ブロック、炭化物をおおかに含み、しまっている
- 2 暗褐色土上：径1～3mmの黄褐色土粒を多く、焼土、炭化物をおおかに含み、しまっている

S187 (C-C'・D-D')

- 1 暗褐色粘質土：炭化物をおおかに含み、しまり強い
- 2 暗褐色土上：径3～5mmの灰色粘土粒を多く、径1～3cmのロームブロックをおおかに含み、しまっている
- 3 黄褐色粘質土：暗褐色土をおおかに含み、しまっている

S187 (G-G'・H-H')

- 1 暗褐色土：焼土、炭化物を多く含み、粘性、しまりとも強い
- 2 淡褐色土：黄褐色粘土粒をおおかに含み、しまっている
- 3 黄褐色土上：焼土、炭化物をおおかに含み、しまっている
- 4 淡褐色粘質土上：焼土、炭化物を多く含み、しまっている
- 5 暗褐色土上：径1mm以下のローム粒、焼土、炭化物をおおかに含み、しまっている
- 6 黄褐色土：焼土粒、炭をおおかに含み、しまっている
- 7 赤褐色土：炭化物をおおかに含み、しまっている
- 8 淡褐色土上：径4層より焼土、炭化物をおおかに含み、しまっている
- 9 黄褐色土上：径6層より焼土、炭を多く含み、しまっている
- 10 黄褐色土：径5mm～1cmの黄褐色粘土ブロック、焼土、炭化物をおおかに含み、しまっている
- 11 黄褐色土：径5mm～1cmのロームブロック、焼土、炭化物を多く含み、しまっている
- 12 暗褐色土上：径3～5mmのローム粒を多く、炭化物をおおかに含み、しまっている

S187 (E-E')

- 1 暗褐色土上：径5mm～1cmのロームブロックを多く、焼土、炭化物をおおかに含み、しまっている
- 2 暗褐色土：径5mm～1cmのロームブロック、炭化物をおおかに含み、しまっている
- 3 暗褐色土上：径1～3mmのローム粒を多く、炭化物をおおかに含み、しまっている
- 4 黄褐色土：径3～5mmのローム粒をおおかに含み、しまっている

S187 (F-F')

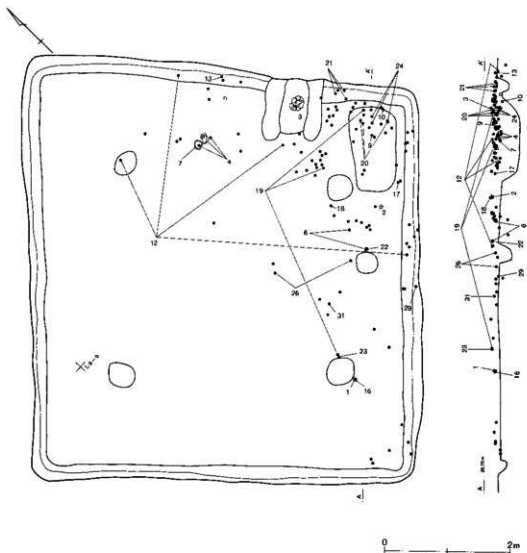
- 1 淡褐色粘質土上：径3～5mmのローム粒、径5mm～1cmのロームブロックをおおかに、暗褐色土を多く含み、しまり強い(程度弱)
- 2 暗褐色粘土：径1～3mmのローム粒を多く、径5mm～1cmのロームブロックをおおかに含み、しまっている

第86図 第7号住居跡②・同カマド

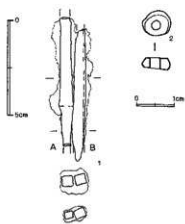
ほぼ方形である。2は臼玉である。直径7mm、滑石製である。

図示できた土器は29点である。3は高杯杯部である。カマド覆土中に倒立して出土した。4・5は須恵器模倣杯である。基本形態以外は、比企・人間型杯に近い。6～11は比企・人間型杯である。7は床面上から出土した。唯一ほぼ完形の状態で出土したが、下半側面に打ち欠かれたように穿孔されている。偶発的な破損かもしれないが、とりあえず注目しておく。12は小型鉢である。13は高杯脚部である。柱部は比較的短く太い。16は壺、18・19は短頸壺、14・15も壺の口縁部、21・25は底部だろう。16は、この形式の壺で赤彩が確認された、遺跡内で唯一の例である。17は甌の口縁部だろう。20・24は甕である。いずれも肩が張り、口縁部は反りかえるように外反する点で共通する。22は小型甕、23は頸部が細く口縁部の開きも小さいが、甕の口縁部とおもわれる。26は底部外面に木葉痕をもつ。29は甌の底部である。

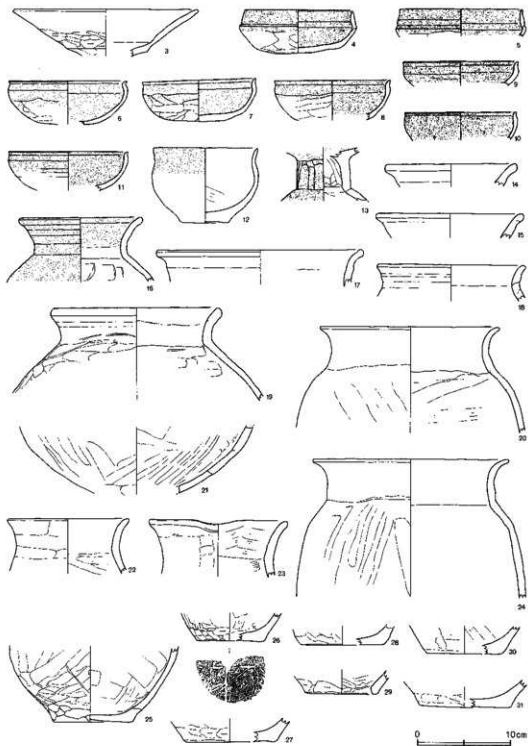
これらの遺物は、古墳時代後期に属するものである。



第87图 第7号住居跡遺物出土状況



第88图 第7号住居跡出土遺物(1)



第89図 第7号住居跡出土遺物(2)

第23表 第7号住居跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
3	高杯	19.9		19.9	ABDEH	優	明赤褐	杯部 95%	No121 カマド
4	杯	11.6	4.7	12.6	BCG	優	明赤褐	70%	No105・107・104(貯蔵穴) 赤彩
5	杯	(13.1)		(13.9)	BDGH	普	明赤褐	口縁部 25%	貯蔵穴 内外面赤彩
6	杯	(12.5)	4.7	12.9	BCG	優	明赤褐	50%	No20・18 内外面赤彩
7	杯	12.2	4.4	12.2	ABCG	優	明赤褐	95%	No107 内外面赤彩
8	杯	(12.3)		(12.4)	BGH	普	明赤褐	図示部 25%	貯蔵穴 内外面赤彩
9	杯	(12.3)		(12.3)	BG	普	明赤褐	口縁部 10%	No35 内外面赤彩
10	杯	(11.9)		(12.1)	AB	普	明赤褐	口縁部 20%	No96 内外面赤彩
11	杯	(12.7)		(12.7)	BG	普	明赤褐	図示部 20%	貯蔵穴 内外面赤彩
12	鉢	(11.2)	7.9	(11.4)	GH	劣	にぶい橙	50%	No1・4・32 内面赤彩
13	高杯				BCG	優	にぶい赤褐	脚柱部 30%	No6 内外面赤彩
14	壺?	(14.2)			ACGH	優	にぶい橙	口縁部 15%	貯蔵穴
15	壺?	(15.8)			ABCGH	普	明赤褐	口縁部 20%	貯蔵穴
16	壺				ABCFGH	普	明赤褐	図示部 40%	No68 内外面赤彩
17	瓶?	(22.2)			CEFH	普	にぶい橙	口縁部 15%	No27
18	壺	(15.9)			CDFH	優	にぶい橙	口縁部 10%	No17
19	壺	18.2			ABDFGH	優	にぶい橙	図示部 50%	No58・60・78
20	壺	(19.2)			ADE	普	にぶい橙	図示部 30%	No39・40・45
21	壺				ABCEFG	普	にぶい黄褐	図示部 40%	No42・41・92 外面スス
22	壺	(12.9)			BCDFGH	優	明赤褐	口縁部 20%	No20
23	壺	(14.8)			ABCEF	優	灰褐	口縁部 15%	No59
24	壺	(21.0)		(24.5)	AEGH	普	にぶい橙	上半部 25%	No45・54・55 条痕明顯
25	壺?				ABCFGH	優	にぶい赤褐	下半部 100%	貯蔵穴 底部スス
26	壺				ABC	優	明赤褐	底部 25%	No10・15 外面スス, 底部木炭痕
27	壺?				A EFGH	優	にぶい赤褐	底部 30%	貯蔵穴
28	壺?				ACEF	優	赤褐	底部 25%	貯蔵穴
29	瓶				FG	優	にぶい赤褐	底部 15%	No111
30	壺				BDFH	優	にぶい赤褐	底部 20%	貯蔵穴
31	壺				ABFGH	優	にぶい赤褐	底部 25%	No11

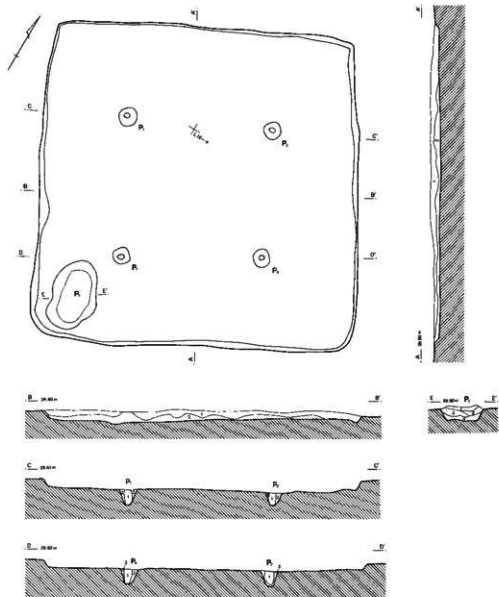
第8号住居跡 (第90・91図 遺物第92図)

位置は、L9・L10グリッドである。北に第9・10号住居跡、北西に第7号住居跡が近接する。

南北幅5.0m、北壁長4.7m、南壁長5.1mで、周壁平面形は正方形に近い。カマドは確認されなかったが、中心軸を南北優位に仮定すると、その方向はN-30°-Eである。床面積は、25.1㎡である。主柱穴はP₁~P₄、南西隅のP₅は貯蔵穴だろう。

周壁は、高さ0.1~0.15mである。主柱穴は、深さ約0.3mで、いずれも柱痕が確認された。柱間距離は、東西2.8m・南北2.1~2.3mである。貯蔵穴P₅は1.2×0.7mの楕円形で、深さ0.2mである。覆土上面から中層にかけては焼土が堆積していた。

出土遺物は覆土中の土器片が主体で、点数は比較的少ない。東壁周辺と貯蔵穴上面に分布の偏りが認められた。2は完形品で、貯蔵穴P₅から出土した。口縁端部は傷みが著しいためやや不明確だが、外反しない単純な器形であるとみられる。1は須恵器模倣杯である。口縁部を含め器壁が厚



S188 (A-A'・B-B')

- 1 黒褐色土：径5mm～1cmの暗茶褐色土ブロックを含み、しまり強い
- 2 暗茶褐色土：径1～2cmの黄褐色土ブロックを多く、径2～3mmの黄褐色土粒をわずかに含み、しまっている

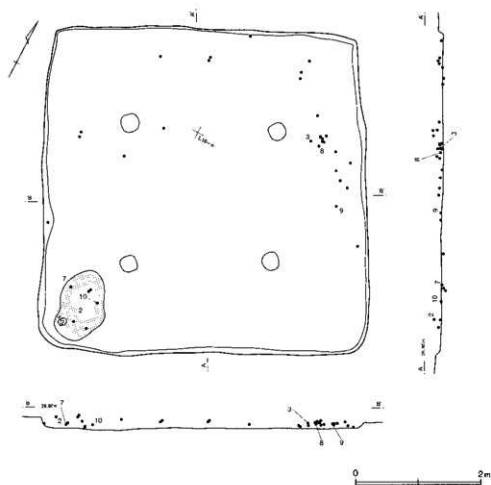
S188 (C-C'・D-D')

- 1 黒褐色土：炭化物を多く、径5mm～1cmの灰褐色粘土ブロックをわずかに含み、しまり強い
- 2 灰褐色土：径3～5mmの黄褐色土粒を多く、黒褐色土をわずかに含む。粘性强く、しまっている

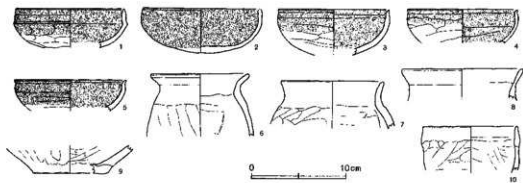
S188 (E-E')

- 1 灰褐色粘土：粘土ブロックを多く含む。粘性強く、しまっている
- 2 暗茶褐色土：径5mm～1cmの黄褐色粘土ブロック、炭土、炭化物粒をわずかに含み、しまっている
- 3 黒褐色土：粘土粒をわずかに含み、しまっている
- 4 茶褐色土：径5mm～1cmの灰褐色土ブロックをわずかに含み、しまっている

第90図 第8号住居跡



第91图 第8号住居跡遺物出土状況



第92图 第8号住居跡出土遺物

第24表 第8号住居跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
1	杯	(11.7)		(12.2)	ABGH	普	にぶい橙	図示部 20%	内外面赤彩
2	杯	12.6	4.7	12.9	ABDH	劣	橙	95%	No.25 内外面赤彩
3	杯	(11.9)		(12.0)	ACG	普	明赤褐	20%	No.12 内外面赤彩
4	杯	(11.8)		(11.8)	ABDG	優	明赤褐	図示部 40%	内外面赤彩
5	杯	(12.2)		(12.2)	A	優	赤褐	図示部 15%	内外面赤彩
6	小型壺	(10.7)			AB	優	にぶい赤褐	上半部 50%	No.19・20
7	小型壺	(11.0)			BH	優	にぶい赤褐	口縁部 5%	No.23
8	小型壺?	(13.0)			BDF	優	にぶい赤褐	口縁部 25%	No.11
9	壺?				ABG	優	褐	底部 20%	No.28 スス
10	埴	(10.2)		(10.5)	ADEH	優	明赤褐	口縁部 25%	No.22

く、口縁部外面にかすかに稜をもつ。基本形態以外は、比企・入間型杯に近い。3～5は比企・入間型杯である。5は3・4に比べ浅い形態のようである。6～8は小型壺である。6・7は焼成・胎土の特徴から同一個体の可能性がある。10は埴である。

これらの遺物は、古墳時代後期に属するものである。

第9号住居跡（第93～96区 遺物第97図）

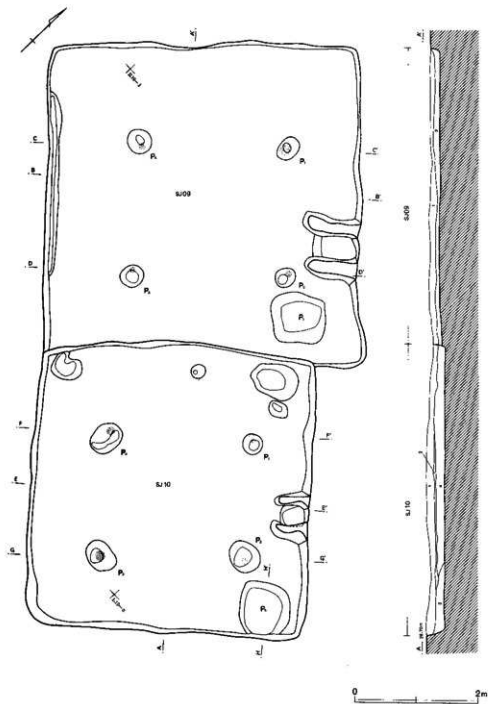
位置は、K9・K10グリッドである。南東壁は第10号住居跡に破壊されている。つまり第10号住居跡に先行することが確認された。南に第8号住居跡、南西に第7号住居跡が近接する。

周壁平面形は4.9×4.7mのほぼ正方形、床面積は24.7㎡である。カマドは北東壁やや東寄りに位置し、主柱穴はP₁～P₄、カマドの脇、床面東隅に位置するP₅は貯蔵穴である。

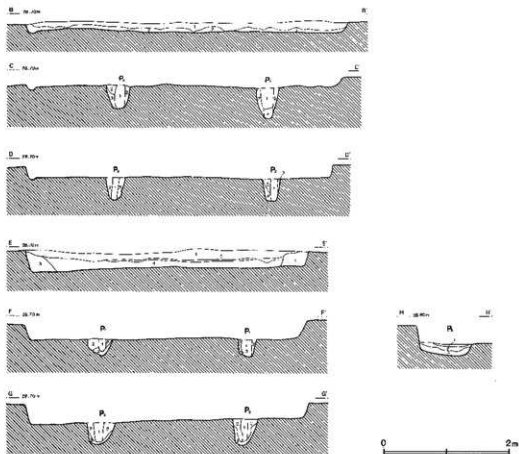
周壁は、高さ0.1～0.2mである。中心軸方向はN-48°Eである。奥壁対面にあたる南西壁の一部には、3mにわたり壁溝が存在した。主柱穴P₁～P₄は、深さ0.4～0.5mで、いずれも柱痕が確認された。柱間距離は、奥行2.4～2.5m、幅2.2mである。貯蔵穴P₅は0.9×0.8mの隅丸方形で、深さ0.2mである。カマドは両袖部が遺存し、燃焼部はわずかにくぼんでいる。煙道は失われている。

出土遺物は少ないが、カマド、貯蔵穴周辺に分布のまとまりが認められた。杯1・2はいずれも完形品で、貯蔵穴から出土した。同じく貯蔵穴から出土した破片は、第10号住居跡壺16と接合した。1は須恵器模倣杯である。基本形態以外は、比企・入間型杯に近い。2・3は比企・入間型杯である。4は小型の杯だろう。小型模倣品かもしれない。5は高杯の脚部である。柱部は細身で、ふくらみが少なく、中実である。裾部との境は屈曲が少ない。6・7は鉢だろう。6は口縁部にかけて直線的に開く器形だが、7は頸部がくびれ、壺に近い形態である。8は壺の口縁部だろう。9・10は壺である。いずれも口縁部は直立気味で、端部付近が外反する。頸部内面はわずかに屈折する。11は小型壺である。やはり口縁部は直立気味で、端部付近が外反し、頸部内面はわずかに屈折する。胴部中位はススが付着し、黒ずんでいる。底部は器壁接合部で脱落している。12・13は壺の底部、14は壺もしくは壺の底部である。

これらの遺物は、古墳時代後期に属するものである。



第93图 第9・10号住居跡(1)



S23 (A-A'・B-B')

- 1 暗茶褐色土：径1mm以下のローム粒を多く、径5mm～1cmのロームブロック、炭土、灰化物をわずかに含み、しまっている
- 2 黄褐色土：黒褐色土、砂、炭をわずかに含み、しまっている

S25 (C-C'・D-D')

- 1 暗茶褐色土：径1～2mmの黒褐色粘土ブロック、径3～5mmのローム粒を多く含み、しまり強い
- 2 黒褐色土：径5mm～1cmの黄褐色土ブロックをわずかに、砂炭を多く含み、しまっている
- 3 黄褐色土：黒褐色土をわずかに含み、しまっている

S26 (A-A'・E-E')

- 1 暗茶褐色土：径1～3mmのローム粒、炭土、灰化物をわずかに含み、しまっている
- 2 暗茶褐色粘土：黒土、灰化物を多く含む、粘性強く、しまっている
- 3 暗黄褐色土：径1～1.5cmのロームブロック、炭土粒をわずかに含む、しまっている
- 4 黒褐色土：径1mm以下のローム粒、炭土粒をわずかに含み、しまっている
- 5 コード層土：別図参照

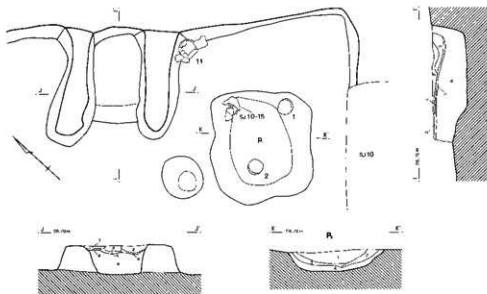
S27 (F-F'・G-G')

- 1 暗茶褐色土：径1～2mmの黒褐色粘土ブロックを多く、炭土粒をわずかに含み、しまり強い
- 2 暗黄褐色土：暗茶褐色土をわずかに含み、しまっている
- 3 黄褐色土：砂、炭を多く含み、しまっている

S28 (H-H')

- 1 暗茶褐色粘土：炭土、灰化物を多く含む、粘性強く、しまっている
- 2 暗茶褐色土：径3～5mmの黒褐色粘土粒、黒土、灰化物を多く含む、しまっている
- 3 黒褐色土：径3～5mmのローム粒、炭土、灰化物をわずかに含み、しまっている

第94図 第9・10号住居跡(2)

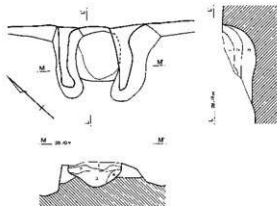


510 カマド (J-I・J-J')

- 1 障成色土 : 障土粒を多く、灰をわずかに含む
- 2 障成色土 : 炭化物粒をわずかに含む
- 3 障成色土 : 障土粒を多く、炭化物粒をわずかに含む、しまり強い
- 4 障成色土 : 灰をわずかに含む、しまり強い
- 5 障成色土 : 炭化物をわずかに含む、しまっている
- 6 障成色土 : 障1mm以下のローム粒を多く、障1~2cmのロームブロックをわずかに含む、しまっている

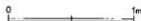
510 (K-K')

- 1 障成色土 : 障土、炭化物粒、径5mm~1cmのロームブロックをわずかに含む、しまっている
- 2 障成色土 : 炭化物をわずかに含む、しまり強い
- 3 障成色土 : 障成色土をわずかに含む、しまり強い
- 4 障成色土 : 障1~2cmのロームブロック、炭化物粒をわずかに含む、しまっている



510 カマド (L-L'・M-M')

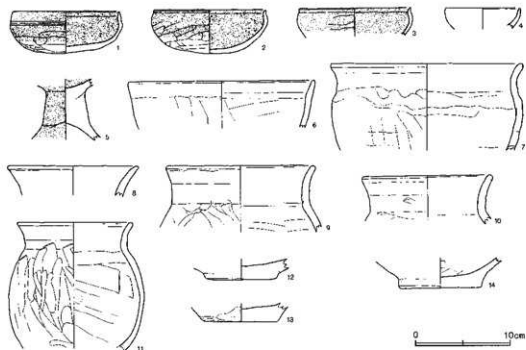
- 1 障成色土 : 障土粒をわずかに含む、しまっている
- 2 障成色土 : 炭化物をわずかに含む
- 3 障成色土 : 障1mm以下のローム粒を多く、障土粒をわずかに含む
- 4 障成色土 : 障成色土をわずかに含む



第95図 第9・10号住居跡カマド



第96図 第9・10号住居跡遺物出土状況



第97図 第9号住居跡出土遺物

第25表 第9号住居跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
1	杯	11.4	4.5	12.0	ABCDGH	普	橙	100%	No90(貯蔵穴) 内外面赤彩
2	杯	12.0	4.7	12.5	ABCGH	優	橙	100%	No89(貯蔵穴) 内外面赤彩
3	杯	(12.0)		(12.4)	AG	普	明赤褐	口縁部 15%	No7 内外面赤彩
4	杯	(8.0)		(8.0)	ABFG	劣	橙	口縁部 20%	
5	高杯				ABCEG	普	明赤褐	図示部 30%	No45・46 内外面赤彩
6	鉢	(20.0)		(20.0)	ABFG	優	にぶい赤褐	口縁部 15%	No83
7	鉢	(20.6)		(20.6)	ABCFH	普	にぶい橙	上半部 35%	No41・72・77他
8	壺	(14.0)			ABEF	普	にぶい橙	口縁部 15%	No11
9	壺	(16.0)			BDFG	優	明赤褐	口縁部 25%	No40・63
10	壺	(14.0)			ABEG	優	明赤褐	口縁部 25%	No87
11	小形壺	12.3		14.5	ABDEFH	優	にぶい赤褐	80%	No33・87 スス
12	壺?				ABEG	普	橙	底部 50%	No10・79 赤化
13	壺?				ABCFG	優	明赤褐	底部 100%	
14	壺?				ABDFH	優	にぶい褐	底部 100%	No38

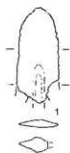
第10号住居跡 (第93~96図 遺物98・99図)

位置は、K10・L10グリッドである。第9号住居跡と重複し、その北西壁を破壊していた。すなわち第9号住居跡に後出することが確認される。南西には第7号住居跡と第8号住居跡が近接する。周壁平面形は、奥行4.4m、幅4.6mのほぼ正方形である。床面積は19.2㎡である。カマドは北東壁に設置されていた。中心軸方向はN-49°-Eである。主柱穴はP₁~P₄、東隅のP₅は貯蔵穴だろう。

他に、北西壁寄りにも4基のピットが確認された。

周壁は、最高0.3mである。主柱穴P₁~P₄は、深さ0.3~0.4mで、いずれも柱痕が確認された。柱間距離は奥行2.3m、幅2.0mである。貯蔵穴P₅は0.9×0.8mの隅丸方形で、深さは0.2mである。貯蔵穴としてはやや浅い。カマドは両袖部が遺存していた。袖部は、床面を台状に突出させて土台とした上に構築されている。燃焼部はややくぼんでいる。

出土遺物は、覆土中の土師器片を主体とし、遺構内全面にわたり分布していた。他に、北西壁中央際の床面上から鉄鏝が出土した。1は柳葉形の鉄鏝である。錆化が著しいため、実測および計測は、X線写真を参考にした。逆刺部から頸部以下は欠けている。断面形態は錆化のため不鮮明だが、片丸造とおもわれる。現存長5.0cm、幅2.2cm、鏝身厚0.4cm。2~5・7は比企・入間型杯である。5は須恵器模倣杯、7もその系統の杯である。9~11は高杯である。9は柱部がふくらみをもち中空であるのに対し、11は文字どおり柱状で、中実である。12は甕もしくは鉢だろうか。外面はタテハケ仕上げである。14~18は甕、19~23も、過半は甕の底部だろう。14~17はいずれも最大径が胴部中位にあり、14・15は、ゆるやかにくびれた頸部の内面にくだらかな稜をもつ。これらの遺物は、古墳時代後期に属するものである。

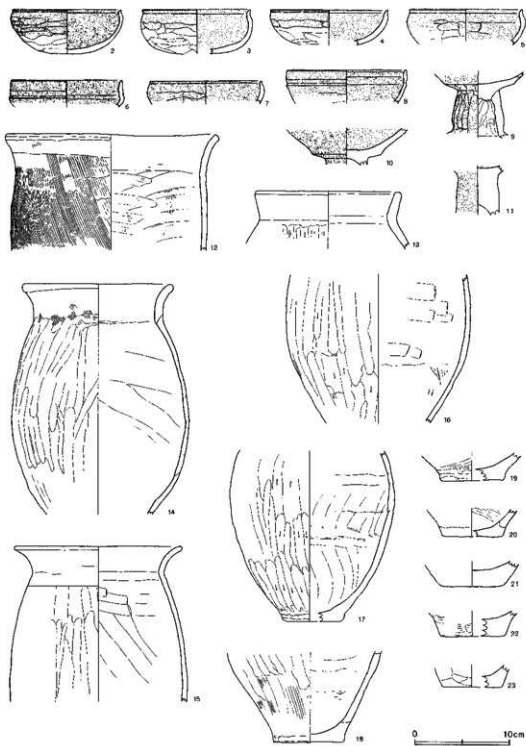


0 5cm

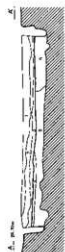
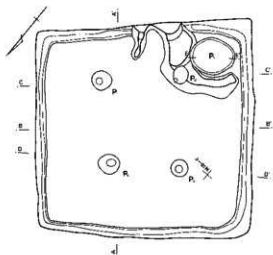
第98図 第10号住居跡出土遺物(1)

第26表 第10号住居跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	釉色	残存	出土番号・その他
2	杯	(11.6)	4.7	(12.0)	ABCGH	青 橙	50%	No.9, S J 貯蔵穴 木炭灰赤彩
3	杯	11.5		11.9	ABG	優 明赤褐	40%	No.142 内外面赤彩
4	杯	(12.6)		(12.6)	ABCG	青 赤褐	20%	No.23-80-88 内外面赤彩
5	杯	(12.1)		(12.7)	BGH	青 明赤褐	口縁部 15%	No.123 内外面赤彩
6	杯	(12.0)		(12.4)	AG	優 明赤褐	口縁部 15%	No.5 内外面赤彩
7	杯	(12.0)		(12.0)	ABG	青 明赤褐	口縁部 20%	No.51-54 内外面赤彩
8	杯	(12.8)		(12.8)	BG	優 赤褐	口縁部 15%	No.114 内外面赤彩
9	高杯				ABG	青 橙	胴示部 50%	No.38-39 内外面赤彩
10	高杯				BCEG	優 明赤褐	杯部 20%	No.17 内外面赤彩
11	高杯				ABDF	優 明赤褐	胴柱部 40%	貯蔵穴 内外面赤彩
12	甕?	(22.9)		(22.9)	ABEF	優 におい赤褐	上半部 70%	No.132-133
13	甕	(15.7)			ABDEF	青 におい褐	口縁部 15%	No.72
14	甕	(16.2)		(19.0)	ABCDFH	優 におい赤褐	50%	No.137-8
15	甕	(17.9)		(19.0)	ABCEF	優 におい黄橙	上半部 20%	No.40-76 胴部下位赤化
16	甕			(19.6)	ABCEF	優 明赤褐	胴示部 30%	No.55-124他, S J 9 貯蔵穴
17	甕			(17.6)	ABCEH	優 赤褐	下半部 50%	No.125-38他, S J 9 貯蔵穴
18	甕				ABH	優 におい赤褐	下半部 60%	No.9-10-11
19	甕?				ABFG	優 におい赤褐	底部 30%	No.26
20	甕?				DF	優 におい橙	底部 30%	No.134-53
21	甕?				ABCEF	優 におい赤褐	底部 50%	No.14 赤化, 内面炭化物
22	甕?				ABCEF	青 明赤褐	底部 30%	No.32
23	甕?				ABFG	青 におい赤褐	底部 40%	No.21



第99图 第10号住居跡出土遺物(2)



21: (E-E')

- 1 暗褐色土：焼土粒、ローム粒、炭化物を含む
- 2 黒色炭化層：炭化物を主体とする
- 3 暗褐色土：炭化物粒、焼土粒、ローム粒を含む
- 4 暗褐色土：第3層より粘性強い
- 5 暗褐色土：ローム粒、焼七粒を含む



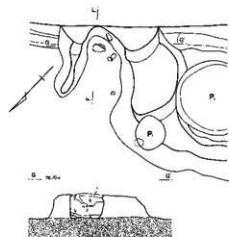
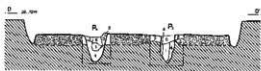
21: (A-A'・B-B')

- 1 褐色土：焼土、炭化ロームをわずかに含む
- 2 黒色土：炭化物、薪土を含む
- 3 暗褐色土：炭化物、炭化物粒、焼土粒を含む
- 4 暗褐色土：炭化物、炭化物粒、焼土粒、ロームブロックを含む、粘り厚構造土
- 5 暗褐色土：焼土、ローム粒、炭化物粒を含む、しまり強い
- 6 暗褐色土：焼土、炭化物粒を含む
- 7 暗褐色土：焼土、炭化物粒をわずかに含む
- 8 暗褐色土：ロームを主体とする、粘性強く、しまっている。
- 9 暗褐色土：ロームブロック、炭化物粒を含む



21: (C-C'・D-D')

- 1 暗褐色土：粘土、ローム粒、炭化物粒を含む
- 2 暗褐色土：ロームブロックを主体とする
- 3 暗褐色土：焼土、炭化物粒を含む
- 4 暗褐色土：ロームブロック、炭化物粒を含む
- 5 暗褐色土：ローム粒を含む、しまり強い
- 6 粘土

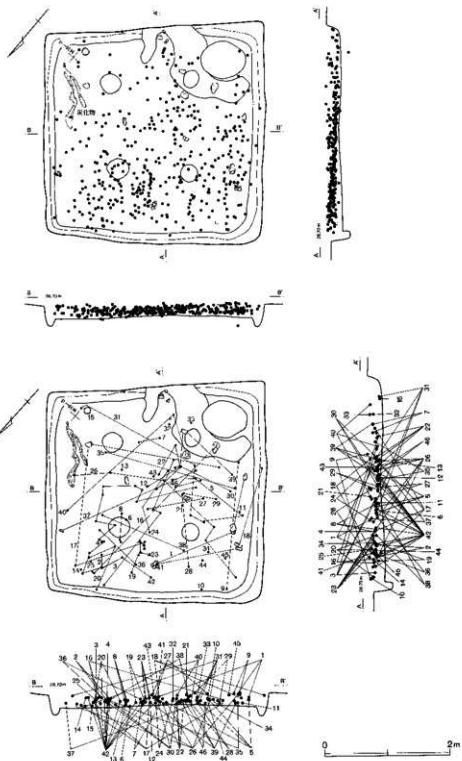


22: カマド (F-F'・G-G')

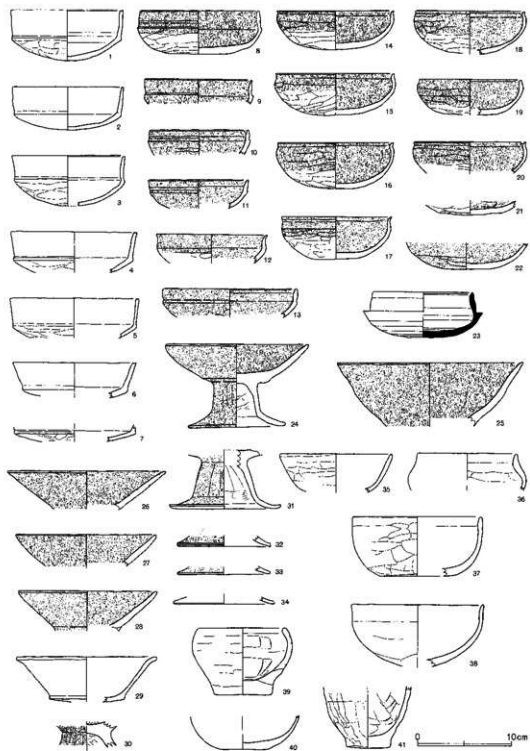
- 1 黄褐色土：焼土ブロック、焼七粒、炭化物粒を含む
- 2 黄褐色土：第1層よりローム粘土を多く含む
- 3 赤色焼土
- 4 炭化物・灰
- 5 黄褐色土：ローム粘土、焼土粒、炭化物粒を含む
- 6 灰褐色粘土



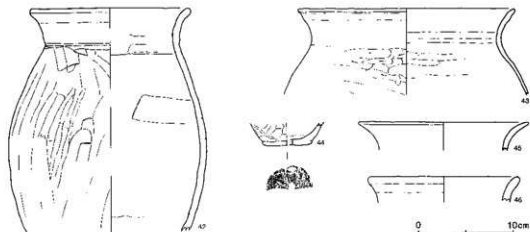
第100図 第11号住居跡・同カマド



第101图 第11号住居跡遺物出土状況



第102図 第11号住居跡出土遺物(1)



第103図 第11号住居跡出土遺物(2)

第11号住居跡 (第100・101図 遺物第102・103図)

位置は、L10・M10グリッドである。北西に第7～10号住居跡が近接する。

周壁平面形は、奥行3.4m、幅3.3mのややいびつな正方形である。床面積は10.6㎡で、棚田遺跡で確認された竪穴住居跡では最も小規模である。カマドは南東壁に設置されていた。中心軸方向はN-139°-Eである。カマドに接し、南隅に位置するP₂は貯蔵穴である。なお床面は、ロームブロックを主体とする貼床である。8・9層がそれにあたる。

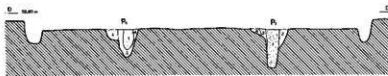
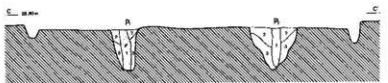
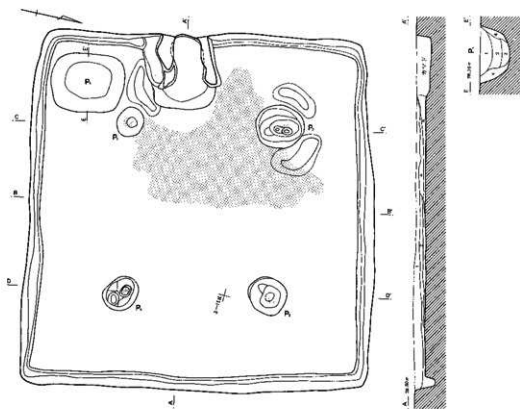
周壁は、最高0.4mである。全周にわたり壁溝が存在した。主柱穴P₁～P₄は、深さ0.45～0.55mで、いずれも柱痕が確認された。柱間距離は、奥行1.4m・幅1.1～1.3mである。貯蔵穴P₂は、平面が0.75×0.55mの楕円形で、深さ0.2mである。その北側は、黒色土の土塊にとりまかれていた。カマドは両袖部が遺存していた。

遺物は、覆土中から床面上にかけて多くの土器片が出土した。破砕後に覆土中に投棄されたものが主体とみられる。図示できた点数は多かったが、復元作業を経ても、5割以上遺存した個体は少なかった。15は完形で、東隅床面上から出土した。1～11・13は須恵器模倣杯である。1～8は赤彩が認められない軟質な杯蓋模倣杯で、このままとまりは、他の遺構にくらべきわだっている。10・11は、口径が小さく、口縁部の立ち上りも低い。12・14～20は比企入間型杯である。21・22も杯の底部だろう。23は須恵器杯身である。棚田遺跡では、須恵器はごくわずかしか出土していないが、遺構出土須恵器としては、唯一全景のうかがえる資料である。胎土は白色針状物質を含まない。24～34は高杯である。24は杯部が浅く、脚柱部は直線的で、裾部との境界が明瞭である。26～28も同様の杯部であるが、25の杯部はきわだって深く、やや大型であるようだ。29は遺跡内では類例に乏しく、赤彩された有稜高杯が主体であるなかで、杯1～8のままとまりとも関連して注意をひく。36～39は鉢である。39は上半が内湾し、無頸壺に似た形態である。41は埴だろだろう。

これらの遺物は、古墳時代後期に属するものである。

第27表 第11号住居跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
1	杯	11.9	5.5	11.9	DH	劣	橙	90%	No.75・77・79
2	杯	(11.9)	4.7	(11.9)	H	劣	橙	40%	No.285・136
3	杯	12.2	(5.4)	12.2	EH	普	にぶい褐	90%	No.233・301・196他
4	杯	(13.4)		(13.4)	H	劣	にぶい褐	図示部 15%	No.43
5	杯	(13.7)		(13.7)	H	普	黄褐	図示部 15%	No.259・234・97他
6	杯	(13.1)		(13.1)	BGH	劣	橙	図示部 15%	No.388
7	杯				GH	劣	橙	図示部 20%	No.104・354
8	杯	(12.8)	4.6	(13.3)	BGH	優	にぶい赤褐	50%	No.151・152・163 内外面赤彩
9	杯	(11.5)		(11.7)	ABD	優	橙	口縁部 15%	No.2・69 内外面赤彩
10	杯	(10.6)		(10.9)	ABG	優	明赤褐	口縁部 15%	No.88 内外面赤彩
11	杯	(10.7)		(10.7)	GH	優	明赤褐	図示部 15%	No.318 内外面赤彩
12	杯	(11.9)		(11.9)	G	優	にぶい赤褐	口縁部 15%	No.303 内外面赤彩
13	杯	(14.5)		(14.5)	BGH	普	明赤褐	15%	No.277 内外面赤彩
14	杯	12.4	4.2	12.4	ABG	優	明赤褐	50%	No.108 内外面赤彩
15	杯	12.6	4.5	12.9	ABCG	優	明赤褐	100%	No.84 内外面赤彩
16	杯	12.3	5.0	12.5	BG	普	にぶい赤褐	80%	No.80・105・106 内外面赤彩
17	杯	(11.8)	4.5	(11.8)	BGH	優	明赤褐	40%	No.128・217・297他 内外面赤彩
18	杯	(11.6)		(12.0)	BGH	優	明赤褐	40%	No.20・70・78 内外面赤彩
19	杯	11.0	(3.8)	(11.3)	BGH	優	明赤褐	15%	No.331・383 内外面赤彩
20	杯	(11.9)		(12.2)	BG	優	にぶい赤褐	図示部 20%	No.38・132・148 内外面赤彩
21	杯				ABG	優	明赤褐	底部 30%	No.361 内面赤彩
22	杯				ABCH	優	明赤褐	底部 50%	No.230・238・310他 内外面赤彩
23	杯身	10.8	4.8	12.7	G	優	褐灰	40%	No.387・332・335他 須恵蓋
24	高杯	15.2	8.8	15.2	BGH	優	明赤褐	60%	No.237・299 内外面赤彩
25	高杯	(13.5)		(13.5)	BGH	優	にぶい赤褐	杯部 10%	No.41 内外面赤彩
26	高杯	16.9		16.9	BGH	優	にぶい赤褐	杯部 30%	No.10・112・213他 内外面赤彩
27	高杯	(14.9)		(14.9)	BC	優	明赤褐	杯部 15%	No.36・58 内外面赤彩
28	高杯	(14.7)		(14.7)	BGH	優	明赤褐	杯部 30%	No.362・22 内外面赤彩
29	高杯	(14.9)		(14.9)	AH	普	褐	杯部 20%	No.363・366
30	高杯				ABF	優	にぶい赤褐	図示部 80%	No.225・308・381 外面赤彩
31	高杯				BG	優	明赤褐	脚部 20%	No.57・97・202他 外面赤彩
32	高杯				B	優	橙	脚部 15%	No.250 外面赤彩
33	高杯				B	優	にぶい赤褐	脚部 15%	No.65 外面赤彩
34	高杯				AG	劣	橙	脚部 15%	No.173
35	杯	(12.0)		(12.0)	ABEF	普	赤灰	20%	No.55・263
36	鉢	(10.7)		(12.6)	H	劣	にぶい赤褐	口縁部 30%	No.155・330
37	鉢	(13.9)	6.3	(13.9)	ABCF	普	褐	15%	No.76・258
38	鉢	(14.1)		(14.1)	AH	劣	明赤	20%	No.291・157
39	鉢	(9.2)	7.1	(11.0)	ABH	普	灰褐	60%	No.82・262・303他
40	杯?				BCH	劣	にぶい橙	50%	No.51・63・81
41	柑?				BF	優	にぶい橙	図示部 60%	No.75
42	甕	(17.4)		(21.0)	ABCFH	普	にぶい赤褐	図示部 50%	No.115・123・126他
43	甕	(22.9)			ABEFH	優	にぶい橙	頸部 25%	No.231
44	甕?				ABEF	優	暗褐	底部 50%	No.171 底部木葉痕
45	甕	(18.0)			AEG	普	にぶい褐	口縁部 15%	No.14
46	甕	(16.0)			ABEF	優	にぶい赤褐	口縁部 20%	No.256・306



第104图 第12号住居跡(1)

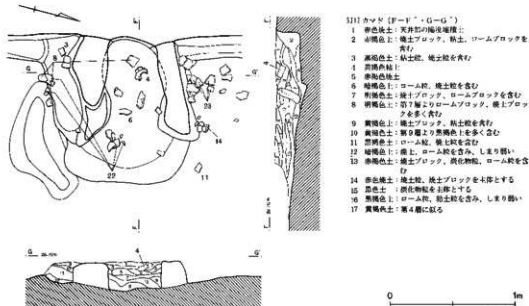
第12号住居跡(第104~106図 遺物第107・108図)

位置は、N10・N11グリッドである。南東に第13号住居跡、東に第14号住居跡が近接する。

周壁平面形は、奥行5.3m、幅5.1mのほぼ正方形である。床面積は29.0㎡である。カマドは西壁や南寄りに設置されていた。中心軸方向はN-102°-Wである。支柱穴はP₁~P₃、カマドの脇にあたる南西隅のP₃は貯蔵穴である。

周壁は、最高0.40mである。全周にわたり壁溝が存在した。支柱穴P₁~P₃は、深さ0.25~0.7mで、いずれも柱痕が確認された。柱間距離は、奥行2.7m、幅2.3~2.5mである。またP₁の北半をとりまくように、床面に盛り上がりが見られた。貯蔵穴P₃は、平面が1.15×1.0mの方形で、深さ0.4mである。カマドは両袖部が遺存していた。燃焼部はややくぼんでおり、南側面に溝状のくぼみが認められた。カマド前面の床面上には、焼上の堆積が認められた。

出土遺物は比較的多く、分布は柱穴列P₁~P₃より南に偏る傾向が認められる。7は破砕されて



512 (A-A'・B-B')

- 1 暗茶褐色土：径1cm以下のローム粒、焼土粒、炭化物粒をわずかに含む。しまっている
- 2 黄褐色土：径3~4mmのローム粒、焼土粒、炭化物粒をわずかに含む。しまっている
- 3 黒褐色土：径2mmより炭化物粒を多く含む。しまっている
- 4 暗黄褐色土：径5mm~1cmのロームブロック、炭化物ブロック、焼土粒を多く含む。粘性強く、しまっている
- 5 赤褐色土：焼土、炭化物ブロック、炭化物粒を含む。しまり弱い

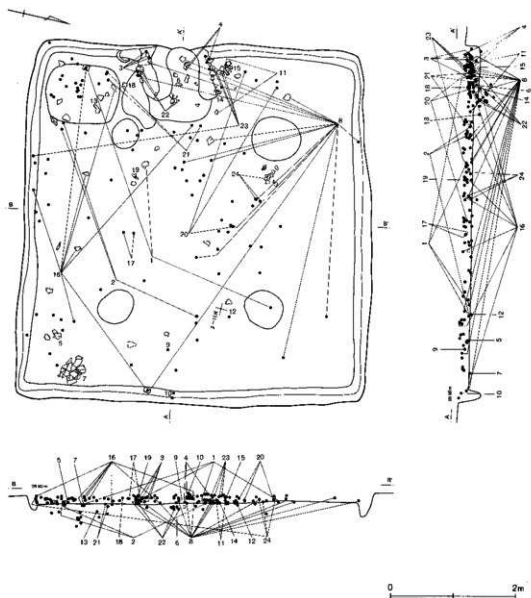
513 (C-C'・D-D')

- 1 灰褐色土：焼土粒、炭土粒、炭化物粒を含む
- 2 暗褐色土：ロームブロック、焼土粒、炭化物粒を含む。しまっている
- 3 黄褐色土：ロームブロック、ローム粒を多く含む。焼土粒、炭化物粒を含む
- 4 暗褐色土：ロームブロック、ローム粒、焼土、炭化物粒を含む。しまり弱い

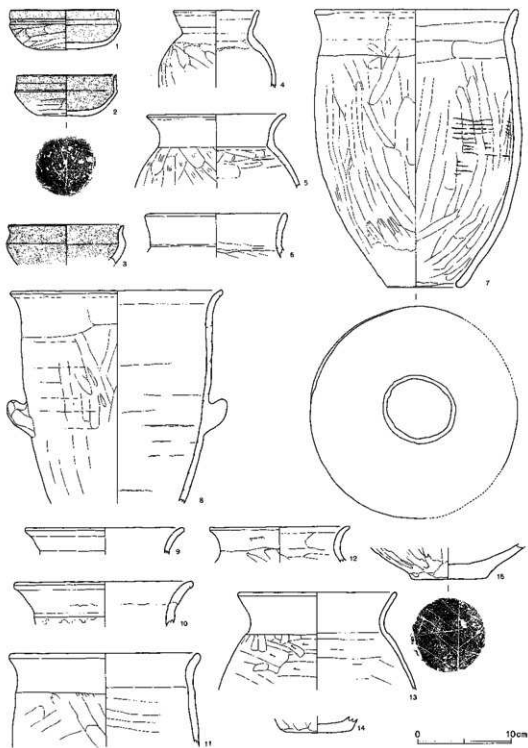
511 (F-F'・G-G')

- 1 赤色焼土：天井部の焼土堆積土
- 2 赤褐色土：焼土ブロック、焼土、ロームブロックを含む
- 3 黄褐色土：焼土粒、焼土粒を含む
- 4 黄褐色土
- 5 赤褐色土
- 6 暗褐色土：ローム粒、焼土粒を含む
- 7 黄褐色土：焼土ブロック、ロームブロックを含む
- 8 黄褐色土：径7mmよりロームブロック、焼土ブロックを多く含む
- 9 黄褐色土：焼土ブロック、焼土粒を含む
- 10 黄褐色土：径7mmより黄褐色土を多く含む
- 11 赤褐色土：ローム粒、焼土粒を含む
- 12 暗褐色土：焼土、ローム粒を含む。しまり弱い
- 13 赤褐色土：焼土ブロック、炭化物粒、ローム粒を含む
- 14 赤色焼土：焼土粒、焼土ブロックを主体とする
- 15 赤褐色土：炭化物粒を主体とする
- 16 黄褐色土：ローム粒、焼土粒を含む。しまり弱い
- 17 黄褐色土：第4層に似る

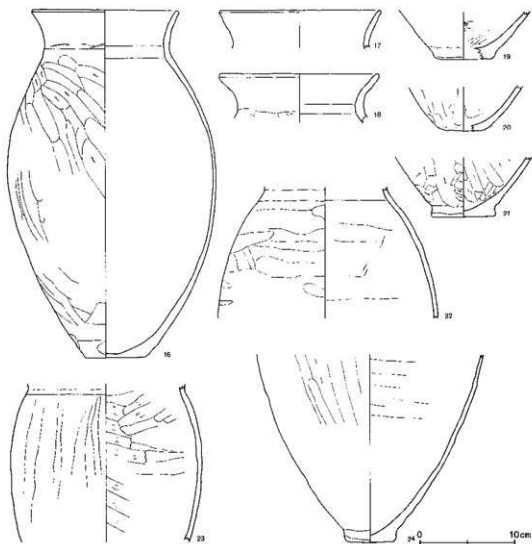
第105図 第12号住居跡(2)・同カマド



第106图 第12号住居跡遺物出土状況



第107图 第12号住居跡出土遺物(1)



第108図 第12号住居跡出土遺物(2)

第28表 第12号住居跡土器観察表(1)

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
1	杯	(11.5)	4.4	11.8	BG	優	明赤褐	60%	No.17・24・83他 赤彩
2	杯	(10.5)	4.4	10.9	ABGH	優	橙	30%	%55-56-94 木炭灰内外面赤彩
3	杯	(12.3)		(12.7)	AH	劣	橙	上半部 30%	No.71・72・175他 内外面赤彩
4	壺	9.2		(12.5)	ABCH	普	橙	40%	No.91・156・158(カマド)
5	壺	(14.9)			ABG	優	にぶい褐	頸部 25%	No.44
6	壺	(15.2)			ABGH	優	にぶい橙	口縁部 15%	No.160
7	瓶	22.2	29.4	22.2	ABEFGH	普	明赤褐	85%	No.49 孔径7.8
8	瓶	22.6		22.6	ABCH	普	橙	図示部 50%	No.4・12・157他
9	壺	(17.0)			ABEH	劣	にぶい黄橙	口縁部 15%	No.28
10	壺	(19.2)			ABCFH	優	にぶい赤褐	口縁部 15%	No.113
11	瓶?	(20.5)			ABCFH	普	にぶい橙	図示部 20%	No.154・155

第20表 第12号住居跡土器観察表(2)

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	構成	色調	残存	出土番号・その他
12	甕	(14.9)			ABEG	普	灰褐	口縁部 25%	№19貯蔵穴
13	甕	17.0			ABCFEH	普	黒褐	頸部 20%	№132貯蔵穴
14	甕?				AB	普	にぶい赤褐	底部 50%	№152
15	壺?				ABFH	優	灰褐	底部 60%	№90 底部木葉痕
16	甕	15.6	36.6	(22.0)	ABCDFGH	普	褐	40%	№88・89・67他
17	甕	(17.1)			BCGF	普	にぶい黄褐	口縁部 15%	№118・35
18	甕	(17.0)			ABCFH	普	にぶい褐	口縁部 15%	№73
19	甕				AEH	普	にぶい橙	図示部 50%	№85
20	甕				BEGH	普	灰褐	底部 60%	№3・110・119他 スス赤化
21	甕				BGF	優	灰黄褐	胴下位 50%	№95・96・100
22	甕			(23.2)	ABEGH	普	明褐	胴部 30%	№164・167・174他
23	甕			(20.3)	ABH	普	にぶい橙	胴部 30%	№52・138・139他
24	甕				ABCDEF	普	明赤褐	下半部 20%	№9・11・12 下半赤化

はいたが南東隅床面上にまとまった状態で出土した。その他のものは、破片となって散乱した状態だった。1・2は須恵器模倣杯である。ともに口縁部にふくらみもち、2は肩部がわずかに外反する。また2の底部には木葉痕が残されている。3も杯だろう。器壁は厚く、胴部に稜をもち、口縁部が外反する形態は、遺跡内では類例が少ない。4は壺である。7・8は瓶である。7は胴部がふくらみもち、頸部がわずかにくびれる曲線的な形態である。胴部内面は雑なマガキ仕上げだが、中位にハケメに似た、粗い条痕が残されている。一方、8は胴部から口縁部にかけてほとんどくびれずに開く直線的な形態であり、胴部中位に把手がつく。8は7と対照的に、覆土下層の広範囲にかけて散乱していた。5・6、9・10・12・13、16~24は甕である。5は頸部内面に鋭い稜をもつ。11は頸部がほとんどくびれず、瓶あるいは鉢などの可能性もあるだろう。16は細身で長胴である。頸部内面に稜をもつ。22・24なども、細身で頸部がくびれる特徴がうかがえ、いずれも器壁が薄く仕上げられた、精巧なつくりである。21・24は底部が突出する。15は壺だろう。やはり底部のみだが、大きく開き、底面に木葉痕をもつ。

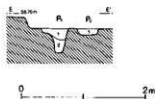
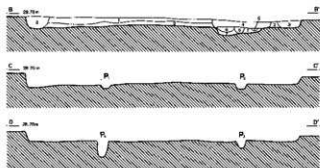
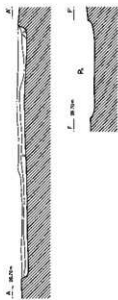
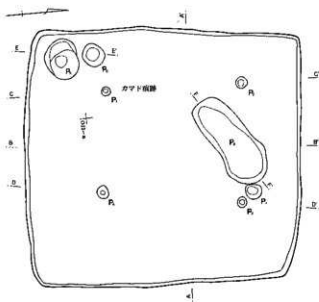
これらの遺物は、古墳時代後期に属するものである。

第13号住居跡（第109・110図 遺物第111図）

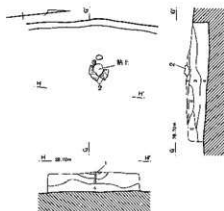
位置は、N11・N12・O11・O12グリッドである。北西に第12号住居跡、北東に第14・15・16号住居跡が近接する。

周壁平面形は、奥行4.0m、幅4.4mの方形である。床面積は16.8㎡である。カマドの存在は明瞭でないが、西壁寄りの覆土中に、焼土と粘土塊がまとまっていたことから、西壁に想定しておきたい。中心軸方向はN-83°-Wである。支柱穴はP₁~P₄、南西隅のP₁は、位置からして貯蔵穴の可能性はあるが、規模は小さく、むしろ形状は柱穴に近い。P₂は性格不明だが、覆土断面には上層から掘りこまれた可能性も認められる。

周壁は、最高0.2mである。支柱穴P₁~P₄は、P₁が深さ0.25mであるほかは、いずれも0.1m未満と浅く、柱痕は確認されなかった。柱間距離は、奥行1.7~1.9m・幅2.2~2.5mである。P₂は0.65



- 図1 (A-A'・B-B')
- 1 黒褐色砂質土：焼土、炭化物粒をわずかに含み、しまり強い
 - 2 暗褐色砂質土：第1層より暗褐色土を含み、しまり強い
 - 3 黒褐色土：焼土粒、ローム粒をわずかに含む
 - 4 暗褐色土：焼土ブロック、ロームブロックを含む
 - 5 赤褐色土：第1層に密着
 - 6 灰褐色土：焼土を含む
 - 7 黄褐色土：ロームを主体とする

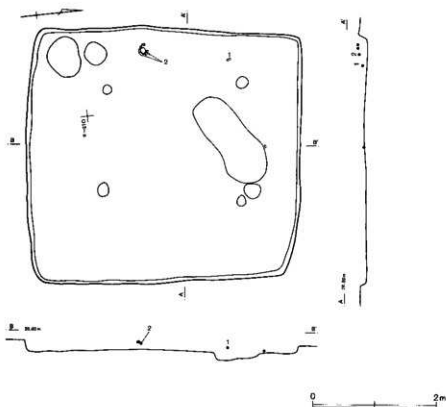


- 図2 (K-K')
- 1 暗褐色土：厚5mm-1cmの暗褐色土ブロックをわずかに含み、しまっている
 - 2 暗褐色土：厚5mm-1cmのロームブロックを多く、焼土粒をわずかに含み、しまっている

- 図3 カマド痕跡 (G-G'・H-H')
- 1 赤褐色土：焼土、炭化物粒を多く含む
 - 2 赤褐色土
 - 3 暗褐色土：炭化物粒を含み、しまり強い
 - 4 暗褐色土：焼土を含む
 - 5 黒褐色土：焼土ブロック、炭化物粒を含む



第106図 第13号住居跡・同カマド痕跡



第110図 第13号住居跡遺物出土状況

×0.5mの楕円形で、浅い西半は深さ0.1m、深い東半は0.4mである。

出土遺物は、ごくわずかである。西半に偏って出土した。1は碗の上半部である。口縁部が内湾して立ち上がる。2は高杯の杯下半で、焼土中から出土した。底部外面は稜が強調されている。

これらの遺物は、古墳時代後期に属するものである。



第111図 第13号住居跡出土遺物

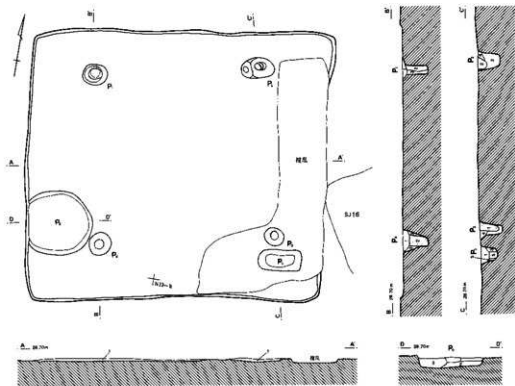
第30表 第13号住居跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
1	碗	(12.0)		(12.7)	G		青にぶい赤褐	20%	No1
2	高杯				B C G		優橙	杯下半 60%	カマド 内外面赤彩

第14号住居跡（第112図）

位置は、N12グリッドである。東壁で第16号住居跡と重複した可能性があるが、攪乱されており状況は不明である。周壁平面形は4.8×4.1mの長方形で、床面積は20.1㎡と推定される。主柱穴はP₁～P₄、南東隅のP₅は貯蔵穴か、覆土の堆積状況からみて柱穴の可能性もある。南西隅付近のP₆も、何等かの屋内施設と推定される。カマドは認められなかったが、破壊された東壁に仮定すると、中心軸方向はN-80°-Eである。周壁は、最高0.05mである。主柱穴は、深さ0.5mである。いずれも柱痕が確認された。柱間距離は、東西・南北とも2.8mである。P₅は0.7×0.4mの隅丸長方形で、深さ0.3m、P₆は直径1mのほぼ円形で、深さ0.2mである。

出土遺物は土器片数点のみで、帰属時期は不明である。



S11 (A-A')

- 1 褐色土：ローム粒、炭化物粒、焼土粒をわずかに含み、しまり強い

S12 (B-B'・C-C')

- 1 暗褐色土：ロームブロック、炭化物粒、焼土粒を含む
- 2 灰褐色土：粘土粒、焼土粒、炭化物粒を含む、柱状構造
- 3 暗褐色土：ローム粒、ロームブロックを含む、しまっている
- 4 暗褐色土：ロームブロックを含む、しまっている
- 5 暗褐色土：粘土粒、焼土粒を含む

S13 (D-D')

- 1 褐色土：ローム粒を含む、しまり強い
- 2 褐色土：第1層より褐色土を多く含む
- 3 暗褐色土：ローム粒をわずかに含み、しまり強い

0 2m

第112図 第14号住居跡

第15号住居跡 (第113~115図 遺物第116図)

位置は、N12・N13グリッドである。南西隅周辺は第16号住居跡と重複し、その覆土上に床面がのることから、第16号住居跡に対し後出することが確認される。

周壁平面形は、奥行3.7m、幅3.6mのほぼ正方形で、床面積は12.6㎡である。カマドは西壁ほぼ中央に設置されており、中心軸方向はN-97°-Wである。支柱穴はP₁~P₄、南東隅に位置するP₄は貯蔵穴である。カマドの脇にあたる北西隅のP₁もその可能性があるが、覆土がP₁に切られてお

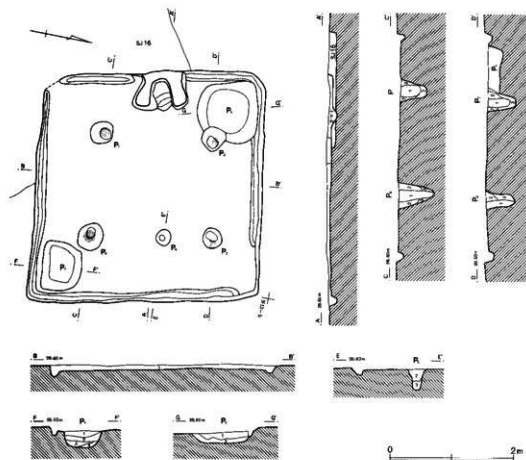


図13 (A-A'・B-B')

- 1 黒褐色土：厚5mm~1cmのロームブロックを多く、炭土粒、炭化物粒をわずかに含み、しまっている

図14 (C-C'・D-D'・E-E')

- 1 暗灰褐色土：灰褐色粘土ブロックを多く、砂質の黄褐色土をわずかに含み、しまり強い
- 2 暗茶褐色土：黄褐色土をわずかに含み、しまっている
- 3 黄褐色土：暗茶褐色土をわずかに含み、しまっている

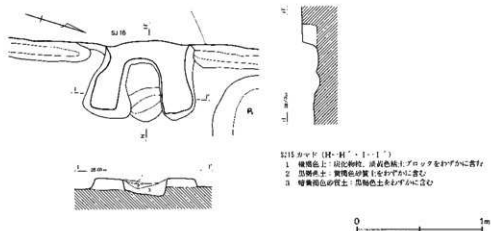
図15 (F-F')

- 1 暗茶褐色土：厚1~2mmのローム粒、炭化物粒をわずかに含み、しまっている
- 2 黒褐色土：厚1mm以下のローム粒、炭化物粒をわずかに含み、しまっている
- 3 暗黄褐色砂質土：厚5mm~1cmの黄褐色土ブロックをわずかに含み、しまっている
- 4 黄褐色砂質土：黒褐色土をわずかに含み、しまっている

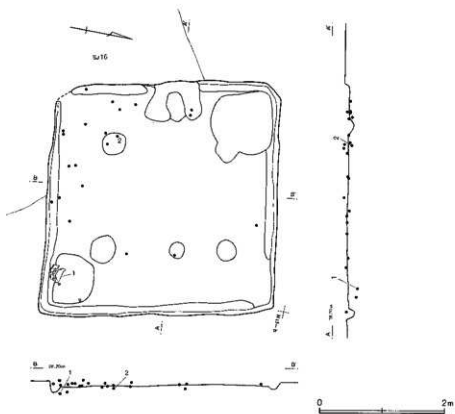
図16 (G-G')

- 1 暗茶褐色砂質土：黄褐色土粒を多く、炭化物粒をわずかに含み、しまっている
- 2 暗黄褐色土：厚1~2cmの黄褐色土ブロックを多く含み、しまっている

第113図 第15号住居跡



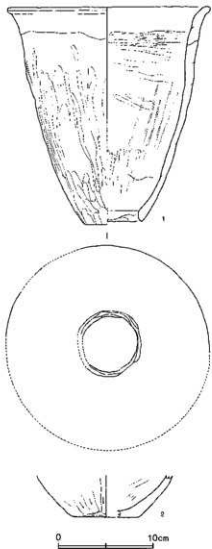
第114図 第15号住居跡カマド



第115図 第15号住居跡遺物出土状況

第31表 第15号住居跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	構成	色調	残存	出土番号・その他
1	甌	21.4	23.0	21.4	ABCEFG	優	にぶい赤褐	70%	No.22 孔径6.6
2	甌				ABFGH	優	明赤褐	底部 30%	No.5



第116図 第15号住居跡出土遺物

り、床下遺構とも考えられる。

周壁は、最高0.2mである。北東・南西隅を除き壁溝が存在する。支柱穴 $P_1 \sim P_4$ は、深さ0.4~0.56mで、いずれも柱痕が確認された。柱間距離は、奥行1.7m、幅1.9~2.0mである。貯蔵穴 P_5 は、0.8×0.6mの隅丸方形で、深さ0.25mである。カマドは両袖が遺存し、燃焼部奥壁は屋内に突出して構築されていた。

出土遺物は比較的少なく、1の甌が貯蔵穴 P_5 に落ち込みかけた状態で出土した。

これらの遺物は、古墳時代後期に属するものである。

第16号住居跡 (第117~119図 遺物第120図)

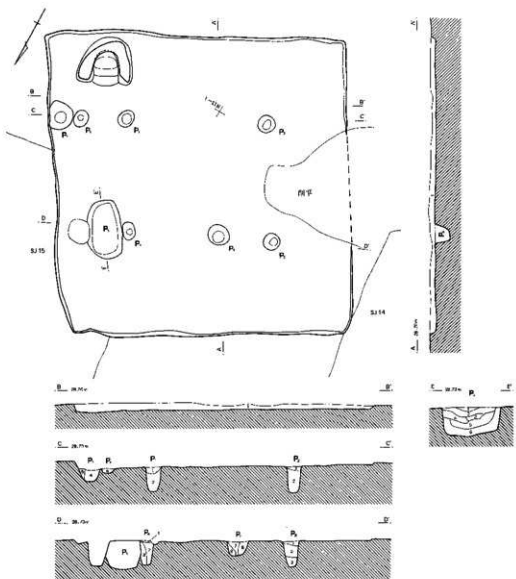
位置は、N12・N13グリッドである。北隅周辺は第15号住居跡と重複し、覆上が切られていたが、床面は遺存していた。すなわち第15号住居跡に先行することが確認された。南西壁中央部が削平されていた。西隅は第14号住居跡に接するが、捜乱のため重複関係は不明である。

周壁平面形は、奥行き4.7m、幅4.7mの正方形である。床面積は21.4㎡である。カマドは、南壁東隅付近に、壁面から独立して設置されていた。中心軸方向はN-148°-Eである。支柱穴は $P_1 \sim P_4$ 、 P_5 は貯蔵穴の可能性があるが、支柱穴 P_5 を切っている。

周壁は、最高0.1mである。支柱穴 $P_1 \sim P_4$ は深さ0.4mで、柱間距離は、奥行1.9m、幅2.3mである。貯蔵穴 P_5 は0.9×0.6mの隅丸長方形で、深さ0.5mである。カマドは周壁から独立し、両袖と奥壁が馬蹄形に遺存していた。燃焼部は、床面から深さ0.5m掘りくぼめられていたが、燃焼面はより上層だった可能性もある。

出土遺物は少なく、断片的である。1は須恵器模倣杯の底部、2は高杯の脚部である。

これらの遺物は、古墳時代後期に属するものだろう。



SJ11 (A-A'・B-B')

- 1 黄褐色砂質土：黒褐色土をわずかに含み、しまっている

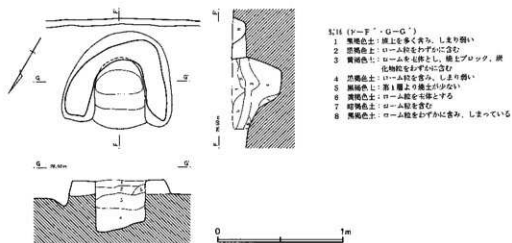
SJ11 (C-C'・D-D')

- 1 暗褐色土：砂粒、ローム粒を含む
- 2 暗褐色土：ローム粒、炭化物粒、焼土粒を含む
- 3 暗褐色土：ローム粒、ロームブロックを含む
- 4 黒褐色土：炭化物粒、焼土粒を多く含む
- 5 暗褐色土：ローム粒、炭化物粒、焼土粒を含む
- 6 暗褐色土：ローム粒を含む、しまり強い
- 7 褐色土：ローム粒を含む、しまり強い
- 8 黄褐色土：ローム粒、砂粒を含む

SJ16 (E-E')

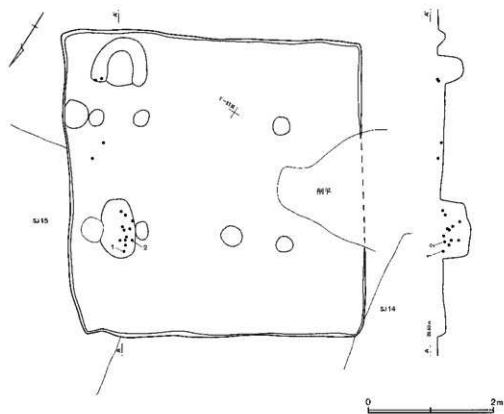
- 1 黒褐色土：焼土ブロック、炭化物ブロック、焼土ブロックを含む、しまり強い
- 2 黄赤褐色土：ローム粒、焼土粒、炭化物粒を多く含む、しまっている
- 3 黒褐色土：焼土粒、炭化物粒、ローム粒を含む、しまり強い
- 4 暗褐色土：炭粒、炭化物粒、ローム粒を含む、しまり強い
- 5 暗褐色土：炭化物粒、焼土粒を含む
- 6 黄褐色土：ローム粒を含む、しまり強い

第117図 第16号住居跡



- §16 (F-P・G-G)
- 1 黄褐色土：灰土を多く含む。しまり強い
 - 2 黄褐色土：ローム殻をわずかに含む
 - 3 黄褐色土：ロームを主体とし、焼土ブロック、炭化物殻をわずかに含む
 - 4 黄褐色土：ローム殻を多く含む。しまり強い
 - 5 黄褐色土：若くはより焼土が少ない
 - 6 黄褐色土：ローム殻を主体とする
 - 7 黄褐色土：ローム殻を多く含む
 - 8 黄褐色土：ローム殻をわずかに含む。しまっている

第118図 第16号住居跡カマド



第119図 第16号住居跡遺物出土状況



第120図 第16号住居跡出土遺物

第32表 第16号住居跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
1	杯				ABDE	劣	明赤褐	底部 20%	No1
2	高杯				A E	劣	橙	脚部部 25%	No9

第17号住居跡 (第121・122・124図 遺物第123図)

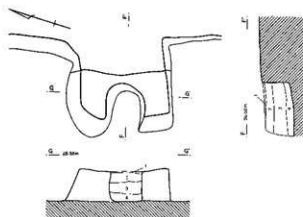
位置は、M13・M14・N13・N14グリッドである。第15・16号住居跡の東にあたる。

周壁平面形は、奥行4.5m、幅4.1mの、北辺がやや長いびつな方形である。床面積は18.1㎡である。カマドは東壁南寄りに設置されている。中心軸方向はN-73°-Eである。主柱穴は、配置からは確定できない。北壁両隅のP₂とP₉などは、対の関連をもつようにみえる。また、P₂・P₈・P₉は、遺構平面の中心軸線上に並ぶのが注目されるが、土層断面からすると、遺構覆土上層からの掘り込みである可能性が高い。貯蔵穴と断定できるものはない。

周壁は、0.1~0.25mである。壁溝は存在しない。

カマドは、両袖から裏壁ぐるりが粘土で構築されており、燃焼部底面は床面と同じ高さである。特徴的なのは、周壁のカマド設置部分が、屋内にむけて突出している点で、棚田遺跡においてはこの1例に限られる。

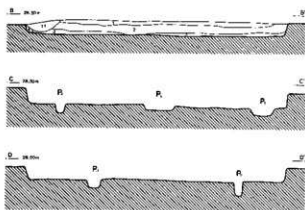
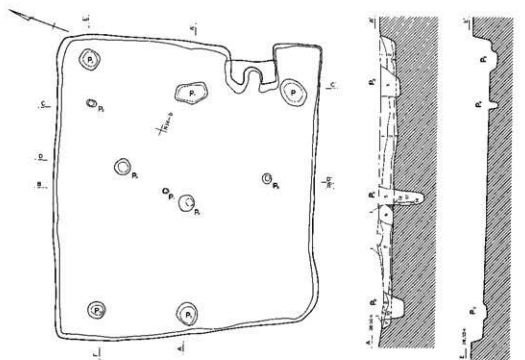
出土遺物は、土器片8点のみで、いずれも特徴に乏しい。1は、平底の底部である。甕とみられる。これらの帰属時期は確定しがたいが、古墳時代後期以降だろう。



S17 (F-F'・G-G')

- 1 黒褐色土：炭化物、焼土を主体とする
- 2 暗褐色土：粘土質、ローム粒を含む
- 3 暗褐色土：ソーム粒をわずかに含む、しまり粘性とも強い
- 4 黄褐色土：黒褐色土とローム

第121図 第17号住居跡カマド



215 (A-A'・B-B')

- 1 焼褐色土：ローム粒、焼土粒を含む
- 2 暗褐色土：砂粒、ローム粒を含む、こより多い
- 3 明褐色土：ローム粒を多く含む、粒性強く、しまっている
- 4 高褐色土：ローム粒を多く含む
- 5 黄褐色土：ロームブロック、焼土ブロックを多く、焼土粒、炭化植物をわずかに含む
- 6 赤褐色土：ローム粒、焼土粒を含む
- 7 暗褐色土：焼土粒、焼土粒を含む
- 8 高褐色土：ローム粒、ロームブロック、黄褐色ブロックを含む
- 9 明褐色土：黄褐色よりロームが少くない
- 10 暗褐色土：ローム粒、小石を含む
- 11 黒褐色土：ローム粒を含む
- 12 黄褐色土：ロームブロックを主体とする
- 13 黒色土：ローム粒を含む
- 14 黒褐色土：ローム粒、焼土粒を含む



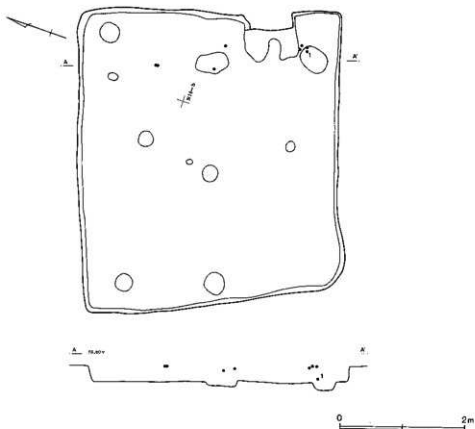
第122図 第17号住居跡



第123図 第17号住居跡出土遺物

第33表 第17号住居跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
I	甕?				ABFG	優	明赤褐	底部 25%	No8



第124図 第17号住居跡遺物出土状況

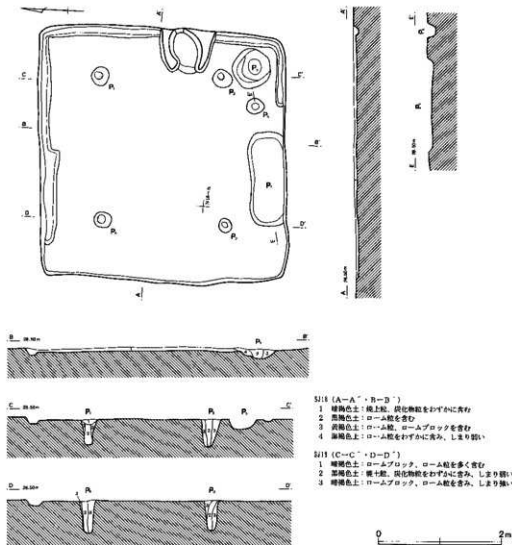
第18号住居跡（第125・126図）

位置は、M17・M18・N17・N18グリッドである。

調査区の南東にあたり、他の住居跡と離れて、孤立的な立地である。最も近い第21号住居跡は、北に約40m離れている。

周壁平面形は、奥行4.1m、幅3.9mのほぼ正方形である。床面積は15.3㎡である。カマドは東壁ほぼ中央に設置されていた。中心軸方向はN-87°-Eである。支柱穴はP₁～P₄、P₅は貯蔵穴である。ほかにP₅に近接してP₆、南壁に接して細長いP₇がある。

周壁は、高さ0.1～0.25mである。北壁から東壁、さらに南壁の一部にかけて壁溝が存在する。支柱穴P₁～P₄は、深さ0.4～0.5mで、いずれも柱痕が確認された。柱間距離は、奥行2.4m・幅2.0mである。貯蔵穴P₅は、直径1.2mの円形で、深さ0.55mである。カマド側の壁面の傾斜がややゆるく、中途に段がつく。底面は水平である。カマドは、両袖が遺存し、燃焼部は平面が円形に近い。またその底面は、床面から深さ0.3m掘り込まれていた。P₇は、平面が1.05×0.55mの隅丸長方形で、深さは壁溝並みの0.1mと浅い。対面する北壁西半の壁溝も内側に広くなり、また西壁の手前で途切れる点も共通しており、両者の対応の有無が注意される。



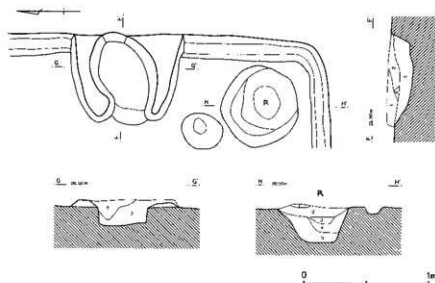
第125図 第18号住居跡

出土物はきわめて少なく、土器片8点のみである。いずれも特徴に乏しく、帰属時期は確定できない。古墳時代後期以降である。

第19号住居跡 (第127・128図 遺物第129図)

位置は、J15グリッドである。東に畑跡とみられる畝状遺構をはさんで、第20・21号住居跡が近接する。

周壁平面形は、奥行3.4m、幅2.8mの長方形で、床面積は9.0㎡である。カマドは南西壁に設置されていた。中心軸方向はN-140°-Wである。主柱穴はP₁~P₄、カマドに接して南隅に位置するP₅は貯蔵穴だろう。他にP₆・P₇があるが、これらはP₁と直線上に並ぶのが注意される。柱穴である可能性がある。



SII カマド (F-F'・G-G')

- 1 茶褐色土：焼土、ローム殻、ロームブロックをわずかに含む
- 2 茶褐色土：ローム殻、ロームブロックを含む
- 3 暗褐色土：ロームブロックを多く、ローム殻、黒色土をわずかに含む
- 4 ローム再堆積土

SII (H-H')

- 1 赤褐色土ブロック
- 2 暗褐色土：焼土と炭化物粒をわずかに、ローム殻を均等に含む、しまり強い
- 3 暗褐色土：焼土、炭化物粒を食み、しまっている
- 4 茶褐色土：ロームブロックを食み、しまっている
- 5 暗褐色土：砂粒、ローム殻を食み、しまっている

第126図 第18号住居跡カマド

周壁は、最高0.2mである。支柱穴P₁~P₄は、深さ0.15~0.2mである。柱痕は確認されなかったが、柱間距離は、奥行・幅ともおよそ1.3mだろう。貯蔵穴P₁は、直径0.75mの円形で、深さ0.15mである。カマドは両袖部が遺存していた。燃焼部は床面を0.2m掘り下げ、4層土で再び床面と同じ高さに埋めもどして、その上面を燃焼面にしていたとみられる。

出土遺物は、カマド周辺から遺存状態の良い土器が出土した。4の高杯は、カマド燃焼面に倒立していた。支脚として使用されていたとみられる。さらに、その前部、カマド焚口に乗り上げるように、7が転倒していた。貯蔵穴P₁上面からは8、カマドの脇、南西壁際の床面上では1・5・6がかたまって出土した。また、支柱穴P₂近くの床面上から9の石製紡錘車が出土した。1・3は須恵器模倣杯、2は比企・入間型杯である。4は高杯である。脚部はふくらみを帯び、柱部から裾部へはゆるく屈曲してつながっている。5は甌である。胴部はややふくらみを帯び、上・中位の屈曲は小さく、下位がすばまる。頸部はわずかにくびれる。6・7は甕である。6は比較的細身で、最大径は胴部上位にある。頸部は直立し、口縁部は端部付近で大きく開く。7は最大径が胴部中位にあり、頸部はゆるくくびれる。器壁は胴部上位が薄く、口縁部で厚くなり、接合部である頸部内面に稜がつく。8は甕である。胴部の張りは強く、ソロバン玉状である。9は石製紡錘車である。直径4.2cm、厚さ1.7cm。滑石製である。

これらの遺物は、古墳時代後期に属するものである。

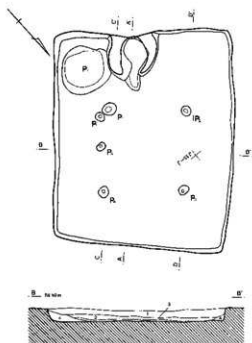


図11 (A-A'・B-B')

- 1 暗褐色土：厚1～2cmの灰色土ブロック、径1～3mmのローム粒、炭化物粒をわずかに含み、しまっている
- 2 黄灰色土：粘土粒、炭化物粒をわずかに含み、しまっている
- 3 黒色土：炭化物を主体とし、径1粒をわずかに含み、しまり強い
- 4 暗褐色土：径3～5mmのローム粒を多く含み、しまっている

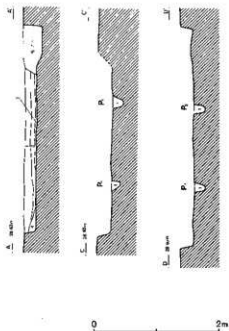


図12 (C-C'・D-D')

- 1 暗褐色土：ローム粒、粘土ブロック、炭土、炭化物粒をわずかに含み、しまり強い

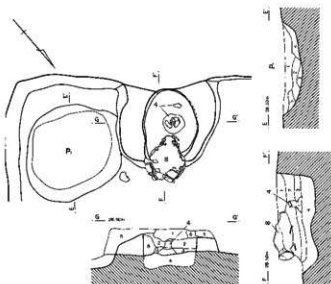


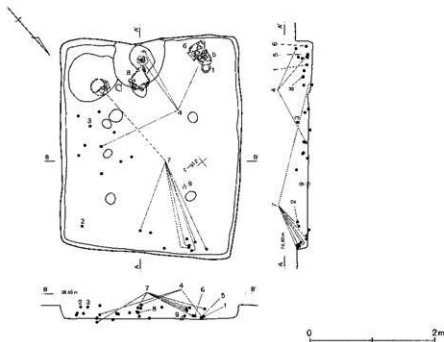
図13 (E-E')

- 1 暗褐色土：ローム粒、炭化物粒、炭土粒を含む
- 2 暗褐色土：粘土粒、炭化物粒、ローム粒を含み、しまり強い
- 3 黄褐色粘土：ローム粒を主体とし、しまっている
- 4 明褐色土：ローム粒を含み、しまり強い
- 5 黄褐色土：ロームを主体とし、黄褐色土ブロックをわずかに含む

図14 (F-F'・G-G')

- 1 暗褐色土：径2～5mmの粘土ブロック、ローム粒、炭化物粒を含み、しまり粘性とも強い
- 2 赤褐色土：粘土粒、粘土ブロックを主体とする
- 3 灰と炭化物：粘土粒を含む
- 4 暗褐色土：ローム粒を含む
- 5 暗褐色土：炭化物粒、粘土粒を均一に含む
- 6 灰褐色粘土

第127図 第19号住居跡・同カマド



第128図 第19号住居跡遺物出土状況

第34表 第19号住居跡土器観察表

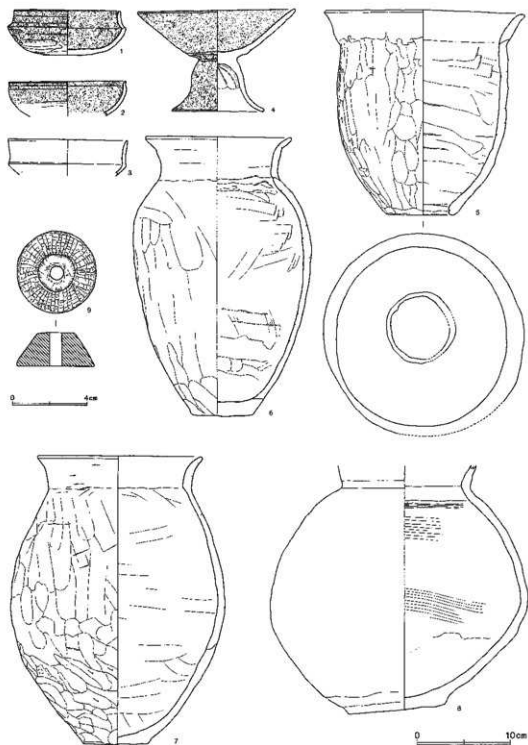
番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
1	杯	11.3	4.9	12.7	ABGH	優	にぶい橙	80%	No22 底部円盤,内外面赤彩
2	杯	(12.4)		(12.6)	BCG	普	橙	図示部 20%	No11 内外面赤彩
3	杯	(12.8)		(12.8)	GH	劣	橙	10%	No14
4	高杯	(16.9)	10.8	(16.9)	ABCG	普	橙	90%	No19・24・28(カマド) 内外面赤彩
5	瓶	21.4	21.6	21.4	ABCEFG	優	にぶい赤褐	90%	No24 孔径6.4
6	壺	15.6		18.8	ABCDFGH	普	にぶい赤褐	70%	No23 胴部スス
7	甕	(17.6)	30.4	(22.8)	ABCDFH	優	明赤褐	80%	No1・2・3他
8	壺			(27.4)	ABCGH	優	にぶい赤褐	80%	No26(カマド), J15グリッド

第20号住居跡 (第130～132図 遺物第133図)

位置は、J16グリッドである。東に第21号住居跡、西に畑跡とみられる畝状遺構をはさんで第19号住居跡が近接する。

周壁平面形は、奥行4.1m、幅2.9mの長方形で、床面積は11.6㎡である。カマドは西壁寄りに設置され、壁面から独立していた。中心軸方向はN-87°-Wである。支柱穴はP₁～P₄、南西隅のP₄は貯蔵穴である。

周壁は、最高0.2mである。北壁と南東隅周辺に壁溝が存在した。支柱穴P₁～P₄は、深さ0.1～0.2mである。柱痕は不明だが、柱間距離は、奥行1.7～1.8m、幅1.3～1.4mほどだろう。貯蔵穴P₄は0.6×0.5mの方形で、深さ0.2mである。カマドは、平面が馬蹄形で、床面を掘り込まずに構築さ

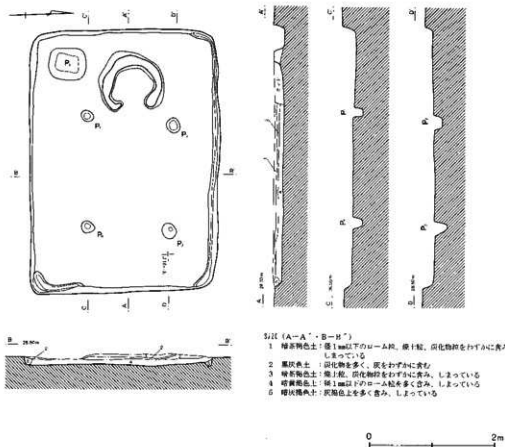


第129図 第19号住居跡出土遺物

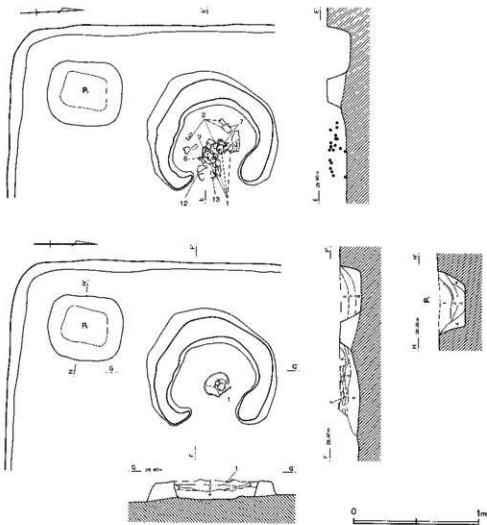
れている。燃焼部の高さも床面と同じである。

出土遺物は、覆土中から出土した土器片が主体であり、復元図示できたものも、1・11以外は破片となって散乱した状態で出土した。分布は、カマド周辺と西壁付近に分かれており、前者には同一個体として復元できた破片が多く含まれる。1は、一部の破片は散乱していたが、カマド覆土中に倒立した状態で出土した。支脚として使用されていた可能性がある。1～4は高杯である。脚部のみの4を除けばいずれも有縁高杯である。脚部は比較的長い。5～9は杯である。5は比企・入間型杯、8・9は須恵器模倣杯である。10・13・14は甕、11は小型甕である。10は頸部がゆるく屈曲し、内面に稜をもたない。11は2次的な被熱によって全体が赤化し、胴部下半表面が剥落している。

これらの遺物は、古墳時代後期に属するものである。



第130図 第20号住居跡



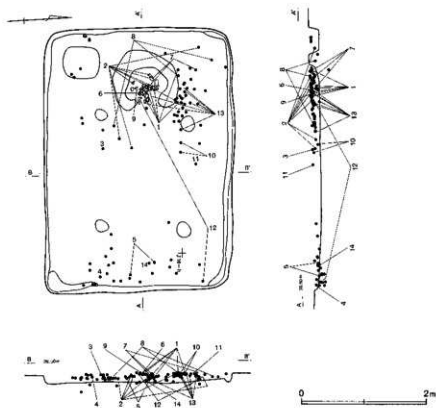
1312カマド (F-D・G-G')

- 1 淡黄褐色粘土：粘土粒をわずかに含む
- 2 灰と炭化物：焼土粒をわずかに含む
- 3 灰：焼土粒、炭化物粒をわずかに含む
- 4 茶褐色土：径5～10mmのロームブロックをわずかに含む
- 5 褐色粘土：炭化物粒をわずかに含む
- 6 淡黄褐色土：径1～3mmのローム粒を多く、炭化物粒をわずかに含む
- 7 灰褐色土：径3～10mmのロームブロックをわずかに含む
- 8 暗茶褐色土：径3～10mmのロームブロックをわずかに含む

1318 (H-H')

- 1 黄褐色土：炭化物粒、焼土粒を含有し、しり強い
- 2 灰褐色粘土
- 3 暗褐色土：ローム粒、炭化物粒を含む
- 4 黄褐色土：ローム粒、ロームを主体とし、粘性強くしまっている

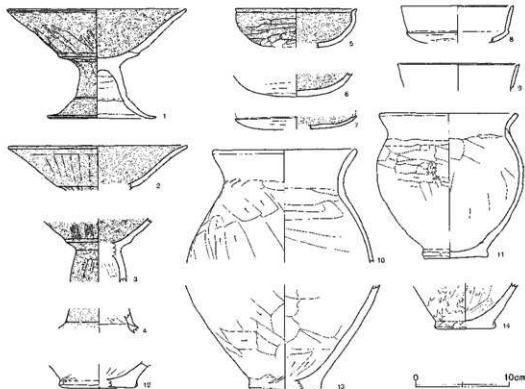
第131図 第20号住居跡カマド



第132図 第20号住居跡遺物出土状況

第35表 第20号住居跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
1	高杯	19.1	11.8	19.1	ABCD	優	明赤褐	90%	No.17・81他(カマド) 赤彩
2	高杯	(19.1)		(19.1)	ABGH	優	明赤褐	杯部 50%	No.46・47・83(カマド) 赤彩
3	高杯				ABG	普	明赤褐	図示部 40%	No.48 内外面赤彩
4	高杯				CG	優	明赤褐	脚柱部 25%	No.42 外面赤彩
5	杯	(13.0)			BG	優	にぶい赤褐	30%	No.61・63 内外面赤彩
6	杯				BCH	普	にぶい赤褐	底部 50%	No.90(カマド) 内面赤彩
7	杯				BED	優	にぶい赤褐	底部 25%	No.5・103・104(カマド) 赤彩
8	杯	(12.0)		(12.0)	BH	普	橙	図示部 25%	No.2・7・50
9	杯	(13.0)			ADG	普	橙	口縁部 15%	No.86(カマド)
10	壺	15.5			ABCD F H	普	明赤褐	頸部 100%	No.35・36
11	壺	14.8	15.6	15.6	ABCE F	普	暗赤褐	40%	No.57 外面被熱剝落
12	壺?				ABCF G	優	にぶい赤褐	底部 80%	No.88・96
13	壺				ABDFGH	普	褐	下半部 30%	No.11・15・24他
14	壺				ABC F G	優	にぶい褐	底部 30%	No.82 スス



第133図 第20号住居跡出土遺物

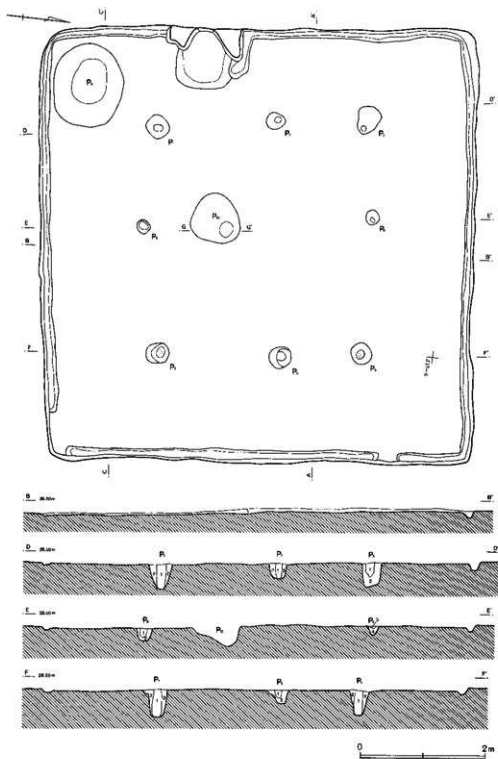
第21号住居跡（第134～136図 遺物第137図）

位置は、I17・J17グリッドである。西に第20号住居跡が近接する。

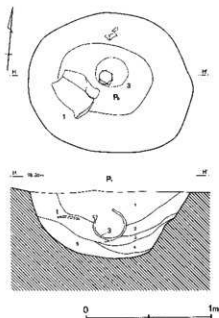
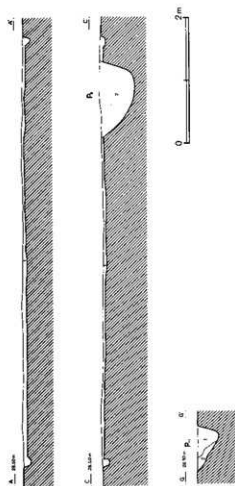
周壁平面形は6.8×6.8mの正方形で、床面積は46.1㎡である。棚田遺跡では最大の住居跡である。カマドは西壁中央に設置されていた。中心軸方向はN-98°-Wである。主柱穴はP₁～P₄、南西隅のP₅は貯蔵穴である。また、床面のほぼ中央、カマドの正面にあたる位置にP₆がある。

周壁は、最高0.1mと浅い。壁溝が、一部断続するもののほぼ全周しており、カマド北壁では袖部に沿って内側に入り込んでいた。主柱穴P₁～P₄は、各壁面に3基ずつ対応するように2×2間の配置をとっており、四隅にあたるP₁・P₂・P₃・P₄が深さ0.35～0.45mであるのに対し、その間のP₅・P₆・P₇・P₈は0.18～0.24mと浅く、平面形も小さめである。いずれも柱痕が確認されている。柱間距離は、四隅の柱穴間で、奥行3.6m・幅3.2mである。貯蔵穴P₅は、平面が1.3×1.1mの楕円形で、深さ0.5mである。カマドは、両袖部が辛うじて遺存しており、燃焼部は浅くくぼんでいた。

出土遺物は少ないが、遺存状態の比較的良いものも3点ある。土器のほか、北西隅床面上でベンガラがかたまって出土した。カマド付近に土器片が集中していたほか、貯蔵穴P₅覆土中から1・



第134图 第21号住居跡(I)



S21 (A-A'・B-B'・C-C')

- 1 暗褐色土：小石、ロームブロックを含む
- 2 黄褐色土：焼土、炭化物粒を含む

S21 (D-D'・E-E'・F-F')

- 1 灰褐色粘土：しまり粘土とも稱い、柱状腐土
- 2 暗褐色土：ローム粒、砂利を含み、しまっている
- 3 黄褐色土：砂利を主体とする
- 4 暗褐色土：砂利を主体とする

S21 (G-G')

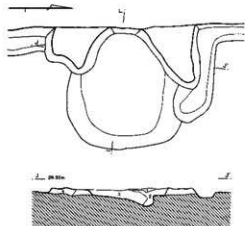
- 1 黄褐色土：小石を多く、ローム粒、焼土を含む
- 2 黄褐色土：ロームを主体とし、砂利を多く含む

S21 (H-H')

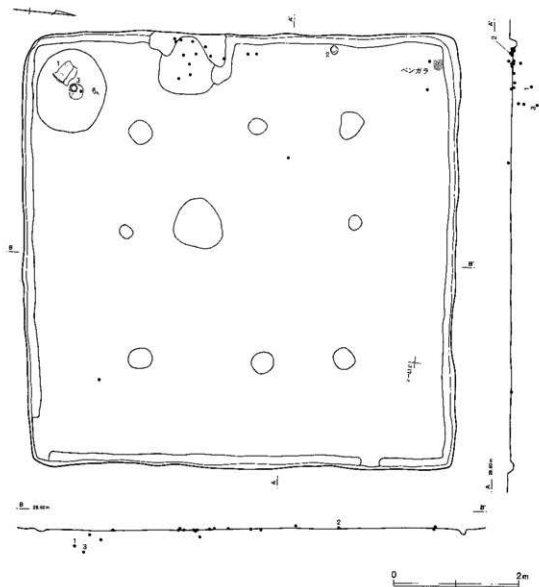
- 1 赤色土：小石、粘土、炭化物粒をわずかに含む
- 2 暗褐色土：小石、焼土、炭化物粒を含み、第1層よりしまっている
- 3 黄褐色土：ローム粒、ロームブロック、砂利を含む
- 4 砂利層
- 5 区別なし

S11 カマド (1-1'・2-2')

- 1 黄褐色ローム土：赤色粒をわずかに含む
- 2 暗褐色土：粒1～1.5cmの焼土粒、径3cmの炭化物を含む（下部に炭化粒が多い）
- 3 暗褐色土：径1～1.5cmの焼土粒、径2cmの炭化物を含む
- 4 暗褐色土：ローム粒を含む、カマド煉瓦層土
- 5 赤褐色土：焼土粒、焼土ブロックを主体とする
- 6 明褐色土：しまり粘り
- 7 赤褐色腐土
- 8 黄褐色土：焼土、ロームを含み、しまっている
- 9 区別なし



第135図 第21号住居跡(2)・同カマド

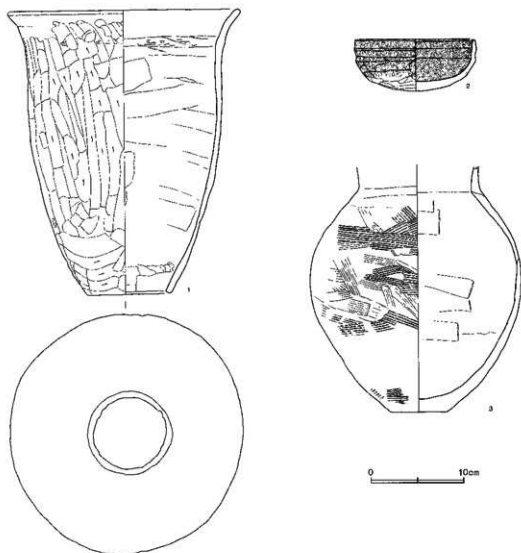


第136図 第21号住居跡遺物出土状況

3が、床面上の西壁際から2が出土した。

1は甕である。胴部の膨らみは小さく、頸部はほとんどくびれない。外面は底部付近がヨコケズリ、それ以上はタテケズリ仕上げである。胴部内面は底部付近をヨコケズリ、それ以上はヨコヘラナデ仕上げ。2は横楕杯である。口縁部外面の膨らみが顕著である。器壁も厚い。3は壺である。やや縦長の胴部から、頸部は直立気味に立ち上がる。接合部内面には稜がつく。胴部外面にヨコ・ナメハケメを残している。焼成は軟質である。

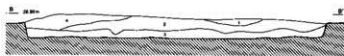
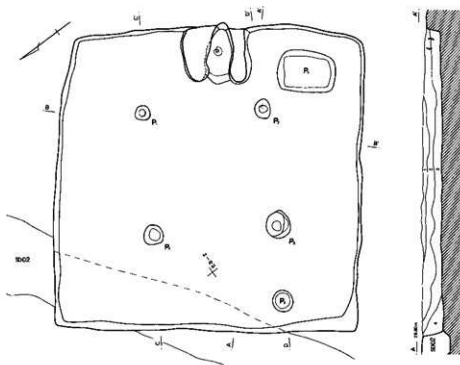
これらの遺物は、古墳時代後期に属するものである。



第137図 第21号住居跡出土遺物

第36表 第21号住居跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
1	甕	24.8	30.0	24.8	ABCFGH	優	にぶい橙	100%	No.21(貯蔵穴) 孔径7.2
2	杯	12.9	5.5	12.9	ABGH	優	橙	80%	No.13 内外面赤彩
3	壺			22.0	ABCGH	劣	橙	90%	No.22(貯蔵穴)



1111 (A-A'・B-B')

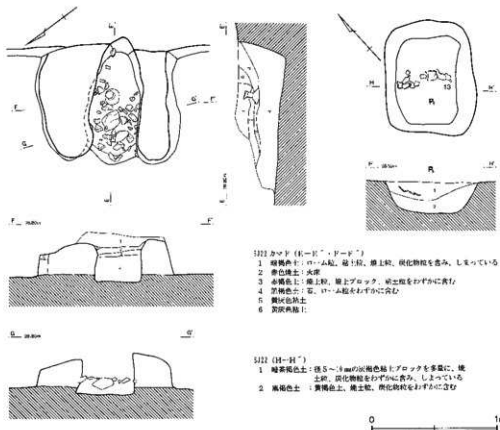
- 1 暗茶褐色土：径5～15mmのロームブロック、焼土粒、炭化物粒をわずかに含み、しまっている
- 2 暗灰褐色土：径3～5mmのローム粒をわずかに、焼土粒、炭化物粒を多く含み、しまっている
- 3 灰褐色土：暗茶褐色土、焼土粒、炭化物粒をわずかに含み、しまっている
- 4 暗褐色土：粘土ブロック、ローム粒、焼土粒、炭化物粒をわずかに含む

0 2m

1111 (C-C'・D-D')

- 1 暗茶褐色土：灰褐色粘土を多く、炭化物粒をわずかに含み、やわらかい
- 2 暗黄褐色土：径2～3mmのローム粒を多く、小礫を含み、しまっている

第138図 第22号住居跡



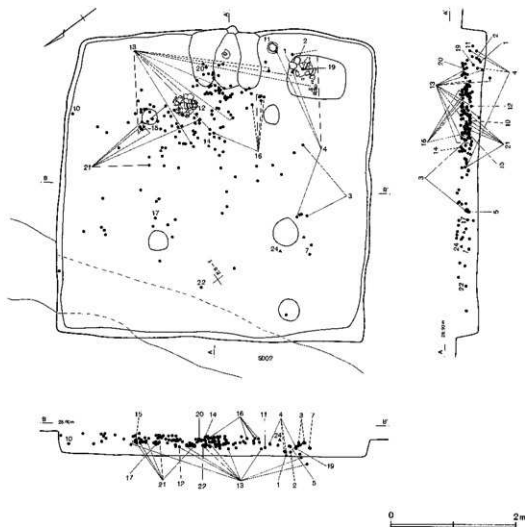
第139図 第22号住居跡カマド

第22号住居跡 (第138～140図 遺物第141・142図)

位置は、E 8 グリッドである。北西に第23号住居跡が近接する。北西壁から北隅周辺にかけて第2号溝と重複し、その覆土上に床面がのっている。すなわち第2号溝に対し後出することが確認される。

周壁平面形は奥行4.7m、幅4.9mのほぼ正方形で、床面積は22.4㎡である。南隅に位置するP₂は貯蔵穴と思われる。カマドは南東壁ほぼ中央に設置されていた。中心軸方向はN-52°-Wである。支柱穴はP₁～P₄、P₅は貯蔵穴である。それらの他に、南西壁際にあたるP₂・P₃の延長線上にP₆がある。

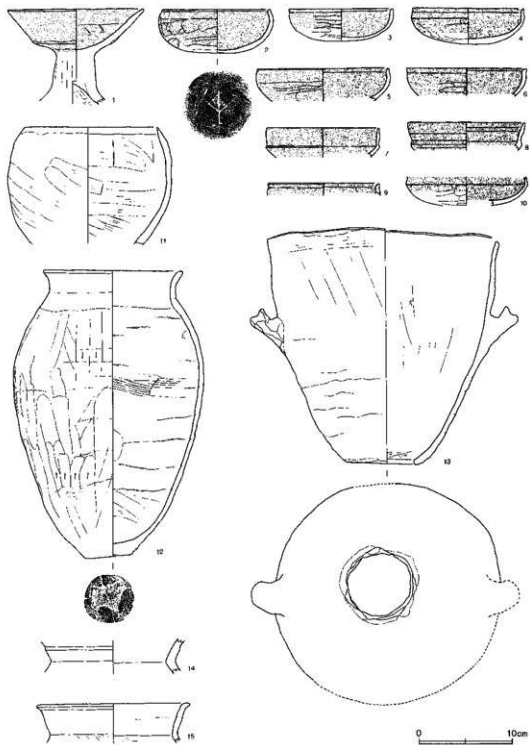
周壁は、最高0.4mである。支柱穴P₁～P₄は、深さ0.25～0.35mで、P₁・P₂で柱痕が確認された。柱間距離は、奥行約2m・幅2.0mである。貯蔵穴P₅は、平面形が0.9×0.7mの長方形で、深さ0.25mである。P₆は、位置からして、出入口との関連を示唆するが、深さは0.1mと浅い。カマドは、両袖部が遺存していた。燃焼部底面は、奥壁に向かってやや傾斜していた。燃焼部覆土最下層である4層の上部には礫が水平分布し、その上面には土製支脚が据付られていた。さらに2層が焼土層であることから、使用時の燃焼面は、2層から4層上面だったとみられる。



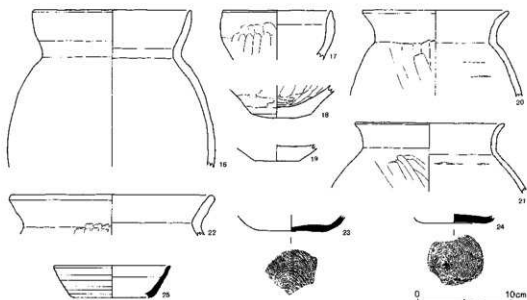
第140図 第22号住居跡遺物出土状況

出土遺物は比較的多く、覆土中の土器片が主体だが、個体としてのまとまりを保っていたものもある。分布図からは、覆土中層に集中していた傾向が認められる。上述の土製支脚は、脆かったために収納の際崩れてしまった。比較的遺存状態の良いものでは、1・2が貯蔵穴P₂の上面から、11がカマド脇、12がカマドの前方から出土し13はカマド周辺に散乱していた。いずれも床面からは離れていた。1は高杯である。杯部は開きが大きく浅めで、脚部は長く柱部が中実である。2～7は比企・入間型杯である。2の底部には木葉痕がある。8～10は須恵器模倣杯である。11は鉢あるいは無頸壺とするべきか。仕上げはやや粗雑である。12は甕である。胴部上半が張り頸部はくびれるが、内面に明瞭な稜はない。13は甌である。片側は欠けているが、両側面に把手がつくだろう。14・16は壺である。23～25は、時代の下る混入品である。

それら以外の遺物は、古墳時代後期に属するものである。



第141图 第22号住居跡出土遺物(1)



第142図 第22号住居跡出土遺物(2)

第37表 第22号住居跡土器観察表

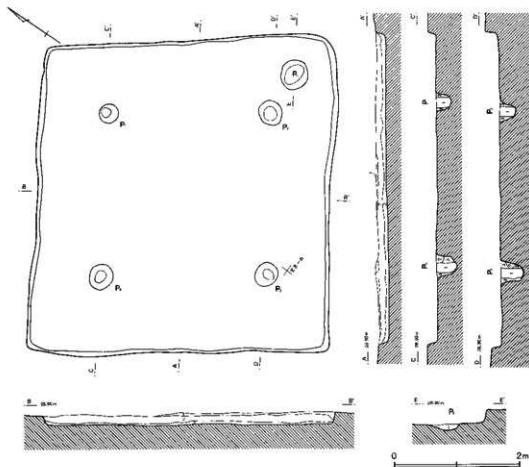
番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	肌感	色調	残存	出土番号・その他
1	高杯	14.5		14.5	ABCDEF	普	橙	90%	No140 内外面赤彩
2	杯	11.6	4.7	12.3	ABG	普	にぶい赤褐	95%	No139 底面本草灰内外面赤彩
3	杯	(11.2)	3.5	(11.2)	ABG	普	橙	20%	No60・74 内外面赤彩
4	杯	(11.8)	3.9	(12.1)	ABG	普	橙	70%	No153・63・117他 赤彩
5	杯	(14.1)		(14.4)	BG	優	橙	口縁部 30%	No63 内外面赤彩
6	杯	(12.8)		(12.8)	GH	優	橙	口縁部 15%	内外面赤彩
7	杯	(12.6)		(12.6)	ABG	優	明赤褐	口縁部 15%	No57 内外面赤彩
8	杯	(12.7)		(12.7)	BG	優	にぶい橙	口縁部 15%	内外面赤彩
9	杯	(11.9)			G	優	明赤褐	口縁部 15%	内外面赤彩
10	杯			13.0	AG	優	にぶい赤褐	15%	No16 内外面赤彩
11	鉢	14.2		(17.5)	ABG	優	褐	図示部 100%	No141 被熱赤化・剥落
12	甕	14.8	30.2	20.4	ABCEFH	普	褐	100%	No137 凹底
13	甕	24.4	25.0	24.4	ABGH	優	明赤褐	70%	No70・137・1他 孔径6.8
14	甕				ABDG	普	にぶい橙	頸部 15%	No162
15	甕	(16.3)			ABG	優	にぶい褐	口縁部 15%	No171
16	甕	(17.0)		(22.3)	ABGH	劣	にぶい橙	上半部 25%	No146・144・145他
17	椀	(11.8)		(12.2)	AG	普	にぶい橙	図示部 15%	No10
18	甕?				ABFG	普	にぶい橙	底部 50%	
19	甕?				AG	普	にぶい褐	底部 30%	No119(貯蔵穴)
20	甕	(15.6)			AFG	普	橙	図示部 15%	No110
21	甕	(16.0)			ABCFG	普	にぶい褐	口縁部 25%	No25・39・51他
22	甕	(22.0)			ABCFG	普	にぶい橙	口縁部 15%	No154
23	杯				ABF	優	褐灰	底部 60%	須恵器, 底部糸切痕
24	杯				ABFG	優	にぶい褐	底部 100%	No56 須恵器, 底部糸切痕
25	杯	(12.4)		(12.4)	FG	優	灰黄	図示部 15%	

第23号住居跡 (第143・144図 遺物第145図)

位置は、D7・D8・E7・E8グリッドである。南東に第22号住居跡が近接する。

周壁平面形は4.8×4.5mのほぼ正方形で、床面積は22.2㎡である。カマドは確認されなかったが、中心軸を東西儀位に想定すると、その方向はN-55°-Eである。東隅に位置するP₁は、浅いが、その位置からみて貯蔵穴の可能性はある。

周壁は、最高0.20mである。支柱穴P₁~P₄は、深さ0.23~0.36mで、いずれも柱痕が確認された。柱間距離は、東西2.5m、南北2.7mである。貯蔵穴P₁は、平面が0.5×0.45mの円形で、深さ0.2mである。



S22 (A-A'・B-B')

- 1 黒褐色土：粘土。炭化物を多く、16.5~19mmの灰褐色粘土ブロックをわずかに含み、しまっている
- 2 暗黒褐色土：16.5~19mmの灰褐色粘土ブロック、焼土粒、炭化物粒をわずかに含み、しまっている
- 3 暗黒褐色土：径2~3mmのローム粒、焼土粒をわずかに含み、しまっている

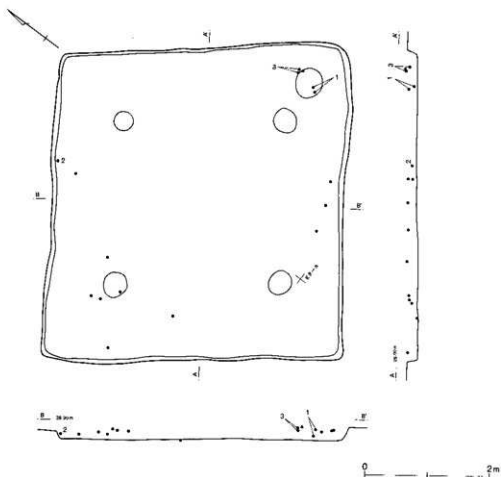
S23 (C-C'・D-D')

- 1 暗灰褐色土：焼土粒、炭化物粒を多量に含み、しまり粘性とも強い、柱痕粘土
- 2 黄褐色土：径5~15mmのロームブロックを主体とし、黒褐色土をわずかに含む、しまっている
- 3 黒褐色土：ローム粒を多く含み、しまっている

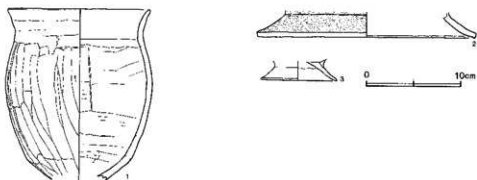
S25 (E-E')

- 1 暗黒褐色土：焼土粒、炭化物粒を多く含み、しまっている

第143図 第23号住居跡



第144図 第23号住居跡遺物出土状況



第145図 第23号住居跡出土遺物

第38表 第23号住居跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
1	小型壺	(15.2)		15.8	ABCEF	普	にぶい褐	40%	№10・11
2	高杯	(23.4)			ABGH	優	明赤褐	脚部部 15%	№14・16 外面赤彩
3	高杯				ABEFH	普	橙	脚部 100%	№12・15

出土遺物は少ない。1は小型甕である。2は高杯脚部だろう。大型で、外面に段をもち、やや裝飾的である。3はかなり低いが、やはり高杯の脚部だろう。

これらの遺物は、古墳時代後期に属するものである。

第24号住居跡（第146・147・150図 遺物第148・149図）

位置は、E6・F5・F6グリッドである。北東22mに第22・23号住居跡があるが、やや孤立的な立地である。河道跡に一部重複し、その堆積土に掘り込まれている。

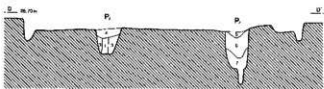
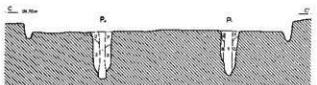
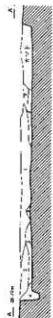
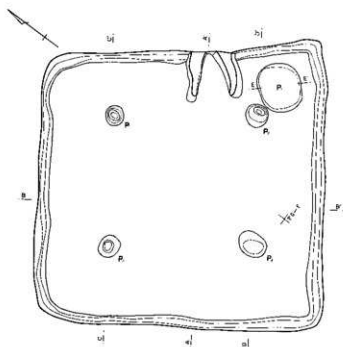
周壁平面形は、奥行4.4m、幅4.3mのはほぼ正方形で、東隅がやや張り出している。床面積は、18.7㎡である。カマドは、北東壁に設置されていた。中心軸方向はN-57°-Eである。主柱穴はP₁～P₄、東隅に位置するP₃は貯蔵穴である。

周壁は、最高0.4mである。壁溝が全周していた。主柱穴P₁～P₄は、深さ0.4～0.8mで、P₁・P₂・P₄で柱痕が確認された。柱間距離は、奥行2.1m・幅2.3mである。貯蔵穴P₃は、平面が0.8×0.7mの隅丸方形で、深さ0.4mである。カマドは、壁面を掘り込まずに付設され、両袖部が遺存していた。

遺物は、覆土中の土器片が少ない一方、床面上とカマドから、遺存状態の良い土器が多数出土した。分布のまとめは、カマド周辺と北東壁際の2カ所に認められた。カマド燃焼部では1の高杯、その上部に18の甕、カマド前部に12と6の甕と袖部脇に礫と17の甕があった。1は覆土中に倒立していたが、覆土断面図によれば、カマド使用時の燃焼面は、1の接する5層上面付近にあった可能

第39表 第24号住居跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
1	高杯	(15.7)	(9.7)	(15.7)	GH	劣	にぶい橙	90%	No.45(カマド) 赤彩
2	高杯	16.8		16.8	BDG	優	橙	杯部 60%	カマド 内外面赤彩
3	高杯				B	優	明赤褐	脚部部 20%	カマド 外面赤彩
4	高杯				ABD	優	明赤褐	脚部部 25%	カマド 外面赤彩
5	高杯				ABEFG	普	橙	脚部部 30%	カマド 外面赤彩
6	甕	12.3	12.8	14.6	GH	劣	橙	100%	No.34・35(カマド) 内外面赤彩
7	高杯	12.2	8.0	12.2	ABDGH	劣	橙	100%	No.28 内外面赤彩
8	高杯	12.5	8.3	12.5	ABFGH	普	橙	100%	No.20 内外面赤彩
9	高杯	12.4	8.0	12.6	ABGH	劣	橙	100%	No.23・28・29 内外面赤彩
10	高杯	12.9	8.0	13.0	ABGH	劣	橙	100%	No.23 内外面赤彩
11	高杯				ADH	劣	橙	脚部 100%	No.14 外面赤彩
12	甕	17.6	32.4	23.4	ABGH	劣	にぶい黄橙	90%	No.34・35・38
13	杯	(13.1)	(4.4)	(13.1)	ADGH	劣	橙	60%	No.3・4・5
14	甕	21.8	24.0	21.8	ABH	劣	にぶい橙	100%	No.32・36 孔径7.4
15	甕				ABFGH	普	明黄褐	胴下半 100%	No.34・35・22地(カマド)
16	甕				ABFG	普	橙	頸部 25%	No.24・25・26
17	甕	18.0	29.2	21.0	BGH	普	にぶい橙	100%	No.38・46
18	甕	17.2	28.8	(21.0)	BH	劣	にぶい黄橙	70%	No.34・35(カマド) スス
19	埴	(10.2)		10.4	ABEF	優	橙	図示部 20%	No.31 スス
20	埴	(8.8)		(8.8)	ABEFG	普	橙	図示部 15%	No.30
21	杯	9.1		9.1	ABFH	普	暗赤灰	口縁部 25%	No.10 内外面スス



S24 (正-E')

- 1 黒褐色土：炭化物粒、粘土、ローム粒を含み、しりとり
- 2 黒褐色土：第1層より炭化物粒を多く含み、しりとり
- 3 暗褐色土：炭化物粒、粘土粒を含む
- 4 暗褐色土：ローム粒、粘土粒を多く、炭化物粒、粘土粒をわずかに含む
- 5 暗褐色土：ローム粒、炭土、炭化物を含み、しりとり



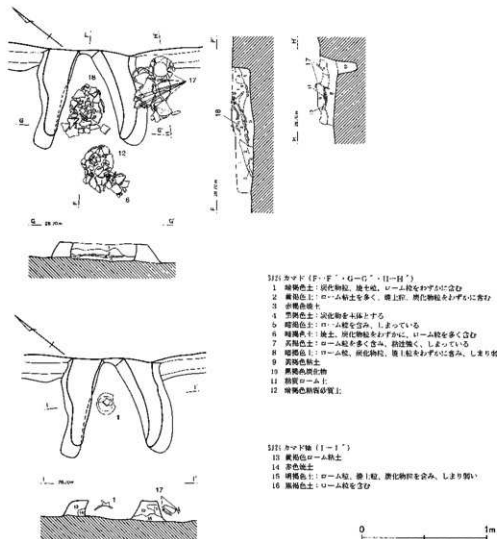
S24 (A-A' - B-B')

- 1 黒褐色土：炭土粒、炭化物粒をわずかに含む、しりとり強とも強い
- 2 黒褐色土：径1mm以下のローム粒、炭化物粒をわずかに含む、しりとり
- 3 暗褐色土：径5mm-1cmの炭褐色土ブロック、粘土粒をわずかに含む、しりとり
- 4 黒褐色土：径1-3mmの炭褐色土粒、粘土粒、炭化物粒をわずかに含む、しりとり

S24 (C-C' - D-D')

- 1 暗褐色土：ローム粒、粘土粒、炭化物粒をわずかに含む、しりとり
- 2 暗褐色土：ローム粒、径2-5mmのロームブロック、粘土粒、炭化物粒をわずかに含む
- 3 暗褐色土：ローム粒、径2-5mmのロームブロックをわずかに含む
- 4 暗褐色土：ローム粒、粘土粒、炭化物粒をわずかに含む、しりとり
- 5 暗褐色土：炭化物粒、ローム粒を多く含む
- 6 暗褐色土：ローム粒をわずかに含む、しりとり
- 7 暗褐色土：ローム粒をわずかに含む

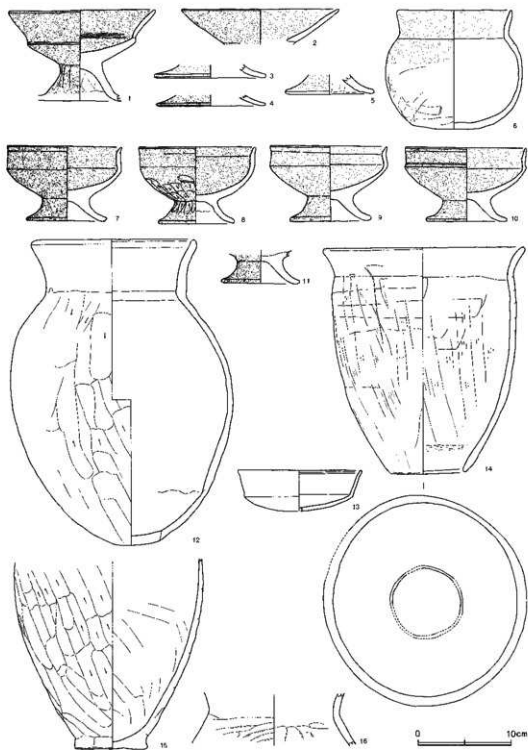
第146図 第24号住居跡



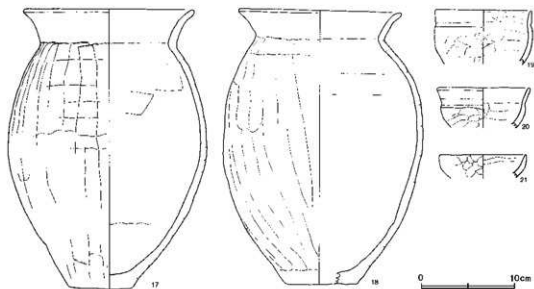
第147図 第24号住居跡カマド

性があり、1は支脚として使用されていた可能性がある。17・18などととも、カマド周辺における土器の日常的な原位置を示す出土状況といえるだろう。一方、北東壁際には、やはり高杯7・8・9・10がかたまっていた。他に貯蔵穴と北東壁の間に14があった。13と15は、破片となって散乱していた。1～5・7～11は高杯であるが、1～4以外は、ごく低平な脚部が共通点である。焼成がごく軟質である点も、他の高杯と対照的である。6は甕である。口縁部上半は内湾気味である。13は須恵器模倣杯である。14は甕である。12・15・16・17・18は甕である。12は底部が丸底に近い。19・20は埴、21は小型の杯である。

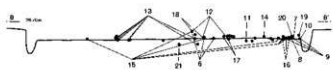
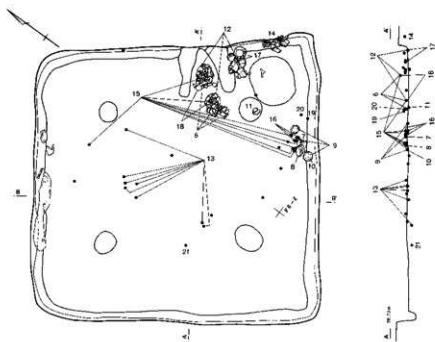
これらの遺物は、古墳時代後期に属するものである。



第148図 第24号住居跡出土遺物(1)



第149図 第24号住居跡出土遺物(2)



第150図 第24号住居跡遺物出土状況

第25号住居跡（第151図 遺物第152図）

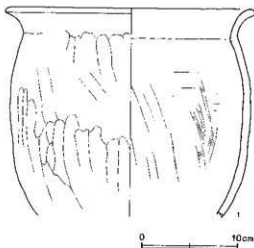
位置は、H 8・I 8 グリッドである。南東に第26号住居跡が近接する。

遺構は、床面付近まで削平され、主柱穴とみられる P₁～P₄ とカマドを残すのみであった。したがって周壁平面形は不明である。

主柱穴は、深さ0.05～0.5mと差が大きい。北側が深く、南側が浅い。いずれも柱痕は確認されていないが、柱間距離は、奥行2.6m、幅2.8mほどだろう。カマドは、両袖部が辛うじて遺存した。燃焼部は、深さ0.2m掘り込まれている。

遺物は、カマド覆土中から土器片数点が出土した。1は甕である。胴部は丸く、頸部のくびれは小さい。口縁部は短く、屈曲しながら外反する。

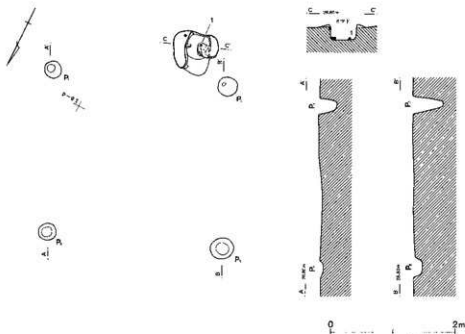
これらの遺物は、古墳時代後期に属するものである。



第151図 第25号住居跡出土遺物

第40表 第25号住居跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
1	甕	(26.3)		(26.3)	ABCEP	優	明赤褐	図示部 20%	No.1(カマド)



第152図 第25号住居跡

第26号住居跡 (第153図)

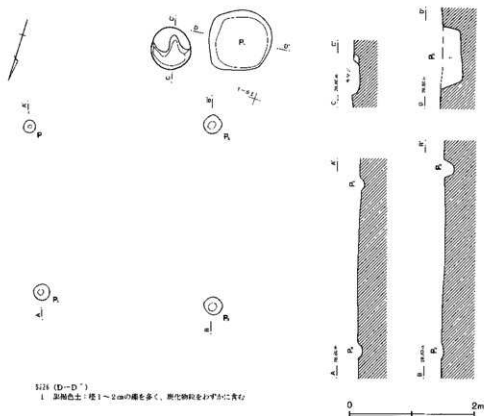
位置は、I 8・I 9 グリッドである。北西に第25号住居跡が近接する。

遺構は、床面付近まで削平され、主柱穴とみられる $P_1 \sim P_4$ 、貯蔵穴とみられる P_5 、カマドの痕跡を残すのみであった。したがって周壁平面形は不明である。

主柱穴は、深さ0.04~0.16mである。柱痕は確認されていないが、柱間距離は奥行2.7~2.9m、幅2.8~2.9mほどだろう。貯蔵穴 P_5 は、平面が径1.0mの隅丸方形で、深さ0.3mである。カマドは、深さ0.1mの掘り込み中に構築土が遺存していた。主柱穴との位置関係から、南壁付近に設置されていたと推定される。

遺物は、カマドと貯蔵穴 P_5 から土器片10数点が出土したが、図示できるものはない。

これらの遺物は、古墳時代後期に属するものである。



第153図 第26号住居跡

第27号住居跡（第155図 遺物第154図）

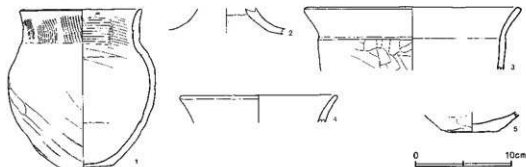
位置は、I 6・I 7グリッドである。東15～20mに第25・26号住居跡が近接するが、周囲は遺構の空白域である。

遺構は、床面まで削平され、主柱穴とみられるP₁～P₄、貯蔵穴とみられるP₅等を残すのみであった。したがって周壁平面形は不明である。P₁南のピットは覆土に焼土を含み、他のピットとの位置関係からみてもカマドの痕跡である可能性が高い。とすると、中心軸方向は、およそN-90°-Eである。

主柱穴は、現状で深さ0.3～0.4mである。柱間距離は、奥行3.5m、幅2.5mである。貯蔵穴P₅は、平面が円形と方形の間というべき不整形で、径1.1m、深さ0.3mである。底面は比較的広く、平坦である。カマド痕跡は、平面が1.2×0.9mの卵形で、断面は深さ0.1mで、皿状のである。P₄は、主柱穴と同等の掘り込みをもち、柱穴に類する可能性がある。

出土遺物は、遺構の遺存状態が悪かったこともあり多くない。1・3～5は貯蔵穴P₅覆土中から出土した。1は小型甕である。口縁部は頸部から直立気味に立ち上がり、内外面にハケメを残す。2は高杯の脚裾部である。広がりが大きい。3は肩部の張りが認められず、甕の可能性はあるだろう。頸部のくびれはごく小さく、口縁部は直線的に開く。4は甕あるいは壺の口縁部、5は同様に底部だろう。

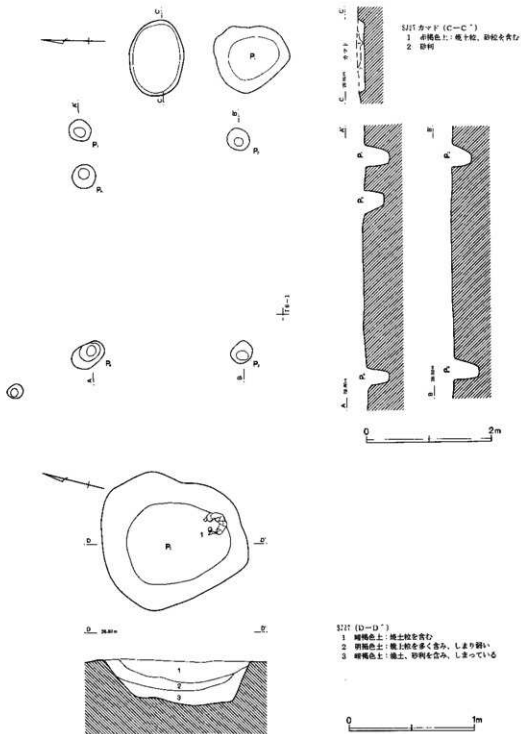
これらの遺物は、古墳時代後期に属するものである。



第154図 第27号住居跡出土遺物

第41表 第27号住居跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
1	小型甕	12.9	16.8	15.6	ABG	普	明赤褐色	100%	貯蔵穴 被熱赤化・剥落
2	高杯				ABEF	普	明赤褐色	脚裾部 30%	貯蔵穴
3	甕	(23.0)			ABFGH	優	橙	口縁部 20%	貯蔵穴
4	甕	(16.8)			ABEFH	優	にぶい橙	口縁部 15%	貯蔵穴
5	甕				ABDEGH	普	橙	底部 25%	貯蔵穴



第155図 第27号住居跡

第28号住居跡 (第156図)

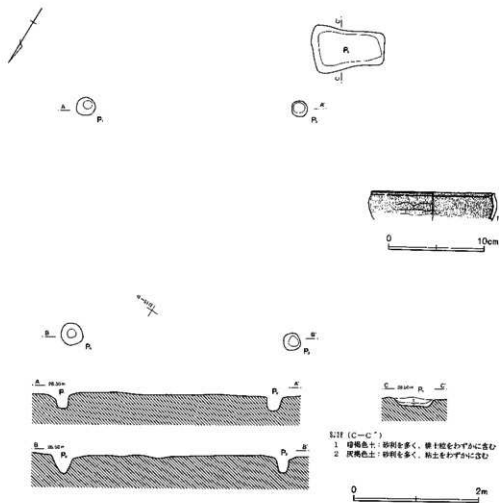
位置は、C10・D10グリッドである。第2号溝に近接し、一部重複していたとみられる。

遺構は、床面まで削平され、主柱穴とみられるP₁~P₄、貯蔵穴とみられるP₅を残すのみであった。したがって、周壁平面形は不明である。

主柱穴は、現状で深さ0.25~0.3mである。柱間距離は、東西3.5m、南北3.7mである。貯蔵穴P₅は、平面が長径1.2m、短径0.5~0.8mのゆがんだ長方形で、深さ0.15mである。

出土遺物は、ごくわずかである。1は比企・入間型杯である。

この遺物は、古墳時代後期に属するものである。



第156図 第28号住居跡・同出土遺物

第42表 第28号住居跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
1	杯	(13.2)		(13.6)	AGH	菅	にぶい橙	口縁部 15%	内外面赤彩

(2) 井戸跡

第1号井戸跡 (第157図)

位置は、O8・P8グリッドである。発掘区の最南部にあたる。第4・5号住居跡が近接する。平面形は、直径1.25mのほぼ円形で、深さは1.28mである。

出土遺物は、土器片2点のみで、遺構・遺物とも帰属時期は不明である。

第2号井戸跡 (第157図 遺物第159図)

位置は、D7グリッドである。発掘区の北部である。第23号住居跡・第4号井戸跡が近接する。平面形は直径2.28mのほぼ円形で、深さは2.3mである。6基の井戸跡では最大の遺構である。

出土遺物は、土器片が20点余りで、復元図示できたものが1点ある。1は須恵器大型甕の口縁部である。

これらの遺物からみて、遺構の帰属時期は古墳時代後期以降である。

第43表 第2号井戸跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
1	甕	(19.2)			CFG	優	灰	口縁部 15%	須恵器

第3号井戸跡 (第157図)

位置は、C8グリッドである。発掘区の最北部にあたる。

平面形は1.5×1.7mの楕円形で、深さは1.3mである。覆土は、焼土、炭化物、ローム土を交えて複雑に堆積している。

出土遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。

第4号井戸跡 (第158図 遺物第159図)

位置は、D7グリッドである。

北東に第2号井戸が位置する。平面形は、直径1.32mのほぼ円形で、深さ1.60mである。

出土遺物は、土器・陶器片7点である。3・4は須恵質の鉢である。底部に板状工具の木目条痕が残されている。これらの遺物からみて、遺構の帰属時期は中世である。

第44表 第4号井戸跡土器観察表

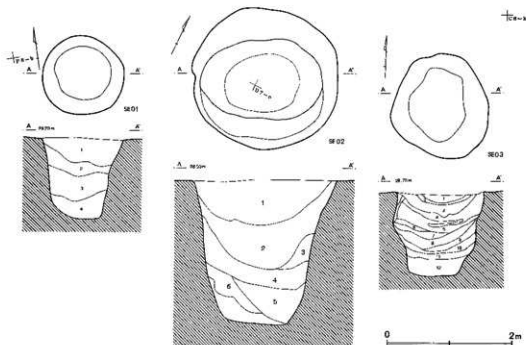
番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
3	鉢	(26.9)	(11.3)	(26.9)	ACG	普	灰黄	10%	須恵器、静止糸切痕
4	鉢				ACG	普	灰黄	底部 100%	須恵器、静止糸切痕

第5号井戸跡 (第158図 遺物第159図)

位置は、E6グリッドである。第3号土壇を壊しており、それに後出することが確認される。

平面形は0.95×0.85mの楕円形で、深さは0.9mである。

出土遺物は、土器片7点である。2は甕の口縁部である。これらの遺物からみて、遺構の帰属時期は、古墳時代後期以降である。



- SR01
- 1 黒褐色土 : 礫を多く、径1~2cmの黒褐色土ブロックをわずかに含む。しまり強い
 - 2 赤褐色砂 : 砂と礫を主体とし、径1~2cmの黒褐色土ブロックをわずかに含む
 - 3 暗茶褐色砂 : 第2層より層が太く、黒褐色土が少い
 - 4 灰茶褐色土 : 径1~3cmの黒褐色土ブロックを含む

- SR02
- 1 黒褐色土 : 径10~20cmの石を多く含む
 - 2 黒褐色土 : 石を多く含む。灰化物粒、焼土粒、土器を含む
 - 3 黒褐色土 : ロームを主体とする
 - 4 黒褐色土 : 灰化物粒、焼土粒、ローム粒を含む。しまり粘性とも強い
 - 5 灰茶褐色土 : しまり粘性とも強い
 - 6 砂利層

- SR03
- 1 赤褐色土 : 径1~2cmの焼土粒、灰化物粒、ローム粒、粘土粒を含む。粘性強く、しまり強い
 - 2 明灰褐色粘土 : 径1粒、ローム粒、灰化物粒を多く含む。しまり粘性とも強い
 - 3 明褐色土 : 砂をブロック状に含む
 - 4 灰褐色土 : ローム粘土を主体とし、灰化物粒、焼土粒をわずかに含む
 - 5 黒褐色土 : 灰化物を主体とし、焼土、ローム、粘土を含む
 - 6 赤褐色土 : 礫土を主体とし、灰化物、ローム粘土を含む
 - 7 黒褐色土 : 灰化物粒を主体とし、径1~2cmの砂利を含む
 - 8 暗茶褐色土 : 灰化物粒、ロームを含む
 - 9 暗褐色土 : 砂利を多く含む
 - 10 黒褐色粘土 : 灰化物粒を含む。粘性強く、しまり強い
 - 11 赤茶褐色砂利
 - 12 暗褐色土 : 灰化物粒、砂利を多く含む

第157図 井戸跡(1)

第45表 第5号井戸跡土器観察表

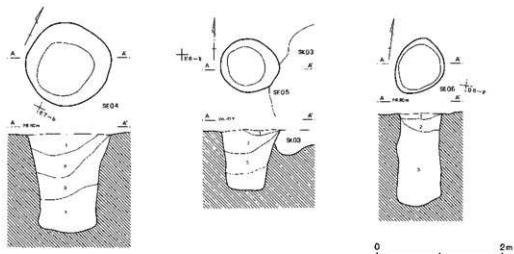
番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
2	甕	(20.9)			ADEG	劣	にぶい橙	口縁部 20%	

第6号井戸跡(第158図)

位置は、D6グリッドである。南に第7号土壌が近接する。

平面形は、長径0.9m、短径0.75mのひずんだ円形で、深さ1.45mである。

出土遺物は、須恵器を含む土器片9点で、図示できるものはなかった。遺構の層属時期は、古墳時代後期以降である。



SE04

- 1 黄褐色土：ロームを多く、粗シブロック、砂利を含む
- 2 暗褐色土：径10~20cmの塊、ロームブロックを含む
- 3 明褐色土：小石、ローム、焼土粒を含む、均質強く、しまっている
- 4 暗褐色土：砂粒を含む、しまり強い

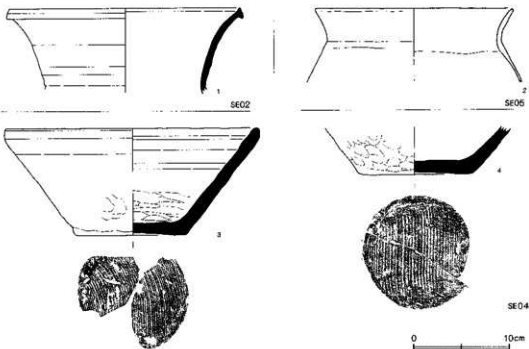
SE03

- 1 暗褐色土：粘土を主体とする
- 2 暗褐色土：焼土粒、炭化物粒を多く、小石をおおりに含む
- 3 黄褐色土：ローム粒を多く含む

SE06

- 1 黄褐色土：ローム粒、炭化物粒を含む
- 2 暗褐色土：砂利をおおりに、ローム粒、焼土粒、炭化物粒を含む
- 3 暗褐色土：ローム粒、炭化物粒を含む

第158図 井戸跡(2)



第159図 井戸跡出土遺物

(3) 溝跡

第1号溝跡(第160図 遺物第161図)

位置は、Q7～19グリッドである。桑原遺跡第23号溝・田島遺跡第1号溝とひとつづきの、3遺跡にまたがる長大な溝である。

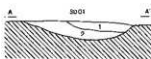
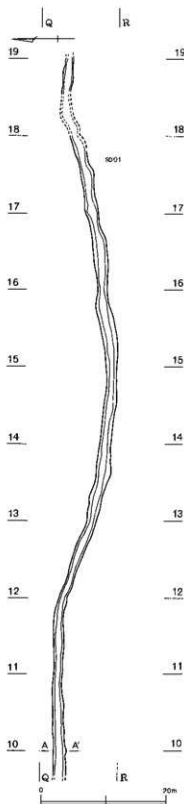
3遺跡で発掘された全長は約370mである。棚田遺跡は、そのうち西部分115mを含んでいる。幅は1.5～2m、深さは0.3mである。

図示できた出土遺物は22点である。1～8は古墳時代前期の古式土師器である。1は甕である。胴部上半に単節縄文をもち、頸部は鋭く屈折する。縄文装飾は古々谷式土器のなごりだろう。2は鉢である。大きく開く口縁部をもつ。3は壺である。底部が凹底で最大径が胴部下位にある点は、東海地方との関連をうかがわせる。4～7は台付甕の脚部である。8は埴である。16は古墳時代中期の土師器とみられる。高杯の脚柱部である。9～15、17は古墳時代後期の土師器である。9は壺である。10～14は須恵器模倣杯である。いずれも赤彩されている。17は高杯の脚柱部である。18は古式土師器の短頸壺である可能性もあるが、確定的な特徴に乏しく断定できない。19・21・22は壺か甕の底部だろう。19は外部底面に木葉痕をもつ。20は須恵器杯である。時代の下る、上層出土の遺物だろう。

これらのみからでは、遺構の帰属時期は特定が難しいが、田島遺跡第1号溝跡の所見にもとづき、古墳時代後期には存在したといえるだろう。

第40表 第1号溝跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	顔色	調	残存	出土番号・その他
1	壺			17.2	ABDH	青	明赤褐	胴上半 15%	外面縄文
2	鉢	16.5		16.5	AE	劣	にぶい黄褐	図示部 30%	Q18グリッド 内外面赤彩
3	壺			12.8	ABEG	劣	にぶい赤褐	下半部 60%	Q14グリッド
4	台付壺				ABC	普	にぶい黄橙	図示部 100%	Q14グリッド
5	台付壺				ABG	劣	橙	図示部 100%	
6	台付壺				ABE	普	橙	脚部 30%	Q18グリッド
7	台付壺				ABGH	普	橙	図示部 100%	Q14グリッド
8	埴	(11.0)		(11.0)	BGH	普	橙	図示部 15%	Q13グリッド 内外面赤彩
9	壺	13.7		13.7	ABCD	普	橙	上半部 15%	Q18グリッド
10	杯	12.5		13.0	ABH	普	にぶい褐	25%	Q18グリッド 内外面赤彩
11	杯	12.0		12.4	AB	普	明赤褐	図示部 15%	Q18グリッド 内外面赤彩
12	杯	(13.1)		(13.6)	AB	普	にぶい赤褐	図示部 15%	Q18グリッド 内外面赤彩
13	杯			(11.4)	BG	普	にぶい橙	図示部 15%	Q18グリッド 内外面赤彩
14	杯			(12.6)	ABG	普	明赤褐	図示部 15%	Q18グリッド 内外面赤彩
15	杯	11.7		12.4	ABH	普	にぶい赤褐	図示部 15%	Q18グリッド 内外面赤彩
16	高杯				ABC	普	にぶい橙	図示部 100%	Q18グリッド
17	高杯				AEH	劣	にぶい褐	脚柱部 15%	Q18グリッド 外面赤彩
18	壺	(18.6)			ABH	劣	橙	図示部 30%	Q18グリッド
19	壺				ABC	普	にぶい橙	底部 100%	Q18グリッド 底部木葉痕
20	杯	(15.0)		(15.0)	AF	優	灰白	図示部 10%	Q18グリッド 須恵器
21	壺				ABG	劣	にぶい黄橙	底部 45%	Q18グリッド
22	壺				ABEFH	普	灰黄褐	底部 60%	Q14グリッド 凹底



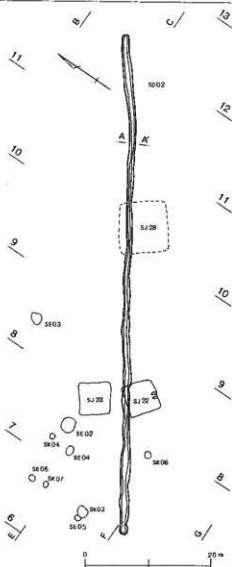
SD01 (A--A')

- 1 暗褐色土：従5~10mmの砂礫を多く含む、粘性強い
- 2 黄灰色砂：従5~10mmのロームブロックをわずかに含む

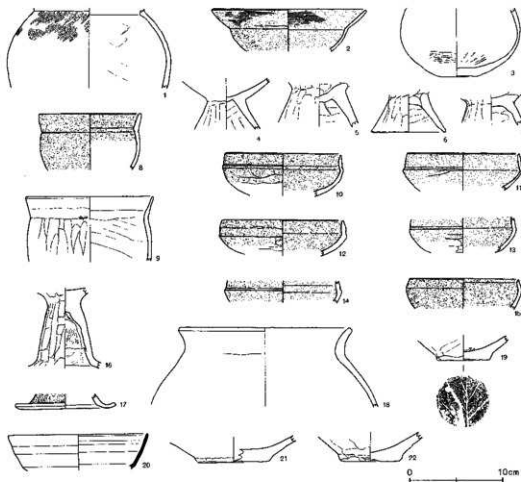


SD02 (A--A')

- 1 暗褐色土：砂利を含む
- 2 灰褐色土：砂利、小石を多く含む
- 3 暗褐色土：砂利、ローム粒をわずかに含む



第160図 溝跡



第161図 第1号溝跡出土遺物

第2号溝跡 (第160図)

位置は、B11・B12・C10・C11・D9・E8・E7・F6グリッドである。

長さは80m、幅は1～1.5m、深さは0.2mである。平面形は、屈曲が少なく直線的である。

出土遺物はなく、層序時期は不明だが、第22号住居跡と重複し、それに先行することが確認されていることから、古墳時代後期以前であることは確実である。

(4) 土壌

第1号土壌 (第162・163図 遺物第164図)

位置は、I9グリッドである。第2号土壌とともに調査区のほぼ中央に位置し、北に第26号住居跡が近接する。

平面形は1.3×1.15mの隅丸方形で、深さ0.12mである。

出土遺物は、大型甕が破砕された状態で出土した。1は大型甕である。外面ヘラミガキ。焼成は

堅緻で精製品である。

この遺物から、遺構の帰属時期は古墳時代後期である。

第47表 第1号土壌土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
1	壺	22.4		(40.0)	ABEG	優	明褐色	40%	№1・4・10他

第2号土壌 (第162・163図 遺物第164図)

位置は、J8グリッドである。第1号土壌とともに調査区のはぼ中央に位置する。

平面形は1.0×0.9mのはぼ円形で、深さ0.10mである。

出土遺物は、杯の破片と、甕が破砕された状態で出土した。2は甕である。口縁部は屈折して開き、胴部中位に一對の把手がつく。外面はタテハケのあとタテヘラナデ。ヨコハケのあとヨコヘラナデ。3は須恵器横楕杯、4は比企・入間型杯である。

これらの遺物から、遺構の帰属時期は、古墳時代後期である。

第48表 第2号土壌土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
2	甕	26.6	32.0	26.6	ABEF	普	褐	70%	№1・2、S、J8 孔径6.8
3	杯	11.9	4.7	12.2	ABG	優	におい橙	60%	№7 内外面赤彩
4	杯	12.0		12.4	BG	優	明赤褐	10%	№18 内外面赤彩

第3号土壌 (第162・163図)

位置は、E6グリッドである。調査区北寄りにあたる。第5号井戸と重複し、壊されていた。このことから第5号井戸に先行することが確認される。

平面形は1.0×1.6mの楕円形で、深さは0.4mである。底面は平坦でなく、西壁際がさらに円形にくぼんでいた。

出土遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。

第4号土壌 (第162・163図)

位置は、D7グリッドである。南に第4号井戸跡、南東に第2号井戸跡が近接する。

平面形は直径0.80mの円形で、深さは0.55mである。

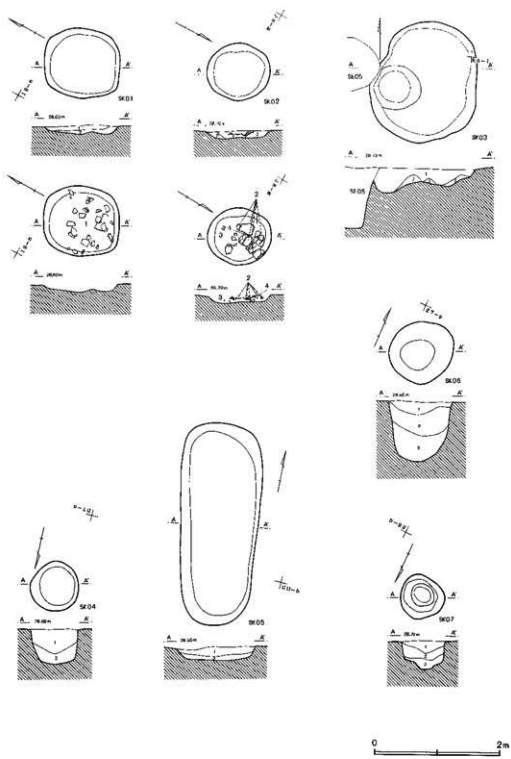
出土遺物は土器片4点である。須恵器を含み、遺構の帰属時期は古墳時代後期以降である。

第5号土壌 (第162・163図 遺物第164図)

位置は、F11・G11グリッドである。第2号溝跡と河道跡の中間にあたり、周囲に遺構はなく孤立的な立地である。

平面形は3.25×1.25mの長楕円形で、深さは0.2mである。

出土遺物は、土器片3点で、うち2点は図示できた。5は、有段口縁蓋の頸部にも似るが、有段高杯の杯部だろう。6は高杯の脚部である。柱部は長く直線的で、棚田遺跡では古い型式である。



第162图 土坑(1)

SK01

- 1 赤褐色土：炭化物粒、灰を多く含む
- 2 黒灰色土：炭化物粒、灰、焼土粒を多く含む

SK02

- 1 黒褐色土：径1mm以下のローム粒、焼土粒、炭化物粒をわずかに含む
- 2 暗赤褐色土：径1～3mmのローム粒を多く、焼土粒をわずかに含む
- 3 暗赤褐色土：焼土粒を多く、炭化物粒をわずかに含む

SK03

- 1 暗褐色土：炭粒を多く含む
- 2 黄褐色土：ロームを多く含む

SK04

- 1 暗褐色土：ローム粒を多く、焼土粒、径2～3mmの焼土ブロック、炭化物粒をわずかに含む
- 2 暗褐色土：第1層よりローム粒、ロームブロックを多く含む、焼土粒、炭化物粒を含む

SK05

- 1 暗赤褐色土：径1～3mmのローム粒を多く、炭化物粒をわずかに含む
- 2 暗褐色土：径5～10mmのロームブロックを多く、炭化物粒をわずかに含む

SK06

- 1 黄褐色土：径5～10mmのロームブロックを多く、焼土粒、炭化物粒をわずかに含む、粘性強く、しまっている
- 2 暗赤褐色土：径1～2cmのロームブロックを多く、焼土粒、炭化物粒をわずかに含む、粘性強く、しまっている
- 3 暗赤褐色土：径1～2cmのロームブロック、焼土粒、炭化物粒をわずかに含む、粘性強く、しまっている

SK07

- 1 暗褐色土：ローム粒、炭化物粒を含む
- 2 暗赤褐色土：ローム粒、炭化物粒をわずかに含む
- 3 暗褐色土：ローム粒、径10～15cmの礫を多く含む、しまり強い

第163図 土壌(2)

これらの遺物から、遺構の帰属時期は古墳時代中期に遡る可能性がある。

第49表 第5号土壌土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
5	高杯				ABEG	普	橙	図示部 30%	内外面赤彩
6	高杯				ABCG	普	にぶい橙	50%	内外面赤彩

第6号土壌 (第162・163図)

位置は、E7グリッドである。第2号溝に近接する。

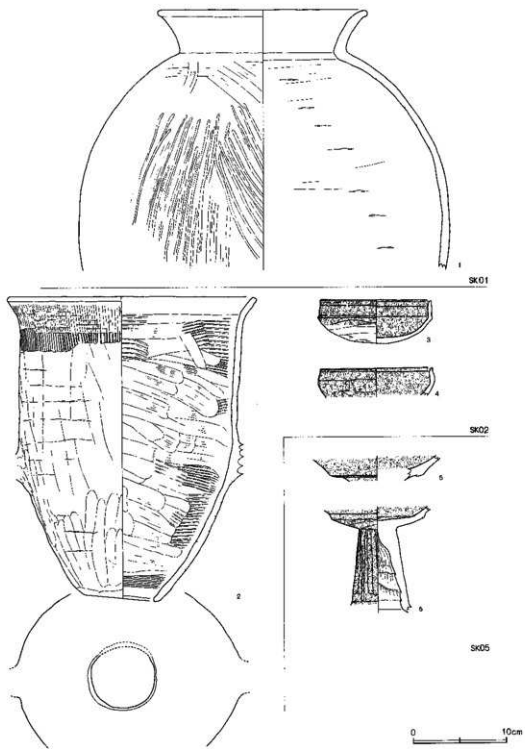
平面形は直径1mのほぼ円形で、深さは0.95mである。平面規模にくらべて深く、井戸跡である可能性もあるだろう。

第7号土壌 (第162・163図)

位置は、D6グリッドである。北に第6号井戸跡が近接する。

平面形は直径0.7mのほぼ円形で、底面中央部は、さらに同心円状に深くなっている。深さは0.45mである。

出土遺物は土器片8点である。須恵器を含み、遺構の帰属時期は古墳時代後期以降である。



第164図 土壙出土遺物

(5) 埋設土器

第1号埋設土器（第165図 遺物第166図）

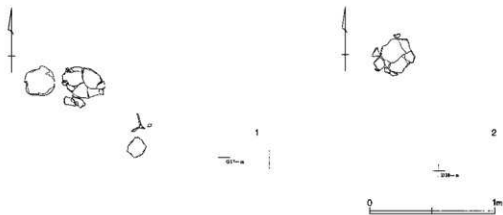
位置は、G16グリッドである。集落から離れた立地である。

明確な遺構に伴わず、単独で土中に埋められていたとみられる。出土時には破片の一部が散乱した状態だった。大型壺である。胴部の張りが強く、ややソロバン玉状に近い。法量からみて壺棺として使用された可能性があるが、出土状態は、それを積極的に裏づけてはいない。帰属時期は、古墳時代中～後期だろう。

第2号埋設土器（第165図 遺物第166図）

位置は、D17グリッドである。第1号埋設土器同様集落から離れた立地である。

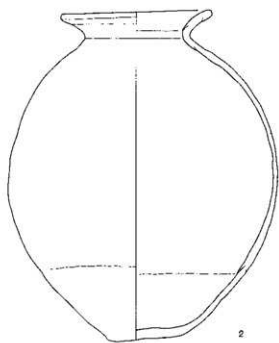
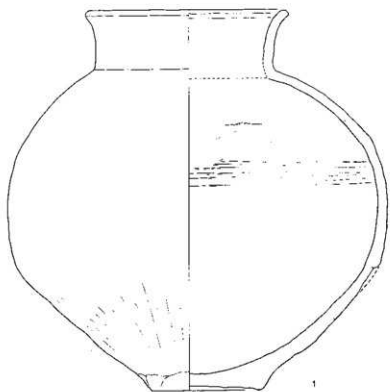
やはり明確な遺構に伴わず、単独で土中に埋められていたとみられる。やや長胴の壺で、第1号埋設土器より小さいが、小児棺としての使用は可能だろう。帰属時期は古墳時代後期である。



第165図 埋設土器出土状況

第50表 埋設土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
1	壺	21.3	(40.2)	(40.4)	ABFH	普	にぶい黄橙	40%	Q17グリッド
2	壺	16.1	34.6	29.0	ABGH	劣	にぶい黄橙	70%	Q16グリッド



第166図 埋設土器

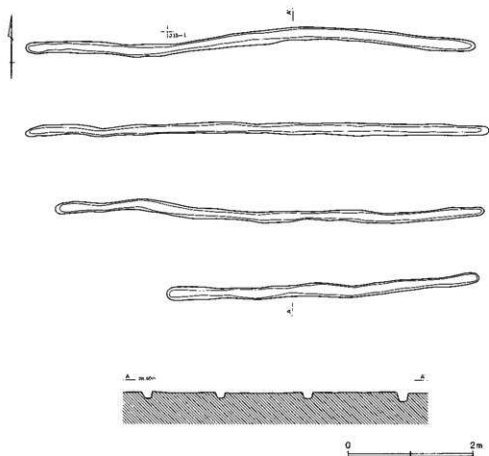
(6) 畑跡 (第167図)

位置は、J15・16グリッドである。東に第20・21号住居跡、西に第19号住居跡が近接する。

遺構は、細い溝4条が、東西方向にほぼ等間隔で平行している。溝間の距離は1.0~1.2mである。溝はいずれも概ね直線的で、長さは、北から順に7.2・7.4・6.8・5.0mである。幅は0.15~0.2mでほぼ一定しており、深さは0.1m前後である。

このような状況から、遺構は、畑地の畝跡と推定される。

出土遺物はなく、畑属時期を推定する手がかりを欠いているが、近接する第19~21号住居跡と関連する可能性は否定できない。

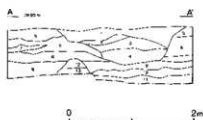


第167図 畑跡

(7) 河道跡 (付図2・第62・168図 遺物第169図)

調査区北西隅から東辺中央にかけて検出された。幅は2~12mであるが、4~6mの部分が主体である。地形からみて、西から東へ流れていたとみられる。覆土断面はD5グリッド5ラインに沿ったものだが、砂礫からなる1~4層が流路断面である。

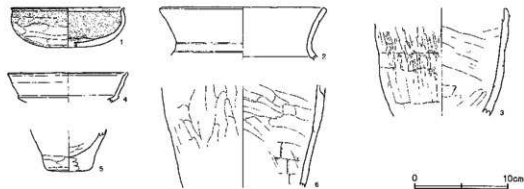
遺物は少なく、土器片30点余りである。図示できたものは6点ある。1は比企・入間型杯である。2は甕の口縁部である。3・6は甕の胴部である。4は須恵器換模杯系杯である。5は底部である。比較的小型の土器だろう。



河道跡 (D-5グリッド)

- 1 赤褐色砂 砂、径1mm以下、3~6mm、1~2cmの礫を主体とする
- 2 灰褐色土 径1~3mmの砂、炭化物をわずかに含む、しまっている
- 3 灰褐色土 細粒の炭化物を多く含む
- 4 赤褐色砂 赤褐色土をわずかに含む
- 5 炭褐色土 径1mm以下の砂粒を多く含む
- 6 赤褐色粘土 径1mm以下の砂粒を多く含む、炭化物をわずかに含む
- 7 赤褐色砂 炭褐色土をわずかに含む
- 8 赤褐色粘土 炭化物を多く含む、炭分の含量が高い
- 9 暗赤褐色土 炭化物、径1~2mmの砂をわずかに含む、炭分の含量がわずかに認められる
- 10 赤褐色粘土 炭化物、径5~10mmの礫をわずかに含む、炭分の含量がわずかに認められる
- 11 暗赤褐色土 炭化物、径10~15mmの礫をわずかに含む、炭分の含量がわずかに認められる
- 12 青灰色粘土 炭化物をわずかに含む、裏1層より砂質
- 13 暗赤褐色土 径1~1.5cmの礫をわずかに含む

第168図 河道跡断面図



第169図 河道跡出土遺物

第51表 河道跡土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	焼成	色調	残存	出土番号・その他
1	杯	(12.0)	(4.3)	(12.2)	ABG	普	にぶい橙	25%	底部木炭痕、内外面赤彩
2	甕	(17.8)			AGH	劣	明黄褐	口縁部 15%	
3	甕				AFGH	普	にぶい黄橙	図示部 25%	
4	杯	(12.8)		(12.8)	ABH	優	オリーブ褐	口縁部 15%	内外面黒色処理
5	甕				ABG	普	橙	底部 45%	
6	甕				ABFG	優	明黄褐	図示部 30%	

(8) 遺構外出土の遺物(第170・171図)

出土地点がグリッド単位で確認できるものと、出土地点未詳のものがある。図示できた遺物は39点である。

1～5は杯である。1は須恵器模倣杯、2・3はその係累の杯、4は比企・入間型杯系杯である。2は口縁部が内傾し、深い器形とみられる。1はQ7グリッド出土、2・4はF5グリッド出土である。

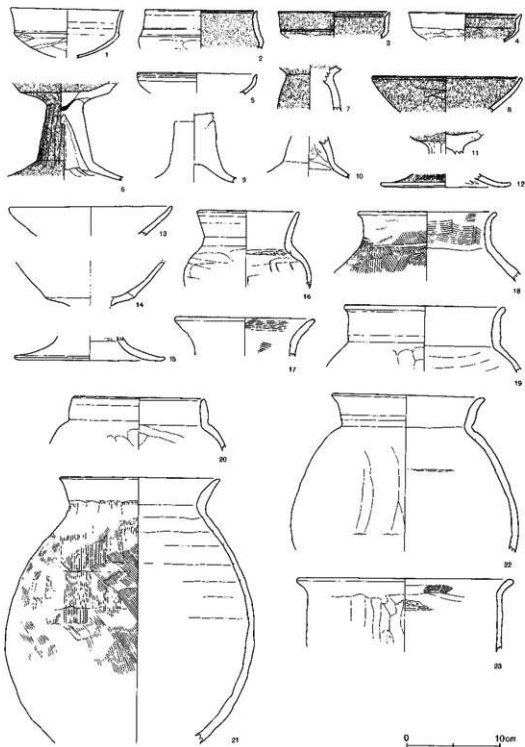
6～15は高杯である。6・7・9・10・11・12・15は脚部である。6は杯部底が比較的広く、柱部が直線的で長く、棚田遺跡では古い型式に属する。7は柱部のふくらみが顕著である。9は直線的で中実である。10は短脚である。11は杯部との接合部である。12・15は裾部である。いずれも大きく開く。8・13・14は杯部である。14は有稜高杯で、6同様に底部が広く、また開きがやや小さい。相対的に杯部の深い、古い型式に属する可能性があるだろう。6はF12グリッド出土、7はQ8グリッド出土、9はQ7グリッド出土、10はQ8グリッド出土、13はF13グリッド、14・15はH13グリッド出土である。

16は小型の壺である。G7グリッド出土である。17～22は甕である。17は口縁部全体が大きく外反する。18・19は口縁部が頸部から直立し、端部のみ屈曲して外反する。18は外面と口縁部内面にハケメを残す。20は口縁部がわずかに内傾し、ごく短頸である。21・22は、口縁部が頸部から鋭く屈折して開く。21は口縁端部が薄く、胴部外面にハケメを残し、胴部上位内面には粘土帯接合痕が残されている。17はO10-2グリッド出土、18はF12グリッド出土、19はQ7グリッド出土である。

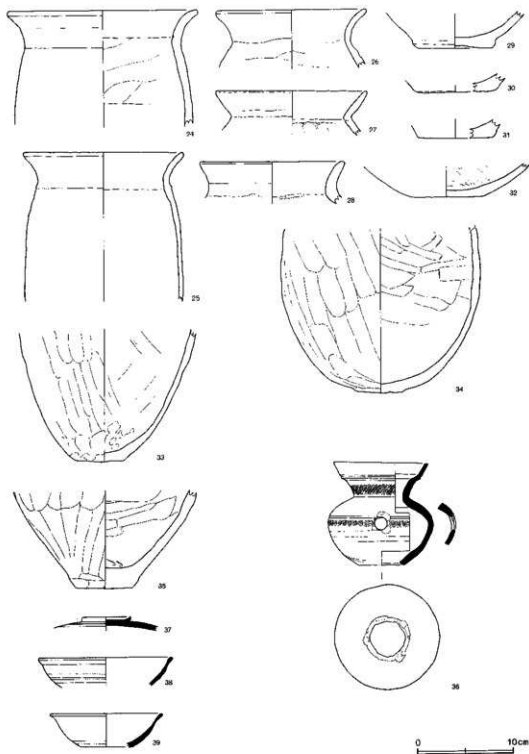
23は口縁部から胴部上位のみだが、甕と推定される。頸部はくびれず、短い口縁部が胴部から屈折して開く。

24～28・33～35は甕である。24～28は胴部上位以上口縁部にかけての破片である。24・25は細身で長胴とみられる。いずれも頸部はゆるく屈曲し、口縁部は比較的大きく開く。26～28は頸部のくびれが強く、27は内面に鋭い稜をもつ。33～35は胴部中位以下底部にかけてのみである。34は胴部下位から底部にかけての丸みが顕著で、底部はわずかに突出する。対照的に、35は胴部下位が底部にかけて直線的にすばまる。29～32は甕もしくは壺の底部である。24はQ7グリッド出土、25はF5グリッド出土、26はO10-k・cグリッド出土、30はP1-0グリッド出土、32はF5グリッド出土、33はK16グリッド出土である。

36～39は須恵器である。36は壺である。口縁部の大半と底部を欠いている。底部は人為的な穿孔だろう。古墳時代後期に属し、集落との関連がうかがわれるが、出土地点不明である。古墳時代の須恵器ではほぼ全景がうかがえるのは、棚田遺跡では、この資料と第11号住居跡23の杯身の2点のみである。37は杯蓋、38・39は杯である。平安時代に属する。



第170図 遺構外出土遺物(1)



第171図 遺構外出土遺物(2)

第52表 遺構外土器観察表

番号	器種	口径	器高	最大径	胎土	地色	潤	残存	出土番号・その他
1	杯	12.0		12.0	ADEH	劣	にぶい黄橙	25%	Q7グリッド
2	杯	(12.1)		(13.4)	ABD	普	にぶい橙	口縁部 15%	F5グリッド 内面赤彩
3	杯	(12.0)		(12.0)	AB	普	橙	25%	G7グリッド 内外面赤彩
4	杯	(12.1)		(12.1)	ABG	普	にぶい赤褐	口縁部 15%	F5グリッド 内面赤彩
5	杯	(12.9)			ABH	普	にぶい橙	口縁部 15%	
6	高杯				ABE	優	にぶい橙	脚柱部 100%	F12グリッド 内外面赤彩
7	高杯				BH	劣	橙	図示部 15%	Q8グリッド 内外面赤彩
8	高杯	(16.1)		(16.1)	AB	普	にぶい赤褐	杯部 15%	内外面赤彩
9	高杯				AH	劣	にぶい橙	図示部 90%	Q7グリッド
10	高杯				ABH	普	にぶい橙	脚部 50%	Q8グリッド
11	杯				AG	優	明赤褐	図示部 50%	内外面赤彩
12	高杯				ABGH	普	にぶい橙	脚部部 20%	外面赤彩
13	高杯	(17.5)		(17.5)	ABD	劣	明赤褐	杯部 15%	F13グリッド
14	高杯				ABG	普	明赤褐	杯部 15%	H13グリッド
15	高杯				AB	普	明赤褐	脚部部 30%	H13グリッド
16	蓋	(10.9)		(13.6)	ABH	優	明褐	30%	G7グリッド
17	甕	(15.0)			ABCG	劣	明赤褐	口縁部 15%	O10グリッド
18	甕	(14.9)			ABDG	優	にぶい橙	口縁部 25%	F12グリッド スス
19	甕	(17.2)			ABFG	普	にぶい黄橙	口縁部 25%	Q7グリッド
20	甕	(14.3)			ABFG	普	明黄褐	口縁部 35%	
21	甕	17.2		27.4	ABGH	普	にぶい赤褐	60%	
22	甕	16.3		(24.4)	ABGH	普	にぶい黄褐	上半部 40%	
23	瓶?	(23.2)		(23.2)	ABDF	普	明黄褐	図示部 15%	
24	甕	(20.1)		(20.1)	AG	劣	にぶい黄橙	上半部 20%	Q7グリッド
25	甕	(17.0)		(17.0)	ABGH	劣	橙	図示部 20%	F5グリッド
26	甕	(16.0)			BG	普	にぶい赤褐	口縁部 25%	O10グリッド
27	甕	(16.0)			AB	普	にぶい黄褐	口縁部 15%	
28	甕	(15.4)			ABFGH	劣	にぶい橙	口縁部 15%	
29	甕				ABFG	劣	にぶい黄褐	底部 70%	
30	甕				ABGH	普	にぶい黄褐	底部 25%	P10グリッド
31	甕				ABEF	劣	にぶい黄褐	底部 25%	
32	甕				ABDGH	劣	橙	底部 50%	F5グリッド
33	甕				DG	普	にぶい黄橙	下半部 50%	K16グリッド
34	甕			(21.1)	ABF	普	褐	下半部 45%	下半スス
35	甕				ABDF	劣	にぶい黄橙	20%	下半スス
36	埴	(10.0)		(11.2)	AG	優	オリーブ灰	90%	須恵器、底部穿孔
37	蓋				A	優	灰黄	図示部 75%	P8グリッド 須恵器
38	杯	(14.2)		(14.2)	AFG	優	灰黄褐	図示部 15%	須恵器
39	杯	(12.0)		(12.0)	ABF	優	灰黄	20%	須恵器

V. 調査の成果と課題

1. 田島遺跡

(1) 成果の概要

田島遺跡の調査において検出された遺構については、既にⅢ-1において概要を述べた。その繰り返しになる部分もあるが、編年の位置づけと、それにもとづく変遷の整理を主眼として、報告のまとめを試みたい。なお、編年の位置づけにあたっては、隣接する稲荷前遺跡土器編年案(富田1992・1994)を援用する。

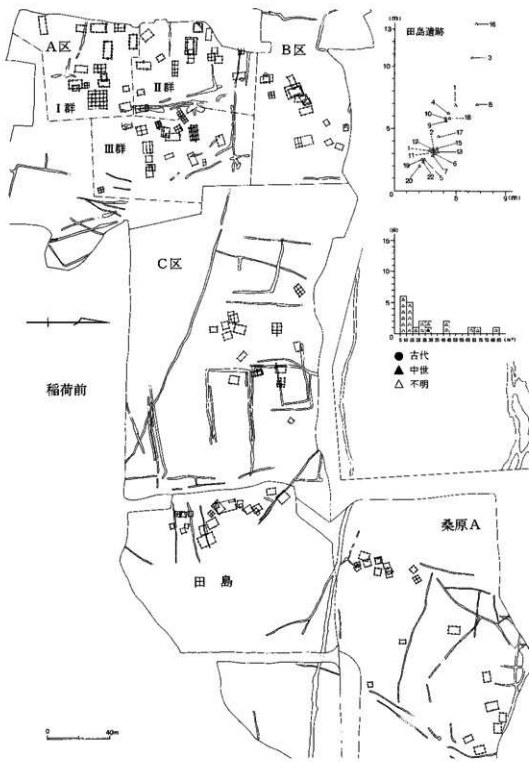
遺構の内容は、竪穴住居跡6、掘立柱建物跡22、井戸跡9、溝跡10、土壇10である。その他、掘立柱建物跡柱穴とほぼ同規模の小型土壇(ピット)が多数ある。ただし掘立柱建物跡とみなした遺構に竪穴住居跡の可能性のあるものが含まれ、また掘立柱建物跡も、著しい重複の中からすべてを把握できたか不安が残る。このように遺構の総数は不確定の部分を含んでいるが、本節においては、とりあえずこの数字にもとづいておく。遺構の大半は調査区西辺の高位部に集中し、立地からすれば、稲荷前遺跡C区に展開する遺構群の東限といえることができる。第3号溝跡のように、両遺跡にまたがる遺構もある。もっとも、掘立柱建物跡の分布は、田島遺跡の範囲内でまとまりを示しており、また稲荷前遺跡の古墳時代前期方形周溝墓群は田島遺跡には広がっていないなど、内容の差違は指摘することができる。

遺構は複雑に重複しているが、掘立柱建物跡をはじめとして帰属時期不明・裁り合い関係不明の遺構も多く、複合する各期集落の整理と抽出は容易ではない。それについては、遺構の種別に項をあらためて検討していくが、まず遺跡内容の変遷について大略を通観しておく。

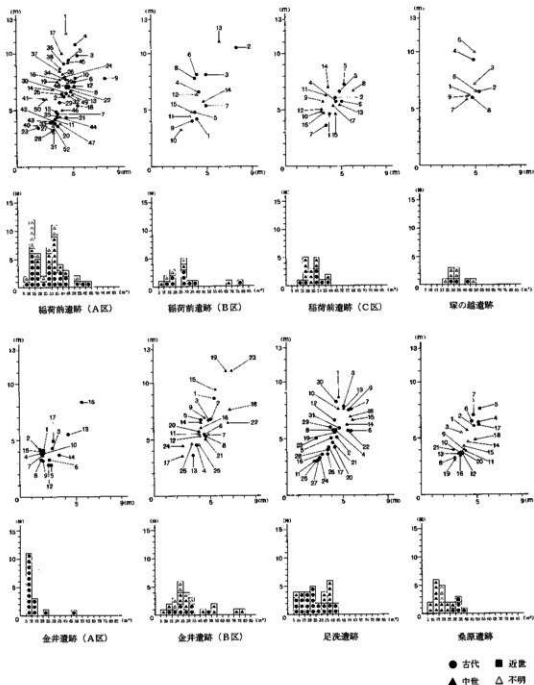
田島遺跡で確認された最古の遺物は、第1号溝跡出土の古式土師器である。古墳時代前期でも初頭に位置づけられるだろう。遺物の主体は古墳時代後期に属し、遺構も古墳時代前期まで遡るとは考えにくく、混入品とみなされる。古墳時代前期に属する遺構は確認されていない。古墳時代中期は空白である。古墳時代後期前半の遺構は、第1・2号溝跡・第3号土壇である。竪穴住居跡は、不確定なものもあるが、概ね古墳時代終末期に属する。7世紀代である。第1・10号土壇もその可能性がある。以降、空白をはさみ、ふたたび遺構が確認されるのは平安時代である。第5号井戸跡・第3・10号溝跡がそれに属する。さらに中世に下り、最も新しい遺構は、第9号掘立柱建物跡である。遺物から、上限が13世紀後半であることが確認された。掘立柱建物跡は、ほとんどが帰属時期を特定できない。

(2) 竪穴住居跡

6軒の竪穴住居跡は、南北に分かれて分布し、重複はない。出土遺物から帰属時期を推定すると、主に土師器杯の特徴などから第1・2・5号住居跡は稲荷前Ⅱ期(7世紀第1四半世紀)、第3号住居跡は稲荷前Ⅱ期(7世紀中葉)、第4号住居跡は、1・2の土師器杯破片に拠るならば稲荷前Ⅲ～Ⅳ期以降とみられるが、不明としておくべきだろう。第6号住居跡は遺物皆無であり、カマド痕跡



第172図 田島遺跡と周辺の掘立柱建物跡 (1/2400)



第173図 据立柱建物跡の平面規模分布

の存在から、古墳時代中期以降といえるにとどまる。ところで拡張後の第3号住居跡が稲荷前Ⅱ期に属するとすれば、拡張前の住居跡はⅡ期に遡り、第1・2号住居跡と同時存在した可能性があるだろう。

床面積による平面規模を含めて整理すると、最大は拡張後の第3号住居跡(29.7㎡)、次いで拡張前の第3号住居跡(17.5㎡)と第6号住居跡(17.0㎡)、そしてこの第4号住居跡(11㎡)・第2号住居跡(9.3㎡)・第5号住居跡(5.6㎡)という大小3段階が認められる。第6号住居跡を稲荷前Ⅱ期と仮定すれば、稲荷前Ⅱ期に第1・2・3(拡張前)号住居跡と第5・6号住居跡という南北2群のまとまりが想定され、それぞれ中・小規模の住居跡で群が構成されたことになる。不確定要素をふくむが、集落構成の可能性として注目しておきたい。

(3) 掘立柱建物跡

22棟の掘立柱建物跡は、著しく重複しながら、南北に連なって分布する。接する稲荷前遺跡C区東辺部は分布が空白であり、田島遺跡西辺部の比較的限られた範囲に集中する状況が認められる。重複の状況は、北から第10・18・20・22号掘立柱建物跡、17・19号掘立柱建物跡、14・15・16号掘立柱建物跡、3・4号掘立柱建物跡、5・13号掘立柱建物跡、6・11・12号掘立柱建物跡であり、3期以上の細分は期待されるだろう。しかし、層序の切り合い関係から新旧の序列が確認できた例はない。また、出土遺物は、いずれの遺構も僅少もしくは皆無である。帰属時期を特定できた遺構はないが、断片的な遺物の特徴から、その上限が知られるものは、第5号掘立柱建物跡(7世紀以降)・第9号掘立柱建物跡(13世紀後半以降)・第10号掘立柱建物跡(10世紀以降)である。中・近世の集落が含まれていることは確実だろう。このように、層序・遺物の型式からは、細分の手がかりを得るのは困難である。

規模の分布を整理するために、柱心-柱心間を結んで想定される方形の面積を、遺構の床面積に擬し、平面規模を示す属性として使用する(註1)。すると、田島遺跡では複数の分布のまとまりが認められる(第172図)。すなわち5㎡前後のもの(第5・19・20・22号掘立柱建物跡)、10㎡前後のもの(第2・6・7・11・12・13・15・17・21号掘立柱建物跡)、25㎡前後のもの(第4・9・10・18号掘立柱建物跡)、40㎡前後のもの(第1・4・8号掘立柱建物跡)、70㎡以上もの(第3・16号掘立柱建物跡)の5群に分けられるだろう。小規模な群から順にA～E群と仮称する。基本構造と対比すると、A群は1×1間3、2×2間1、B群は1×1間1、1×2間2、2×2間6、C群はいずれも2×3間、D群は3×3間2、3×5間1、E群は3×5間である。これらのうち、B群2×2間建物跡とC群2×3間建物跡は、平面規模がほぼ一定しているのが注目される。同一の目的で、継続的に造営されたものだろうか。重複関係にないものは、同時存在の可能性もあるだろう。とすれば、C群2×3間建物跡すなわち第4・9・10号掘立柱建物跡は、第9号掘立柱建物跡の所見からして中世以降に属する可能性がまず注目される。B群2×2間建物跡は、稲荷前遺跡A区・桑原A遺跡でも検出されている。とりわけ桑原A遺跡では、総柱建物跡を含め重複しながら、集落の端部に局地的に分布している。その状況は、田島遺跡とよく似ている。中世の倉庫等収蔵施設と推定されており、田島遺跡の場合もまずその可能性を認めておきたい。D・E群建物跡は、規模に

比べ柱穴が小さく、また柱間距離が部分的に間延びしている。稲荷前遺跡においては、それらが中世建物跡の特徴としてしばしば指摘されている。以上を通観すると、田島遺跡の掘立柱建物跡群は、中世集落が主体である可能性は認められるようだ。

入西地区の遺跡群では、田島遺跡をはじめ7遺跡で合わせて188棟の掘立柱建物跡が検出されている。いずれの遺跡でも複数時期の遺構が重複し、そして個々の遺構に共伴遺物が希な事情から、単一集落の全容、いかえれば同時存在した建物跡の組み合わせが明確に把握された例に乏しい。そこで、遺跡ごとに遺構を一括し、平面規模の分布と調査者によって比定された帰属時期をグラフにまとめ、参考資料として提示しておく(第173図)。

(註1)柱痕が遺構平面形細部の把握に十分なだけ確認された例は、田島遺跡では皆無である。そこで、いずれの場合も柱中心点は、遺構の平面形が基本的に方形であることを前提に、柱穴内部に任意で想定した。Ⅲ-2(1)において遺構平面図に示したのはその結果である。なお文中では、遺構規模を示すのに、柱穴間距離の距離の最大値を使用した。推定値を嫌ったためである。ちぐはぐな表記となったことをお詫びする。

なお他の遺跡については、平面形の想定・帰属時期とも報告者の見解に従った。

2. 棚田遺跡

(1) 成果の概要

棚田遺跡の調査において検出された遺構についても、既にIV-1において概要を述べた。その繰り返しになる部分もあるが、堅穴住居跡を中心に、編年の位置づけと、それにもとづく変遷の整理を主眼として、報告のまとめとしたい。

遺構の内容は、堅穴住居跡28、井戸跡6、溝跡2、土壇7、畑跡1、河道跡1である。遺構に伴わない遺物も含め、まず遺跡内容の変遷について大略を通観しておく。

帰属時期を特定できた遺構・遺物で最古のものは、第1号溝跡出土の古式土師器である。より新しい遺物とともに断片的に出土しており、混入品である。H島遺跡の豊富な出土土器から、遺構が古墳時代後期に位置づけられるだろうことは既に述べた。古墳時代前期に属する遺構は確認されていない。古墳時代中期和泉式の特徴を示す高杯が、第1号溝跡・第5号土壇・遺構外F12グリッドから出土している。第5号土壇は、遺物と同時期の可能性がある。第2号溝跡は無遺物だが、第22号住居跡に截られていた点から、古墳時代後期以前に属する。棚田遺跡で主体となるのは、古墳時代後期、わけてもその前半である。堅穴住居跡のうち、帰属時期を推定できたものはすべてそこに属する。堅穴住居跡群は随所で遺構が重複しており、数時期の集落を含んでいることが暗示されている。その解明は、一括遺物を含む豊富な出土土器の編年の細分と相互補完的・不可分の作業であり、この2点については次項以下で検討する。さらに第1・2号溝跡、第1・2号土壇、第1・2号埋設土器も古墳時代後期に含まれる。井戸跡の一部もその可能性があり、また河道跡は、遺物と、河岸付近の堆積土が第24号住居跡に截られていた点から、古墳時代後期以前から現位置にあったとみられる。古墳時代後期を下る遺構としては、第4号井戸跡などがある。中世に属する。さら

鉢C：胴部はふくらみ、口縁部は内湾する。例SJ22-11・SJ11-39。

鉢D：頭部のくびれが明瞭で、口縁部が外反するもの。例SJ09-7・SJ04-10。

壺は、個体数が少なく、堅穴住居跡からは、全景のうかがえる資料は出土していない。法量のばらつきが大きい、一括して口縁部の特徴にもとづき分類する。

壺A：口縁部は短く、外反して立ち上がる。外面に明瞭な段をもつもの、とそうでないものを含む。例SJ04-27。

壺B：口縁部は短く、外反せずに立ち上がる。例SJ12-4。

壺C：口縁部は相対的に長く、直線的もしくはやや内湾して立ち上がる。古式土師器以来の伝統的器形である。例SJ03-1。

壺D：口縁部は短く、内湾して立ち上がる。他地域系だろう。例SJ22-16。

埴は、鉢あるいは壺に近い形態だが、弥生土器以来の小型品の伝統を重視し、器類として独立させた。個体数は少ない。

埴A：胴部はわずかにふくらみ、口縁部は短く、直立気味に立ち上がる。例SJ04-21。

埴B：頭部のくびれが明瞭で、壺の形態に近い。例SJ01-3。

甕は、最大径の位置と、胴部の形状を主要素として分類した。

甕A：最大径は胴部中位にあり、ふくらみが顕著である。頭部は明瞭に屈折する。

例SJ19-7・SJ05-5。

甕B：最大径は胴部中位にあるが、その付近の張りだしは甕Aのように顕著ではない。口縁部はゆるくくびれる。例SJ10-14・SJ11-42。

甕C：最大径は胴部上位にあり、肩部の屈曲が明瞭である。例SJ19-6・SJ22-12。

甕D：最大径は胴部中位にあり、顕著に長胴。器高は35cm以上である。例SJ04-26。

甕E：最大径は胴部中・下位にあり、底部付近の屈曲が明瞭である。例SJ05-6。

甕F：最大径は胴部中位にあり、丸底。口縁端部が直立気味に立ち上がる。他地域系だろう。

例SJ24-12。

小型甕は、被熱痕跡から主に煮沸具とみられる。甕類との明瞭な法量差から機能の分化が予想され、器類として独立させた。有為な分類をなし難いようだが、とりあえず甕に準じて実行する。

小型甕A：最大径は胴部中位にあり、ふくらみが顕著である。頭部は明瞭に屈折する。

例SJ04-16。

小型甕B：最大径は胴部中位にあるが、ふくらみが弱く細身である。例SJ23-1。

小型甕C：最大径は胴部上位にあり、肩部の屈曲が明瞭である。例SJ04-25。

小型甕D：最大径は口縁部にあり、頭部のくびれはごく弱い。顕著に長胴。例SJ04-15。

甕は、一對の把手をもつもの、とないものがあり、また比較的甕の形態に近いものと、そうでないものがある。いずれも底抜け状の単孔である。

甕A：砲弾形である。胴部はふくらまず、口縁部がゆるく外反する。最大径は口縁部にある。

例SJ05-8・9

甕B：砲弾形である。甕Aに1対の把手のついたもの。例SK02-2。

瓶C：甕の形態に近い。胴部はわずかにふくらみ、頸部はくびれる。例SJ19・5・SJ24-14。

瓶D：鉢の形態に近い。口縁部と胴部の境界がなく、口縁部の開きはわずかである。1対の把手がつく。例SJ22-13。

小型瓶は、SJ05-4の1例のみである。

小型瓶A：円錐形で、ほとんどくびれない。SJ05-4

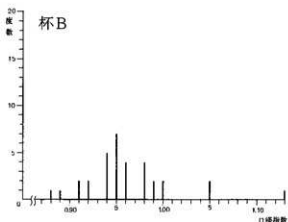
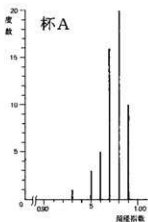
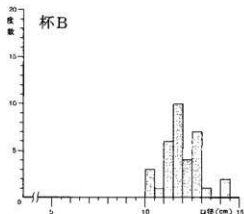
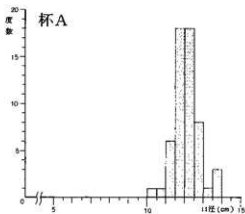
手捏ね土器は、第4号住居跡から集中的に出土している。

手捏ね土器A：相対的に幅広い底部から、短い底部が立ち上がる、盃形である。

つぎに個々の器形のいくつかについて、型式の新古を検討する。

杯について述べる。杯Aとその係累の杯類については、すでに水口由紀子が編年案を提示している(水口1989)。その大綱は、「Ⅰ～Ⅳ段階」の4区分であり、「Ⅰ段階」と「Ⅲ段階」は、さらに3つの、「Ⅳ段階」は2つの「小期」に区分される(水口1989 p124)。須恵器の共伴例にもとづく実年代の比定は、Ⅰ段階：5世紀末～6世紀前半、Ⅱ段階：6世紀後半、Ⅲ段階：6世紀末～7世紀初頭、Ⅳ段階：7世紀中頃を中心とする時期、である(水口1989 p124)。この枠組における形態変遷を瞥見すると、Ⅰ段階では「一定した形態はまだ確立していない」。Ⅱ段階では口径が大きくなり、器高は高いものと低いものに分化し、後者が優勢である。Ⅲ段階では口径はやや縮小に転じ、器高はさらに低いものが加わる。その「第3小期」では「口縁部の屈曲は弱くなり、口唇部内側に沈線がめぐるものが出てくる。」Ⅳ段階では、口径がさらに縮小する。Ⅰ段階以来の「A系列の屈曲の度合いはさらに弱くなる。」とされる(水口前掲 p122)。具体的数値を省略して紹介したが、1世紀半におよぶ変遷の過程を、①口径の拡大と縮小、②器高の低下、③口縁部の開放(内屈の度合の低下)、④新形式の登場と要約しておきたい。ところで棚田遺跡出土の杯Aは、水口編年に照らせば、そのⅠ段階にかかわる。この点は議論の省略が許されるだろう。そのなかで、大局的な変遷に呼応する変化が認められるのか、先の①～③を観察の視点としてみておきたい。

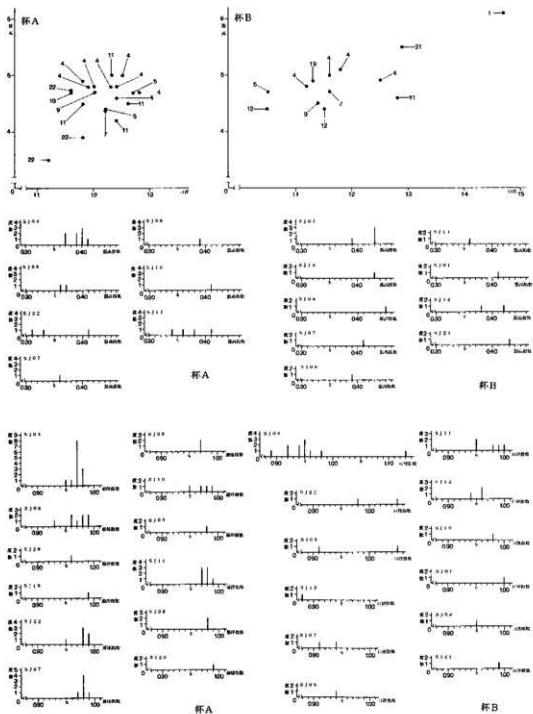
杯Aの口径は、10～14cmにかけて分布するが、12cm前後にはば集中する(第174図上左)。これは破片を含め、口径を推定できた資料すべてにもとづいている。明瞭な大小の器形分化は認められないようである。確認できる器高の分布は3.5～5.0cmにわたり、4cm台が主体となっている(第175図上左)。良好な一括資料であるSJ04は4.5～5.0cmに集中する。SJ11は4.0～5.0cm、SJ22は、さらに低いものを含み、3.5～4.0cmである。器高の度合を示す指数(器高/口径)を用いて器形のプロポーシオンを確認しておく(第175図中左)、SJ04は0.37～0.41に対し、SJ11は0.34～0.41である。SJ05・SJ09・SJ10は、SJ04とSJ11の間にかけて分布する。つぎに内湾する上半部の比較だが、これには内湾の度合を示す指数(頸部径/胴部最大径)を用いる(第175図下左)。なお度数分布図は、復元実測によって数値が推定された資料すべてを標本としている。総体のモードは0.98だが、SJ04の指数は0.95～0.98、0.97に集中が認められる。さらに詳細にみると、貯蔵穴と床面の一括資料に含まれる6点の指数は、0.95～0.97である。SJ11は0.97～0.99である。すなわちSJ04に対し、SJ11は上半が開く傾向にある。この2者に代表される、相対的に器高が高く上半が内湾する形態と、器高が低く、内湾の度合のやや小さい形態を比較すると、前者は胴部全体が曲線的で丸底が意識されているのに対し、後者は上半が開き気味になる一方、下半のふくらみが減り、底部は器壁が厚く、平坦



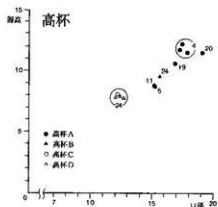
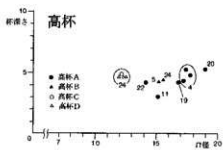
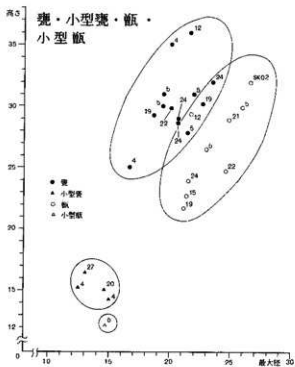
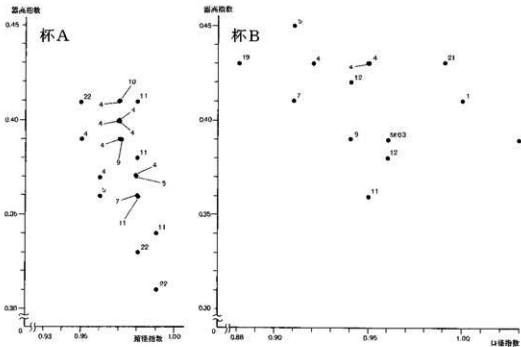
第174図 杯A・Bの口径と指数の分布

になる。下半の丸みが減ることによって、上半との境界が直線的にきわだってくる。すなわちSJ 11-17のように、口縁部周辺のヨコナデの下端に稜をもつものがみられる。また前者では口縁端部の屈折外反が直線的で明瞭であるのに対し、後者では内面の稜線が不明瞭で、外方への突出がゆるやかあるいは小さくなる傾向が認められる。調整についてみると、前者は下半部の仕上げをナデによるものが多いが、後者では明瞭なケズリ痕をそのまま残すものがある。以上のような変化が認められる。この2者を、先述した器高の低下と口縁部の開放(内屈の度合の低下)という変化の基本的傾向を反映したもののみなし、新旧関係に位置づけておきたい。すなわちSJ04を代表とする古相と、SJ11に代表される新相である。

杯Bは、口径の分布は10.5~14cmにわたり、杯Aに比べばらつきが大きいようだ(第174図右)。ただし主体は12cm前後で、杯Aと同じである。器高の分布は4.4~5.1cmにかけて集中が認められるが、SJ01-1のように6cmを超える大型品もある(第175図上右)。器高度の指数(器高/口径)の分



第175図 杯A・Bの法量と指数の分布



第176図 杯A・Bの指数の相関と他の器種の法量分布

布をみると(第176図中イ)、SJ04(一括)は0.43で一定しており、SJ19・SJ21も同じ、SJ05は0.45とより深く、SJ01・SJ04(覆土)・SJ07・SJ09・SJ11・SJ12はより浅い。もっとも浅いSJ11-8は指数0.36である。つぎに屈折する上半部の比較だが、内湾度の指数(口径/胴部最大径)の分布をみると(第176図下右)、分布は0.88~1.13にわたり、杯Aにくらべ大きく開く形態が含まれるが、モードは0.95であり、杯Aよりも内屈した形態が主体である。SJ04(一括)の指数分布は0.92~0.95であるが、SJ01・SJ11・SJ22などは0.95~1.05とより開いて直立に近いものがある。一方SJ07・SJ09・SJ19は0.88~0.94でより内屈の割合が高い。杯A同様、相対的に浅い形態では、底部が厚く平底に近くなる。杯Aに対応し、SJ04とそれに近いSJ05・SJ07・SJ19・SJ12-2などを相対的に古く、浅くなるSJ09・SJ11・SJ12-1を新しく位置づけておきたい。

杯Cは、いわば典型的な須恵器模倣杯だが、出土量は多くない。SJ01・SJ11・SJ19・SJ20・SJ24にある。とりわけSJ11に集中的に認められるのが注目される。杯A・Bをはじめその他の土器とは胎土が異なり、周辺地域からの搬入品である可能性もある。開きが大きく相対的に浅い形態のSJ24が新相を示しているといえるだろう。

杯Dもごくわずかで、全景がうかがえる確実なものはSJ04-43のみである。

最後に、杯について、先に分類した器形の比率を報告しておく。その算出方法は、家根祥多によるものを借用した(家根1994)。すなわち、各器形ごとに、①小破片を含め残存する口縁の長さを計測し、その総延長をもとめる。②口径を計測もしくは復元できるものについて、その平均値をもとめ、それをもとに口縁部円周の平均値を算出する。③①を②で割り、得られた値を残存個体数とする。このようにして得られた残存個体数にもとづき、器形の比率を算出した。その結果は以下のとおりである(長さの単位はcm)。

	計測数	口縁総延長	平均口径	平均円周	残存個体数	比率(%)
杯A	105	841.4	11.9	37.4	22.5	54.2
杯B	76	475.5	11.6	36.4	13.1	31.6
杯C	22	146.0	11.8	37.1	3.9	9.4
杯D	5	71.0	11.1	34.9	2.0	4.8

すなわち、棚田遺跡においては、杯Aがほぼ半数を占め、杯Bの約1.7倍、須恵器模倣杯である杯B・Cの1.3倍にあたる。遺跡単位で一括したおおまかな数値であり、その精密化が必要であることは当然だが、基調というべき傾向は示しただろう。遺跡どうしのかかるデータの比較は、比企・入間型杯の分布の実態、また分布圏内の遺跡の位置づけを明らかにするうえで有効である。その集積が期待される(註3)。

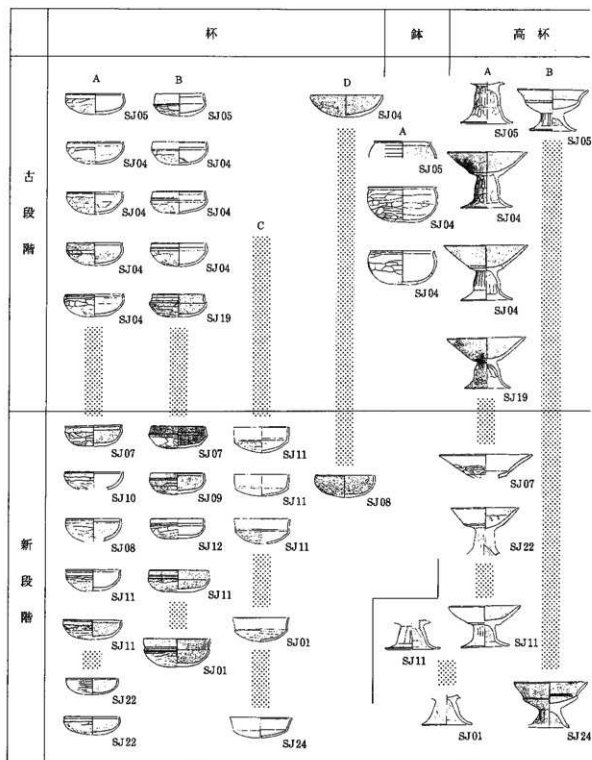
鉢について。鉢Aについてのみ触れておく。鉢Aは、杯Aを深くした形態であり、杯Aの大型品ともみなされる。SJ04・SJ05で認められるのみで、杯Aが古相を示す段階で消滅した可能性があるだろう。

高杯について述べる。古式土師器以来主要器類に加わった高杯は、大局的には退化の傾向にあるといえるだろう。主たる器形は伝統的な有稜高杯である高杯Aだが、和泉式の高杯と比較して、脚部が低くなる(=短くなる)のが顕著な変化である。窪穴住居跡の土器群に先行するとみられる長脚

の高杯は、断片的ながらSK05-6・SD01-16・遺構外-6などがある。いずれも脚柱部が細く高い。堅穴住居跡出土の高杯は、これらに後出するとみてよいだろう。ただしSJ23-2は脚裾部が大きく、また外面途中に段をもつとみられる。これは和泉式の有段高杯に共通する特徴であり、例外的に古く位置づけられる可能性がある。もっともごく断片的で、遺構にともなうものではないだろう。それはさておき、これらに次いで長脚の特徴を残し、古相を示しているといえるものに、SJ04・SJ05・SJ19・SJ20がある。SJ04に先行するSJ05は脚部のみだが、もっとも長脚である。これが最古相とみなせるだろうか。良好な一括資料であるSJ04では、脚柱部は曲線的なふくらみをもつものと、直線的なものがある。前者に属するSJ04-14は、脚裾部が比較的上方で屈折し、脚柱部が短くなっている。より新しい特徴といえるだろう。これに近いのはSJ19である。脚柱部と脚裾部の境界が不明瞭で、両者がゆるやかに一体化したいわばワンピースの形態である。この系列のより新相はSJ01だろう。SJ01-4は脚部のみだが、脚柱部と脚裾部の一体化がさらに進み、全体がスカート状に開く形態である。一方直線的な脚部の系列は、脚裾部の屈折が明瞭なまま、その広がりを強調しつつ短脚化している。SJ04-23・SJ20-1に対し新相を示すものに、SJ07-13・SJ11-24などがあり、またSJ09-5・SJ22-1のように脚柱部が中実なものもある。SJ11-24・SJ22-1は、杯部口径の減少も認められ、高杯B以下の法量となっている(第176図下右)。高杯Bは、高杯Aの矮小形にも見えるが、杯部底部が口縁部に比べ発達しており、独立した器形である。SJ05-2の例から、古相の高杯Aともなっていたことが確認される。SJ05-2は脚部上半が直立し、脚柱部がわずかながら存在するのに対し、SJ24-1は脚部全体が直線的に開く。高杯Aと同様、後者を新相とみてよいだろう。より小型の高杯C・Dは、SJ24に集中的に含まれる。脚部は杯底部から「ハ」字状に開き、高杯の脚部としては、ほぼ低脚の限界に位置づけられるだろう。同様な脚部はSJ23にもみられる。出土例は他に乏しく展開の様相はうかがえない。しかし高杯Aを欠き、小型の高杯B・C・Dで構成されるSJ24のセットは、SJ04に対し、有段高杯の退化にともなう、新たな様相を示しているといえるだろう。

壺について述べる。壺類は、すでに主要器類から姿を消しつつあるといえるだろう。壺Aは端部の丸い単純口縁だが、有段口縁の痕跡とみられる段や凹凸を残すものがある。一方壺Cは古式土師器以来の器形である。SJ03-1は器高が18cm前後という特徴も守っており、この器形にかかわる制約の強さをうかがわせる。しばしば墳墓にも供献され、祭祀性の強い器形といえる。

甕について述べる。大局的には球形胴から長胴への変化の途上に位置づけられるだろう。その具体相は、第5号住居跡において端的に示されるように、比較的ふくらみの強い器形と、細身長胴傾向の甕が共存していたようだ。胴部のふくらみと頸部の「く」字状屈折を特徴とする甕Aが、伝統的な甕の系譜上にあるといえるだろう。SJ05・SJ19は、上下の部位で調整方向が異なるが、SJ24はケズリが上から下へ一定方向で、下半が細身になっている。前者に対し後者を新相とみなしたい。甕Bにおいても、SJ05に対しSJ10・SJ11ではふくらみが目立たなくなるようである。後者を新相とする。口縁部上端の屈曲と肩部の張りが特徴的な甕Cは、SJ19・SJ07・SJ22などがある。SJ19は肩部が張り頸部の屈折が明瞭であるのに対し、SJ22は肩部の張りが弱くなるとともに、口縁部外面のヨコナデが頸部の屈折から下方におよんでいる。この調整は頸部のくびれの退化に関係する



第177図 横田遺跡土器編年表 (スケール 杯1/6、高杯1/8、甕・瓶1/12)

罍

甗



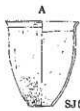
SJ05



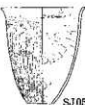
SJ05



SJ05



SJ05



SJ05



SJ19



SJ19



SJ19



SJ04



SJ19



SJ10



SJ07



SJ21



SJ12



SJ12



SJ22



SJ24



SJ11



SJ12



SJ27



SJ24



SJ24



SJ24



SJ24



SJ22

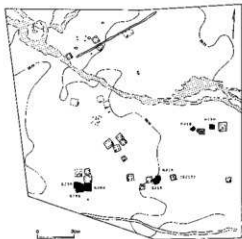
とみられ、より後出の長胴甕にも認められる。新しい要素として注目しておく。甕Dは、SJ04・SJ12に認められる。顕著な長胴である。甕Aなどむしろ丸い甕が存続する一方で、用途に応じいち早く長胴化をとげた一群があったのだろうか。ともあれ長胴化の過程は、単純な様相ではないようだ。甕は、隣接する桑原A遺跡において、「『逆台形』状の直線的なシルエット」のものが先行し、次第に胴部がふくらみ、口縁部と胴部の境界が明瞭になる変遷が指摘されている(村田1992)。これまでしばしば古相を指摘してきたSJ05の甕Aは、頸部がほとんどくびれず、口縁部は短く外反する。これに対し、SJ21の甕Aは、胴部がわずかにふくらみ、口縁部は長く、外反が大きくなる。後者を新相とみる。SJ05同様口縁部がわずかに外反し、胴部がより直線的なSJ15は、SJ05とともに古相といえるだろう。一方甕の形態に近い甕Cは、SJ12・SJ24のほか、SJ19がある。SJ19も総じて古相が指摘できることから、甕Cの組列も、甕Aに併行させて想定しておく。

以上、主な器形について、雑然としてしまったがその様相を観察し、概ね新古2相の存在を確認してきた。これらをまとめ、新古2段階を設定する(第177図)。主たる根拠は高杯と杯の変化であるが、両者に古相が認められる段階を古段階としたため、古相を示す杯でも、新相を示す高杯にもなうとみられるものは新段階に含めた。これらをもとに新段階はさらに細分される可能性があるが、ここでは明示することはできなかった。古段階の代表的存在はSJ04・SJ05であり、他にSJ15・SJ19・SJ20も含まれるだろう。これに対し新段階に属するのはSJ01・SJ03・SJ07・SJ08・SJ09・SJ10・SJ11・SJ12・SJ21・SJ22・SJ23・SJ24・SJ25・SJ27である。これらは、SJ09・SJ10に代表される古段階に近い段階と、SJ11・SJ24などを含む新段階にさらに細分される可能性がある。これらの暦年代だが、手がかりとなるのはSJ11出土の須恵器杯身だろう。TK47型式である。須恵器の伝世の可能性、さらに出土状態など直接的な根拠とするには問題も残されているが、とりあえず唯一の手がかりとしてそれにもとづけば、新段階は6世紀前葉、それに先行する古段階は、5世紀後葉付近に位置づけられるだろうか。

(註1)分類のための用語とその概念は、加納俊介に従った(加納1981・1987)。もともと器形の分類においては組列単位の把握おぼつかなく、単なる類型分類で終わった器種も複数ある。氏の説の肝腎にはむしろ背く結果となったことをこたわっておく。なお、この「器類」にあたる単位は、他例においてしばしば「器種」と呼ばれるものである。

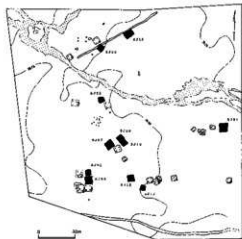
(註2)すでにⅢ-2・Ⅳ-2において、杯の一部に対し「比企・入間型杯」という名称を用いた。その対象は、従来使用されてきた「比企型杯(杯)」と同一である。「比企型杯」に対し、入間地域の状況の評価し、名称として「比企・入間型杯」を提唱したのは水口由紀子である(水口1989 p134~135)。本稿においても、それに導かれた。ただし文意を遵守するなら、水口はこの名称の使用を6世紀末~7世紀初頭に当たる「Ⅲ段階」にとりあえず限定している。続く「Ⅳ段階」はそれにふさわしい状況ではないとするが、「Ⅱ段階」以前については言及していない。すなわちここで扱う土器群に対して「比企・入間型杯」の名称を使用する正当性は、水口の保証するところではない。しかし「比企」以南を重視した水口の視点は、今後とも分析の基本的枠組として有効であり、6世紀を保留した時間的制約も必要ないと考える。この点から、あえて提唱者の示した文意からはみだして、「比企・入間型杯」の名称を使用した。とりあえず「比企」という局地的概念からの伸張を眼目としたものである。

「筆者は、入間川流域の入間地域の“比企型杯”もいくつか観察したが、これらも硬質感のある焼き上



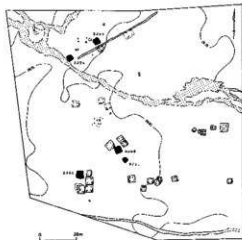
I期の集落

SJ04 (40.4㎡)・SJ05 (40.7㎡)・SJ06 (32.0㎡)
 SJ15 (12.6㎡)・SJ16 (21.4㎡)・(SJ17) (18.1㎡)
 SJ19 (9.0㎡)・SJ20 (11.6㎡)



II期の集落

SJ02 (19.4㎡)・SJ03 (36.0㎡)・SJ07 (38.4㎡)
 SJ09 (24.7㎡)・SJ10 (19.2㎡)・SJ12 (29.0㎡)
 SJ13 (16.8㎡)・SJ21 (46.1㎡)・SJ22 (22.4㎡)
 SJ25 (不明)・SJ28 (不明)



III期の集落

SJ01 (33.0㎡)・SJ08 (25.1㎡)・SJ11 (10.6㎡)
 SJ23 (22.2㎡)・SJ24 (18.7㎡)

第178図 標田遺跡の集落変遷

がりで器壁の薄いものであった。そして、ここでは、甕や鉢など、ほかの器種の土器も同じ胎土・焼成であった。この点と、先の比率の検討結果を合わせると、もし、地域名をもってこの形態の杯を呼ぶならば、Ⅲ段階では“比企・人間型杯”という名称のほうがふさわしいように思う。ただし、Ⅳ段階では大宮台地南部においても比率が高くなっているため、この名称もふさわしいとは言えない。胎土の検討が不十分であるため、ここでは、“比企型杯”という名称に再検討の余地があることを提示するにとどめたい。(水口1989 P135)

(註3)前掲水口論文においても、武蔵野台地から大宮台地にかけて、遺跡単位で「比企型杯」の比率が比較されている。編年在先鞭をつけたと同時に、分布の実態に注目した視点が、この論文の特徴として記憶されるべきだろう。

(3) 集落の変遷

前項における出土土器の編年の細分に照らし、28軒の壑穴住居跡群の細分を試みる。土器様相の変化は、明瞭な断絶をささず連続的であり、集落も同様に、遺跡内部で連続的に推移したとみられる。その全期間も、漠然とした表現ではあるが、数10年という比較的限られた時間ではなかったろうか。そのような状況下では、遺構内遺留土器と、廃絶後の投棄あるいは混入土器との峻別、そしてそれらの厳密な型式細分という難課題を越えずして、細分単位の正確な設定はおぼつかないだろう。調査担当者により綿密な出土記録が残されていたにもかかわらず、文字どおりおぼつかなかったわけだが、前項では辛うじて新・古2段階を想定した。本項では、その古段階に相当する期間をⅠ期とし、新段階の期間をⅡ期とⅢ期に分けた。具体的にいえば、古段階に対し新相明瞭とみなした土器群に対応する期間をⅢ期として分離し、両極の間をⅡ期とした。少なくとも、集落の実態はさらに細かな単位で推移したとみられるが、とりあえずこの3期区分にもとづき、おぼろげながらも平面的な集落景観のいくつかを浮かびあがらせてみたい。なお、遺物がごく断片的あるいはほとんどなわなかった第13・14・17・18・26・28号住居跡は、いずれのグループにも加えず、遺構の特徴あるいは配置に応じ、帰属の可能性に触れることにする。

Ⅰ期の集落は、第4・5・6・15・16・19・20号住居跡である。第6号住居跡は、第5号住居跡に載られている事実からこれに加えた。複数の重複を含み、同時存在の集落を抽出するにはさらに細分が必要だが、とりあえず現状での分布の特徴を指摘しておく。すなわち遺構分布圏の南辺から東辺を録取するように、7軒が2・3軒づつ3つにまとまって、弧状の配置をとっている。それぞれの間隔は40～50mである。西寄りの第4・5・6号住居跡は床面積30～40㎡であり、相対的に大型の住居が、1軒づつ連続的にその位置を占めていたようだ。とりわけ第4・5号住居跡は、方向・平面規模がほぼ同一であり、無関係な重複ではなさそうだ。一方北寄りの第19・20号住居跡に挟まれた畑跡とみられる畝状遺構も、これらⅠ期の集落に含まれる可能性がある。さらに注目されるのはカマドの構造である。第16・20号住居跡のカマドは周壁から独立し、壁体の平面は馬蹄形である。これらは従来「初期カマド」あるいは「出現期カマド」として注意されてきたものである。また第5号住居跡のカマドも、周壁に設置されているが、両袖部が奥壁で結合しており、壁体の平面形は第16・20号住居跡のカマドに共通する。また、第17号住居跡は時期不明だが、壁体はやはり馬蹄形で、さらに周壁が屋内に突出してカマドと結合する特徴的な構造である。そこに「初期カマド」と

の共通点を認めるならば、第17号住居跡もⅠ期の集落に含まれる可能性が高いだろう。さらなる類例の蓄積を待って、これら多様な構造のカマドが、当地域におけるカマドの出現と定着の具体相を物語ることを期待したい。

第Ⅱ期の集落は、第2・3・7・9・10・22・25・28号住居跡である。最大規模の第21号住居跡を取り巻くように、標高20.5mの等高線に沿って弧状の配置をとっている。第9・10号住居跡が重複していることから細分の必要を残しているが、いずれの住居とも80～90mの距離を置いた、第21号住居跡の孤立的な立地には注目してよいだろう。第21号住居跡は、調査区の東辺に位置するが、東に接する桑原A遺跡の遺構群からも隔絶が認められる。床面積46.1㎡で、標田遺跡では最大である。支柱もそれに応じ、やはり遺跡内で唯一、一辺2間の8本構造となっている。大型住居の性格については学史においてしばしば話題となり、階級格差の表象、あるいは集会所等複数の説がある。ここでは、その孤立的な立地も加え、集落内の有力者層の住居とみる説が注目される。もっとも、その隔絶性を強調するには、これに次ぐ規模の第7号住居跡との共存関係を確認する課題も残している。床面からベンガラ塊が出土していることは、遺構の性格に関連するだろうか。あらためて特筆しておきたい。

Ⅲ期の集落は、第1・8・11・23・24号住居跡である。Ⅰ・Ⅱ期ほど分離の根拠は明確ではないが、ほぼⅡ期集落の分布に沿っており、南北に散在している。1・2軒を単位としてブロックをなしているようにみえるが、これがⅠ期以来の基本的な景観なのだろう。

(4) 残された課題

果たせなかった課題のうち、急務といえるのは、隣接する桑原A遺跡と一括しての分析である。両者が時期的に重なり、有機的な関連を有するだろうことは確実である。この点は当然ながら当初より念頭にあり、それにむけて準備を進めたが、自遺跡の検討に窮々とするうちに、何ら形にすることができないままとなってしまった。他日を期して果たしたい。

また、標田遺跡の資料によって、比企・入間型杯の初期様相がいっそう明らかになったといえるだろう。分析の当否はさておくとし、和泉式土器との関係の整理も検討課題として残されている。比企・入間型杯の祖型は、しばしば和泉式土器に求められる。それについての持論を持ちえぬままでののだが、朝鮮半島南部との関連に注目する立石盛詞の視点(立石1989)(註1)も記憶しておきたい。近年、和泉式土器の編年的分析を、韓式土器の影響を重視する視点からおこなった論考が提出されており(坂野1991)、今後5～6世紀の土器研究において、渡来系の影響の確認は重要な課題といえる。比企・入間型杯の成立と定着の背景を検討する上でも、念頭に置いておきたい。

(註1)「埼玉県には比企型杯と呼ばれる赤彩された杯形土器が県西部比企地方を中心に分布することが知られている。この土器は和泉期ないしは鬼高期の晩から変化したもの、あるいは須志器杯を模倣し、且つ口唇部の発達したものと見る見方が大勢を占めている。しかし、遠く大韓民国慶尚南道からもよく似た土器が出土しており、半島系土器の影響を受けたものとも考えることも出来るかもしれない。」(立石1989 p392)

文献目録

- 加納俊介 1981「駿河湾東部の弥生土器編年のための覚書」『月の輪遺跡群Ⅱ』 富士宮市教育委員会
- 加納俊介 1987「用語に関する二、三の問題」『第3回東海埋蔵文化財研究会「欠山式とその前後」研究・報告編』愛知考古学談話会
- 鈴木徳雄 1993「鬼高式における大形鉢の意義」『土曜考古』第17号 土曜考古学研究会
- 立石盛詞 1989『御伊勢原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第79集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 富田和夫 1992『稲荷前遺跡(A区)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第120集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 富田和夫 1994『稲荷前遺跡(B・C区)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第145集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 坂野和信 1991「和原式土器の成立過程とその背景」『埼玉考古学論集』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 水口由紀子 1989「いわゆる“比企型坏”の再検討」『東京考古』7 東京考古談話会
- 村田健二 1992『桑原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第121集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 家根祥多 1994「藤原式の提唱」林謙作編『繩紋晩期前葉—中葉の広域編年』平成4年度科学研究費補助(総合A)研究成果報告書 北海道大学文学部

付篇. 自然科学的分析

1. 棚田遺跡の珪藻化石

藤根 久 (株) パレオ・ラボ)

1. はじめに

珪藻は、10~500umの微小な藻類で、個々の種は水域の塩分濃度・pH値・流水に対する適応性などの要因により、特定の生息場所・生活形態（浮遊・付着生活など）を有している。また、珪藻殻は、珪酸体からなるため地層中に化石として残り易い。このような特性から、古環境、特に堆積環境を復元するために利用される。

分析試料を採取した棚田遺跡は、坂戸市と鳩山町の境界を流れる越辺川の扇状地の堆積物から構成される低地部に位置する。この遺跡の中央には東西に延びる歴史時代の河川跡の流路があり、その南側には微高地上の集落を挟んで東西に延びる古墳時代後期の大きな溝がある。このような状況のもとで古環境の復元を目的として、花粉等の自然科学分析を行なう。

ここでは、上述の中央の河川跡付近および溝の堆積物を用いて堆積環境を検討するために、珪藻分析を行なうものである。

2. 堆積物の層序

ここでは、各グリッド（D5、O4、O7グリッド）ごとの堆積物および層序についてその概略を述べる。なお、詳細については、本文中を参照されたい。

a. D5グリッド

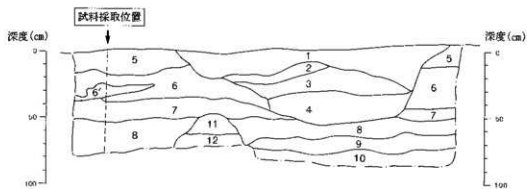
遺跡の中央を東西に走る河川跡付近のグリッドである。第1図の分析試料採取位置において上位から5層、6層、6'層、7層、8層に区別される。

5層は、褐灰色のシルト質砂層からなる。6層は、褐灰色の粘土質シルトで、炭化物を少量含んでいる。6'層は褐色のシルト質砂層で、層厚が最大8cmのレンズ状の層であり、6層に挟在する。7層は、褐灰色の砂質シルトで、炭化物の薄層が2層準で入る。また、全体的に黄褐色のリモナイト層がブロック状に入る。8層は、褐灰色の砂質シルトで上位より灰色が強い。また、斑点状のリモナイトおよび炭化物層が下部に多く見られる。

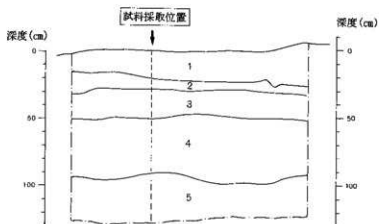
b. O4グリッド

遺跡の南側を東西に走る古墳時代後期の溝で、遺跡の東端に位置するグリッドである。第1図の分析試料採取位置において、上位から1層、2層、3層、4層、5層に区別される。1層は、褐灰から黒褐色の砂を含む粘土質シルトからなり、2~3cmの礫が散在する。2層は、黒褐色のシルト質砂層からなり、2~10cm程度の礫を含む。また、下部には、黒褐色の砂質シルト~砂質粘土がある。3層は、灰色の粘土質シルトからなり、2~3cm程度の礫を含む。また、褐色のリモナイトが縦方向に入る。4層は、黒色の泥炭質粘土からなり、4~5cm程度の礫が入る。5層は、灰色の5

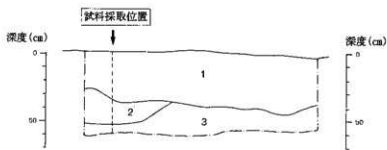
D5グリッド



O4グリッド



O17グリッド



第1図 各グリッドの層位と分析試料採取位置

～50mmの礫を多く含む粘土層である。

c. O17グリッド

遺跡の南側を東西に走る古墳時代後期の溝で、遺跡の西端に位置するグリッドである。第1図の試料採取位置において、上位から1層、2層、3層に区分される。1層は、黒色の泥炭質粘土または泥炭からなり、植物根が混入し周囲にリモナイトが付着している。また、下部には、2～3cm程度の褐色のシルト質粘土がブロック状に見られる。2層は、暗灰色のシルト質～泥炭質粘土からなり、5～20mmの礫が散在している。また、下部には、褐色のシルト質粘土が混じる。3層は、暗褐色の砂質粘土からなり、2～10mmの亜角～亜円礫を含んでいる。

3. 試料及び処理方法

試料は、柱状試料(約10×10cm断面)として採取し、乾燥・型崩れを防ぐためにアルミホイルおよび食品用包装ラップで包んだ。さらに、室内に持ち帰った後、層位を考慮に入れ、分析位置を決定し、外部および他試料の汚染を避けるため柱状試料の内部から1cm厚程度をスライスし1試料とした。

珪藻分析を行った試料は、D5グリッドが7試料、O4グリッドが11試料、O17グリッドが5試料である。これらの試料は、以下に示す方法によって処理をした。

- (1) 湿潤重量18程度(秤量する)の試料を300ccのトルビーカーに移し、30%の過酸化水素水30～40ccを加え、ホットプレート上で加熱し、有機物の分解と粒子の分散を行なう。
- (2) 過酸化水素水の反応が終わった後、蒸留水を加え半日程度放置する。
- (3) 上澄液を捨てた後、傾斜法で細粒部のみ選別し再び蒸留水を加え遠心分離器を用いて数回水洗いする。
- (4) 試料を適当な濃度で希釈し、その中からマイクロピペットで適量を取りカバーガラスに滴下する(堆積物中の殻数の算出のため)。その後、ホットプレート上で乾燥させる。
- (5) スライドガラスに封入剤マウントメディア(和光純薬製)を1滴加え封入する。
- (6) 作成したプレパラード試料を光学顕微鏡を用いて1000倍で鏡検し、各プレパラート毎に、200個体以上の珪藻殻を同定し、完形・非完形に分けて計数した(完形殻の出現率の算出のため)。

なお、珪藻化石の同定及び生態にはHustedt(1930, 1927～1966)、Hendy(1964)、Krammer and Lange-Bertalot(1986)、Lowe(1974)、小久保(1960)などを参考とした。

第1表 D5グリッドで検出された珪藻化石産出表(1)

分類群 (学名)	適 応 性				1	2	3	4	5	6	P1
	塩分	pH	流水	生活							
<i>Melosira sulcata</i>	M	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Achnanthes brevipes</i>	B	-	-	-	-	-	-	-	2	2	-
<i>A. inflata</i>	F-ind	Alka	Rhe	B	-	2	-	7	-	1	1
<i>A. lanceolata</i>	F-ind	Alka	Rhe	B	-	-	-	-	1	2	-
<i>Amphora ovalis</i>	F-ind	Alka	Lim	P	-	1	3	6	7	1	3
<i>A. ovalis var. libyca</i>	F-ind	Alka	ind	P	-	-	-	4	2	8	10
<i>A. veneta</i>	F-phl	Alka	ind	B	-	1	-	-	-	-	-
<i>Caloneis bacillum</i>	F-ind	Alka	Rhe	B	-	-	1	2	-	5	-
<i>C. silicula</i>	F-ind	Alka	ind	B	-	-	-	-	1	-	-
<i>C. spp.</i>	F-?	?	?	B	-	-	-	-	2	-	-
<i>Cocconeis placentula</i>	F-ind	Alka	ind	B	1	-	5	12	8	10	10
<i>Cymbella aspera</i>	F-ind	Alka	ind	B	-	-	-	4	1	-	1
<i>C. cuspidata</i>	F-ind	ind	ind	B	-	1	-	3	4	-	2
<i>C. lanceolata</i>	F-ind	Alka	Lim	B	-	-	-	-	4	5	-
<i>C. minuta</i>	F-ind	ind	ind	B	-	2	88	5	5	1	4
<i>C. naviculiformis</i>	F-ind	ind	ind	B	-	-	-	2	1	-	4
<i>C. sinuata</i>	F-ind	ind	ind	B	-	-	-	1	-	2	-
<i>C. tumida</i>	F-ind	Alka	Lim	B	-	19	5	5	5	5	3
<i>C. turgidula</i>	F-ind	Alka	ind	B	-	152	17	38	26	32	32
<i>C. spp.</i>	F-?	?	?	B	-	-	-	-	4	3	7
<i>Diatoma hiemale</i>	F-ind	Alka	ind	B	-	-	-	-	2	-	2
<i>Diploneis finnica</i>	F-ind	Acid	Lim	B	-	-	1	2	1	-	-
<i>D. ovalis</i>	F-ind	ind	ind	B	-	-	-	1	-	-	-
<i>Epithemia intermedia</i>	F-ind	Alka	Lim	B	-	1	-	-	-	-	1
<i>Eunotia lunaris</i>	F-pho	Acid	Lim	B	-	-	-	-	3	-	-
<i>E. pectinalis</i>	F-pho	Acid	ind	B	-	-	3	18	11	6	12
<i>E. pectinalis var. minor</i>	F-pho	Acid	ind	B	-	-	2	5	7	11	7
<i>E. praerupta</i>	F-pho	Acid	ind	T	-	-	-	-	-	-	1
<i>E. spp.</i>	F-?	?	?	B	-	-	-	2	1	-	4
<i>Frustulia vulgaris</i>	F-ind	Alka	ind	B	-	-	-	-	-	-	1
<i>F. spp.</i>	F-?	?	?	B	-	-	-	2	-	-	-
<i>Gomphonema acuminatum</i>	F-ind	Alka	Lim	B	-	1	2	1	2	3	-
<i>G. clevei</i>	F-ind	Alka	Rhe	B	-	2	10	3	7	2	-
<i>G. constrictum</i>	F-ind	Alka	Lim	B	-	-	3	2	-	2	3
<i>G. gracile</i>	F-ind	ind	Lim	B	-	-	6	1	-	3	1
<i>G. interrupta</i>	F-?	?	?	B	-	-	-	-	1	-	-
<i>G. parvulum</i>	F-ind	ind	ind	B	-	-	17	13	6	13	16
<i>G. spp.</i>	F-?	?	?	B	-	-	-	2	4	2	-
<i>Gyrosigma scalpoides</i>	F-ind	Alka	Rhe	B	-	-	-	1	-	-	-
<i>G. spp.</i>	F-?	?	?	B	-	-	-	-	1	2	1
<i>Hantzschia amphioxys</i>	F-ind	Alka	ind	T	-	-	2	7	9	13	6
<i>Melosira ambigua</i>	F-ind	Alka	Lim	P	-	-	1	5	4	3	3
<i>M. distans</i>	F-pho	Acid	ind	P	-	-	-	-	1	-	2
<i>M. roeseana</i>	F-?	?	?	T	-	-	-	1	-	-	-
<i>M. varians</i>	F-ind	Alka	ind	P	-	-	-	-	-	1	1
<i>Meridion circulae</i>	F-ind	Alka	Rhe	B	-	-	3	2	-	-	4
<i>Navicula americana</i>	F-ind	ind	Lim	B	-	-	-	-	-	1	1
<i>N. bacillum</i>	F-ind	Alka	ind	B	-	-	-	1	1	-	1
<i>N. cryptocephala</i>	F-ind	Alka	ind	B	-	-	-	-	-	-	1
<i>N. cuspidata</i>	F-ind	Alka	ind	B	-	-	-	1	1	-	1
<i>N. eiginensis</i>	F-ind	Alka	Rhe	B	-	-	-	2	2	1	1
<i>N. goeppertiana</i>	F-?	?	?	B	-	-	1	-	1	-	-
<i>N. mutica</i>	F-ind	ind	ind	T	-	2	2	5	3	5	4
<i>N. oppugnata</i>	F-ind	Alka	ind	B	-	-	18	3	5	1	4
<i>N. placentula</i>	F-ind	Alka	Lim	B	-	-	-	-	1	-	-
<i>N. radiosa</i>	F-ind	ind	ind	B	-	1	-	-	-	-	-
<i>N. viridula</i>	F-ind	Alka	Rhe	B	-	-	1	1	-	-	-

第2表 D5グリッドで検出された珪藻化石産出表(2)

分類群(学名)	適応性				1	2	3	4	5	6	P1
	塩分	pH	流水	生活							
<i>Melosira sulcata</i>	M	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Achnanthes brevipes</i>	B	-	-	-	-	-	-	-	2	2	-
<i>N. sp-1</i>	F-?	?	?	T	-	-	-	-	1	1	-
<i>N. spp.</i>	F-?	?	?	B	-	-	6	-	-	-	4
<i>Neidium affine</i>	F-ind	ind	Lim	B	-	-	-	-	-	-	1
<i>N. iridis</i>	F-pho	ind	Lim	B	-	-	-	2	6	1	-
<i>N. spp.</i>	F-?	?	?	B	-	1	-	1	-	-	5
<i>Nitzschia parvula</i>	F-ind	ind	ind	B	-	-	-	-	1	-	1
<i>N. tryblionella</i>	F-pho	ind	ind	B	-	-	-	-	-	-	1
<i>Ophephora martyi</i>	F-ind	Alka	Lim	B	-	-	1	-	1	1	-
<i>Pinnularia acrosphaeria</i>	F-ind	ind	Lim	B	-	-	-	-	-	1	2
<i>P. gibba</i>	F-ind	Acid	ind	B	-	-	3	7	3	5	1
<i>P. hemiptera</i>	F-pho	ind	Lim	B	-	-	-	-	-	-	1
<i>P. interrupta</i>	F-?	Acid	?	B	-	-	2	-	-	-	-
<i>P. microstauron</i>	F-ind	Acid	ind	B	-	-	-	-	-	2	-
<i>P. viridis</i>	F-ind	ind	ind	B	-	-	-	-	4	3	2
<i>P. spp.</i>	F-?	?	?	B	-	-	3	9	12	6	5
<i>Rhizocosphenia curvata</i>	F-pho	Alka	ind	B	-	-	-	-	-	-	1
<i>Phopalodia gibberula</i>	F-pho	Alka	ind	B	-	-	-	2	-	3	1
<i>Stauroneis phoenicenteron</i>	F-ind	ind	ind	B	-	-	-	1	4	4	-
<i>Surirella angusta</i>	F-ind	Alka	Rhe	B	-	-	-	2	2	4	9
<i>S. spp.</i>	F-?	?	?	P/B	-	-	-	-	1	-	1
<i>Synedra rumpens</i>	F-ind	ind	ind	P	-	-	3	-	2	1	1
<i>S. ulna</i>	F-ind	Alka	ind	P	-	19	15	7	18	19	13
<i>S. vaucheriae</i>	F-ind	Alka	ind	P	-	1	3	1	-	-	-
<i>S. spp.</i>	F-?	?	?	P	1	-	-	-	1	1	-
<i>Tabellaria fenestrata</i>	F-pho	Acid	Lim	P	-	-	-	-	-	-	1
<i>T. flocculosa</i>	F-pho	Acid	Lim	P	-	-	1	1	-	-	1
海産種					0	0	0	0	1	0	0
海-汽水産種					0	0	0	0	0	0	0
汽水産種					0	0	0	0	2	2	0
淡水産種					2	206	206	207	201	199	204
計数した総数					2	206	206	207	204	201	204

凡例

塩分濃度に対する適応性	pHに対する適応性	流水に対する適応性	生活型
M : 海産種	Acid : 酸性種	Lim : 止水種	P : 浮遊性種
M-B : 海-汽水産種	ind : 不定種	ind : 不定種	B : 底生種
B : 汽水産種	Alka : アルカリ種	Rhe : 流水種	P/B : 浮遊性 or 底生種
F-pho : 淡水産-好塩種	? : 不明種	? : 不明種	T : 陸生種
F-ind : 淡水産-不定種			? : 不明種
F-pho : 淡水産-嫌塩種			
F-? : 淡水産-不明種			

第3表 O4グリッドで検出された珪藻化石産出表(1)

分類群 (学名)	適 応 性				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
	塩分	pH	流水	生活											
<i>Biddulphia</i> spp.	M	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes exigua</i>	F-ind	Alka	ind	B	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>A. lanceolata</i>	F-ind	Alka	Rhe	B	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Amphora ovalis</i>	F-ind	Alka	Lim	P	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>A. ovalis</i> var. <i>libyca</i>	F-ind	Alka	ind	P	2	1	4	1	2	-	-	-	-	-	-
<i>A. spp.</i>	F-?	?	?	P/B	-	2	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Bacillaria paradoxa</i>	F-phi	ind	ind	B	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis bacillum</i>	F-ind	Alka	Rhe	B	8	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>C. silicula</i>	F-ind	Alka	ind	B	5	15	11	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>C. spp.</i>	F-?	?	?	B	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Cocconeis placentula</i>	F-ind	Alka	ind	B	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella aspera</i>	F-ind	Alka	ind	B	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>C. cuspidata</i>	F-ind	ind	ind	B	1	1	4	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>C. lanceolata</i>	F-ind	Alka	Lim	B	-	-	4	6	-	3	-	-	-	-	-
<i>C. minuta</i>	F-ind	ind	ind	B	18	14	11	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>C. naviculiformis</i>	F-ind	ind	ind	B	3	2	4	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>C. tumida</i>	F-ind	Alka	Lim	B	5	5	6	1	-	1	-	-	-	-	-
<i>C. turgidula</i>	F-ind	Alka	ind	B	6	17	7	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>C. spp.</i>	F-?	?	?	B	1	21	43	6	14	2	-	-	-	-	-
<i>Diploneis linnica</i>	F-ind	Acid	Lim	B	-	1	2	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>D. ovalis</i>	F-ind	ind	ind	B	5	18	22	2	3	-	-	-	-	-	-
<i>D. yatukaensis</i>	F-ind	?	Lim	B	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-
<i>D. spp.</i>	F-?	?	?	B	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-
<i>Ephemia zebra</i>	F-ind	Alka	ind	B	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia arcus</i>	F-pho	Acid	ind	B	1	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>E. gracilis</i>	F-pho	Acid	?	B	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>E. pectinalis</i>	F-pho	Acid	ind	B	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>E. pectinalis</i> var. <i>minor</i>	F-pho	Acid	ind	B	3	8	1	1	-	-	1	-	-	-	-
<i>E. spp.</i>	F-?	?	?	B	1	1	2	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria construens</i>	F-ind	Alka	ind	P/B	3	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Frustulia vulgaris</i>	F-ind	Alka	ind	B	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>F. spp.</i>	F-?	?	?	B	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema acuminatum</i>	F-ind	Alka	Lim	B	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>G. constrictum</i>	F-ind	Alka	Lim	B	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>G. gracile</i>	F-ind	ind	Lim	B	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>G. parvulum</i>	F-ind	ind	ind	B	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>G. subtile</i>	F-ind	Alka	ind	B	1	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gyrosigma</i> spp.	F-?	?	?	B	8	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Hantzschia amphioxys</i>	F-ind	Alka	ind	T	8	1	3	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Melosira ambigua</i>	F-ind	Alka	Lim	P	-	1	1	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>M. granulata</i>	F-ind	Alka	Lim	P	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>M. italica</i>	F-ind	Alka	ind	P	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>M. spp.</i>	F-?	?	?	P	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Navicula bacillum</i>	F-ind	Alka	ind	P	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>N. cryptocephala</i>	F-ind	Alka	ind	B	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>N. cuspidata</i>	F-ind	Alka	ind	B	3	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>N. elginensis</i>	F-ind	Alka	Rhe	B	5	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>N. gastrum</i>	F-ind	ind	Lim	B	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>N. mutica</i>	F-ind	ind	ind	T	2	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>N. pupula</i>	F-ind	ind	ind	B	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>N. radiosa</i>	F-ind	ind	ind	B	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>N. spp.</i>	F-?	?	?	B	4	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Naidium iris</i>	F-pho	ind	Lim	B	6	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>N. productum</i>	F-pho	Acid	?	B	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>N. spp.</i>	F-?	?	?	B	-	1	4	-	-	-	-	-	-	-	-

第4表 O4グリッドで検出された珪藻化石産出表(2)

分類群(学名)	適応性				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
	塩分	pH	流水	生活											
<i>Biddulphia</i> spp.	M	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia parvula</i>	F-ind	ind	ind	B	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>N. tryblionella</i>	F-phl	ind	ind	B	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>N. spp.</i>	F-?	?	?	P/B	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia acrosphaeria</i>	F-ind	ind	Lim	B	4	3	2	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>P. braunii</i>	F-pho	Acid	Lim	B	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>P. divergens</i>	F-pho	Acid	?	B	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>P. gibba</i>	F-ind	Acid	ind	B	5	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>P. hemiptera</i>	F-pho	ind	Lim	B	1	2	-	-	2	-	-	-	-	-	-
<i>P. interrupta</i>	F-?	Acid	?	B	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>P. maior</i>	F-ind	Acid	Lim	B	6	12	6	1	1	-	-	-	-	-	-
<i>P. microstauron</i>	F-ind	Acid	ind	B	5	4	1	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>P. subcapitata</i>	F-ind	ind	ind	B	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>P. viridis</i>	F-ind	ind	ind	B	8	12	12	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>P. spp.</i>	F-?	?	?	B	13	24	18	20	15	5	-	-	-	-	-
<i>Rhopalodia gibba</i>	F-ind	Alka	ind	P	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis acuta</i>	F-ind	Alka	ind	B	3	6	5	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>S. phoenicenteron</i>	F-ind	ind	ind	B	6	10	4	1	-	1	-	-	-	-	-
<i>S. spp.</i>	F-?	?	?	B	6	2	6	2	4	2	-	-	-	-	-
<i>Suriella angusta</i>	F-ind	Alka	Rhe	B	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>S. tenera</i>	F-ind	Alka	Lim	P	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>S. spp.</i>	F-?	?	?	P/B	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Synedra ulna</i>	F-ind	Alka	ind	P	3	2	1	1	2	1	-	-	-	-	-
<i>S. vaucheriae</i>	F-ind	Alka	ind	P	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>S. spp.</i>	F-?	?	?	P	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
海産種					1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
海-汽水種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
汽水産種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
淡水産種					202	204	206	52	51	19	2	1	0	0	2
計数した殻数					203	204	206	52	51	19	2	1	0	0	2

凡例

塩分濃度に対する適応性	pHに対する適応性	流水に対する適応性	生活型
M : 海産種	Acid : 酸性種	Lim : 止水種	P : 浮遊性種
M-B : 海-汽水産種	Ind : 不定種	Ind : 不定種	B : 底生種
B : 汽水産種	Alka : アルカリ種	Rhe : 流水種	P/B : 浮遊性 or 底生種
F-phl : 淡水産-好塩種	? : 不明種	? : 不明種	T : 陸生種
F-ind : 淡水産-不定種			? : 不明種
F-pho : 淡水産-嫌塩種			
F-? : 淡水産-不明種			

第5表 O17グリッドで検出された珪藻化石産出表

分類群(学名)	適 応 性				1	2	3
	塩分	pH	流水	生活			
<i>Caloneis bacillum</i>	F-ind	Alka	Rhe	B	2	-	-
<i>Cymbella minuta</i>	F-ind	ind	ind	B	9	-	-
<i>C. turgidula</i>	F-ind	Alka	ind	B	2	-	-
<i>C. spp.</i>	F-?	?	?	B	1	-	-
<i>Eunotia pectinalis var. minor</i>	F-pho	Acid	ind	B	1	-	-
<i>Frustulia vulgaris</i>	F-ind	Alka	ind	B	1	-	-
<i>Gomphonema acuminatum</i>	F-ind	Alka	Lim	B	-	1	-
<i>G. parvulum</i>	F-ind	ind	ind	B	3	-	-
<i>Navicula bacillum</i>	F-ind	Alka	ind	B	1	-	-
<i>Neidium iridis</i>	F-pho	ind	Lim	B	1	-	-
<i>Nitzschia parvula</i>	F-ind	ind	ind	B	1	-	-
<i>N. spp.</i>	F-?	?	?	P/B	1	-	-
<i>Pinnularia borealis</i>	F-ind	ind	ind	T	-	-	1
<i>P. microstauron</i>	F-ind	Acid	ind	B	1	-	-
<i>P. subcapitata</i>	F-ind	ind	ind	B	1	-	-
<i>P. viridis</i>	F-ind	ind	ind	B	1	-	-
<i>P. spp.</i>	F-?	?	?	B	-	-	1
<i>Stauroneis spp.</i>	F-?	?	?	B	1	-	-
<i>Synedra ulna</i>	F-ind	Alka	ind	P	1	-	1
海 産 種					0	0	0
海 - 汽 水 種					0	0	0
汽 水 産 種					0	0	0
淡 水 産 種					28	1	3
計 数 し た 殻 数					28	1	3

凡 例

塩分濃度に対する適応性	pH に対する適応性	流水に対する適応性	生 活 型
<i>M</i> : 海産種	<i>Acid</i> : 酸性種	<i>Lim</i> : 止水種	<i>P</i> : 浮遊性種
<i>M-B</i> : 海-汽水産種	<i>ind</i> : 不定種	<i>ind</i> : 不定種	<i>B</i> : 底生種
<i>B</i> : 汽水産種	<i>Alka</i> : アルカリ種	<i>Rhe</i> : 流水種	<i>P/B</i> : 浮遊性 or 底生種
<i>F-phl</i> : 淡水産-好塩種	?: 不明種	?: 不明種	<i>T</i> : 陸生種
<i>F-ind</i> : 淡水産-不定種			?: 不明種
<i>F-pho</i> : 淡水産-嫌塩種			
<i>F-?</i> : 淡水産-不明種			

4. 珪藻化石群集と堆積環境

珪藻化石群集の解析を行なうために、検出した分類群を可能な限り、大きく水生種と陸生種に分け、さらに水生種は、底生種と浮遊生種（小久保、1960）に細分した。陸生種は、小杉（1986）の示した *Hantzschia amphioxys*, *Navicula contenta*, *Navicula mutica*, *Pinnularia borealis*, *Pinnularia obscura*, 安藤（1982）によりコケ付着珪藻として記載された *Eunotia praerupta* および辻ほか（1986）により陸生珪藻の随伴種と記載された *Navicula* sp.-1 を加えて陸生珪藻とした。この陸生珪藻とは、珪藻の中で水中や水底などの水域の環境以外のたとえばコケ類を含めた陸上の植物の表面や、岩石の表面、土壌の表層部など、大気に接触した環境に生活する一群が知られている珪藻群集である（FLORIN, 1970）。さらに、塩分濃度に対する適応性として嫌塩種・不定種・好塩種に、phに対する適応性として酸性種・不定種・アルカリ種に、流水に対する適応性として止水種・不定種・流水種にそれぞれ細分した（Hustedt, 1930他）。

検出された分類群の合計は、D5グリッドでは、83分類群（その内訳は、27属71種 2亜種）、O4グリッドでは、79分類群（その内訳は、24属61種 2亜種）、O17グリッドでは、19分類群（その内訳は、11属14種 1亜種）であった。

検出された全分類群の出現率（個数）を第1～5表に示す。さらに、主要珪藻化石ダイアグラム（3%以上の種）を第2・3図に示す。各珪藻の層位分布を見ると、特定の層帯で出現率を変えるものがある。このような群集組成の層位変化の特徴から、D5グリッドの左側については下位よりI～IIIの3帯に、O4グリッドについては下位よりI～IIIの3帯にそれぞれ分帯した。なお、O17グリッドは、珪藻殻が極めて少なく、環境解析を行なうにはやや困難なため、ダイアグラムとしては図示しなかった。以下に、この分帯にしたがって珪藻化石群集の特徴および堆積環境について下位から述べる。

a. D5グリッド

I帯（試料 No 3～P1、合計 5試料）：No 3の試料で底生種の *Cymbella minuta* が32.0%出現するほかは、全体的にアルカリ性・底生種の *Cymbella turgidula* が8.3～18.4%出現しており、アルカリ性の水域に生育する珪藻が多いこと、また、植物あるいは底質に付着して生活する底生種の多いことで特徴づけられる。なお、下部より比較的乾燥した環境に生育する *Hantzschia amphioxys* など陸生珪藻が減少する様子が見られる。このことは、堆積物が上部では粗粒化するが泥質であること、水質がアルカリ性であること、また、水深のあるところで生育する浮遊性の珪藻が少ないことから、水深のない沼沢地のような環境であったと考えられる。また、陸生珪藻が減少することから、常時滞水する環境が広がるか、もしくは陸生珪藻が生育するような環境から離れた環境に変化したと思われる。なお、P1試料はD5グリッドの断面において、畦畔状を呈したところの上部から採取した試料で、ほぼこのI帯に似た環境であることがわかった。

II帯（試料 No 2、1試料）：このII帯は、アルカリ性・底生種の *Cymbella turgidula* が73.8%と優先することから、下位のI帯とは区分した。ただし、環境としては、I帯と大きな差はないが、堆積物が砂質であることから、河川等の流入があったと思われる。

III帯（試料 No 1、1試料）：このIII帯は、ほとんど珪藻が出現しない。このことは、6'層のよ

うに砂質の堆積物がレンズ状に入ること、基本的には粗粒分が多いことから、試料2で代表される珪藻の生育できない変化の激しい環境であったと考えられる。

b. O4グリッド

I帯(試料 No.6~11、合計 6試料) : このI帯は、珪藻がほとんど算出しない。3層下部から5層の上部に及ぶ堆積物に相当するが、いずれも粒度分析の結果(IV. 棚田遺跡古墳時代溝中の堆積物参照)から含砂率が極めて高いことがわかる。このように、4層の泥炭質粘土であるにもかかわらず含砂率が高いこと、1g当たりの珪藻殻数が10⁶台であることから、珪藻が十分生息できない環境であったことを裏付けている。

II帯(試料 No.4~5、2試料) : 破片が多く同定するには至らなかったが、特に優先種ということではないが、底生種のCymbella属やPinnularia属が約10~30%と極めて多い。このことは、粒度分析の結果から含砂率が約10%前後とI帯と同様高いことから、他の場所で生育していた珪藻の遺骸が流水によって運ばれてきたものと考えられる。ただし、なかには完形殻の珪藻も見られることから、この時期に珪藻が生育し始めたものと思われる。III帯で出現する珪藻群集はこのことを示していると思われる。

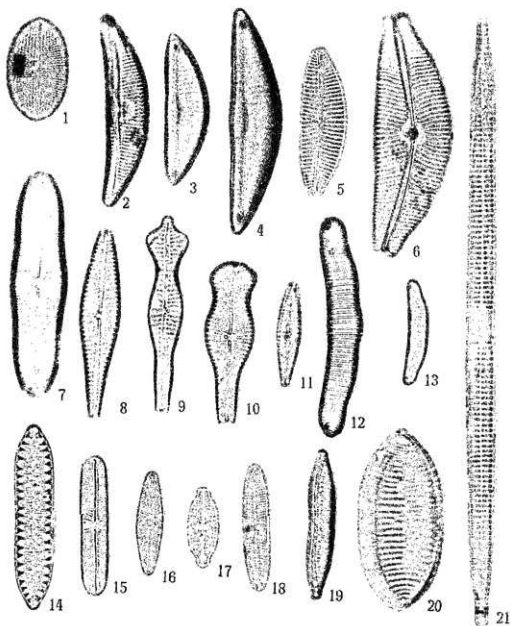
III帯(試料 No.1~3、3試料) : 1g当たりの珪藻殻数が10⁶台と特に高くないが、完形殻の珪藻も出現しており、安定した珪藻群集であることが分かる。特に優先種は見当たらないが、底生種が多く出現している。水質は、どちらかといえばアルカリ性であること、また、水深のあるところで生育する浮遊性の珪藻が少ないことから、水深のない沼沢地のような環境であったと考えられる。

c. O17グリッド

珪藻分析を行った試料は、ほぼ均等に1層が3点、2層が2点であったが、珪藻化石は、1層では、検出されたが極わずかで、2層では全く検出されなかった。このことは、粒度分析の結果より、含砂率が極めて高く、特に2層では著しいことから、珪藻が生育するには適さない環境であったと考えられる。

引用文献

- 安藤一男(1982):『日本産コケ付着珪藻(5)』藻類 p.30・319-324.
- FLORIN,M,B.(1970):Late-glacial diatoms of Kirchner Marsh, southeastern Minnesota. *Nova Hedwigia*,31,667-756
- Hendy,N.I.(1964):Bacillariophyceae(Diatoms).An introductory account of the smaller algae of British coastal waters. Part V,Ministry of Agriculture,Fisheries and Food, London.
- Hustedt,F.(1930):Bacillariophyta.Susswasser-Flora Mitteleuropas,10,Gustav Fischer, Jena.
- Hustedt,F.(1927-1966):Die Kieselalgen Deutschlands,Osterreichs und der Schweiz unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas sowie der angrenzenden Meersgebiete. Kryptogamen-Flora von Deutschland. Osterreich und Schweiz.7,Leipzig.
- 小久保清治(1960):『浮遊珪藻類』330PP. 恒屋社厚生閣
- 小杉 正人(1986):「陸生珪藻による古環境の解析とその意義—わが国への導入とその展望—」『植生史研究』1号、29-44.
- Krammer,K.and Lange-Bertalot,H.(1986):Bacillariophyceae.1 Teil:Naviculaceae. 876p.,Gustav Fischer,Verlag.
- Lowe,R.L.(1974):Environmental requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms.333p.,National Environmental Reserch Center.
- 辻誠一郎・南木睦彦・小杉正人(1986):「館林の池沼群と環境の変遷史」『茂林寺沼及び低地湿原調査報告書』第2集、110PP. 館林市教育委員会



- | | |
|--|--|
| 1. <i>Cocconeis placentula</i> (D5,P1) | 2. <i>Amphora ovalis</i> v. <i>lybica</i> (D5,3) |
| 3. <i>Cymbella minuta</i> (D5,2) | 4. <i>Cymbella minuta</i> (D5,4) |
| 5. <i>Cymbella turgidula</i> (D5,3) | 6. <i>Cymbella tumida</i> (D5,3) |
| 7. <i>Caloneis silicula</i> (O4,1) | 8. <i>Gomphonema glacile</i> (D5,3) |
| 9. <i>Gomphonema acuminatum</i> (D5,3) | 10. <i>Gomphonema constrictum</i> (D5,3) |
| 11. <i>Gomphonema parvulum</i> (D5,3) | 12. <i>Eunotia pectinalis</i> (D5,3) |
| 13. <i>Eunotia pectinalis</i> v. <i>minor</i> (O4,2) | 14. <i>Surirella angusta</i> (D5,P1) |
| 15. <i>Navicula bacillum</i> (D5,P1) | 16. <i>Navicula mutica</i> (D5,P1) |
| 17. <i>Navicula elegendensis</i> (O4,1) | 18. <i>Caloneis bacillum</i> (O4,1) |
| 19. <i>Hantzschia amphioxys</i> (D5,P1) | 20. <i>Nitzschia tryblionella</i> (O4,1) |
| 21. <i>Synedra ulna</i> (D5,3) | すべて 1400倍 |

第4図 化石顕微鏡写真

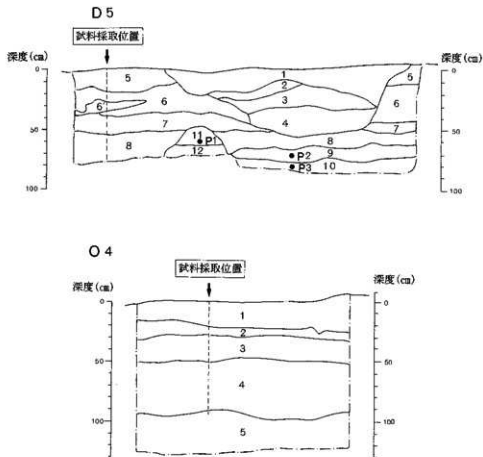
2. 坂戸市棚田遺跡の古墳時代以降の花粉化石群集

吉川昌伸 (榎 パレオ・ラボ)

1. はじめに

棚田遺跡は、坂戸市の関越自動車道の西側、越辺川南の竹の内付近くに位置する。地形的には、岩殿丘陵と毛呂台地に挟まれた越辺川の氾濫源にある。棚田遺跡の東には、桑原A遺跡、広面B遺跡が隣接する。棚田遺跡では、時代の異なる2つの大きな溝があり、1つは遺跡中央部を東西に伸びる浅谷で、奈良・平安時代の遺物を包含する。もう1つは、遺跡南側を東西方向に発達する比較的大きな溝である。これは、古墳時代後期の遺物を包含する。

棚田遺跡は、関東平野西縁部に位置し、植生史研究において重要な地点と言える。しかし、木材化石や大型植物遺体が含まれないこと、無機物が卓越する堆積物であることから植生・植物相の復



第5図 各グリッドの層位と分析試料採取位置

元においての情報は少ないと言える。ここでは、溝の堆積物を中心に古墳時代以降の花粉化石群集の検討を行った。

2. 堆積物の記載

花粉化石の検討は、D5、O4地点の2ヶ所で行った。位置は、遺跡の章を参照されたい。以下に2地点の堆積物の記載を行う。

a. D5地点の堆積物の記載

D5地点は、遺跡の北西部に位置する。D5地点の断面図を第5図に示す。土層は、12層に区分され、5～12層は古墳時代の堆積層からなりそれを切って溝が形成される。溝の堆積物(1～4層)には、奈良・平安時代の遺物が含まれる。この溝は、遺跡中央部を東西方向に長く伸びる。試料採取地点の地質柱状図は、花粉分布図の左端に示す。また、分析試料のP1は11層、P2は9層、P3は10層よりスポットで採取した。

11・12層は、畝状の高まりを示し、暗青灰色粘土質シルトよりなる。10層は黒褐色粘土よりなり粘性は高い。炭化物片を僅かに含む。9層は、褐色よりの黒褐色砂質粘土で礫(5～10mm)を少量含む。8層は、灰色よりの褐色砂質シルト質粘土よりなり、層厚は24cm程度である。また、褐鉄鉱が斑状に沈積し、炭化物片が下部に多い。7層は、褐灰色砂質シルトよりなり、層厚は15cm前後である。褐鉄鉱が層状及び斑状に沈積し、炭化物の薄層(2mm程度)が入る。6層は、褐灰色粘土質シルトで2～5mmの炭化物粒及び1～2mmの薄層が入る。6層は、褐色粗粒から極粗粒砂で最大8mmの礫が入る。層の連続性は悪く、厚いところで7cmである。5層は、褐色シルトに中粒砂が多量に混じる。層厚は、15～18cmである。1～4層は、古墳層を浅谷して形成された溝の埋積物で、砂礫ないし中粒砂からなる。1～4層は、分析の対象とはしていない。

b. O4地点の堆積物の記載

O4地点は、遺跡の南西端に位置し、遺跡南側を東西に発達する溝の堆積物からなる。大きくは、上位より1～5の5層に区分される(第5図)。5層は、礫層よりなり5～50mmの礫径からなる。基質は、暗緑灰色粗～極粗粒砂質粘土よりなる。上部10cmは、黒褐色よりの色調を呈し、材片を含み褐鉄鉱が沈積する。層厚は、33cm以上である。4層は、黒色有機質砂質粘土で、層厚は45cmである。4～5mmの小礫が散在し、褐鉄鉱が縦に発達する。また、植物の細かな根が入る。3層は、暗灰褐色粘土質シルトないし砂質シルト質粘土よりなり、層厚は20cmである。粘性が高く、1～3cmの礫や1～2mmの灰白色粒子が散在する。また、縦に褐鉄鉱が発達する。上部5cmは、砂質粘土ないし粘土質砂(中～粗粒)よりなり、植物の茎が入り周囲に褐鉄鉱が沈積する。2層は、2層に細分される。下部層は、黒褐色砂質シルトないし砂質粘土よりなり、層厚は4～5cmで材片を含み、礫は含まれない。上部層は、層厚8cm前後で黒褐色シルト質砂(中～極粗粒)よりなり、2～10cmの礫や木材化石を含む。1層は、黒褐色から褐灰色砂質粘土質シルトよりなり、2～4cmの礫が散在し、植物の根が入る。層厚は、20cm前後である。

3. 試料と抽出方法

試料は、一部を除いて連続柱状ブロックで採取し、後日室内でブロックから1 cm以下の厚さで切り出した。この時試料の汚染には細心の注意を払った。試料採取層準は、花粉分布図の左端及び断面図に示した。また、同一層準の他の試料で含水比（湿潤土中の水の質量／乾燥土の質量×100）を求めた。

花粉化石の抽出は、湿重を秤量後、10%KOH（湯煎約15分）－傾斜法により粗粒砂除去（砂分を回収後、乾燥、秤量、篩別（0.063mm）、篩に残った砂を秤量）－48%HF（約30分）－重液分離（ZnBr₂ 比重2.1、750rpm 20分、2,500rpm 10分）遠心分離後浮上物を回収し比重を下げ沈澱さす）2度繰り返すアセトリシス処理（水酢酸による脱水、濃硫酸9：無水酢酸1の混液で湯煎5分）の順に物理・化学処理を行った。

プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、タッチミキサーで十分攪拌後マイクロベットで取り、グリセリンで封入した。作成時に残液量とプレパラート作成に用いた容量を計測した。

4. 棚田遺跡の花粉化石群集の記載

a. 棚田遺跡より出現した分類群

同定は、断片的計数による花粉組成の系を無くすため、プレパラートの全面を行った。この間に出現した分類群と個数を第6・7表に示す。主要花粉・孢子化石については、花粉分布図に示した（第6・7図）。出現率は、樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・孢子は総花粉・孢子数を基数として百分率で算出した。図表中で複数の分類群をハイフンで結んだものは、分類群間の区別が明確でないものである。また、クワ科、バラ科、マメ科の分類群には樹木と草本があるが、区別が出来ないためここでは草本花粉に含めてある。

図版に示したPAL.MY番号は、単体標本（花粉化石を1個のみ拾い上げ封入したプレパラート）の番号を示す。単体標本の作成は、辻（1975）に従う。これら標本は(株)パレオ・ラボに保管してある。

出現した分類群数は、D5地点が樹木が30、草本が24、形態分類を含む孢子が3、O4地点が樹木が30、草本が35、形態分類を含む孢子が4である。D5及びO4の両地点では、樹木が36、草本が39、形態分類を含む孢子が4である。

b. D5地点の花粉化石群集の記載

D5地点では、花粉化石が出現する試料とそうでないものに明確に分けられ、それは同一層内でも見られる。花粉化石が比較的多く出現したのは、No.3・5・6・P1の4試料である。そのうちNo.5については、樹木花粉が100個以下のため花粉分布図に示していないが、組成はNo.6とほぼ同じと言える。

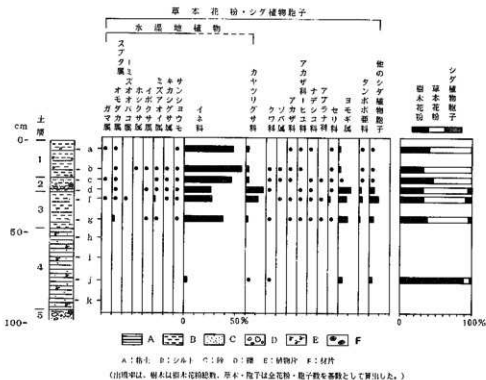
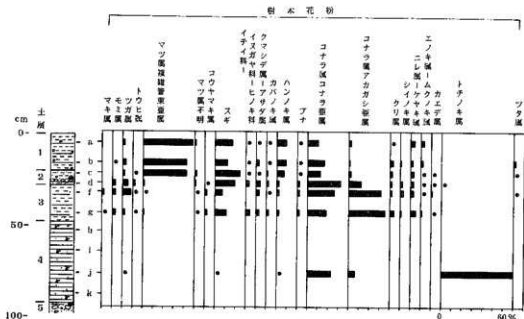
樹木花粉組成は、コナラ亜属ないしアカガシ亜属が多産し、モミ属、ツガ属、スギ、クマシテ属－アサダ属、ニレ属－ケヤキ属、エノキ属－ムクノキ属などを低率ながら伴う。スギは、下部で比較的多く、逆にエノキ属－ムクノキ属は上部で多い。草本花粉・孢子では、No.P1でカヤツリグサ科が24%と比較的多く、イネ科、ヨモギ属、シダ植物孢子など及び水生植物のガマ属、ヒルムシロ属、

第6表 D5グリッドの花粉化石組成表

和名	学名	2	3	4	5	6	P2	P3	P1
樹木									
マナヅ属	<i>Podocarpus</i>	-	-	-	1	-	-	-	1
モミ属	<i>Abies</i>	-	3	-	8	5	-	-	18
ツガ属	<i>Tsuga</i>	-	-	-	2	7	-	-	11
マツ属(単雄管束亜属)	<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxyylon</i>	-	-	-	-	-	-	-	1
マツ属(複雄管束亜属)	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	-	1	-	1	3	-	-	5
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	-	-	-	-	-	-	-	3
コウヤマキ属	<i>Scoladophya</i>	-	-	-	1	1	-	-	1
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	-	-	-	-	6	-	-	27
イチイ科-イヌガサ科-ヒノキ科	T. C.	-	-	-	2	-	-	-	8
ヤナギ属	<i>Salix</i>	-	1	-	-	-	-	-	3
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	-	2	-	-	-	-	-	-
サウグルミ属	<i>Pterocarya</i>	-	2	-	-	-	-	-	-
クルミ属	<i>Juglans</i>	-	4	-	1	1	-	-	1
クマシダ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	-	-	-	7	4	-	-	8
カバノキ属	<i>Betula</i>	-	-	-	1	1	-	-	1
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	-	-	-	-	1	-	-	5
ブナ	<i>Fagus crenata</i> Blume	-	2	-	3	2	-	-	3
イヌブナ	<i>Fagus japonica</i> Maxim.	-	-	-	-	-	-	-	2
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	-	31	1	32	37	1	1	38
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	-	86	1	20	32	-	-	65
クリ属	<i>Castanea</i>	-	-	-	-	2	-	-	1
シイノキ属	<i>Castanopsis</i>	-	-	-	1	2	-	-	5
ユレ属-ケヤク属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	-	2	-	6	5	1	-	7
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	-	12	-	7	1	-	-	5
コクサキ属	<i>Orixa</i>	-	1	-	-	-	-	-	-
アカメガシワ属	<i>Mallotus</i>	-	1	-	-	-	-	-	-
カエバ属	<i>Acer</i>	-	-	-	1	1	-	-	1
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	-	-	-	-	1	-	-	12
クロウメモドキ科	Rhamnaceae	-	-	-	-	1	-	-	1
ウコギ科	Araliaceae	-	1	-	1	2	-	-	-
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	-	1	-	-	-	-	-	-
草本									
ガマ属	<i>Typha</i>	-	2	-	1	-	-	-	4
ヒルムシロ属	<i>Potamogeton</i>	-	-	-	-	-	-	-	2
イネ科	Gramineae	-	7	-	18	34	2	1	23
カヤツリグサ科	Cyperaceae	-	7	1	10	11	-	-	105
イボクサ属	<i>Aneilema</i>	-	-	-	-	-	-	-	2
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	-	-	-	-	-	-	-	1
ユリ科	Liliaceae	-	-	-	-	-	-	-	1
クワ科	Moraceae	-	-	-	5	3	-	-	4
サナエタテ節-ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocalon</i>	-	1	1	8	7	-	-	5
アカザ科	Chenopodiaceae	-	-	-	-	1	-	-	-
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	-	-	-	3	-	-	-	-
ナゲシコ科	Caryophyllaceae	-	-	-	1	-	-	-	-
キンボウケ科	Ranunculaceae	-	-	-	-	-	-	-	3
アブラナ科	Cruciferae	-	-	-	4	8	-	-	-
ワレモコウ属	<i>Sanguisorba</i>	-	-	-	-	-	-	-	1
他のバラ科	other Rosaceae	-	2	-	-	2	-	-	-
マメ科	Leguminosae	-	-	-	-	1	-	-	-
ツリフネソウ属	<i>Impatiens</i>	-	5	-	-	-	-	-	1
セリ科	Umbelliferae	-	-	1	10	8	-	-	1
オオバコ属	<i>Plantago</i>	-	-	-	-	2	-	-	-
ゴキツル属	<i>Actinostemma</i>	-	-	-	-	-	-	-	3
ヘクソカズラ属	<i>Podaria</i>	-	1	-	-	1	-	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	-	21	3	33	40	-	-	26
他のキク亜科	Tubuliflorae	-	-	-	4	2	-	1	-
シダ植物									
ヒカゲノカズラ属	<i>Lycopodium</i>	-	-	1	3	1	-	-	-
ゼンマイ科	Polypodiaceae	-	-	-	1	2	-	-	-
他のシダ植物類了	other Pteridophyta	13	48	15	238	198	3	3	33
樹木花粉									
ヒカゲノカズラ属	Arboreal pollen	0	129	2	95	115	2	1	228
草花花粉	Nonarboreal pollen	0	46	6	97	120	2	2	182
シダ植物類了	Spores	13	48	18	242	201	3	3	33
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	13	223	24	434	436	7	6	443
不明花粉									
不明花粉	Unknown pollen	0	85	0	49	27	0	0	30

第7表 O4グリッドの花粉化石組成表

和名	学名	a	b	c	d	f	g	h	i	j	k
樹木											
マキ属	<i>Podocarpus</i>	-	-	-	-	6	1	-	-	-	-
モミ属	<i>Abies</i>	-	1	-	7	9	5	-	-	-	-
ツガ属	<i>Tsuga</i>	4	7	7	12	20	4	-	1	1	-
トウヒ属	<i>Picea</i>	-	-	1	4	2	1	-	-	-	1
マツ属(樹皮表面)	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyloides</i>	99	93	172	3	1	2	-	-	-	-
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	3	7	3	2	1	-	-	-	-	-
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	-	-	-	2	5	3	-	-	-	-
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	34	26	97	42	19	21	-	-	1	-
イチヒキ科-イソグヤ科-ヒノキ科	T. C.	1	1	3	6	-	7	-	-	-	-
サワグルミ属	<i>Pterocarya</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
クルミ属	<i>Juglans</i>	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-
クマシダ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	1	7	1	8	7	6	-	-	-	-
カバノキ属	<i>Betula</i>	1	1	8	5	1	3	-	-	-	-
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	18	21	28	4	4	3	1	1	1	-
ブナ	<i>Fagus crenata</i> Blume	1	1	1	4	6	4	-	-	-	-
イヌブナ	<i>Fagus japonica</i> Maxim	-	-	-	2	1	2	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Leptobalanus</i>	21	35	48	72	68	35	-	2	32	-
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanus</i>	5	3	7	27	81	67	1	-	8	-
クリ属	<i>Castanea</i>	2	6	8	5	5	7	1	-	-	-
シノキ属	<i>Castanopsis</i>	-	3	-	4	7	2	-	1	-	-
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	6	5	14	7	9	10	-	1	-	-
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celastr-Alphananthe</i>	6	5	3	2	2	2	-	-	-	-
ワザクラ属	<i>Euptelea</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シキミ属	<i>Illicium</i>	1	1	1	4	6	4	-	-	-	-
モチノキ属	<i>Ilex</i>	-	-	2	-	1	-	-	-	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	-	-	1	2	3	1	-	-	-	-
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	-	-	-	-	2	-	-	19	95	1
ツク属	<i>Parthenocissus</i>	-	4	1	-	2	-	-	-	-	-
ウコギ科	<i>Araliaceae</i>	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
エゴノキ属	<i>Styrax</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
草本											
ガマ属	<i>Typha</i>	1	-	1	-	1	-	-	-	-	-
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	2	3	5	2	3	10	-	-	-	-
スズメ草属-ミズオオバコ属	<i>Blyxa - Citeiella</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	<i>Gramineae</i>	238	382	406	184	223	189	3	5	4	2
イヤヅリガサ科	<i>Cyperaceae</i>	17	19	26	110	98	9	-	-	1	1
キク科	<i>Ericacaulon</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ツクサ属	<i>Commelina</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
イボクサ属	<i>Anellima</i>	-	2	-	3	-	1	-	-	-	-
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	-	4	3	5	13	4	-	-	-	-
タウコ科	<i>Moraceae</i>	-	1	1	6	-	3	-	-	1	-
ギンギク属	<i>Rumex</i>	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-
ヤナエタデ属-ウナギカミ属	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinoaulon</i>	2	2	-	10	6	3	-	-	-	-
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	-	3	2	-	1	-	-	-	-	-
アザケ科	<i>Chenopodiaceae</i>	1	4	1	-	1	2	-	-	-	-
アザケ科-ヒユ科	<i>Chenopodiaceae - Amaranthaceae</i>	1	4	-	1	1	2	-	-	-	-
ナデシコ科	<i>Caryophyllaceae</i>	2	-	1	6	4	3	-	-	-	-
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-
他のキンポウゲ科	other <i>Ranunculaceae</i>	-	-	3	1	1	-	-	-	-	-
アブラナ科	<i>Cruciferae</i>	-	-	2	-	4	1	-	-	-	-
キジムシロ属(遠近似種)	cf. <i>Potentilla</i>	1	-	4	1	-	-	-	-	-	-
ウレシモウ属	<i>Sanguisorba</i>	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
マメ科	<i>Leguminosae</i>	-	-	-	-	1	6	-	-	-	-
フウソク属	<i>Geranium</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
トウダイグサ属(遠近似種)	cf. <i>Euphorbia</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
フリフネソウ属	<i>Impatiens</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
キカシダ属	<i>Rotalia</i>	-	3	5	1	5	-	-	-	-	-
アリノトウグサ属	<i>Haloragis</i>	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	<i>Umbelliferae</i>	2	1	1	6	13	1	-	-	-	-
シソ科	<i>Labiatae</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
オキバコ属	<i>Plantago</i>	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-
ゴキソウ属	<i>Actinostemma</i>	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ヘクソカズラ属	<i>Paederia</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	11	15	8	82	65	44	32	19	7	-
他のクク菜科	<i>Tubuliflorae</i>	-	1	-	2	3	2	1	-	-	-
タンポポ属科	<i>Liguliflorae</i>	4	4	2	11	22	6	1	3	-	-
シダ植物											
ヒカゲノカズラ属	<i>Lycopodium</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ゼンマイ科	<i>Osmundaceae</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
サンショウモ	<i>Salvinia natans</i>	3	2	6	1	2	2	-	-	-	-
他のシダ植物類子	other <i>Platodiophyta</i>	3	3	3	37	73	22	4	-	5	2
樹木花粉											
樹木花粉	Arboreal pollen	205	223	408	223	264	190	3	25	138	2
草本花粉	Nonarboreal pollen	283	455	475	436	473	281	38	30	13	3
シダ植物類子	Spores	6	5	8	40	75	24	4	0	5	2
花粉類子総数	Total Pollen & Spores	494	683	891	701	812	495	45	55	156	7
不明花粉	Unknown pollen	7	15	14	21	97	29	4	3	21	2



第7図 O4グリッドの主要花粉分布図

イボクサ属、ミズアオイ属を伴う。Na 6 以上では、シダ植物胞子が多産し、ヨモギ属、イネ科を10%以下の頻度で伴う。水生植物は、ほとんど出現しない。

C. ○4地点の花粉化石群集の記載

4層から比較的多くの花粉が出現したのは、Na j のみで他の試料は少ない。全般に炭化物片が多く見られ、分散されかかった花粉も多い。特にNa h では著しい分解を受けている。Na j では、156個体とそれほど多くの花粉が検出されたわけではないが、トチノキ属が69%と大半を占め、コナラ亜属、アカガシ亜属などを伴うが出現分類群集は少ない。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属、シダ植物胞子が数%で出現する。3層及び2層下部、つまりNa d ~ g では、アカガシ亜属、コナラ亜属が比較的高率に出現し、スギ、ツガ属などを伴う。コナラ亜属は増加し、逆にアカガシ亜属は減少する。草本では、イネ科が26~38%で出現し、カヤツリグサ科、ヨモギ属、シダ植物胞子が比較的高率に出現する。カヤツリグサ科は上部で17%占める。他にオモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、キサシグサ属、サンショウモなどの水生植物やソバ属、アブラナ科などが出現する。2層上部と1層(Na a ~ c)では、マツ属複雑管束亜属(ニヨウマツ亜属)が42~48%と高率に出現し、スギ、コナラ亜属、ハンノキ属を比較的高率に伴う。アカガシ亜属は、2層下部で12%と低率になり、1層では2%以下になる。1層では、イネ科が46~56%と高率に出現し、水生植物などの多様な分類群を伴う。水生植物としては、オモダカ属、ミズアオイ属、キサシグサ属などの抽水植物、浮葉植物のサンショウモなどである。また、ソバ属、アカザ科、アブラナ科などが出現する。

以上のような出現傾向に基づき3帯に区分し、下位よりⅠ~Ⅲ帯と仮称する。Ⅱ帯は更にⅡa、Ⅱbに細分される。各帯は、Ⅰ帯が4層のNa h ~ k、Ⅱ帯が3層のNa f · g (Ⅱa 亜帯)と2層下部のNa d (Ⅱb 亜帯)、Ⅲ帯が2層上部と1層のNa a ~ c である。

5. 堆積物の物理的性質と1g中の花粉粒数

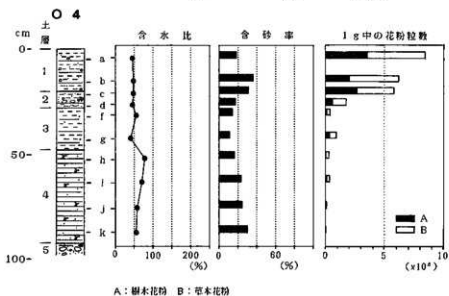
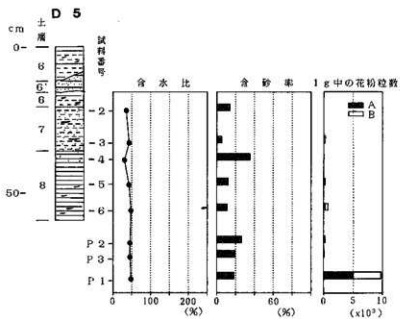
a. D5地点

D5地点では、含水比は35~46%とかなり低く、含砂率は5~35%と変動が激しい。花粉分析試料は、砂が比較的小さい部分を採取していることから、更に高い含砂率を示す層準もある。つまり、有機物に乏しく無機物が卓越する堆積層と言える。1g中の花粉量もNa P 1で9600個含まれるが、他の試料では700個以下である。

○4地点では、含水比は大半が50%前後で、4層上部で70ないし78%と幾分高くなる。含砂率は、4層下部で30%占めるが、上部ほど低くなり3層で14%以下になる。更に上部では、増加し1層下部で36%占める。1g中の花粉粒数は、3・4層では100~9900個以下と著しく少ない。2層上部以降で17800~85200個と多くなる。樹木花粉も同様な変化を示す。ここでは、1g中の花粉量は、含水比や含砂率と相関が殆どないように思える。これは4層が花粉化石を殆ど含まないこと及び1層が現耕作土という特殊な環境にあることに起因するのであろう。

6. 花粉化石群集からみた堆積環境と森林植生変遷

a. 各地点の堆積環境について



第8図 D5・O4グリッド堆積物の物理的性質と1g中の花粉粒数

(1) D5地点

D5地点では、11・12層の形成期にはカヤツリグサ科を主とし抽水植物のイネ科、ガマ属、イボクサ属、ミズアオイ属及び沈水ないし浮葉植物のヒルムシロ属からなる低湿地が形成されていた。11・12層は、形状的に畝状を示すが、イネ科花粉が少なくイネ属型近似種をほとんど伴わないことから畦畔ではないであろう。このことは、9・10層からイネ科花粉も含め花粉が殆ど出現しないことと矛盾しない。8層以降においては、砂を20%前後含み、有機物に乏しい堆積層からなり、6層では頻繁に砂層が入ることから河川の氾濫源的环境下にあったものと考えられ、シダ植物やヨモギ属などが生育するやや乾燥した環境にあったのであろう。

(2) O4地点

古墳時代の包含層である4層形成期には、花粉化石が分解され、水生植物を伴わないことから、基本的には比較的乾燥した環境下で形成されたものであろう。一方、花粉化石からの情報が乏しいことから、草本植生については言及できない。3層から2層下部においては、低湿地が形成されイネ科を主とし、カヤツリグサ科、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、キカシグサ属などの抽水植物及び浮水植物サンショウモなども生育していた。一方、イネ科花粉にはイネ属型近似種が含まれることから水田耕作が行なわれていたのであろう。2層上部及び1層は、ほぼ現耕作土に相当し、イネ科が卓越し水生植物を伴う植生になる。また、上部ほどいわゆる水田雑草の種類も少なくなる。台地上では、3層上部頃からソバの栽培を行っていた。

b. 棚田遺跡周辺の森林植生について

D5地点及びO4地点で得られた結果は、植生変遷史を捉えるには十分とは言えない。それは、時代が特定できないこともさることながら、O4の下部層から花粉化石が殆ど得られないこと、花粉化石以外に植物群に関する情報が無いことにつける。このような状況の基で棚田遺跡周辺の森林植生について検討を行った。

棚田遺跡の古墳時代後期頃の森林植生は、落葉広葉樹のナラ類、クマシデ属-アサダ属、ニレ属-ケヤキ属及び常緑樹のアカガシ亜属、シノキ属から形成されていた。また、O4地点の周囲にはトチノキ属も生育していたであろう。一方、ツガ属、スギなどもそれら森林となんらかの係わりを持って分布していた。O4地点のIIa帯は、時代の特定が出来ないがD5とほぼ同様の組成を示し、マツ属を伴わない。北関東におけるニヨウマツ亜属の増加は、浅間Bテフラ以降に見られ、II帯の組成は少なくともそれ以前の堆積層と言える。森林植生は、古墳時代の頃と同様に、照葉樹のカシ類や落葉樹のナラ類を主とする森林が形成されていた。これら森林も破壊にともないカシ類が減少し、二次林のナラ類が目だってくる。III帯では、マツ属、スギが多産し、他の分類群が減少あるいは低率になる。マツ属の多産は、層位的根拠が確実な地点の分析結果に基づけば、宝永スコリア降下頃以降と言える(辻, 1984)。この時代におけるマツ、スギの増加は植林による可能性が高い。一方、低地部周辺では、ハンノキ属や、エノキ属-ムクノキ属も分布拡大してきた。

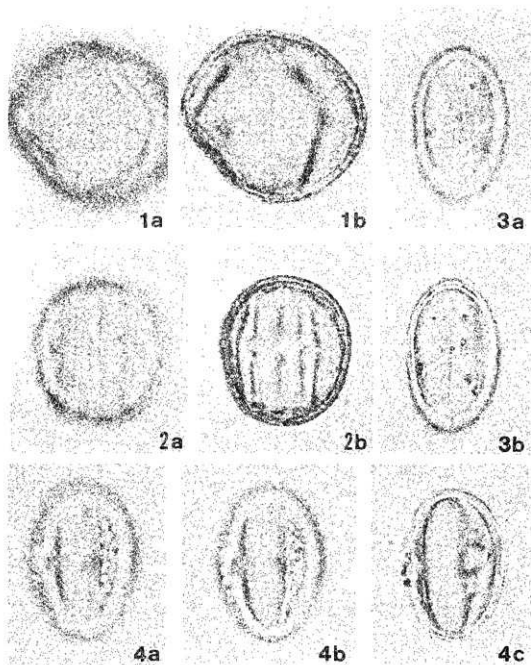
坂戸入西地区では、住宅・都市整備公団土地区画整理事業に伴い、63年度までに9遺跡の発掘が終了し、64年度には2件予定されている。今回、棚田遺跡、広面B遺跡、桑原A遺跡の近接する3つの遺跡の溝あるいは周溝堆積物の花粉化石群集の検討を行った。いづれの地点においても1ヶ所

で植生変遷史を把握できるデータは得られていないが、3地点を総合するとほぼ連続したものが得られる。古墳時代頃は、榮原A遺跡及び棚田遺跡D 5地点、O 4地点の4層で見られる。周囲には、落葉樹のナラ類や照葉樹のカシ類からなる森林が形成され、トチノキ属も周囲に生育していた。中世頃は棚田遺跡O 4地点のⅡ帯及び広面B遺跡で見られ、森林破壊に伴い照葉樹林が衰退あるいは減少し二次林としてのナラ類が増加する。その後ニヨウマツ亜属も分布拡大する。近世は、棚田遺跡O 4地点Ⅲ帯に見られ、マツ、スギが目だってくる。これらは、森林破壊及び植林に伴う変化であろう。

引用文献

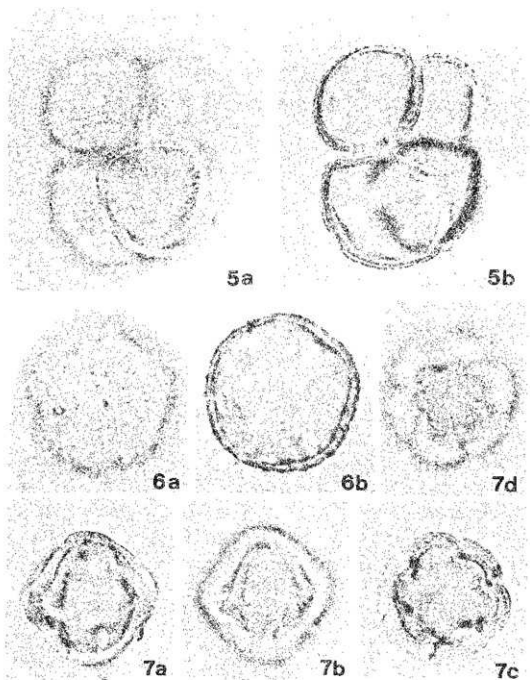
辻 誠一郎 (1975) 「化石花粉のための単体標本について」『地学研究』26 P.253-257

辻 誠一郎 (1984) 「関東地方におけるマツ林繁栄の時代とその背景」『日本生態学会大会講演要旨集』31 P.47



- 1 コナラ属コナラ坐属 (赤道観), D5 No.P1, PAL.MY 748 ($\times 1,150$)
- 2 コナラ属アカガシ亜属 (赤道観), D5 No.P1, PAL.MY 749 ($\times 1,150$)
- 3 トチノキ属 (赤道観), O4 No.j, PAL.MY 744 ($\times 1,440$)
- 4 トチノキ属 (赤道観), D5 No.P1, PAL.MY 747 ($\times 1,440$)

第9図 花粉化石顕微鏡写真(1)



- 5 ガマ属, D5 No.P1, PAL.MY 750 ($\times 1,150$)
 6 オモダカ属, O4 No.d, PAL.MY 754 ($\times 1,440$)
 7 ワレモコウ属 (a・b:赤道観, c・d:極観), D5 No.P1, PAL.MY 752 ($\times 1,150$)

第10図 花粉化石顕微鏡写真(2)

3. 棚田遺跡のプラント・オパール分析

1. はじめに

プラント・オパール(植物珪酸体)は、イネ科やカヤツリグサ科の一部、あるいはこれ以外の草本の一部、樹木の一部など葉身中に吸収された珪酸分(SiO₂)が特定の細胞に沈着される珪酸体である。ここで扱うプラント・オパールは、他の細胞に由来するプラント・オパールと比べ比較的大型であり、(約50μm)、抽出が容易である。また、イネ科およびタケ亜科などの機動細胞に由来するプラント・オパールは、藤原(1976)、杉山・藤原(1986)などによって詳しく調べられており、近年その応用として、古代遺跡にかかわる水稲栽培について、その有効性が示されている(藤原1979など)。

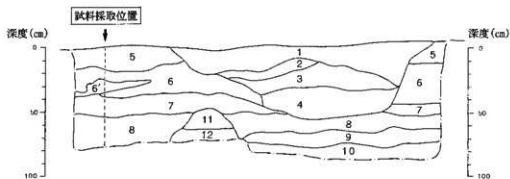
今回プラント・オパール分析を行なう棚田遺跡は、坂戸市と鳩山町の境界を流れる越辺川が作る扇状地地形にあり、低地部である。このような地形的状況のもとに、遺跡の中央にほぼ東西に延びる歴史時代の河川跡があり、これより下位に泥質堆積物がある。

ここでは、この泥質堆積物のところで稲作が行われたか否かを検討するために機動細胞に由来するプラント・オパール分析を行なう。

2. 堆積物の層序

プラント・オパール分析を行ったD5グリッドの断面図および層位区分を第11図に示す。堆積物は、12層まで区分され、このうち分析に用いた堆積物は、5層～8層についてである。ここでは、分析の対象となる堆積物の特徴についてのみ述べる。

5層は、褐灰色の砂層が頻繁に入るシルト質の砂層である。6層は、2～5mm程度の炭化物が散在する褐灰色の粘土質シルトである。6'層は、6層の中に部分的に入る茶褐色の粘土質砂層である。この層は、最も厚いところで8cmほどある。7層は、褐灰色の砂質シルトで、褐色のリモナイトがブロック状に入り、さらに炭化物の薄層も入る。8層は、褐灰色のシルト質粘土からなり、リモナイト斑がところどころに見られ、さらにこの下半分では炭化片が多く見られる。この8層の右側では、東西に走る畦畔状の盛り上がりが見られる。

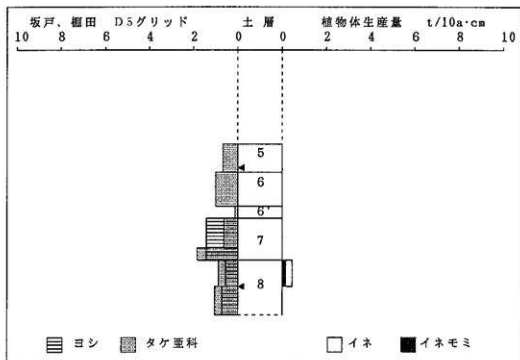


第11図 D5グリッドの層位と分析試料採取位置

第8表 D5グリッドの試料1g当たりのプラント・オパール個数

D5グリッド地点

試料名	イネ	ヨシ属	タケ亜科	ウシクサ族	キビ族
5	0	0	11,600	0	0
6	0	0	19,300	0	0
6'	0	0	2,400	0	0
7-1	0	1,900	12,600	900	0
7-2	0	1,800	34,800	900	0
8-1	1,100	500	14,000	500	0
8-2	0	700	16,800	0	0



(注) ◀印は50cmのスケール

第12図 主な植物の推定生産量とその変遷

3. 試料と処理

試料は、花粉および珪藻分析も同時に行なうため、現地において10cm角の柱状試料として採取した。この柱状試料は、室内にて縦割りにし、一方を容積50cm³の採土管を用いて各層ごとに5~10cm間隔で取り出した。残りの試料は、花粉・珪藻分析の試料とした。

プラント・オパール（植物珪酸体）の抽出と定量は、『プラント・オパール定量法（藤原、1976）』をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料土の絶乾（105℃・24時間）および仮比重測定。
- (2) 試料土約1gを秤量後ガラスビーズ添加（直径約40μm、約0.02g）。
- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理。
- (4) 超音波による分散（150W・26KHz・15分間）。
- (5) 沈降法による微粒子（20μm以下）除去と乾燥。
- (6) 封入剤（オイキット）中に分散後プレパラートを作成。
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズが400個以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1gあたりのプラント・オパール個数を求めた。また、この値に試料の仮比重と各植物の換算計数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10⁻⁸g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を産出した。換算計数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケ亜科はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.94（種実量は1.03）、6.31、0.48である（杉山・藤原、1987）。

4. 結果

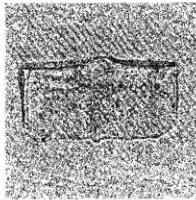
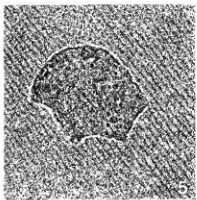
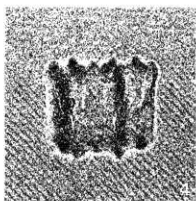
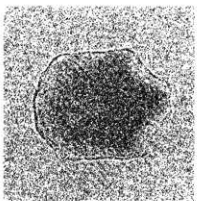
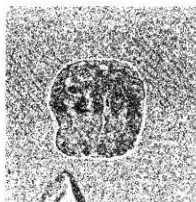
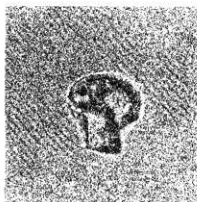
プラント・オパール分析の結果を第8表および第12図に示す。なお、稲作跡の探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族（ススキやチガヤなどが含まれる）、キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な5分類群に限定した。巻末に各分類群の顕微鏡写真を示す。

5. 考察

5~8層について分析を行った結果、8層上部でイネのプラント・オパールが検出された。プラント・オパール密度は1,100個/gと低い値であるが、上部の5~7層ではまったく検出されないことから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、同層の時期にこの地点もしくはその周辺で稲作が行われた可能性が考えられる。

引用文献

- 杉山真二・藤原宏志 (1986) 「機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として」『考古学と自然科学』19 p.69—84.
- 杉山真二・藤原宏志 (1987) 「川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析」『赤山—古環境編一』川口市遺跡調査会報告第10集 p.281—298.
- 藤原宏志 (1976) 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—」『考古学と自然科学』9 p.15—29.
- 藤原宏志 (1979) 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)—福岡・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(*O. sativa* L.)生産総量の推定」『考古学と自然科学』12 p.29—41.



- 1. イネ (8-1)
- 3. ヨシ属 (7-1)
- 5. タケ亜科B1 (クマザサ属) (8-1)

- 2. イネ (8-1)
- 4. タケ亜科A1a (ネザサ節) (6)
- 6. 不明 (8-2)

(すべて400倍)

第13図 プラント・オブ・オパール顕微鏡写真

4. 棚田遺跡古墳時代溝中の堆積物

小山修司 (株) パレオ・ラボ

1. はじめに

棚田遺跡は越辺川の氾濫原に位置する。分析は遺跡中の古墳時代の溝(O4, O17地点)に堆積した堆積物を試料として、堆積物中にテフラが挟在するかを調べた。結果は、テフラの挟在は認められなかったが、堆積物の含水比、粒度組成、礫種、砂粒の種類等が同時に得られたため、それについて報告する。分析は、5cm間隔でO4で13試料、O17で11試料行った。分析方法は、自然含水状態の試料を秤量し、ホットプレートにより乾燥し、これを再秤量し含水比を求めた。その後、1φから4φ(0.50~0.063mm)までのふるいを4枚重ねたものを使用し、流水下で湿式ふるい分けを行った。凝集粒子がなくなり、シルト粘土分により水が濁らなくなった後1φ、2φ、3φ、4φふるい上の残渣を乾燥、秤量後、観察を行った。

2. 分析結果

O4地点、O17地点の分析結果を第9表に示した。またグラフ化して第14図に示した。それぞれの地点について、結果を遺跡の層位区分に従って述べる。

[O4地点]

3層：灰色から暗灰色を示す礫混じり粘土である。含水比は49.4%~55.0%を示し、含砂率は14.3%~23.2%を示す。粒度組成は1φふるい残渣粒子が多く細粒なほど少くなる傾向を示し、重量としては礫の占める率が高い、最大礫径はNo.3試料に含まれる27mmであり、他の試料は10mm前後である。礫種は、チャートと結晶片岩を主体としている。火山ガラスを極少量含むが濃集せず再堆積と考えられる。

4層：黒色を呈する礫混じり有機質粘土から礫混じり黒泥であり、最下部は特に礫混じり黒泥状を示す。含水比は44.5%~67.5%を示し上部で高く下部で低くなっている。含砂率は22.1%~34.5%で下部ほど高い値を示し、含水比とほぼ逆相関となっている。粒度組成は1φふるい残渣粒子が多く、細粒なほど少くなる傾向を示し、重量としては礫の占める率が高い、最大礫径はNo.7試料に含まれる29mmであり、他の試料は15mm~25mm前後である。礫種は、チャート、砂岩、結晶片岩、凝灰岩を主体としている。

全体を通して見ると3層と4層では堆積物の性質が異なり境界部で含水比が変化している。

4層は上方細粒化を示し一連の堆積物であると考えられる。

[O17地点]

1層：黒色を示す礫混じり黒泥である。含水比は50.8%~87.7%を示し、含砂率は27.4%~44.2%を示し最上部を除き下部に向かい低くなる傾向を示す。粒度組成は1φふるい残渣粒子が多く細粒なほど少くなる傾向を示し、重量としては礫の占める率が高い、最大礫径はNo.4試料に含まれる26mmであり、他の試料は20mm前後である。礫種は、チャート、砂岩、凝灰岩、

結晶片岩を主体としている。

2層：灰色を呈する礫混じり粘土である。含水比は37.5%～53.5%を示し上部で高く下部で低くなっている。含砂率は22.3%～35.7%で下部ほど高い値を示し、含水比とはほぼ逆相関となっている。粒度組成は1φふるい残渣粒子が多く細粒なほど少なくなる傾向を示し、重量としては礫の占める率が高い、最大礫径はNo11試料に含まれる25mmであり、他の試料は15mm～20mm前後である。礫種は、チャート、砂岩、結晶片岩を主体としている。火山ガラスを極少量含むが濃集せず最堆積と考えられる。

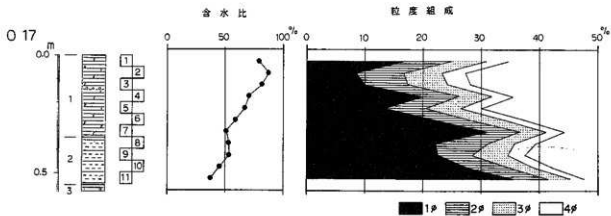
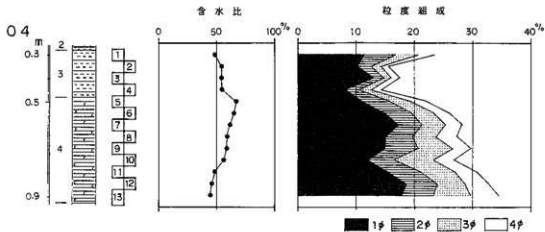
全体を通して見ると1層と2層では堆積物が連続的に変化し、含水比は下部に向かい低くなり、含砂率は下部に向かい高くなる。

3. 考察

古墳時代の溝中の堆積物は、礫を多く含む堆積物であり、このような堆積物のため、テフラが降灰したとしても、単層として確認できないものと考えられる。O4地点とO17地点は同一の溝の堆積物であり、O4地点が上流側にあたる。この両地点の堆積物を比較すると、全体的な傾向から見ると、O4地点の4層がO17地点の1、2層にほぼ対応するものと考えられる。この部分は含水比が上方に向かい高くなり、また、含砂率が上方に向かい低くなる上方細粒化の傾向を示し、徐々に安定した環境に変化したものと考えられる。

第9表 堆積物の洗い出し結果

試料番号	湿潤重量	乾燥重量	1φ以上	2φ以上	3φ以上	4φ以上	含水比	含砂率	1φ%	2φ%	3φ%	4φ%	
○ 4	1	121.27	81.17	9.19	4.34	3.14	2.19	49.40	23.24	11.32	5.35	3.87	2.70
	2	114.57	73.94	7.60	1.51	1.38	1.01	54.95	15.55	10.28	2.04	1.87	1.37
	3	119.06	77.04	10.03	1.22	1.09	1.12	54.54	17.47	13.02	1.58	1.41	1.45
	4	96.07	61.97	4.98	1.52	1.33	1.05	55.03	14.33	8.04	2.45	2.15	1.69
	5	116.32	69.43	7.64	3.28	2.46	1.96	67.54	22.09	11.00	4.72	3.54	2.82
	6	122.36	73.74	11.10	3.34	2.73	2.06	65.93	26.08	15.05	4.53	3.70	2.79
	7	126.97	78.42	13.48	3.18	3.22	2.30	61.91	28.28	17.19	4.06	4.11	2.93
	8	155.50	97.37	14.65	4.57	3.99	3.30	59.70	27.23	15.05	4.69	4.10	3.39
	9	135.46	85.16	12.81	4.80	5.07	2.67	59.07	29.77	15.04	5.64	5.95	3.14
	10	137.52	88.06	10.57	4.00	5.86	3.19	56.17	26.82	12.00	4.54	6.65	3.62
	11	134.33	90.36	14.00	5.11	5.35	3.34	48.66	30.77	15.49	5.66	5.92	3.70
	12	157.44	107.83	20.04	5.78	5.02	4.35	46.01	32.63	18.58	5.36	4.66	4.03
	13	148.22	102.61	18.32	5.49	6.62	4.98	44.45	34.51	17.85	5.35	6.45	4.85
試料番号	湿潤重量	乾燥重量	1φ以上	2φ以上	3φ以上	4φ以上	含水比	含砂率	1φ%	2φ%	3φ%	4φ%	
○17	1	148.18	82.71	13.98	6.67	4.83	3.29	79.16	34.78	16.90	8.06	5.84	3.98
	2	121.30	64.62	5.53	5.31	4.24	2.62	87.71	27.39	8.56	8.22	6.56	4.05
	3	140.39	77.15	7.77	5.76	5.26	3.03	81.97	28.28	10.07	7.47	6.82	3.93
	4	149.21	87.65	17.53	5.56	4.86	3.12	70.23	35.45	20.00	6.34	5.54	3.56
	5	135.71	81.31	10.87	5.87	4.76	2.92	66.90	30.03	13.37	7.22	5.85	3.59
	6	146.43	92.20	20.05	5.73	5.42	3.14	58.82	37.25	21.75	6.21	5.88	3.41
	7	171.52	113.71	35.26	6.41	5.14	3.47	50.84	44.22	31.01	5.64	4.52	3.05
	8	125.34	81.92	18.23	7.27	3.82	2.81	53.00	39.22	22.25	8.87	4.66	3.43
	9	156.32	101.82	23.09	5.94	6.20	3.06	53.53	37.61	22.68	5.83	6.09	3.01
	10	199.36	136.84	37.71	9.59	5.88	4.38	45.69	42.06	27.56	7.01	4.30	3.20
	11	173.48	126.19	45.05	7.45	4.52	3.30	37.48	47.80	35.70	5.90	3.58	2.62



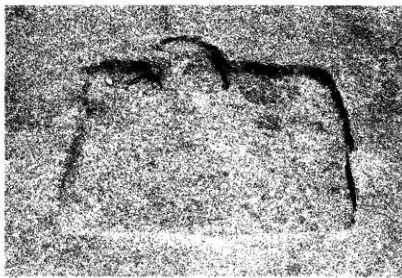
第14図 棚田遺跡の堆積物の含水比と粒度組成

写 真 图 版

田島遺跡



調査区全景空中写真（南から）



第1号住居跡



第2号住居跡



第2号住居跡カマド

第3号住居跡(1)

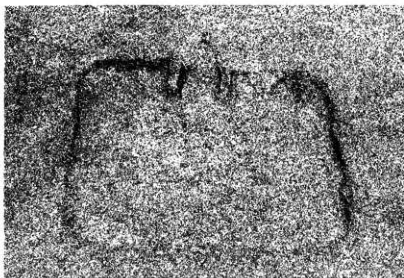


第3号住居跡(2)



第4号住居跡

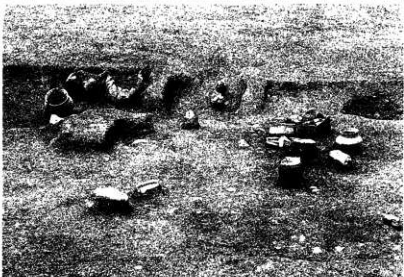




第5号住居跡



第5号住居跡
遺物出土状況



第5号住居跡
遺物出土状況近景(1)

第5号住居跡
遺物出土状況近景(2)

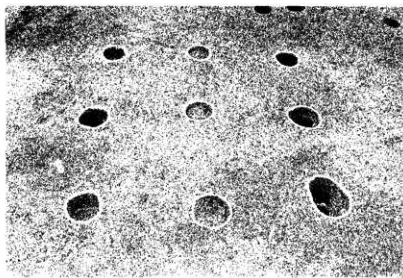


第6号住居跡

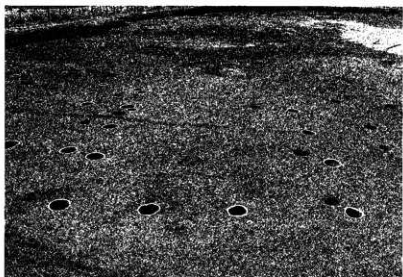


第1号掘立柱建物跡

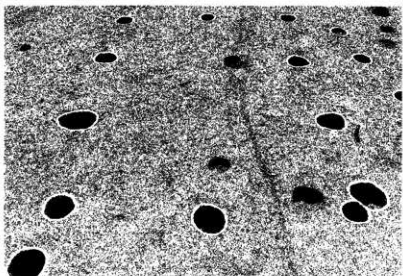




第 2 号掘立柱建物跡

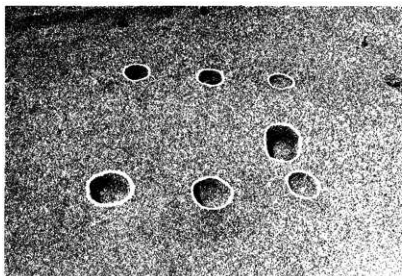


第 3 号掘立柱建物跡

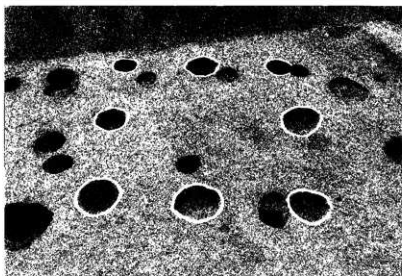


第 4 号掘立柱建物跡

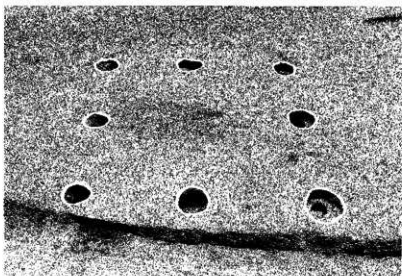
第5号掘立柱建物跡

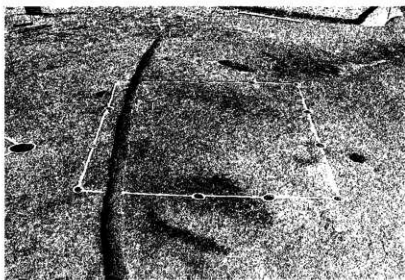


第6号掘立柱建物跡



第7号掘立柱建物跡

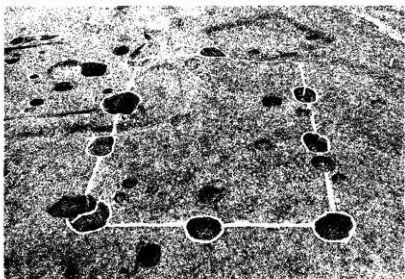




第8号独立柱建物跡

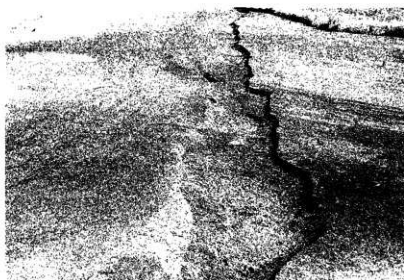


第9号独立柱建物跡



第10号独立柱建物跡

第1号溝跡

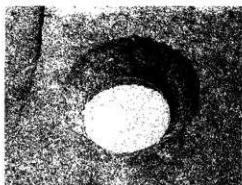


第1号溝跡
遺物出土状況



第2号溝跡

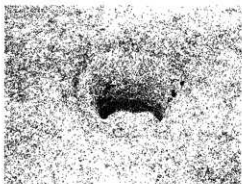




第1号井戸跡



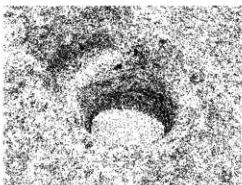
第3号土境



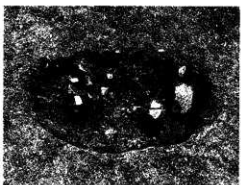
第2号井戸跡



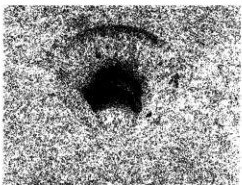
第2号土境



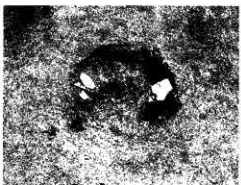
第3号井戸跡



第9号土境



第4号井戸跡



第10号土境